

関東学院大学キリスト教と文化研究所所報 2011 年度

キリスト教と文化

第 10 号



2012 年 3 月



関東学院大学キリスト教と文化研究所

関東学院大学キリスト教と文化研究所所報

キリスト教と文化

第 10 号

2012 年 3 月

キ リ ス ト 教 と 文 化

第 10 号

関東学院大学キリスト教と文化研究所 2011 年度所報

目 次

巻頭言	帆 莉 猛	iii
特別報告		
神の存在と役割に関する科学的分析： 神の存在に関する数学的証明の言葉による説明	安 田 八十五	1
東日本大震災ボランティアアンケート調査中間報告	高 野 進 リサ・G・ボンド 渡 邊 光 一 細 谷 早 里 所 澤 保 孝	21
特別合同研究シンポジウム記録： 坂田 祐先生とご祖父・白虎隊隊長日向内記の思想と行動	矢 嶋 道 文	27
研究論文		
悪性腫瘍を抱えながら生きたクライアントへの心理的援助	長谷川 伸 江	57
太平洋戦争下におけるアメリカ・バプテストの宣教政策に関する一考察	原 真由美	69
AA の 12 ステップのプログラムの普遍的特質についてⅡ ユング心理学における内向・外向のパーソナリティ理論からの構造分析	三 井 純 人	81
研究ノート		
「坂田祐日記」解説（1934 年 1 月～1935 年 12 月）	坂 田 創	93
ロバート・コールズに見られるボランティア活動と人間形成 ...	高 野 進 所 澤 保 孝	117
研究プロジェクト報告		
「坂田祐」研究プロジェクト	帆 莉 猛	129
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト	リサ・G・ボンド 勘 田 義 治	131

研究グループ報告

「いのちを考える」研究グループ	松 田 和 憲	133
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ	細 谷 早 里	135
「依存症とキリスト教」研究グループ	安 田 八十五	137
「バプテスト」共同研究グループ	村 椿 真 理	139

委員会資料

資料委員会	矢 嶋 道 文	141
広報委員会	中 村 友 紀	143
	簗 弘 幸	
所報編集委員会	鈴 木 公 基	144
所報に関する規定		145
2011 年度キリスト教と文化研究所活動報告		146
2011 年度キリスト教と文化研究所構成員		149
2011 年キリスト教と文化研究所研究プロジェクト等の構成メンバー		151
編集後記	鈴 木 公 基	153
執筆者紹介		154
英文目次		155

巻 頭 言

所長 帆 莉 猛

Foreword

Takeshi Hogari

キリスト教と文化研究所設立 10 周年を迎えた今、所報「キリスト教と文化第 10 号」を発刊できましたことは大きな喜びです。投稿して下さった方々、編集に携わって下さった鈴木公基編集長をはじめ皆様方にまず感謝を申し上げます。

さて、今年度は東日本大震災に始まり、この問題に明け暮れたような感じがいたしますが、本研究所でも「奉仕・ボランティア教育」研究グループが東日本大震災のボランティア活動についてアンケートを実施し、その中間報告が本所報に掲載されております。また、1 月には「いのちを考える」研究グループが中心になって関内メディアセンターを会場にシンポジウムが開催されました（この件については、次号の所報で報告されることになります）。

このほか本所報で報告された内容で重要なことは、昨年 3 月に開催されたシンポジウム「坂田祐先生とご祖父・白虎隊隊長日向内記の思想と行動」である。従来しばしば、坂田祐の祖父・白虎隊隊長日向内記は若い隊士たちを戦場に残したまま逃亡した、そしてそれが、若い隊士たちが自死を遂げる遠因になったのだ、と伝えられてきた。坂田祐はこれを聞いて子孫として恥ずかしい思いがし、しかしました、母を通して伝え聞いている祖父がそのような卑怯なふるまいをするはずがない、と感じたのだという。

こうした坂田の思いを受けとめ、また、積み重ねられてきた新しい研究を踏まえて、作家の中村彰彦氏、郷土史家・富田国衛氏、白

虎隊記念館館長・早川廣中氏を迎えて、上記のシンポジウムを開催した。詳細は記録をご覧頂きたいが、この結果、日向内記逃亡説はありえないという結果になった。さらに、中村彰彦氏は『オール読物』（文藝春秋社）10 月号の「白虎隊 140 年目の真実」という記事で、日向内記が逃亡したということはありません。日向内記は斗南に移った会津藩士たちの救援工作を行ったのだ、ということ報告して下さい。これが今後の白虎隊、および、日向内記についての研究の出発点になるのではないかと思います。

このほかの特別報告、研究論文、研究ノート、いずれも十分に積み重ねられた研究を背景にまとめられた優れたものであると感じている。今後とも研究を重ねて、次の成果につながることを期待している。

さらに、各研究プロジェクト、研究グループの日ごろの研究活動も本研究所の研究活動の中心を担うものとして見過ごすことは出来ない。乏しい予算、ほとんど期待できない研究費という制約の中で、それぞれのグループが地道に研究活動を繰り広げている。これらの地道な活動が関東学院大学の建学の精神を次代へ受け継いでいく力となることと信じている。

最後に、所報の出版のための事務的な働きを献身的にしてくださっている事務局の牛坊さん、および、川口さん（1 月末で退職）にも感謝を申し上げたい。今年度の所報の発行も、お二人の実務による下支えによって無事なされたといっても過言ではない。

神の存在と役割に関する科学的分析 —神の存在に関する数学的証明の言葉による説明—

安 田 八十五

A Scientific Analysis of the Existence and the Role of the God

—A Verbal Explanation of the Mathematical Verification
on the Existence of the God—

Dr. Yasoi YASUDA, Marco

要旨：

筆者は、安田八十五（2010）「神の存在の数学的証明」論文において、集合論を用いて神の存在の数学的証明に初めて成功した。また、キリスト教における三位一体説の位相数学を用いた証明にも初めて成功した。しかしながら、この論文は、「数式が沢山出ているので読んでもわからなく、途中までしか読めなかった」という感想や、「神の存在は証明するものではなく信仰するものです」と言われ、「神の存在の数学的証明の意味はあるのか？」を暗示する様々な形でコメントを受けた。そこで、安田八十五（2011）「神は存在するか？：信仰と論理との関係と構造」の特別報告論文では、出来るだけ難しい数式は使用しないで「神の存在」を説明し、また、信仰と論理との間にはどのような関係と構造があるのかを明らかにした。

今回は、上記の筆者が試みた「神の存在及び三位一体説の数学的証明」の研究論文と特別報告論文の背景となった「神とは一体何なのか？」、「神は本当に存在するのか？」という素朴な疑問から出発し、また、神やイエスキリストの存在や役割及び「三位一体説」等に関する過去の諸研究の中から浅学の筆者が

これまでに調査研究を行った文献等にも言及し、更に分かりやすい説明を試みることにし、一部新しい研究成果も追加する。

キーワード：

①宇宙創造 ②聖霊 ③イエス・キリスト
④有限と無限 ⑤無限集合 ⑥神の存在証明
⑦トマス・アクウィナス ⑧神学大全(スンマ)
⑨三位一体説 ⑩位相同型

目次：

1. 序論—本研究の背景と目的—
 - 1.1. 神の存在に関する既存研究の個人的展望
 - 1.2. 神は存在するか？—『神の存在の数学的証明』の意味—
 - 1.3. 東日本大震災と神の働き
 - 1.4. 地球環境問題と神との関係
 - 1.5. 神の存在証明への科学的方法—神は本当に存在するのか？—
2. 『神』の存在の数学的証明及びその言葉による説明
3. 『多神教』と『一神教』との違いの数学的説明—集合としての神は唯一！—
 - 3.1. 人類の歴史における一神教と多神教

- 3.2. 「集合」としての【神】は、唯一
 4. 無限集合としての【神】の科学的定義—有限と無限との違いの数理科学—
 5. 宇宙と神の世界との関係の集合論による説明
 6. 三位一体説の位相数学による証明と分析
 - 6.1. 三位一体説とは何か？—イエス、神と聖霊の位格の同一性—
 - 6.2. 三位一体説の位相数学による証明—イエス、神と聖霊の位相同型分析—
 - 6.3. 神、聖霊、イエス・キリスト及び宇宙、人類との関係の分析—集合・位相論による定義と分析—
 7. 信仰と論理との関係と構造
 8. 震災問題等の具体的問題における神の働きに関する研究の課題と展望
- 参考文献：
- 参考ホームページ：

1. 序論—本研究の背景と目的—

1.1. 神の存在に関する既存研究の個人的展望

神の存在に関しては、人類発生以来、人類にとって最大の課題だったらしく、石器時代の洞窟壁画等に、神らしき絵が描かれている。欧米では、古くはギリシャ・ローマ時代から、神の存在に関する論理的研究が行われて来たようである。文科系の古典等は余り勉強したことのない浅学の筆者にとっては、総合的展望を行うことは難しいので自分が勉強した範囲で個人的展望を行うことにする。ギリシャ・ローマ時代の著名な哲学者であるプラトンやアウグスチヌス等は、神の存在に言及していたようである。ユダヤ教やキリスト教においては、旧約聖書の「創世記」において神の存在と宇宙創造が述べられている。これに関しては、安田八十五（2010）「神の存在の数学的証明」論文において簡単に紹介してある（72頁-74頁）。筆者が知る限りでは、13世紀の神学者であり哲学者であるトマス・アクウ

ナスが、その大著『スンマ』、日本語では『神学大全』の中で「神の存在」を論理的に記述したのが最初ではないかと筆者は推測している。第1部第2問「神について、神は存在するか」の中で、トマス・アクウナスは、神の存在を見事に証明している。5つの方法、を用いて神の存在を説明しており、当時としてはかなりの説得力があったと思われる。

トマス・アクウナスによる『神学大全』から、『第三項 神は存在するか』の部分の『第三の道』の箇所を引用してみよう。

『第三の道は、可能なものと必然的なものという観点から導かれるものであり、それは次のような道である。すなわち、我々は、存在することも存在しないことも可能なものを世界の中に見出す。なぜなら、世界の中には、生成し、そして消滅するものが見出され、そしてその結果として、存在することも存在しないことも可能なものが見出されるからである。ところで、存在しているすべてのものがある点においても存在している、ということはあり得ない。なぜなら、存在しないことの可能なものは、それが存在していない時点もあるからである。したがって、もしもすべてのものが、存在しないことの可能なものであるならば、ある時点ではいかなるものも世界の中に存在していなかった、ということになる。ところで、もしもこれが真ならば、現在もなお、いかなるものも存在していないであろう。なぜなら、存在しないものは、何らかの存在するものが関与しなければ存在を開始しないからである。したがって、もしもいかなる存在者も存在しなかったならば、何かが存在を開始することはできず、その結果として、現在に至ってもいかなるものも存在していないであろうが、これが偽であるということは明らかである。したがって、すべてのものが可能的な存在者であるということではなく、世界の中には何らかの必然的な存在者が存在しなければならない。ところで、必然的に存在するすべてのものは、自らの必然性

の原因を他の何かから受け取るか、それとも受け取らないかのいずれかである。しかし、自らの必然性の原因を他のものから受け取る必然的なものの系列を無限に遡行することはできない。これは、作出因の系列においてそれができないという、すでに証明されたことと同様である。したがって、それ自体によって必然的に存在する何かを指定することが必要である。それは、他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。そして、すべての人々は、それを神と呼んでいる。』

短く要約すると、『他の何かから存在の必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものを神と呼んでいる』とトマス・アクウィナスは『神』を定義している。このトマス・アクウィナスによる『神』の定義を発展させ、数学的に『神』の定義とその存在の数学的証明を第2章『『神』の存在の数学的証明及びその言葉による説明』で行う。我が国においても、神や仏の存在に関する研究や見解は様々の立場から試みられている。筆者が最初に読んだ本は、水原舜爾(1991)「科学を包む仏教」であった。最近読み直した本は、中沢新一(2003)「神の発明」である。その他、作家・五木寛之の二冊の対談本も興味深い。五木寛之・森一弘(2005)「神の発見」と五木寛之・梅原猛(2011)「仏の発見」を参照されたい。

宗教学者である中沢新一は、「人間の心が神を発明するのである」という視点から宗教学者らしい面白い議論を展開している。例えば、中沢は、神(ゴッド)よりも精霊(スピリット)の方が人類にとって早く発見されたものであり、神(ゴッド)は精霊(スピリット)の延長線上で発明されたものであると指摘している。中沢の歴史的考察に基づく神と精霊との関係の分析は極めて興味深いものがある。

しかしながら、中沢も五木もトマス・アクウィナスや筆者のような厳密な神の定義やそ

の論理的証明には及んでいない。

1.2. 神は存在するか?—『神の存在の数学的証明』の意味—

筆者は、平成22年(2010年)3月に正式に公表した安田八十五(2010)「神の存在の数学的証明」論文において、神の存在の数学的証明に初めて成功した。また、三位一体説の位相数学(トポロジー)を用いた証明にも初めて成功した。しかしながら、この論文を筆者の知り合いのキリスト教信者やキリスト教書籍編集者に差し上げた所、「数式が沢山出ているので読んでもわからない」という感想や、「神の存在は証明するものではなく信仰するものです」とほとんど無視に近い対応を受け、がっかりした経験がある。そこで、安田八十五(2011)「神は存在するか? : 信仰と論理との関係と構造」の特別報告論文では、出来るだけ難しい数式は使用しないで神の存在を説明し、また、信仰と論理の間にはどのような関係と構造があるのかを明らかにした。

今回は、筆者が試みた「神の存在及び三位一体説の数学的証明」の研究論文の背景となった「神とは一体何なのか?」、「神は本当に存在するのか?」という素朴な疑問から出発し、また、神やイエスキリストの存在や役割及び「三位一体説」等に関する過去の諸研究の中から浅学の筆者がこれまでに勉強した文献等に言及し、分かりやすい説明を試みることにする。前回の「神は存在するか?」の特別報告論文と重複する部分も少なくないが、さらに分かりやすい言葉による説明を行うことにする。

1.3. 東日本大震災と「神の働き」

2011年(平成23年)3月11日(金)午後、東北地方を中心に東北地方太平洋大地震が発生し、それに伴う大津波等によって東日本が大震災に襲われ、壊滅的な打撃を受けた。

約1週間前の3月3日(木)に高血圧のた

め自損交通事故をおこし、その日横浜市磯子区の自宅で静養していた筆者は、うたた寝をしていたが、妻の「地震！」という大きな叫び声で飛び起きた。地震にとっても弱い妻は、居間のガラス戸を開け、外に逃げようとしていた。筆者は、「何か落ちてくると危ないから外に出るな！」といって妻の所に駆け寄った。妻は、地震があまりにも大きくかつ長く続くので怯えており、筆者も不安が強くなってきた。幸い、私たちは何の被害もなく、この大地震はおさまった。

しかしながら、テレビをつけると、東北地方の海辺地域が大津波に襲われ、住宅・建物や自動車等が津波に飲み込まれてゆく様子が映し出されていった。これは、1923年（大正12年）9月1日（土）に発生した関東大震災よりも大きな大災害になると直感的に感じた。死者・行方不明者の人数は約3万人と関東大震災よりは少なかったが、被害の規模は関東大震災よりも大きかったことが次第に明らかになってきた。

後日、この地震は、太平洋プレートと他のプレートとのずれで発生したプレート型地震と説明されていたが、予知は完全に出来ていなかった。

後で詳しく説明するが、地球を含む宇宙は、「神の働き」によって作られた訳であるが、科学がいくら進歩しても人類には永遠に理解出来ないのである。その意味で、地震の予知は基本的には極めて困難といえよう。

「神の働き」を完全には理解できない人類にとっては、地震や津波のメカニズムを完全に解明することは不可能であり、その被害を避けることは困難である。そこで、地震や津波による被害を最小化する戦略や政策を選択するミニマックス原理を適用することが最も賢明な方法になる。ミニマックス原理とは、元々、数学的ゲームの理論で開発された原理であり、相手の戦略によって与えられる最小の利益を最大化するように自分の戦略を選択する方法が最適な結果をもたらすという考え

方である。

1.4. 地球環境問題と神との関係

筆者は、若手研究者の頃から環境問題に取り組んできたが、温暖化問題等の地球規模環境問題には1980年代から着手し、その研究成果は、綿拔監修・安田八十五他著（1989）「病める地球をどう救うか」（共立出版）等に公表してきた。

最近、温暖化問題は、政治の世界でもや々と取り上げられるようになってきた。

筆者は、元々理工科系の出身であり、若い頃から環境問題・都市問題等へのオペレーションズリサーチによる研究を行ってきた。安田八十五（2009）「地球環境問題をごみ問題から考え直す」（本誌第7号）で紹介したように、筆者は、1980年代から温暖化問題等の地球規模環境問題に取り組み、共著ではあるが何冊かの著書も出してきて来た。地球規模環境問題の重要性をかなり早い時期から指摘し、解決のための政策科学的研究を実践してきた。詳しくは、北野康・田中正之（編）・安田八十五他著（1990）、『地球温暖化がわかる本』等を参照されたい。

人類は、神が与えてくれたこの素晴らしい地球を温暖化問題等の地球規模環境問題によって生命が存在し得ない「死の惑星」にしてしまうかもしれない。現代文明は、人類がこの地球に発生したわずか約700万年間で、人類のみならず、地球上のあらゆる生命すらも消し去ってしまう可能性を有してしまったのである。

地球規模環境問題を考えると、「神は、なぜ宇宙を創造し、さらに、太陽系の中に地球を与え、そこに、人類を頂点とする生命系を作り出したのか？」ということを考えざるを得ない。ことに、生命の起源や宇宙の生成メカニズムを考えると、現在の自然科学のレベルによる説明では、十分に解明することは出来ていない。

そこで、筆者は、人間をはじめとする生命

系、さらには、宇宙の創造等、この世に存在するものの究極の原因者の研究を進めて、それは、「無限の原因者」に他ならず、それを『神』と定義することを解明した

筆者の安田八十五（2010）「神の存在の数学的証明」論文は、このような問題意識から、「神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析」のテーマに約40年前から取り組んできた筆者のキリスト教研究のライフワークとも言うべき研究の成果であり、本稿はその要約解説編である。

1.5. 神の存在証明への論理的方法—神は本当に存在するのか？—

筆者は、2000年（平成12年）の復活祭（イースター）の時、55歳でカトリック磯子教会において洗礼を受け、キリスト教徒になった。24歳の時、関東学院霞ヶ丘教会における結婚式でキリスト教と出会ってから、受洗まで約30年以上かかってしまった。しかしながら、神の存在やキリスト教をきちんと理解出来ていたかどうかは疑問であった。受洗2年後の2002年4月、筑波大学から関東学院大学経済学部へ招聘され、すぐキリスト教と文化研究所の所員の任命を受けた。そこから、キリスト教や神の存在を本格的に、深く考えるようになった。

また、筆者は、主に環境問題を研究しているので、温暖化問題等の地球規模環境問題と真正面から立ち向かうハメになり、1980年代から、地球はどのように出来たのか？宇宙と地球との関係はどうなっているのか？等の地球や宇宙の生成の勉強にも取り組み始めた。

「人類は、いつ発生したのか？」、「地球は、いつ、どのように出来たのか？」、「宇宙は、いつ、どのように出来たのか？」等の疑問と「人類、宇宙と神との関係」とを何としても、解き明かしたいという願望が本研究の契機になった。ことに、人類や宇宙の誕生に、神がどのような働きをしたのかを解き明かしたい

と考え続けて来た。筆者は、最初に述べて来たように理工科系の出身なので、「神、宇宙と人類の存在および関係」を現代の自然科学の方法論を用いて解明できないかと模索し続けて来た。

筆者は、安田八十五（2010）「神の存在の数学的証明」論文において、「旧約聖書の「創世記」における宇宙創造の叙述」及び旧約聖書の「創世記」に対する「アッシャー大司教等による宇宙創成の推理」、さらに、キリスト教における説得力ある神の存在証明に関しては、スコラ哲学の創始者といわれ、当時の最高峰に位置する神学者である、13世紀の聖トマス・アクウィナスが、初めて行ったと言われている文献を取り上げ、「神は存在するか？」という疑問に宗教界とくにキリスト教界がどのように対応してきたかを振り返ってみた。ことに、トマス・アクウィナスが、大著『スンマ』、日本語では『神学大全』と訳されている聖典の中で記述している「神の存在証明に関するトマス・アクウィナスによる5つの方法」にとくに言及し、再検討した。「トマス・アクウィナスの第三の道」の筆者自身による科学的説明を行い、『神』の存在の数学的証明を実行した。

次に、キリスト教において最も重要な概念であり教えである「三位一体説」の数学的証明を、現代数学の一分野である位相幾何学（Topology）を用いて分析を行う。イエス、神と聖霊が、一体であることを「位相同型」の理論を用いて数学的に証明する。

なお、神の存在に関する科学的分析、ことに数学的分析に関しては、同志社大学経済学部の落合仁司が別のアプローチを用いて行い、公表している。落合仁司（2009）、「数理神学を学ぶ人のために」、を参照されたい。筆者とは独自に別のアプローチを展開している。

2. 「神」の存在の数学的証明及び その言葉による説明

筆者は、「神」の存在の数学的証明を初めて公表した論文、安田八十五（2010）「神の存在の数学的証明」論文において、13世紀の神学者であり哲学者であるトマス・アクウィナスが、その大著『神学大全』の中で記述していた「トマス・アクウィナスの第三の道」の『神の存在』を言葉で証明している部分の数学的な表現を試みた。しかしながら、「神」の存在の数学的証明を分かりやすく書き直した安田八十五（2011）「神は存在するか？：信仰と論理との関係と構造」の特別報告論文もまだ数式が多く難しいとのご指摘を受けたので、さらに数式を減らし出来るだけ言葉で説明することを再度試みる。

そこで、本稿では、上記論文と重複している部分もあるが、「トマス・アクウィナスの第三の道」の『神の存在』を証明している部分を再掲載し、再検討することにする『すべてのものが可能的な存在者であるということではなく、世界の中には何らかの必然的な存在者が存在しなければならない。ところで、必然的に存在するすべてのものは、自らの必然性の原因を他の何かから受け取るか、それとも受け取らないかのいずれかである。しかし、自らの必然性の原因を他のものから受け取る必然的なものの系列を無限に遡行することはできない。これは、作出因の系列においてそれができないという、すでに証明されたことと同様である。したがって、それ自体によって必然的に存在する何かを指定することが必要である。それは、他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。そして、すべての人々は、それを「神」と呼んでいる。』

上記の「トマス・アクウィナスの第三の道」を数学的に記述してみよう。

具体例を考える方がわかりやすいので、例

として人間の親子関係を考えてみることにする。「可能な存在者」である、ある人間が存在するためには、「存在者を存在せしめた原因者」である必然的な存在者であるその人の親が存在しなければならない。

X_i : ある人間（可能な存在者）

X_{i+1} : その人の親（その存在者を存在せしめた原因者である存在者）

と定義すると、

X_i と X_{i+1} との親子関係は、次式で数学的に記述することが出来る。

$$X_{i+1} = F_i(X_i)$$

関数 F_i は、 X_i と X_{i+1} との親子関係を示す関数である。

$i=1$ から始めると、親子の関係は、 $X_2 = F_1(X_1)$

$$X_3 = F_2(X_2)$$

$$\cdots \cdots X_{n+1} = F_n(X_n)$$

と、子 n が有限であれば、いくらでも祖先 ($n+1$) に遡ることが出来る。親子関係には父方と母方の両方があるが、ここでは、分かりやすくするために祖先は父方または母方のどちらか一方に限定して考えることにする。このようにしても一般性が失われないことは自明であろう。

NHK「地球大進化」プロジェクト編（2004）によれば、人類の祖先に関しては、次のように記述されている。「あなたの身体の中には、地球46億年の大変動が隠されている――。突然、そういわれると、何のことかと思う人も多いだろう。じつは私たちの身体は、40億年以上というとんでもなく長い時間をかけてつくりあげられてきたものだ。その証拠に、時間をさかのぼっていくと、ヒトの祖先がじつにさまざまな形をとっていたことがわかる。ネズミ大の小動物だったこともあれば、硬骨魚類と呼ばれる魚の一種だったこと

もある。最初は、たった一つの細胞からできた微生物だったにちがいない。」(2頁)

以上は、人類の祖先に関する生物学的な説明であるが、生物学的進化論で説明できるのはここまでである。

「最初のたった一つの細胞からできた微生物」もさらに何らかの祖先、つまり、「存在の原因者」に溯ることが出来るはずであり、そうでなければ、究極の原因者に至ることは出来ない。

「トマス・アクウィナスの第三の道」を、この親子関係(祖先の関係)に適用すると次の「神の定義と存在に関する証明」の命題1を導くことが出来る。

命題1. 「神の定義と存在に関する証明」の命題:

『子 n (存在者)が有限である限り、その親 $n+1$ (存在の原因者である存在者)は、有限であり、さらに、そのまた親 $n+2$ もまだ有限のままである。つまり、 n が有限である限り、その原因者である親、つまり自らの必然性の原因を他のものから受け取る必然的なものの系列を無限に溯る(さかのぼる)ことはできない。これは、作出因の系列においてそれができないという、すでに証明されたことと同様である。したがって、それ自体によって必然的に存在する何かを措定することが必要である。それは、他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。そして、それを「神」(God)と呼ぶことが出来る。』

つまり、ある与えられたものにとって「神」とは、「有限の数列」から発展する「無限の原因者である存在者」ということが出来る。有限の存在者を存在させる究極の原因者は、有限ではあり得ず、「無限の原因者である究極の存在者」ということにならざるを得ない。

あるものの存在の原因者を次々に溯って行

くと、いくら有限でも遡行することはできない。有限は幾ら大きくなってもあくまで有限であり、無限になることはあり得ない。極めて大きな有限の次には、『無限』(Infinity)という概念がどうしても必要になる。つまり、極めて大きな有限から一挙に無限という別の次元に飛ぶことによってしか、あるものの存在の根源的な原因者を見い出すことは出来ない。

現代数学では、無限を ∞ という記号で通常書くが、 $\infty + 1 = \infty$ 、より一般的には、 n を有限の自然数とすると、 $\infty + n = \infty$ となる。無限 (∞) には、それより大きな数は無く、全て 1 つの無限 (∞) と一致するという性質が存在する。つまり、無限の原因者は、その先に存在の原因者を必要としない『究極の原因者』である存在者になるのである。つまり、「有限の存在」は、限りなくその原因に遡及出来るが、「無限の存在」は、自分自身がその原因者であることから「それ自体によって存在するもの」と言える。

自分が存在していることは、現実世界における事実であり、ある意味で自明と考えることが出来るので、この自分を存在せしめている何かである「究極の原因者」である「神」が存在していることが不可欠であることは、以上の論理によって証明されたことになる。

以上の証明は、「トマス・アクウィナスの第三の道」の考え方を参考にしているが、筆者(安田八十五)が独自に開発し発展させた「神の存在の数学的証明」の安田理論と言える。

「依存症」を説明する「依存と自立」(Dependency and Independency)の理論を用いると、「神の存在」の証明は次のようにも説明することが出来る。この世にあるすべてのものは、その存在は何らかのものまたは何らかのことに依存している。具体的には、人間をはじめとする動物の親子関係を見れば明らかである。親子関係を逆にたどってゆくと、子の存在は、親の存在に依存しているこ

とがわかる。有限の世界においては、この依存関係はずっと続く。その存在が誰かに依存しなくともよいのは、もうそれ以上の親の存在が必要なくなる時である。つまり、あるものが何者にも依存する必要が無くなる時に初めて「自立」したと言うことができる。もしくは、究極に依存できる存在者が自分自身である場合しかない。存在の究極の原因者が、自分自身になるのは、有限の世界ではあり得ず、無限の時のみなのである。この無限の究極の原因者である存在者を「神」と定義することが出来るわけである。なお、「依存と自立」の理論の詳細に関しては、安田八十五（2008）「五木寛之「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究―「依存と自立」と「他力と自力」：依存症社会論序説（2）―」を参照されたい。

3.『多神教』と『一神教』との違いの数学的説明―集合としての神は唯一！―

3.1. 人類の歴史における一神教と多神教

人類の歴史を見直してみると、その発生から神という存在に直面していたと言えよう。世界の四大宗教は、キリスト教・イスラム教・ヒンズー教及び仏教と言われるが、キリスト教とイスラム教は一神教、ヒンズー教と仏教は多神教とよく言われる。キリスト教とイスラム教は、ユダヤ教から派生した宗教と言われるが、そのユダヤ教も一神教であると言われている。

しかしながら、下記で詳しく説明するように、集合論的に言うと、一神教と多神教との違いを強調することは誤りである。例えば、中沢新一が、近著『大津波と原発』（2011）の中で、「原子力は一神教的技術なんです。」（62頁）と発言しているが、これは誤解を招く表現である。

3.2. 「集合」としての【神】は、唯一

2章で述べた「神」は、ある与えられたもの（数学では、「要素」という）の「究極の原因者」として定義され、その存在が証明された。次に、この世のすべてのものの『究極の原因者』として定義される「集合」（ものの集まり）としての【神】の定義とその存在証明に進むことにしよう。

「集合」としての【神】に関する定義とその存在に関する定理の数学的証明を下記のように与えることが出来る。

定義1.「神」の集まり（集合）としての【神】の定義：

【神】は、この世の全てのものの「究極の原因者」である「神」（「要素」としての神）の集まり（集合）として定義することが出来る。

定理1.【神】の存在定理：

「神」の集まり（集合）としての【神】は、必ず存在する。

（証明）宇宙をふくむこの世の全てのものには、それを存在せしめている何かである『究極の原因者』である「神」（「要素」としての神）が存在していることが不可欠であることは証明されている。そこで、全てのものの「究極の原因者」である「神」の集まり（集合）である【神】も存在することが証明される。

数学的には、「神」と【神】との関係は次のように説明することが出来る。「神」は、ある与えられたもの（数学では、「要素」という）の「究極の原因者」の存在者として定義されるので、ある要素に対する神であるから、英語では、「A God」と表現できる。これに対して、【神】は、全てのものの「究極の原因者」である「神」の集まり（集合）であるから、数学的には複数の集まり（集合）であるから、英語では、「Gods」と複数形で表現できる。しかしながら、この全てのものの「究極の原因者」である「神」の集まり（集合）は、総体としては1つなので、英語では、定冠詞を付け、【The God】と表現できる。この【The God】こそ、【唯一の神】であると言うことが出来る。

「人間の世界」、「生物の世界」等は、いくら大きくとも有限であり、さらにそれを作り出した宇宙も基本的には、有限のシステムである。人類や宇宙を作り出した、究極かつ根源的な原因者は、無限の存在を考えざるを得ない。この無限の存在の原因者の集合体を、【神】(The God) と定義することが出来る訳である。

神の存在を引き出す最大の「キーコンセプト」(鍵となる概念)は、「有限と無限」という概念である。人類や宇宙は有限であるが、それらを生み出した根源的なものは、有限ではあり得ず、無限なものにならざるを得ない。

この無限の存在の集合を、【神】と名付けることが出来るのである。このことによって、神の存在の科学的分析と同時に数学的証明が出来たといえる。

「有限なもの」は、この世に実在する可能性があるが、「無限なもの」は、宇宙空間にさえ実在する可能性のないものである。「無限なもの」は、抽象的な世界にしか存在しないものかもしれない。「他の何かから必然性の原因を受け取るのではなく、他のものにとって必然性の原因となるものである。」と、トマス・アクウィナスが説明したものこそ、「無限なもの」であり、その集合体(The Set)を【神】と呼ぶことが出来るのである。

数学的に言うと、すべてのもの(要素 = An Element)には、それに対応する1つの神(A God)が必ず存在している。この世のすべてのもの(要素)に対応している神(A God)が全て集まった集合(Set)が【神】(The God)と呼べる。この集合としての【神】(The God)は、唯一つなのである。つまり、理論的には、集合としての【神】(The God)は、唯一つしか存在しないのである。

世上言う「多神教」とは、人種、民族・地域などが異なることから、ある範囲単位で神を考え、それが複数いるため「多神教」と考えているのである。この多神教の神は、集合として唯一の神である【神】から見ると部

分集合(Sub Set=Subset)に過ぎないと数学的には説明できる。全ての神を含む全集合(All Set)としてのとしての【神】は、唯一つしか存在していないのである。

結論的に言うと、一神教こそ集合論的には正しいのである。この世の全ての神が統合された時のみ、この【神】は示される可能性がある。

ところで、現代の最先端の科学では、生物の起源を探る試みが様々試みられている。例えば、平成22年11月30日に出版された長沼毅(2010)「生命の起源を宇宙に求めてーパンスペルミアの方舟ー」では、生命の起源を地球ではなく宇宙にあるという「宇宙起源論」を展開している。

しかしながら、この生物科学に代表される現代科学によっては、生命や物質の究極の起源を説明することは出来ない。「生物学的進化論」という狭い進化論ではなく、宗教、ことにキリスト教等に基づき、かつ、現代の集合論や位相数学を用いる、いわば「構造的数理科学的進化論」というべき「新しい進化論」を構築する必要がある。本研究は、その1つの試みであると言える。

4. 無限集合としての【神】の科学的定義 ー有限と無限との違いの数理科学ー

上記の神の存在証明は、理解しやすくするために、かなり直感的かつ文学的に説明したものである。神を厳密に定義するためには、有限と無限という概念の本質的な違いを理解する必要がある。そのためには、19世紀後半の天才的数学者であるカントールが開発した、現代数学の集合論の基礎知識が必要である。ここでは、数学の予備知識が無い人にもわかるように簡単に集合論の基礎を説明しよう。

1からnまでの自然数の集まり(「集合」)Nを考える。ものの集まりのことを、現代数

学では、「集合」という。

$$N = \{1, 2, 3, \dots, n-1, n\}$$

n を有限の自然数とすると、 N は有限集合となる。例えば、

$S = \{1, 2, 3, \dots, n-1\} = N - \{n\}$ は、 N から n を除いた集合 $S = N - \{n\}$ であり、 S は N の(真)部分集合になるが、 S の個数は、 N の個数よりも小さいことは自明である。 S の個数は $n-1$ であり、 N の個数は n なので、 $n > 0$ ならば、 $n > n-1$ となる。

つまり、有限集合の場合は、部分の個数は全体の個数よりも必ず小さくなる。しかしながら、無限集合の場合は、このことが成立しないことがある。

次の無限集合を考えよう。

$L = \{1, 2, 3, \dots, n-1, n, n+1, \dots\}$ は、自然数全体の集合であり、無限集合である。

無限集合の場合には、集合の個数を、「基数」(Cardinal Number) または濃度と言うが、自然数全体の集合の基数は、「可算無限」(アレフゼロ) となる。

自然数全体の集合 L から、1 から n までの自然数の集合すなわち自然数の有限集合 N を除いた残りの集合、いわば有限集合の他者としての自然数の集合 $M (=L-N)$ を考える。

$$M = \{n+1, n+2, n+3, \dots\}$$

この集合 M は、自然数全体の集合 L の無限部分集合である。

そこで、自然数全体の集合 L からこの他者としての自然数の集合 M への次の写像 (Mapping) を考えてみる。

$$\begin{array}{ccccccc} L = \{1, & 2, & 3, & \dots, & n-1, & n, & n+1, \dots\} \\ \downarrow & \downarrow & \downarrow & & \downarrow & \downarrow & \downarrow \\ M = \{n+1, & n+2, & n+3, & \dots, & 2n-1, & 2n, & 2n+1, \dots\} \end{array}$$

この写像は、自然数全体の集合 L からその無限部分集合である他者としての自然数の集合 M への「1対1対応」(One to One Correspondence) になっている。自然数全体の集合 L とその無限部分集合である他者

としての自然数の集合 M の基数は一致し、共に、「可算無限」(アレフゼロ) となる。自然数の無限集合においては、その全体と部分是一致的なのである。ここに、有限集合と無限集合との決定的な違いが存在するのである。有限の世界の論理と無限の世界の論理とは全く異なるのである。

直感的に言うとな次のようになる。有限集合 N の n を幾ら大きくしても、無限集合 L の大きさには全然及ばないのである。無限の大きさと有限の大きさは全く次元が異なるのである。

$$L = \{1, 2, \dots, n-1, n, n+1, \dots\}$$

を自然数全体の集合とする。 L の1部分、例えば、偶数全体の集合を

$$K = \{2, 4, \dots, 2(n-1), 2n, 2(n+1), \dots\}$$

と記述すると、 K は、 L の真部分集合になる。

K と L とでは、どちらの方の個数(基数)が多いであろうか? 常識的に言うと、 K は L の一部分であるから、 L の方が K よりも大きいと考えがちになる。というよりも、有限の世界で考えると、 $L-K$ は奇数の集合になるのだから、偶数の集合 K の個数は L の半分と考えたくなる。しかしながら、先程の集合論の1対1対応という考え方をを用いると L と K の数は一致する、つまり、個数(基数)は同じ「可算無限」(アレフゼロ)であることが簡単に証明できる。やはり、無限集合の場合、偶数全体の集合 K は、部分であるが全体と一致することになる。これが、無限の世界の不思議さ、面白さである。

人間の世界にせよ、地球や太陽系、さらには、宇宙も有限の世界なのである。この世に存在しているものは、すべて有限の世界である。無限の世界は、【神】の世界のみなのかもしれないのである。無限集合である【神】の世界が、有限集合である宇宙や人類を作り出したと言えるのである。

5. 宇宙と神の世界との関係の集合論による説明

この世、つまり、人類が居住し生きている地球、地球が存在している太陽系、太陽系を生み出した宇宙は、約 150 億年前にビッグバンで出来たと現代の宇宙科学では言われている。最近の宇宙科学は進歩が早くかつその理解は難しいが、その詳細は、磯部秀三 (1991)、川合光 (2005)、及び村山斉 (2011)「宇宙は本当にひとつなのか 最新宇宙論入門」等を参照されたい。

しかしながら、宇宙は幾ら大きくなろうとも有限の世界である。この有限集合の世界である宇宙 (= 自然) N (Nature) を作り出したのが無限集合である【神】(The God) の世界 G (God World) である。

つまり、宇宙 (= 自然) は、無限集合である【神】の世界の有限部分集合となる。我々人類が住む地球がある宇宙 (= 自然) N は、無限集合である「神」の世界 G の有限部分集合であり、神の世界に属していると言えるわけである。

無限集合である【神】の世界 G から、有限部分集合である宇宙 (= 自然) N を取り除いた集合 $K (=G - N)$ は、無限部分集合になるが、これは、宇宙 (= 自然) を含まない「狭義の神の世界」と呼べる。集合論の特質 (= 定理) によって、「狭義の神の世界」 K は、実は、元の無限集合である【神】の世界 G と一致する。つまり、宇宙 N がいくら広いといっ

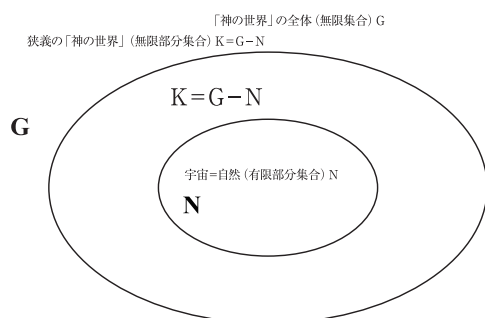


図 1. 「神の世界」(無限集合) と宇宙 (有限部分集合) との関係

ても無限である【神】の世界 G にははるかに及ばないのである。図 1 にこの「神の世界」 K (無限集合) と宇宙 N (有限部分集合) との関係を示す。

この『神の世界』(God World) と宇宙 N との関係を考察すると、宇宙は我々人類がいる宇宙のみではなく、他にもこの宇宙と似たような別の宇宙が存在するという命題が成立する。さらに、そのような宇宙群は、有限ではあるがほぼ無限に存在しうることが推測できる。あらゆる存在物の究極の原因者である『神の世界』が、有限だがほぼ無限に近い宇宙の存在を与え得ると言っても言い過ぎではない。

最近の宇宙科学の進歩は著しいが、このような命題は、宇宙科学がいくら進歩しても到達は不可能であろう。

なお、ヘーゲル等の哲学者が使用している存在(The Being)と存在者(Something)の理論を用いる場合は、存在(The Being)を『神の世界』(God World)、存在者(Something)を宇宙 N (有限部分集合) で読み替えれば、以上の説明は全部成立する。

有限な存在者 N は、無限な存在 G の内部に含まれている、同時に、無限な他者の外部に接していると言える。数学的に言うと次のようになる。有限な存在者 N (有限部分集合) は、無限な存在 G (無限集合) の部分集合である。有限な存在者 N (有限部分集合) の否定である補集合 ($-N$) は、無限部分集合 ($G-N = K$) となる。無限な存在 G (無限集合) の否定 ($-G$) である補集合は、空集合 Φ となる。

つまり、無限な存在 (The Being) である神の世界 K の外部には何も存在しない、つまり空集合 Φ になるのである。また、存在者 (Something) である宇宙 N の否定である補集合 ($-N$) は、 $K=G-N$ となり、「狭義の神の世界」 K となる。無限集合の性質から、狭義の神の世界 $K=G-N$ は、神の世界 G と一致する。有限な存在者 N (有限部分集合) である宇宙は、神の世界 G (無限集合) と比較

すると、無視できるほど小さな世界なのである。人類にとって宇宙はとても広くほとんど未知の世界であるが、神の世界にと比べると無視できるほど小さいことを知ることが出来たわけである。ここでの神とこの世（宇宙）との関係の詳細は、別の機会に詳しく述べる予定である。

6. 三位一体説の位相数学による説明と分析

6.1. 三位一体説とは何か？—イエス、神と聖霊の位格の同一性—

筆者は、最初、今から約40年前キリスト教と出会った時、イエス・キリストの存在と役割が全く理解出来なかった。【神】（The God）の存在とその役割に関しては、自分をはじめとする人類や宇宙を作ってくれた存在として、直感的かつ理念的に理解出来た。そして、数十年間経って、【神】の存在に関しては、上記のような科学的、数学的な理解をすることが可能になった。

しかしながら、キリスト教の研究を進めて行き、『三位一体説』という説があることを知った。『三位一体』（Holy Trinity）とは、神は三つの基本的な形で人間とかかわりを持つ、とするキリスト教の教理である。つまり、『三位一体説』とは、神と聖霊及びイエス・キリストは、実は同じものという考え方である。

もう少し詳しく『三位一体説』を説明することにしよう。『三位一体説』は、キリスト教の根本的教理の一つであり、父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊（Saint Spirits）の三者は、等質で不可分とする説である。

「三位一体（トリニタス）、英語ではトリニティ（Trinity）」は、ローマン・カトリック教会の中心的教義である。

- ① 父なる神
- ② 子なる神イエス・キリスト

③ 聖霊である神

の三者は、「同質」かつ「不可分」であるとする考えのことで、同質不可分であるからには、キリストも聖霊も、「父なる神」と全く同じ「神性」を持つ。

これは東方諸教会及びプロテスタント諸教会も採用しており、特にローマ教会独自のものというわけではないが、カトリック教会はことさらにこれを強調している。

「三位一体」の「位」（ペルソナ）とは「人格」を意味するが、相手は神なので人格ではなく「位格」と呼ぶ。この三者は、位格（ペルソナ）は異なっているが、「実体」（スブスタンス *Substantia* : 英語では, *Substance*）としては一つだと考えるのである。

聖霊（Saint Spirits）とは何かと言うと、「三位一体」論で言う「聖霊」とは、イエス復活後の五旬節（聖霊降臨祭）に使徒たちに下された霊のことで、神自身の分身としての人格（位格）を有する。

6.2. 三位一体説の位相数学による証明

—イエス、神と聖霊の位相同型分析—

6.2.1. 神と聖霊との関数関係

三位一体説に関して、筆者は、まず、聖霊（The Holy Spirit）とは何か？を理解しようとした。そして、『聖霊』とは、【神】（The God）の働きが表現されたものと理解した。

つまり、『聖霊』とは、【神】（The God）の機能（Function）として理解することが出来る。数学的に表現すると、次の関数式で記述することが出来る。

$y = G(x)$ ここに、

$x =$ 神

$y =$ 聖霊

言い換えれば、 $x =$ 神 を原因（インプット）として、神の働き・機能である関数 G によって作り出される結果（アウトプット）が、 $y =$ 聖霊と定義出来る。 x, y が集合の場合は、

函数 G は、写像 (Mapping) と言う。

神と聖霊とが一体とは、位相幾何学・位相数学・トポロジー (Topology) を用いて説明すると次のようになる。

そのために、まず、現代の位相数学 (Topology) における位相と位相空間の基本的概念を、具体例を用いて、簡単に説明しよう。

6.2.2. 位相数学の基本的概念—『位相同型』の理論—

一般に、ある集合 X のすべての部分集合の集まり(集合)を『ベキ集合』 $B(X)$ と言う。ベキ集合 $B(X)$ の部分集合 T がある決められた条件 (複雑なのでここでは省略する) を満たす時、 T を「開集合系」または「位相」(Topology) という。 T を備えた集合の対 (X, T) を位相空間 (Topological Space) という。例えば、無限の自然数全体の集合 $L = \{1, 2, \dots, n-1, n, n+1, \dots\}$ とその部分集合の全体であるベキ集合 $B(L)$ からなる、対 $(L, B(L))$ は、位相空間になる。

次に、『位相同型』(Topological Isomorphism) の概念を、具体例を用いて説明しよう。例えば、平面上の、円 X と楕円 Y とが与えられたとする。すると、円 X と楕円 Y とは位相同型になる。別の例としては、穴の空いたドーナツと手の付いたカップも、位相同型になる。ドーナツとカップを粘土で作れば、ドーナツを変形すればカップを作ることができ、逆に、カップを変形すればドーナツ作ることができることから直観的に理解できよう。複雑なのでここでは厳密な証明は省略する。「1 対 1 対応」(One to One Correspondence) の考え方を用いると証明することが出来る。

このように、2つの位相 X と Y とが『同相』(位相同型) であるということは、この2つは、位相的構造として全く同じものと見なされる。常識の世界 (現実の世界) では、ドーナツとカップとは全く外見上別のものであるが、位相空間的には、両者は、全く同じ構造

ということを意味するわけなのである。

6.2.3. 「三位一体説」の数学的証明—『位相同型』理論の適用—

この『位相同型』の理論を用いて「三位一体説」の数学的証明を行うことにしよう。神のおられる位相空間 (Topological Space) G と聖霊のおられる位相空間 H とは、別の世界 (別の位相空間) ではあるが、神の位相空間 G から、聖霊の位相空間 H に位相写像変換 (Topological Mapping Transformation) F を行くと、神と聖霊が位相的に一致する、ということになる。このことを、位相幾何学では、『位相同型』(Topological Isomorphism) と呼んでいる。つまり、位相数学の言葉で表すと、「神と聖霊とは位相同型である」という命題 (Proposition) になる。これで、聖霊と神が構造的に一致することが数学的に証明されたことになる。

なお、位相数学 (Topology) は、数学の分野においてもかなり難しいが、その基礎及び概要は、例えば、斉藤正彦 (2002) 等を参照されたい。

次に、イエス・キリストと神とが位階として一致することを、位相数学を用いて証明することにしよう。イエス・キリストは、聖母マリアから処女受胎したと聖書では書かれている。処女受胎に関しては、キリスト教徒の中では信じている人もいることは筆者も知っている。しかしながら、現代の科学のレベルで考えると筆者には処女受胎は理解出来ないが、約二千年も前の時代の人々は、イエスの神秘性・神性を強調したために選んだ解釈であると推測することが出来る。現代科学から見て非科学的と片付けてしまうことは、賢明とは言えない。イエスは、「人の子」であるから、本来有限世界である人間社会に存在しているわけである。しかしながら、イエスの行った様々な超人的・神秘的な言動から、当時の人々は、無限空間である「神の世界」にもイエスは属していると理解しようとした

のである。つまり、イエス・キリストは、「人の世界」(Human World)という有限の位相空間 $(H, B(H))$ に属しているが、同時に、「神の世界」(God World)という無限の位相空間 $(G, B(G))$ にも属していることがイエスの言動によって示されたのである。言い換えれば、イエスは、神と同じように聖霊を送る機能・働きを有し実践したのである。つまり、イエス・キリストと「神」とは位相同型であることが示された訳である。

さらに、先程証明した神と聖霊とが位相同型であることを用いると、三段論法により、「神、イエスキリストと聖霊の三者が位相同型である」ことが示されることになる。つまり、神、イエスキリストと聖霊の三位一体説が証明されたことになる。

「イエスは、聖霊と一致する」ことも同様に証明できる。つまり、イエスは、その働きとして、神と同様に、聖霊を与える機能(Function)を有しているわけである。

新約聖書に書かれているイエスが行った様々な奇跡は、上記の位相同型の考え方で解釈すると現代人にも理解しやすくなる。例えば、「ヨハネによる福音書」(ヨハネ2・1-11)の「ガリラヤのカナでの婚礼」でイエスが行った「水をぶどう酒に変えた」ケースが、その典型例であろう。

「新約聖書」のすばらしさは、この三位一体説を、具体例を用いて分かり易く記述していることにある。「新約聖書」を現代の位相数学で解釈すると次の命題が主張できると筆者には考えられる。

「新約聖書」は、「神、イエスキリストと聖霊の三者が位相同型である」ことを記述した、実は現代位相数学のテキスト応用版の、約二千年前の古代版であると言い換えることもできよう。

6.3. 神、聖霊、イエス・キリスト及び宇宙、人類との関係の構造—集合・位相論による定義と分析—

次に、『三位一体説』、つまり、神、聖霊とイエス・キリストとの位相同型の関係を、宇宙(自然)を含めてその関係を図3-図5を用いて説明してみよう。聖霊とは、無限集合である【神】の世界 G と位相同型である無限部分集合 H であると言える。聖霊の世界 H は【神】 G の無限部分集合であり、聖霊 H が有限部分集合である宇宙(=自然) N を創造したのであり宇宙 N を含んでいる。宇宙 N の有限部分集合である地球(Earth) E 上で人類に聖霊を与えてくれるのである。イエス・キリスト C は、「人の子」であり宇宙(=自然) N に属していたが、神 G から聖霊 H を受けて、神化(かみか)したのである。人間の神化は、イエス・キリストによって実現されたのであり、イエスは、聖霊をこの世に送ることによって新約聖書に書かれている様々な奇跡を実行したわけである。

このように、宇宙や人類は、神によって創造されたのであり、聖霊とイエス・キリストは、神との位格が同じであり、神の働きをしてくれるのである。これが、三位一体説の現代数学による説明と解釈になる。

このような三位一体説を受け入れたならば、最終的に「神=人類」という命題を導くことは可能であろうか？筆者は、この命題の成立は難しいと考えている。イエスは、人間ではあるが、神から聖霊を与えられ、神と同じように、その働き・機能として聖霊を送ることが出来るようになった極めて特殊な人間なのである。全ての人間がイエスと同じように聖霊を送ることが出来ると思えることは極めて困難である。かくして、「神=人類」という命題を導くことは可能ではないと言えるよう。

キリスト教でいう「天地創造」や「神の受肉」は、以上の安田理論を用いると次のように説明することができる。

無限集合である【神】 G は、その働き(Function)として、神 G と位相同型である

無限部分集合という聖霊 (Holy Spirit) H を送り、宇宙 (= 自然) N という有限部分集合を創造するという働き (Function) をした。図 2 を参照されたい。

旧約聖書で述べている天地創造は、現代数学で解釈すると以上のようになり、その基本的構造は正しいといえる。当時の人々は、現代数学の知識が無かったので、当時の知識のレベルで解釈し、記述したと解釈できる。

さらに、神 G (無限集合) は、「人の子」であるイエス・キリスト C (有限部分集合) に聖霊 H (無限部分集合) を送り、イエス C を神化(かみか)した。つまり、「イエスに神が宿

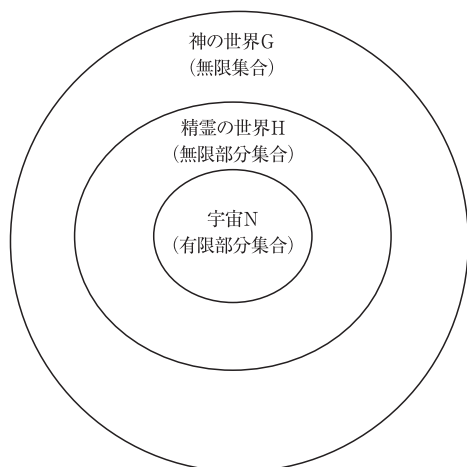


図 2. 神の世界 G (無限集合)、精霊 H (無限部分集合) と宇宙 N (有限部分集合) との関係

った」訳である。数学的に言うと、イエス C が無限部分集合である精霊 H を送る機能(働き)を有するように変化したのである。これが、いわゆる「神の受肉」の現代数学に基づく解釈であるといえる。イエスは人間としては、有限部分集合であるが、神化によって無限部分集合である聖霊を送る機能(function)を有することになったと解釈することが出来る。

図 3 は、無限集合である神が、無限部分集

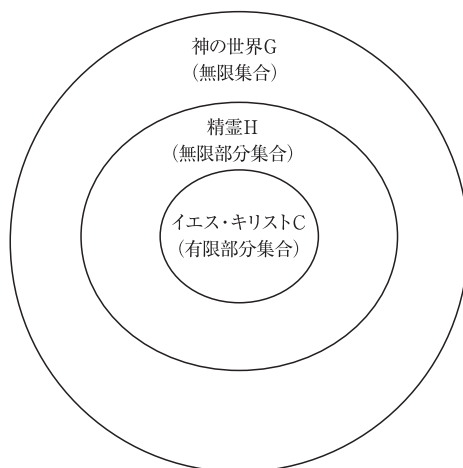


図 3. 神の世界 G, 精霊 H とイエス・キリスト C との関係

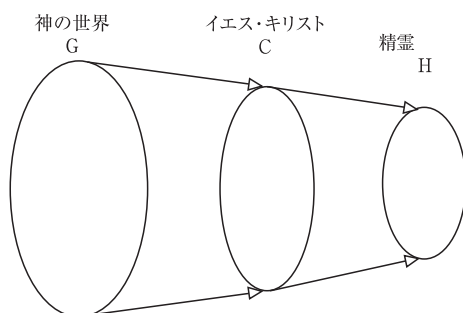


図 4. 神の世界 G, イエス・キリスト C と精霊 H との写像関係 (三位一体の位相同型構造) (三体とも無限集合)

合である聖霊を有限部分集合である人間イエス・キリストに送り、人間イエスを神化したことを示している。

図 4 は、無限集合である神は、神化した人間イエス・キリストを通じて、無限部分集合である聖霊を送る機能をお与えになったことを示している。

イエス・キリストは、処刑後復活し、神(無限集合)と位相同型である無限部分集合として完全神化し、聖霊(無限部分集合)を送る機能を有することになった。『復活』したイエス・キリストによって、三位一体の位相同

型構造は完成したのである。この世に生きていた『人間イエス・キリスト』と処刑後復活した『復活したイエス・キリスト』との本質的な相違は、数学的に言うと、有限集合と無限集合との違いにある。『復活したイエス』は、神と位格が同じの無限集合になったのである。そして、無限集合である精霊を送る機能（働き）を有するようになったのである。生きていた時の人間イエスと死んでから復活したイエスとは全く異なるのである。

7. 信仰と論理との関係と構造

宗教の世界における信仰と論理（もしくは理性）との関係について考えてみたい。宗教の世界は、基本的には、信仰の世界であることは論を待たない。しかしながら、「鰯の頭も信心から」と言われるように、全て信心から出発するという考え方は正しくない。筆者は、論理や理性で追求できることはギリギリまで論理で追求すべきと考えている。論理では、解明できないことは、最後は、「信ずるか？ 信じないか？」という信心や信仰で決定されざるを得ないことは認めざるを得ない。

筆者のように理工科系の教育を受け、環境問題や都市問題を教育研究の仕事として長い間従事してきた立場からは、数式や数学を使わなくとも、論理はギリギリまで追求すべきという習慣が身についている。宗教の世界では、いわゆる文科系出身の宗教者や研究者が多いが、論理を軽視しているとは思えない。例えば、既に紹介した「神の存在」証明に関する「トマス・アクウィナスの第三の道」は、極めて論理的である。筆者の「神の存在の数学的証明」は、「トマス・アクウィナスの第三の道」を参考に、現代数学、ことに集合論を用いて記述したものと言える。この例に示されているように、論理で説明し、理解できるものは、論理で追求して行くべきである。きちんとした論理的分析をせず、最初から信

じてしまうことは、誤ったものを信じる可能性が少なくない。宗教の世界においても、信仰と論理との関係と構造を明確化することが不可欠である。筆者の場合、論理的分析を進めることによって、神の存在や三位一体説への理解及びイエス・キリストに対する信仰が強化され深化したと言える。

8. 震災問題等の具体的問題における神の働きに関する研究の課題と展望

2011年（平成23年）3月11日（金）に発生した東日本大震災によって日本の社会、ことに東日本の地域社会は壊滅的な打撃を受けた。これには、「想定外」という想定を超えた大地震や大津波が発生したため、止むを得なかったという言い訳も見られる。しかしながら、地震学を中心とする現代の自然科学や工学のレベルでは、地震の予知や大津波の推測は、ほとんど不可能と言われており、自然科学や理工学を中心としたいわゆる理科系の学問のみに頼る大地震や大津波対策では対応は不可能と言っても言い過ぎではない。そこで、人文・社会科学や社会工学に基づく政策科学的なアプローチが今こそ求められている。

筆者は、筑波大学在職中の1970年代から、1923年（大正12年）9月1日（土）に発生した関東大震災級の大地震が関東地方に発生した場合の、被害の予測及び復旧の方法の違いによるリスクシステム分析と政策シミュレーション分析等を研究し、オペレーションズ・リサーチ学会や地域学会等で発表して来た。例えば、安田・土方（1979）「第二次関東大震災のシミュレーション」（オペレーションズ・リサーチ、昭和54年9月）を参照されたい。

そこで、今回の東日本大震災を主たる事例研究の対象として、阪神・淡路大震災、新潟中部大震災等も事例研究に加えて、大地震に

伴う大津波や原子力発電所事故による被害の実態調査を行い、被害の最小化を実現するための地域社会システムの構築の仕方、及び復旧・復興・復活をスムーズに展開するための地域社会システムにおける政策の構築方法及び政策シミュレーション分析による政策代替案の評価等を実施し、政策分析と政策評価を行う予定である。さらに、関東地方に(第1次・大正型)関東大震災もしくは東日本大震災クラスの地震・津波等が発生した場合の、被害の予測とリスクシステム分析、及び復旧・復興・復活のための社会システムの構築方法と政策シミュレーション分析を実行することが今後の重要な具体的課題である。

大災害問題のようなその発生メカニズムが自然科学的に解明されていない問題においてこそ、本稿で展開した数理神学的なアプローチが有効になりうる。人類は、宇宙やさらにそれを超えた世界に関しては殆ど無知であると言っても言い過ぎではない。「神の働き」を正確に理解して初めて本当のことがわかると言えるのである。

謝辞：

筆者が本特別報告の初出原論文を執筆しようという動機を抱いたのは、2002年(平成14年)4月、筑波大学から関東学院大学経済学部に着任し、すぐキリスト教と文化研究所の所員の任命を受けてからである。ことに、編集委員会・坂田祐研究プロジェクトおよび「依存症とキリスト教」研究プロジェクトで一緒にさせて頂き様々な刺激を与えて頂いた帆苅猛教授(現所長)をはじめとするチャブレンの先生方及び研究所関係者にまず深く感謝する。また、依存症に関する12ステップ研究グループを1996年から一緒に開始して来た三井純人・田代泰成客員研究員等の助言・共同研究等にもとても助けられた。

さらに、2010年1月23日(土)午後及び2011年7月30日(土)午前、関東学院大学KGU 関内メディアセンターで開催された「依

存症とキリスト教」研究プロジェクト2009年度第4回公開研究会及び2011年度第1回研究会で筆者が発表した「神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析序論—神の存在と三位一体説の数学的証明—」公開講演会等に参加された方々、ことに質問・コメントを頂いた諸氏に感謝する。

また、今回の論稿の元になった研究論文である安田八十五(2010)「神の存在の数学的証明」論文、安田八十五(2011)「神は存在するか？」の特別報告論文及び今回の安田八十五(2012)「神の存在と役割の分析」特別報告論文において、それぞれ匿名の二人ずつの査読者から頂いたコメントによって、本稿及び前論文等を深化し、本稿を執筆修正することが出来た。

筆者は、神学等をきちんと学んだことが無いので、「神の存在」を議論するにはかなり無理がある。「神の存在と役割の科学的分析」という本研究テーマは、広くかつ深いテーマであり、今後も研究を継続して行く予定なので、ご指導をよろしく願う次第である。

参考文献(順不同)：

- A. 筆者(安田八十五)等によるもの(順不同)
1. 安田八十五(2010),「神の存在及び三位一体説の数学的証明—神、宇宙と人類の存在および関係に関する科学的分析序論(1)—」,『キリスト教と文化』,第8号,PP.67-PP.88,関東学院大学キリスト教と文化研究所・2009年度所報,平成22年3月
2. 安田八十五(2011),「神は存在するか? : 信仰と論理との関係と構造—信仰から見た「神の存在に関する数学的証明」の社会的意義—」,『キリスト教と文化』,第9号,関東学院大学キリスト教と文化研究所・2010年度所報,PP.1-PP.15,平成23年3月
3. 安田八十五(2011),「地球環境時代における横浜の政策課題に関する分析と評価—横浜の森と緑の整備に関する政策評価と政策提言を中心に—」,安田八十五・久保新一他編著『海外進出企業の経営現地化と地域経済の再編に関する研究』所収,創風社,PP.301-340,平成23年6月
4. 安田八十五(2011),『神は存在するか?—神

- の存在証明への科学的アプローチの意義と課題—, 2011年7月30日（土）午前10:30—12:30, 主催: 関東学院大学キリスト教と文化研究所「依存症とキリスト教」研究グループ・共催: 日本マクロエンジニアリング学会循環型社会研究会
5. 安田八十五（2011）, 「第3次関東大震災にどう対応すべきか?—大地震で米空母の原子炉が事故を起こした場合の被害に関する社会システム分析と政策提言—」, 『第三次関東大震災のシミュレーション』研究中間報告, 平成23年7月31日（日）13:30—16:30, 原発・地震問題学習会 基調講演, 主催: 『池子の森』を守る会
 6. 安田八十五（2011）, 「第3次関東大震災のリスクシステム分析と政策シミュレーション—大地震で米空母の原子炉が事故を起こした場合の被害に関する社会システム分析と政策提言—」, 『第三次関東大震災のシミュレーション』研究中間報告, 『日本マクロエンジニアリング学会 シンポジウム2011』, 主催: 日本マクロエンジニアリング学会（JAMES）, 後援: 拓殖大学 海外事情研究所, 平成23年9月12日（月）13:00—17:30
 7. 安田八十五（2008）, 「五木寛之の「自力と他力」と安田八十五「依存と自立」との関係の比較研究—「依存と自立」と「他力と自力」: 依存症社会論序説（2）—」, 『キリスト教と文化』, 第6号, PP. 5- PP. 24, 関東学院大学キリスト教と文化研究所2007年度所報, 平成20年3月発行
 8. 安田八十五（2007）, 「依存と自立: 依存症社会論序説（1）—依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの有効性—」, 『キリスト教と文化』, 関東学院大学キリスト教と文化研究所2006年度所報, 第5号, PP.3-21, 平成19年3月発行
 9. 綿抜邦彦監修・安田八十五他著（1989）, 『病める地球をどう救うか: 第三ミレニアム人類への提言—地球規模環境問題と社会システムの変革—』, 共立出版, 平成元年10月
 10. 北野康・田中正之（編）・安田八十五他著（1990）, 『地球温暖化がわかる本』, マクミラン・リサーチ研究所, 平成2年11月
 11. 安田八十五他（1991）, 『デザイン・ビッグバン! 人類と地球・共存の可能性を探る—未来地球システム構築のための5つの提言—』, PHP研究所, 平成3年9月
 12. 安田八十五・土方正夫（1979）, 「第二次関東大震災のシミュレーション」, 『オペレーションズ・リサーチ』, Vol.24, No.9, 昭和54年9月, 日本オペレーションズ・リサーチ学会発行
- B. その他の重要関連文献（順不同）:
1. 長沼毅（2010）, 「生命の起源を宇宙に求めて—パンスペルミアの方舟—」, 化学同人, 平成22年11月30日発行
 2. Newton 別冊（2010）, 「生命史35億年の大事件ファイル—生命創造から人類の誕生まで—」, 平成22年12月15日発行
 3. 坪野吉孝（2009）, 「依存症患者の心の癒やし」, 朝日新聞（夕刊）, 平成21年12月28日（月）
 4. 蟹江憲文（2010）, 「25%削減の旗を降ろす—どうするポスト京都の数値目標（上）—」, 日本経済新聞・経済教室欄, 平成22年1月11日（月）
 5. NHK「地球大進化」プロジェクト編（2004）, 「NHKスペシャル地球大進化46億年への旅1生命の星 大衝突からの始まり」, 日本放送出版協会, 平成16年4月
 6. 磯部秀三（1991）, 「宇宙はこうして発見された」, 河出書房新社, 平成3年8月
 7. 川合光（2005）, 「はじめての〈超ひも理論〉—宇宙・力・時間の謎を解く—」, 講談社, 平成17年12月
 8. 山田晶（責任編集）（1975）, 「世界の名著14—トマス・アクウィナス」, 中央公論社, 昭和50年6月（注: 「神学大全」の和訳が掲載されている）
 9. 落合仁司（2009）, 「数理神学を学ぶ人のために」, 世界思想社, 平成21年11月
 10. 志賀浩二（2008）, 「無限への飛翔: 集合論の誕生—大人のための数学3巻」, 紀伊国屋書店
 11. ヘーゲル著・武市健人訳（2002）, 「大論理学」, 岩波書店, 平成13年9月
 12. 中沢新一（2003）, 「神の発明 カイエ・ソバージュIV」, 講談社, 平成15年6月
 13. ハーバート・ギンタス著・成田悠輔[ほか]訳（2011）, 「ゲーム理論による社会科学の統合」, NTT出版, 平成23年7月平成20年2月
 14. 斉藤正彦（2002）, 「数学の基礎: 集合・数・位相—基礎数学14」, 東大出版会, 平成14年8月
 15. ロマドカ著・山本和訳（1964）, 「無神論者のための福音」, 新教出版社, 昭和39年5月
 16. 稲垣良典（2009）, 「トマス・アクイナス『神学大全』」, 講談社, 平成21年11月
 17. 長倉久子（1996）, 「トマス・アクイナス『神秘と学知』」, 創文社, 平成9年8月
 18. 水原舜爾（1991）, 「科学を包む仏教」, 大蔵出版, 平成3年1月
 19. 五木寛之・森一弘（2005）, 「神の発見」, 平凡社, 平成17年8月
 20. 五木寛之・梅原猛（2011）, 「仏の発見」, 平凡社, 平成23年3月
 21. 内田樹・中沢新一・平川克美（2011）, 「大津波と原発」, 朝日新聞出版, 平成23年5月

22. 村山 齊 (2011), 「宇宙は本当にひとつなのか
最新宇宙論入門」, 講談社, 平成 23 年 7 月
23. 中沢新一 (2011), 「日本の大転換」, 集英社, 平成 23 年 8 月
24. 橋爪大三郎・大澤真幸 (2011), 「ふしぎなキリスト教」, 講談社
25. 中沢新一他 (2011), 「大津波と原発」, 朝日新聞出版, 平成 23 年 5 月

参考ホームページ：

1. 「神学大全」著者——トマス・アクィナス
(Thomas Aquinas) 翻訳者——大黒学のホームページ：<http://theologia.jp/index.html>
2. 旧約聖書 創世記 第 1 章第 1 節～第 31 節
<http://www12.ocn.ne.jp/~sokkidou/>
3. 地震調査研究推進本部 <http://www.jishin.go.jp/main/index.html>
4. 安田八十五専用ホームページ：<http://www.yasuda85.com/>
5. 安田八十五ビッグローブ個人ホームページ：
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~yasuda85/>

東日本大震災ボランティアアンケート調査中間報告

高 野 進
リサ・G・ボン
渡 辺 光 一
細 谷 早 里
所 澤 保 孝

Volunteers for the Great East Japan Earthquake: An Interim Report of the
Questionnaire Administered to Kanto Gakuin Volunteers

Susumu Takano
Lisa Gayle Bond
Koichi Watanabe
Sari Hosoya
Yasutaka Tokorozawa

はじめに

この報告は関東学院大学が計画した東日本大震災救援ボランティア（2011年8月2日から9月5日までの5回）に参加した学生に対するアンケート調査の中間報告である。本学キリスト教と文化研究所の奉仕・ボランティア研究グループは、現地に駆けつけた学生たちのボランティアの意識に関心を持ってきた。そのため関係責任者のご協力をいただきアンケート調査を行った。ボランティア参加学生総数は48名であった。そのうち回答を寄せてくださった学生は、22名であった。22名をもって参加者全体の感想や心情を代表させることはできない。しかしある意味で抽出調査と受けとめるならば、参加者全体をそれなりに反映している指標と見ることができる。

この調査の目的と趣旨は、「何が人々をしてボランティアに向かわせるか」、「世界市民としての互いの結びつきをどう具体化するか」「奉仕・ボランティアとその人に生き方」

について、参加者の見出した知見と示唆を調査して、これからの奉仕・ボランティア教育にいかすことである。

今回の参加者には現地からの帰路のバスの中でアンケートを記入いただいた。後にメールで回答くださった方もいる。いずれにせよ、多忙な日程と暑さと極度の疲労の中で、この調査にご協力いただいたことに衷心より感謝したい。

なお回答集計にあたり、複数回答の項目もあるので、累計数が22を越えるところもあることをご承知いただきたい。

調査結果

問1 今までボランティア活動に参加したことがありますか。

各回答数は、ある 11, ない 7,
無回答 4。

問2 問1の質問に「ある」とお答えを記入された方のみお答えください。

ボランティア活動は、いつごろ参加されましたか。あてはまるすべてにチェックを入れてください。

各回答数は、小学校在学中 3，
中学校在学中 7， 高校在学中 6，
大学 7， 無回答 1。

問3 今回は、なぜボランティア活動に参加したのですか。

これは自由記述であったので、いろいろな回答があった。一人の回答でも、いくつかの視点を盛り込んで記述するものもあった。

一番多かった理由は、被災者・被災地のために何かをしなければならない、という意識があったということである。これは14名であった。代表的な回答をそのままの表現で紹介しよう。

- ・自分にも何かできないかと思って。
- ・人助けがしたいという理由。
- ・自分でも何かできることをしたいと思ったから。
- ・力になれたらと思い。
- ・何らかの支援をしてみたいと思っていた。
- ・人のために奉仕したいと思った。
- ・他人事とは思えなかったから。
- ・ほっとけないから。

これらの回答からわかるように、被災地の人々への深い共感と連帯意識が彼らを動かしたのである。

しかもこれは自分のためでもある、と受けとめている。それらを紹介しよう。

- ・校訓である「人になれ、奉仕せよ」の意味を考えるきっかけと思ったし、…自分自身の成長にもつながると思った。
- ・現地の人のためなど、奉仕活動であると思うが、自分のためという考えが強い。
- ・直接見て、学びたいと感じた。

- ・自分自身も、被災したため、この経験を生かしたいと思った。
- ・現地へ行って直接状況を見たかったから。
- ・現地の状況を肌で感じるため。

問4 今回参加しての感想、また参加して考えたことをお聞かせください。

- ・自分の小ささを改めて実感しました。
- ・自分に出来る事は本当にちっぽけだと思った。

被害の甚大さに直面して、これを深刻に受け止めている記述もあった。

- ・ニュースを通してみるのと実際に行ってみるのとは衝撃の大きさが違うということを感じました。
- ・テレビや新聞では分からないことが、実際現場に足を運んで初めて分かることがあった。メディアばかりをうのみにすることはよくないと思いました。
- ・改めて自然の恐ろしさを知った。
- ・現状はあまりに残酷で、多くの人の心に傷を負わせました。

このような実情の下で、自分たちがやったことは小さかったとしても、かえって自分たちが学んだことが多いという。

- ・参加することによって、自分自身いろいろな面で成長できました。
- ・今回の活動で学んだこと、見たこと、感じたこと、考えさせられたことは、決して忘れてはいけないと思った。
- ・私は吸収しきれないほどに多くのことを学び、感じることができた。
- ・自分が成長したような気がする。
- ・学び考えることがたくさんあり、充実していた。
- ・被災された人が何を考えているかを考え、感情を共有することが大切だと気

付いた。

問5 家族・友人はあなたのボランティア参加にどう反応しましたか。

肯定的、協力的、応援してくれたという回答が22人中18人であった。回答者は家族・友人たちの反応を次のように証言している。

- ・嬉しそうでした。
- ・一生懸命やりなさいと応援してくれた。
- ・行っておいでと言われた。
- ・貴重な体験になるんじゃない、と言っていました。また友達から応援してもらいました。
- ・友人は偉いと言っていました。
- ・父は最初心配したのですが、頑張ってくださいと背中を押してくれました。
- ・積極的に背中を押してくれました。
- ・賛成してくれました。心配して何度もメールをくれましたが、頑張ってくださいと言われました。
- ・家族は賛成してくれました。友達は感心する様子で、体を気遣ってくれ、言葉をかけてくれました。

この他には、「少なからず心配されたが、説得した」と言う記述もあった。

活動から帰って、その経験を話したときのことであろう。このような記述がある。

- ・実際に行ったことに驚いた。熱心にボランティアの感想をきいてくれた。

全般的にボランティア活動への参加については家族、友人ともに好意的であったことは以上の記述からよくわかる。このような背景が次回の活動への弾みとなるであろう。

問6 あなたのボランティア活動はどのように評価してもらいたいですか。

これに対しては、他の人々からの評価は期待していないという回答者が13人で、もっとも多かった。

- ・特に評価して欲しいとは思いません。
- ・自己満足かもしれないけど、自分自身の取り組みとして行ったので、評価に関しては特にはないです。
- ・評価してもらいたくてやっているのではなく、自分が出来ることを考えた上での第一歩がこのような活動であった。

ただし次のような記述もあった。自分のボランティア活動がムダではなかったという自己評価である。

- ・感謝してもらえて嬉しいです。
- ・「お疲れさま」と言っていただければ十分です。
- ・自分の中で、ボランティアに行く前と実際に行ってみて、考えが変わったことを評価してもらいたい。

体験を分かち合い、労いの言葉を受けて素直に喜ぶことが出来たようだ。この経験を通して、自分が成長したことを自ら確認し、他の人にも評価してもらいたいという気持ちは当然であろう。

問7 ボランティア活動を教育の一環に組み込むべきだと思いますか。

これに対しては22命中13名が反対である。その理由は「それはボランティアではなくなってしまう」という。

しかし8名は教育の一環に組み込むことに賛成である。それはこのたびの経験を踏まえての発言と見ることが出来る。

- ・机上では学べないことがあるので、その点ではよいかと思う。
- ・ボランティアをすることで、社会に出

たときに、役立つことも多いと思います。

- ・有意義な経験だったので、取り込むべきだと思う。
- ・思います。自分の目で見て、肌で感じることの大切さを学びました。

なかなか踏み切れなかったり、チャンスがなかったり、事情によりボランティア活動に加われない若者に、そのような機会を提供することは重要なことであろう。こうした学校側の企画や教育的な配慮により、学生たちが社会経験を拡大したり、スキルを養うことになるであろう。

しかし教育の一環として組み込むことに対しては、距離を置いて、中間的な立場をとる回答もある。これも紹介したい。今後のために参考の価値がある。

- ・事前に研修するなど、その状況を理解してから、自発的に活動するようなものであれば、取り込むべきだと思います。
- ・誰かにやらされるのではなく、自分の意志でやるべきです。ただボランティアをやりやすい環境は教育の中で作れるのではないかと思います。

問8 ボランティアの精神はどこで養われると思いますか。

これに対する回答は、まず日常生活の中であるという（12名）。

- ・日々の生活の中にあると思います。
- ・人と人との触れ合いの中で
- ・困っている人が身近にいれば
- ・社会での経験、生活の中で
- ・現場
- ・行動を起こそうとするときから
- ・仕事の間や、日常生活など、すべての場で養われる。

ボランティア活動はボランティア活動の中で養われるという回答もあった（4名）。

しかし必ずしも遠いところに出かけるのではなく、身近なところでボランティア精神が養われるとみている者もいる。

- ・きっかけは、人それぞれだと思います。ボランティアをすることで、それが養われるかも知れないし、身近にボランティアをしている人の影響かもしれない。また困っている人が身近にいれば、ボランティア精神は養われるかもしれない。
- ・ボランティアする側とされる側が交流したり、少しでもスキンシップしたりする瞬間だったりするのかなと思います。

ボランティアがボランティアを生み出すということだろうか。それに助けを必要とする人が近くにいればおのずと手を差し伸べることになるのであろう。そのためには人間性の成長もまた期待されている。

問9 あなたは今後も自分の能力やスキルをボランティア活動に生かしたいと思いますか。

これに対して「思う」と回答したのは22名中21名であった。「思わない」と否定的な答えをしたものは1名であった。

日本的な謙譲の精神からだろうか、自分の能力について謙虚というよりも、高くは評価しない見方もあった。

- ・特に能力や、スキルがあるからやっているのではないし、自分はそれに気がついていない。しかし考えてはいる。

このような回答をする人も、ボラン

ティア活動を通して、能力を開発し、スキルを養っていくことができる。そしてそれがよりよい社会の形成に役立てることになるであろう。

結語

だれもが市民としてよりよい社会をつくりたいと願っている。その手始めとして、現に助けを必要とする人に手を差し伸べることができるはずである。そのチャンスは多くある。しかしそれをあえてやる勇気が少しだけ足りないことも、学生たちには多いかもしれない。そのためには、ボランティアのチャンスの提供も必要なのであろう。しかもしかめ面をした自己犠牲の強要ではなく、自然に、しかも喜びをもって、尽し合い、支え合うことを学ばなければならない。このようにして相手の存在価値を認め、自分の存在価値を自分自身認識し、他者にも認めていただく機会ができるのではないか。

今回の救援ボランティア活動の企画が、参加者の心に深い人間理解を涵養し、内なる思いを行動にあらわすすべを若者たちに提供したことを高く評価したい。

このアンケート調査の中間報告と分析は奉仕とボランティアの課題の研究の一環として行ったものである。これは更なる研究の足がかりとなるものである。

このたび『関東学院大学東日本大震災救援ボランティアプロジェクト体験報告集』がまとめられた。このなかには、5期にわたる参加者（学生45名、教職員18名）の報告が掲載されている。上記アンケート調査とは別に、これらの報告書からボランティアの原動力、あり方、意義を学び取ることができる。

ボランティア参加者は3.11の災害の甚大さに衝撃を受けて、「何かをしなければならぬ」と感じた。ある学生は本学のこのプロ

ジェクト前に、すでに他の救援企画のグループに参加している。緊急性からみれば、一日でも早く出かけたいと考えるのは自然である。政府の災害対応の遅さ、救援金がどこかにとどめられて、今、困っている人たちに届かないでということを知るといらだつ。自分は何の役に立つだろうかと気を使う。当然のこと、受け入れ先と調整する課題もある。出かける者としては、こころの準備ばかりでなく、どんなも服装や道具が必要かを思い悩む。これにいついても詳しい情報がほしいとも記している。

現地に出かけて、映像で知ってきたもの以上であること驚いている。そこに毎日生活する人たちがいること、その人たちは家族を失い、家を失い、すべてのこれまでに蓄積してきたものを失っている。

「だめだー。・・・だめだー。・・・なんにもねー。」

現地で見たVTRに映し出された人の悲痛な叫びを忘れることができないで、これを記している人もいる。限られた期間の、限られた範囲の活動だったが、ボランティアを終わって、ある学生は「人として成長できた」と述懐する。この活動が自分のためでもあったのである。参加者の中の職員の一人はこう記す。

「本学の建学の精神である『人になれ、奉仕せよ』は、わたしを含めた教職員や学生が、校訓を理解し、社会貢献、人との繋がり、ボランティアを学んだことである。」

大学という研究と教育の場が、直接的な奉仕から多くを学び、更なる社会貢献のための研究を推進し、他者のために喜んで奉仕する人材育成に貢献できれば、本学の建学の精神の実現に参与したことになろう。

(奉仕・ボランティア研究グループ所澤保孝、リサ・G・ボンド、渡辺光一、細谷早里、高野 進)

坂田祐先生とご祖父・白虎隊隊長日向内記の思想と行動

日時 2011年3月4日(金) 午後3時～5時50分
場所 フォーサイト21(棟) 10階(中会議室)
主催 キリスト教と文化研究所

司会 帆苅 猛氏(坂田祐研究プロジェクト代表 人間環境学部教授)
発題(コーディネーター) 矢嶋 道文氏(坂田祐研究プロジェクト委員 文学部教授)
パネリスト作品紹介 伊藤 綾氏(文学研究科比較日本文化専攻, 幕末史研究)
パネリスト 早川 廣中氏(会津白虎隊記念館館長: 元中央大学教授, 元会津若松市長)
パネリスト 富田 国衛氏(会津郷土史家: 福島民報出版文化賞受賞)
パネリスト 中村 彰彦氏(直木賞作家)
コメンテーター 富岡 幸一郎氏(キリスト教と日本の精神風土研究代表 文学部教授)



開会挨拶

村椿 真理教授

(キリスト教と文化研究所所長)

本日は、関東学院大学「キリスト教と文化研究所」の特別合同シンポジウムにようこそおいただきました。研究所長(～2011年3月)を務めています村椿と申します。よろしく申し上げます。初めて当研究所の会にご来席の方もおられると思いますので、研究所の昨今のことについて短く申し述べさせていただきます。

本研究所は、2001年度に関東学院大学の

第7番目の研究所として学部を横断する形で設立されまして、開設10年の歩みを続けてきました。学院は126年の歴史がありますが、1957年来、日本プロテスタント史研究所なる研究機関がございました。しかし、残念ながら大学の紛争によって神学部が廃止されるという事態に至り、1973年に事実上活動を休止しました。これが28年ぶりに再会されたのが、この「キリスト教と文化研究所」です。開設後は、文化、倫理、教育、歴史という四つの研究部門が設けられまして、研究プロジェクトが四つ並行して活動してきました。

本日行われますシンポジウムは、「坂田祐

研究プロジェクト」と「キリスト教と日本の精神風土」の二つの研究プロジェクトによる合同の企画ですが、中心である坂田研の方は2004年度から活動を開始しまして、坂田日記の解説、東京帝大への坂田祐先生の卒業論文の研究報告、さらに、坂田先生の生涯を探る研究調査として足尾時代について、また、会津での活動についての調査研究を年々研究範囲を広めて今日に至っております。

プロジェクトの代表を務めている人間環境学部の帆苅猛先生もいつもお書きくださっていますが、こうした研究は関東学院の創設者の教育観の解明に極めて重要な研究であるとともに、本学の建学の精神や校訓の意味に新しく光を当てるような意味を持つ重要な研究課題です。

そうした意味でも、そのような研究の一環として、「坂田祐先生と祖父・日向内記の思想と行動」というテーマを掲げて、会津白虎隊記念館の館長であります早川廣中氏、会津郷土史家であります富田国衛氏、直木賞の作家であります中村彰彦氏のお三方をパネリストにお迎えして直接お話を伺えますことは大変意義のあることで、楽しみにことと期待して今日の日を迎えました。先生方には遠路横浜までお越しくださいまして、心から感謝申し上げます。また、本日シンポジウム開催のために種々ご準備くださいました関係各位にも感謝を申し上げまして、私からのご挨拶に代えさせていただきます。

学院長挨拶



森島 牧人教授

本日は皆様方にお集まりいただき、こんなに盛んに、また熱心にこのテーマについてのお話と研究の時を持てましたことを、本当に感謝しています。

各発題者からのお話をお聞きしたあと、矢嶋先生のまとめがあると思いますが坂田先生

に関するこの研究は、関東学院にとりましてとても重要なものとして位置付けています。なぜならば、これは、関東学院としてのアイデンティティーに関わる重要な部分であるからです。

関東学院がこの研究所を開設するに当たっては、通常このようなクリスチanskoolですと「キリスト教文化研究所」という名称をよくとるのですが、あえて私たちは「キリスト教と文化研究所」という形で立ち上げました。それは、今までの関東学院の歴史の中にある大切な宗教的な諸機関（神学部等）の遺産をいただくと同時に、それがただ単にキリスト教の研究を行うだけではなく、キリスト教と諸文化、また大学における諸科学との対話を進めることを願って再構築された研究機関、しかも一つの学部には附置するのではなく学部横断的な形で、大学が取り扱っているすべての事柄とのかかわりの中で、関東学院が発信できる独自の学の拠点として、これを形成していきたいと思っていますところ。

そういう観点からも、今回のこのテーマは非常に興味があり、多くの方がお集まりいただいて熱心に討議いただけるものだと思います。パネラーを務めていただく3人の先生方に本当に感謝しているところです。

ぜひともここでの討議を内容のある実りあるものとして進めて頂き、また今後はさらにこれを深めて、私たちの今後の研究活動に生かさせていただきたいと思います。本日はお集まりいただき、まことにありがとうございます。

趣旨説明

（帆苅） 坂田研究プロジェクトの代表を務めます帆苅と申します。本日の司会も務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

この会の趣旨について、短くお話しさせていただきます。先ほど村椿所長からもござ

いましたが、坂田祐先生は中学関東学院を1919年に創設され、初代の学院長として今の関東学院の基礎を築かれました。もちろん創設は126年前で、宣教師が始めたのですが、今の関東学院の基礎、教育の土台を築いたのは坂田祐先生と言ってもいいと思います。

坂田祐先生は、20代より晩年に至るまで膨大な日記を残されまして、坂田創先生がご家族を代表して、坂田日記を、学院史の研究のために役立つならとばと寄贈してくださいました。それをまずは読み取って、学院の歴史と併せて検証していますが、「人になれ、奉仕せよ」という校訓、あるいは坂田先生の建学の思いが今の関東学院の土台になっていまして、それは坂田先生の生涯とも密接に関係していると思っています。そういう点で、坂田先生の日記についてだけではなく、生涯についてもいろいろ研究を進めています。

坂田先生は、会津藩の子孫として生まれましたが、明治に会津藩が秋田の斗南(となみ)の方に移封されまして、そこで大変苦勞されました。18歳のときに勉強したいという思いで家出をされ、足尾を経まして、その後軍隊に入って学ばれて、後には東京帝国大学に入学されて関東学院の初代学院長とされました。

まず、われわれは足尾に3回ほど参りました。坂田先生の旧姓は中村だったのですが、足尾銅山の大作業の棟梁であった坂田桃吉のお世話も多少受けて、そこで働きながら学んで後に軍隊に行きます。私たちは足尾で、坂田桃吉の事務所のあった所や坂田先生が働かれた所なども見てまいりまして、大体場所も特定することができました。足尾の方々にもいろいろご協力いただき、坂田先生の記念の碑を建てていただいています。

坂田先生は、『恩寵の生涯』に、お母さまを通して会津の武士の精神をたたき込まれたと書いておられます。その会津の武士道精神が関東学院建学の土台になっているということは坂田先生も意識していたと思われます

し、われわれもそう感じています。そこで、会津と坂田先生の触れ合いを少し調べてみようということで、去年は会津に参りました。

坂田祐先生は会津に行かれたとき、白虎隊の2番隊隊長であった祖父の日向内記が少年たちを残して逃亡してしまったという話を聞きましたが、そんな卑怯者ではないと強く確信していました。ただ、どういう事情だったのか、しっかり調べてほしいという思いを『恩寵の生涯』で残されていますし、いろいろなところに依頼もされたようです。その辺がどうなっているのか、われわれも関心を持ちまして、調査に行って参りました。

史料が十分残っているわけではありませんが、その辺を調べたり書いたりしてくださっているお三方に来ていただきまして、その辺の事情をお話しいただき、共通の理解の方向が出ればと思っています。矢嶋先生がいろいろ尽力してくださいましたので、その辺について発題していただいて、次のシンポジウムにつなげていきたいと思っています。

発題

(矢嶋) ただ今、帆苅先生から丁寧なご説明がありましたので、おおよそのことについてお分かりいただけたかと思いますが、本日は、パネラーとして、早川さん、富田さん、中村さんのお三方にお忙しい中をおいでいただきました。また、昨年秋の会津調査に行きました帆苅先生、牛坊さん、伊藤さんのほかに、足尾銅山調査から会津調査までずっと同行してくださっている栃木の本田先輩にも来ていただいております。

また本日は、OBの皆さま方、学院ご関係の皆さま方にも、お忙しいウイークデーにお集まりくださいまして、ありがとうございます。

坂田祐の足尾銅山時代

私と帆苅先生は昭和41(1966)年に入学しましたので、卒業した年度に坂田先生がご

逝去されたことになります。入学式のときの先生の表情などを記憶にお話します。

坂田先生が足尾銅山に働かれていたことと、ご祖父の日向内記が白虎隊士中2番隊隊長であったことは、学院にとって非常に大きな歴史的重みがあります。

まず、足尾銅山とのかかわりですが、現在の三春台霞ヶ丘教会のオルガン調律師である中山様の奥さまが古河市兵衛のご子孫に当たる方です。あるとき、私が帆苅先生と三春台の坂田記念館を訪れましたときに、事務の方から「われわれは足尾銅山に植樹をしている。10年目になるけれども、関東学院から誰一人も植樹に来ない。われわれは坂田先生と足尾のかかわりの記念のプレートを作ったのに、どうしたのですか」という内容の名刺裏書メモを渡されました。これは大変なことだと思いました。

というのは、私は足尾銅山の調査に行っていたのです。それはどういう調査かといえますと、二宮尊徳の足尾足跡を追っての調査です。尊徳の日記を読み解いていきますと「赤い水が流れている」とありました。銅山公害の一端です。しかし、足尾町の年表には二宮尊徳が来たことはどこにも書いていないのです。それで、「残念だな」と思いながらも尊徳の原稿を書きましたが、その調査の翌年から植樹が始まっていたのです。現在は、4月の植樹祭には全国から何千人も集まるそうです。それを聞いて、早速、帆苅先生、本田さん、牛坊さん、それにゼミ生10名ほどを連れて植樹に行きました。

この足尾については、その後、展示会・講演会（学芸員課程特別展示・講演会）なども文学部主催で行いました。田中正造の写真も展示したのですが、田中正造が天皇に直訴したときに、坂田先生は近衛騎馬隊として馬上から驚きながら見下ろしていたというお話をご子息の坂田創先生から伺いました。足尾はかつてご自分が働いていたところでした。足尾時代の立派な写真が残っています。17歳前

後の青年が木刀を持って足をはだけながらにらみつけている気合い充分の写真です。素晴らしいです。その青年が、ご縁があって近衛の騎兵隊に入り、馬上から田中正造の直訴を見ていた、ということもご縁なのです。

私は、このことから、足尾銅山への評価なくして坂田先生の評価はあり得ないと思いました。日本の資本主義発達史との戦いですから、これは荷が重いと思いました。しかし、明治以降の近代化、工業化に欠くことのできない大隈重信さんがやりました工部省の展開も、多くが足尾銅山を含めた鉱山に負っています。しかも、江戸時代であれば足尾銭として有名な銅銭があります。長崎貿易の輸出品はほとんどが銅と海産物ですから、その大半を足尾が担っていたという歴史的評価なくしてわれわれの今日はありません。

そうは思っていました、大変荷が重いと思いました。そうこうしているうちに、足尾銅山のお抱え写真家であった小野崎一徳氏のお孫さんである小野崎敏さん（写真家）が、当時撮られた足尾銅山の写真を写真集として出版されて賞を取り、多くの書評となり、それがきっかけとなって世界遺産の登録申請にまでなりました。すでに日光が世界遺産に登録されていますので同一地域で二つの登録は難しいということのようですが、登録申請までいけば足尾の評価は充分といえます。

日向内記の離隊についての見解

残るは、白虎隊です。私たち卒業生としては、坂田先生が日向内記逃亡説を無念に思ったことを共に考えるということは使命です。物事の解釈は多様ですから、一概に簡単な結論は出せないと思っています。ただ、卒業生としてこの問題にかかわることは非常に重要だと思っています。ゼミ生と一緒に、ほぼ10年近く断続的に会津の白虎隊記念館を訪問してまいりましたが、昨年のもれわれ調査チーム訪問をきっかけに、本日、早川館長さんがお忙しい中をおいでくださり光栄の至りです。

お手元に、私が富田さんから頂いた「歴史の真実」という原稿のコピーがございます。これは、葉山町の長柄にお住まいの西村肇さんがお書きになったものです。その7行目辺りに、富田さんのご著書である『戸ノ口原の戦い』の183ページと184ページに出てくる白虎士中1番隊西村四郎は先祖だという記述をされています。「私の先祖は出陣した殿様を護って城に戻る途中戦死、年17歳、観光地として有名な飯盛山の白虎隊の墓にまつられています」というくだりです。

そして、27行目以降には「白虎士中二番隊の集団自決が武士道の精華と称えられる一方で、二番隊長の日向内記はど会津藩士の中で武士としての誇りを傷つけられている人物はいません。彼はこの戸ノ口原決戦前夜に食料調達を理由に戦場離脱を計り、士中2番隊の集団自決の悲劇を招いた卑怯者として、関係史書やドラマによって一般の常識となっており、会津藩氏の末裔でも、この話を今も信じているひとが多いのではないかと思います。私は、朝から何も食べていない少年たちを目の当たりにして食料調達を考えるのは隊長の務めであるし、雷雨と霧、身の丈もある草原の中で、散り散りになった隊士たちを見つけるのは大変だったのではないかと、会津士魂を頑なに守る会津武士に、逃亡はあり得ないと考えていましたが、それ以上でも以下でもなく、故人の名誉までは思い至りませんでした。士中二番隊の集団自決の詳細は、ただ一人助かった飯沼貞吉という隊士の談話といわれるものから知られることになるわけですが、談話の存在そのものに諸説があります。もっとも信頼される会津戊辰戦争の史書のひとつといわれている、昭和2年に発行された平石弁蔵著『会津戊辰戦争 増補白虎隊・娘子隊・高齢者之健闘』の中で、飯沼翁の談話を綿密に検討した結果として、『日向内記は食料調達を理由に姿を消した』と書かれて以来事実となり、白虎隊関連書のほとんどが、この史書から派生し、戦場離脱説が今日まで

語られることとなります」と書かれています（アンダーライン矢嶋）。

2行下の箇所には、「何年前に、上野精養軒で開かれた『会津士族会』というのに初めて参加したとき、偶然にも誰かに無理やり連れてこられて来た感じの、やはり初めて出席した日向内記の子孫というひとに会いました。参加者は来てくれたことに驚きを隠せませんでした、誰もその事には触れなかったし、お互い彼とは口数が少なかったことを覚えています。日向内記の孫の坂田祐氏は、『中隊長たるものが、部下を放置して行方不明になることなど考えられないことで、自刃した20名の勇名をさらに高めるために、後から隊長行方不明ということをつけ加えたのではないか、隊長が死を恐れて卑怯にも行方不明になったと一般に思われているので、私ども近親者は恥ずかしい次第です』と述べ、『あの会津武士の教養に満ちた私の母を生んだ祖父の人柄は私どもには深く確信できます。戸ノ口における特別事情については、是非とも詳細なご研究を願いたい』と無念の中、昭和43年に93歳で亡くなられたとのことです。上野精養軒に来た子孫という人は、確か『坂田』と名乗った記憶があるので、坂田祐氏のお孫さん（ご子息）に当たるのかもしれませんが。飯沼貞吉は、自刃蘇生後に新政府軍を逃れて、喜多方で療養しており、日向内記は明治のはじめに喜多方に住み、明治18年に同地で亡くなっています（アンダーライン・矢嶋）。

こうした縁もあり、喜多方に在住する郷土史家富田国衛氏が、『日向隊長は食料調達を理由に戦場を逃亡した』という話の真偽を確かめる目的で、調査・分析・研究の結果、完成したのが、送られてきた本です」とあります（傍点矢嶋）。

そして、70行目の二重線の部分には「百数十年たった今日、事実が明かされ、名誉が回復されたことは、坂田祐氏の願いがかなえられたこととなります」とあります。しかし、

これは結論をやや急ぎすぎているかも知れません。先述のように、歴史の解釈は多様ですし、異なる解釈を尊重してこそわれわれの建学の精神はあると思うからです。

この後はパネラーの先生方のお話を伺い、フロアの皆さま方からのご意見をも伺って、最後に私なりの解釈を述べさせていただければと思っています。

パネリストの作品紹介

（帆苅） 続いて、現在文学研究科の比較日本文化専攻で幕末史を中心に研究している伊藤綾氏に、パネリストの皆様が今までに発表された主なものを纏めてご紹介していただきます。

早川廣中著『真説・会津白虎隊－会津藩に学ぶ品格－』

（伊藤） 会津白虎隊記念館館長、早川廣中さんの『真説・会津白虎隊－会津藩に学ぶ品格－』から紹介したいと思います。この本では、会津は品格のある土地と強調され、この本を書いた目的を、戦時中の軍国教育に「利用されてしまった白虎隊像」ではなく、「ありのままの白虎隊像」を世の中に広めることとして書かれています。内容は会津戦争が中心なので、全般に会津から見た戊辰戦争という内容となっています。白虎隊以外の人物にも触れた部分があり、新政府側では長州の大村益次郎の戦略家としての評価や新政府と対立した側として、長岡藩の河井継之助がいかにリーダーシップを持った人物かという評価がなされています。

本書の中で、日向内記については、小見出しの部分に「砲声近づき、隊長戻らず」とあるように、やや冷たい印象を受けるような表現がなされています。特に逃亡説とみられがちな部分に関しては、中隊長の日向が食料調達のために隊を離れたという説を用いられており、すぐには戦争に突入しないと思ったの

か、中隊長の日向内記が「糧食の手配をしてくる」と言って単身で闇の道を引き返してしまったというように描かれています。

また、この著書では平石弁蔵による『会津戊辰戦争』の中での世論の批判と、この著書にある日向に対する一応の弁護と不信感を紹介しています。世論の批判にあたる部分を少し読んでみます。「彼日向、君国の存亡を憂ふの秋に方たり独り身を以て遁れたために、多数有為の青年をして空しく自刃せしめたり」。この部分、特に「一人身をもって逃れ」の部分は逃亡と同じような表現だと思われます。当時の人々は、日向内記のことを白虎隊から逃亡した人物と評価していることが分かります。

早川さんは、当時の会津の気風からして、わずかでも危険を避けて生死を生き抜こうとするなどといった行動を、日向ほど高禄をもらっていた人がとるだろうかという部分を一応の弁護としています。しかしその後、だからこうした状況となって彼にリーダーシップを持っているような才覚があっただろうかという表現があることから、この資料を読むと私自身、これは早川さんによる完全な批判だと思っています。それを早川さんが一応の弁護ととらえたということは、やはり会津の人としての多少なりとも日向への弁護の気持ちを抱いてほしい、という早川さんの気持ちの表れた部分とも思えました。

先ほど、本書では日向内記の離隊を食料調達としていると言いましたが、9月の会津調査の段階で、早川さんは食料調達説を否定していました。特にこの説は、集団自刃の生き残りである飯沼貞吉の証言によるもので、彼の証言自体信憑性に乏しいものとして否定していました。そのお話を聞いた時点が9月なので、今の段階でどのような説を用いているのか、お話を伺えればと思います。

また、9月の調査では早川さんが使っている資料に関して、高橋淡水が書いた『壮絶悲絶白虎隊』という本が最も参考にできるもの

と紹介していただきました。早川さんなりの日向内記の離隊の説については、「鬼官兵衛」と呼ばれた佐川官兵衛との事前の打ち合わせによって、日向内記が佐川官兵衛の下に行ったために離隊という形を取ってしまったという新説を紹介していただきました。

富田国衛著『会津戊辰戦争 戸ノ口原の戦い 日向内記と白虎隊の真相』

次に富田国衛さんの『会津戊辰戦争 戸ノ口原の戦い 日向内記と白虎隊の真相』を紹介します。この本では、「はじめに」の段階で関東学院大学の創立者である坂田祐先生を紹介しています。日向内記の離隊に関して食料調達説を疑問視し、その上でこれまで日向の離隊が描かれてきたものを時系列に並べて検証しています。特に中村謙の『白虎隊事蹟』を「日向を卑怯者の隊長とした最初の本である」と紹介していますが、最初の卑怯者と称した決定的な理由が何か分かりにくかったので、今回説明いただけたらと思います。

また飯沼貞吉の食料調達という証言は、時がたつにつれて飛躍したり脚色されたために、表現に変化が表れて食料調達となってしまうとして紹介しています。例えば、飯沼貞吉のインタビューを最初に載せた東北地方の地方紙「河北新報」には、隊長の日向は「敢死隊に用談があるからとその趣を篠田という白虎隊の隊士に告げて一人隊を離れて出ていった、その隊長はついに隊へ帰ってこない」とされています。この時点では、飯沼は全く食料調達の話をしていません。しかし、後々出た『会津戊辰戦争』の中では、白虎隊隊長の日向内記がみんなに向かって『我等には糧食の準備がないから敢死隊に相談して何とか都合して貰ふから、一同ここに待ちおるよう』と、单身闇の道を元来た方向へ急ぎ足にて引き返した」と表現されています。

富田さんは、こうして食料調達説が濃厚になっていくことに関して、日向隊長の監視隊への用談の中身を食料調達としてだんだん年を追うごとに思い付いていったのであろう

と、厳しい意見を出されています。『会津戊辰戦争』という本は、戊辰戦争の研究をする上で必ず目にするものですが、思い付きや主観的すぎる部分があると問題視しており、特に日向内記に関する部分では、富田さんはさまざまな本を用いての再検証をしています。

少し日向内記から外れますが、白虎隊隊士らが飯盛山で集団自刃した理由として、ようやく飯盛山に到達し、その上で隊士らが山に登って城を見下ろしたら城が燃えているように見えてしまって、それに絶望を感じてみんなど自刃したというのが通説となっています。しかし、自刃のきっかけとされる鶴ヶ城炎上という錯覚について、富田さんは「隊士たちは、燃えているのが上級の武家屋敷のみであるということを認識していた」とする説をあげています。それでは自刃の直接的理由は何だったのかということになりますが、この理由は、弾が尽きるまで隊士らが戦うと申し合わせた上で戦闘を続けて、文字どおり弾が尽きたことでほかに戦うすべをなくしての実行だとされていました。

日向内記に関していえば富田さんによるご著書が最も詳しいものだと思います。内容は白虎隊2番隊長であったところにこだわらず、日向内記の略歴やその子孫にまで触れた作品となっています。また日向内記の肖像画についても触れていて、「今現在出回っている肖像画は実物とはかけ離れたものである」と富田さんはおっしゃっています。むしろ、今お手元にあります坂田祐先生の写真を見られた方がよほど本人に近いのではないかと富田さんは推測されています。ただ、早川さんのお父さまの早川喜代次氏が書かれた『史実会津白虎隊』には、富田さんが似ていないとしている肖像画が載せられており、これが日向内記として紹介されているので、早川さん自身はこの肖像画についてどう思われているのか、ご意見を伺えたらと思います。

日向内記は、晩年会津には帰らず、隣の喜多方に住むこととなります。このいきさつに

については、会津若松との連絡が取りやすいことと、移封した斗南藩との情報交換が便利であったためとされています。この本は、日向内記の食料調達説などの通説を覆すことを目的に構成されていますので、これまでのほとんどの説を批判的に見るように書かれています。日向の行動自体を肯定的に見ている部分では、そうした理由から、少し富田さんの主観に寄りすぎる部分もある作品になっていると思います。ただ、これは地元の人としての地元愛を持った目線であるものなので、日向内記を擁護するこちら側としてはとてもうれしいものです。

最後に参考資料に関してですが、先ほど早川さんに紹介していただいたと言った高橋淡水の本は、分かりやすく読みやすい書物ではありますが、富田さんは信ぴょう性には乏しいものとしてとらえているようでした。

中村彰彦著『白虎隊』ほか

最後に、中村彰彦さんの作品を紹介しましょう。日向内記に触れているものは『白虎隊』だけですが、その他の著書でも会津人の気質をテーマとしたものがあり、たとえば直木賞受賞作『二つの山河』では、大正期のドイツ人捕虜収容所の話を書かれています。徳島の収容所が、ドイツ人捕虜をほかの収容所と比べて人道的に扱っていたという内容ですが、その所長が会津出身の方だったことから、会津の人間がさむらいと呼ぶのにふさわしい気質であることを強調した作品となっていました。

ほかに、保科正之や佐川官兵衛などを題材とした本を書かれていて、会津藩の歴史を題材とした著作が多い作家といえます。ただし、最近出された『戊辰軼々録』などは、戦国時代から明治に至るまで特定の地方を選ばずに書かれた短編集なので、幅広い時代をテーマとする歴史小説家です。

中村さん自身、これまでの白虎隊研究が白虎士中隊にばかりよることを残念に思っているためか、白虎隊の枠を大きくとらえている

ようでした。なお、白虎隊には士中隊のほかにも寄合組や足軽隊があって、そのすべてを一括して「白虎隊」といいます。

先ほども出ました鶴ヶ城の炎上の錯覚についてですが、中村さん自身、飯盛山から見下ろした鶴ヶ城を見た印象から、この段階では「城が煙に包まれていたのを白虎隊士らが見たというより、彼らの目には城自体が燃え上がっているように見えた」と表現すべきとしていました。この飯盛山から見た鶴ヶ城の印象については、私も初めて飯盛山に登って鶴ヶ城を見下ろしたときに、これだったら武家屋敷が燃えていれば私自身も城が燃えているように見えると錯覚するだろうと実感したので、富田さんの説を聞いた上でどう思うか、今日改めてお話を伺いたいと思います。

中村さんはこの本で、日向内記が若松に帰らなかったのではなく、帰れなかったという喜多方でのインタビューを紹介しています。このことについては、『歴史群像』の記事にも同じことを書いています。この『歴史群像』の記事は、私たちが中村さんが日向内記のことを書いていると知るきっかけとなったものですが、この「帰らなかった」のではなく「帰れなかった」という表現について、先ほどの富田さんの本の中は、でこうして「帰れなかった」という意見は先入観による解釈であるという厳しい批判がされています。この指摘についても、中村さんは今の時点でどう思っているのか後ほどお話ししていただきたいと思います。

先日配りましたご案内の中に、中村さんが逃亡説であるというような表現がされているかと思いますが、私自身この本を読んで逃亡説だとは思いませんでした。特に中村さんは、この日向の行動を「中隊離脱」と表現しています。離脱の理由は食料調達説という一般的なことなのですが、否定的ではあるにしろ「逃亡説」ではないように感じました。ただし、この離脱について、中村さんは「ミス犯した」と表現しています。早川さんと富田さん

は、恐らく「ミスを犯した」という部分では違う感想を持っておられると思うので、この違いについても伺いたいと思います。

早川さん、富田さんは、会津戦争が起こったときの会津、中でも白虎隊を軸としての調査を書いています。中村さんは、小説の題材に保科正之などを用いていることから分かるように、江戸時代を通した会津の一部である「白虎隊」をとらえているように感じました。そのため、日向内記に関しても、離隊の理由を探るというよりも、離隊したことによる周囲の影響を見ているように思えました。日向内記はあまり有名な人ではないので、初めてこの名を耳にする人も多いかと思いますが、そうした客観的な目線から見るとすれば、中村さんの作品が最も共感しやすいものだと思います。

これからお話しいただく早川さんと富田さんに関しては、そうした一般的な通説を覆すお話になると思いますので、その部分のお話をこれから楽しみにしています。

(帆苅) 早速、本日のメインに移りたいと思います。最初は、会津白虎隊記念館館長で元中央大学教授、会津若松市の市長も務められました早川廣中さんです。私どもは昨年調査に行ったときにお話をお伺いしたのですが、先ほどご紹介していただいたように、逃亡したのではなくて別な理由ということでした。早速、お願いします。

(早川) ただ今紹介いただきました、早川廣中です。今、政治の世界では、二世というのは大変評判が悪いです。私は昭和29年に高等学校を卒業して東京に出てきましたが、事情があり、51歳のときに郷里で市長選に立候補しました。投票日の3週間前に決めました。私の父が全区で票集めをしたというので、いまだに評判が悪いようです。「おまえは信任がない」と言われる根拠になっています。

私は、父が高齢なので、市長を1期やれば、

すぐまた記念館の館長になれると思ったのです。ところが、父が96歳まで生きていました、15年間部屋住みです。父は私の説を取り入れるような人ではなくて頑固だったわけです。従って、評判が悪い二世の話かと思って聞いていただければ結構です。しかし、二世も便利ことがあります。「おまえ、テレビにあまり出ないではないか」と言われましたが、2年前にTBSで、「第二次世界大戦はなぜ起きたか」という特集がありまして、東条英機と徳富蘇峰が中心の話でしたので、私も出演の機会がありました。徳富家のお孫さんが神奈川県在住でいらっしゃいます。訪ねたいと思ったので、神奈川県だということでこちらに喜んで飛んできたわけです。

私は、大学のときは「日本貿易論」という講座を持っていました。今風に言うところ、TPPの走りみたいな講座です。まさに世界は一つだという考え方ですので、それを引き下げて会津若松の市長を務めました。市長に就任したとき、「尊敬する人物は誰か」と聞かれて、思い付きで「松平容保だ」と言ったら、「松平容保は京都に行って7年しか政権が取れなかった。おまえも4年で終わりではないか」と言われました。そして、みんなが言うとおり4年で終わって、記念館に戻りました。

父が死ぬまでは、白虎隊についての論文を書くわけにはいきませんので、ひたすら我慢してきました。12年前に亡くなったので、ようやく『真説・会津白虎隊』という本を書くことになりました。父の書いた本等と矛盾しますと財団法人白虎隊記念館として困りますので、半分ぐらいは父の説を取らないと駄目だと思いながら書いたのが『真説・会津白虎隊』です。私は父と同じことではないので「真説」と付けたわけです。その真説の根拠は何かというと、今まさにズバツと指摘されたことです。私がぐらぐらしながら「真説」にしたところを、その道の専門家はよく見ていると思ってびっくりしています。

白虎隊のことについては、今日は日向内記

のことが主題になるだろうと思います。今から4年前にテレビ朝日で「白虎隊」を放送したときにもテレ朝の人たちとも議論になったのですが、内館牧子さんというシナリオライターは絶対人の意見を入れそうにもない、きつい質問をする人で、あれが出来上がってみたら全部内館説でできていました。これにはいささか参ったということですが、今は女性の時代ですから、逆らわない方がいいということのようです。

会津の史料について

6カ月前にお会いし、『真説・会津白虎隊』に触れてみないかと言われて、今の心境で正直言いますと、実はこういう催しがあると云ったら、郷土史家として会津の歴史研究をしている人が私のところに、今読まれたのと同じものを持ってこられました。そのほか、日向内記については、主に5冊の本に書いてあるということです。一つは『史実会津白虎隊』、もう一つは富田さんの『会津戊辰戦争 戸ノ口原の戦い－日向内記と白虎隊の真相－』、その他5冊の本が載っていますということで、どこがそうかということ已全部急きょコピーしたものです。2冊ありますので、これはここに置いていって各自読んでもらうことになると思います。

先ほどご紹介のありました高橋さんという人の本がありまして、その復刻版を出すに当たって、私が今から17～18年前に淡水さんの本を読んだときに、会津の歴史についてはどういう史料を頼ったらいいのか、私が市長のときから、「会津の本はいろいろあるけれども、どの本がいいのか」と再三聞かれていましたので、それなりに分析した方がいいと思いました。会津の歴史を冷静に見て、北原雅長という人が書いた会津では有名な『七年史』があります。これは、松平容保は、京都守護職を1回辞めさせられて、またなったのですが、ほぼ7年間務めたときの日記です。北原さんという方が幕末の会津側から見た歴史を克明に書き上げまして、この『七年史』

は日本史学会でも史実書として一番高く評価されているということです。

もう一つは、山川浩、山川健次郎、山川捨松という3兄弟が有名ですが、浩という人とは鶴ヶ城に籠城したときに家老としてナンバー2でした。それから、落城後、青森の斗南藩に行ったときはナンバー1になったという人です。妹さんは、大山巖という薩摩藩のナンバー1か2の軍人の後妻になったという、私が七光ではないかと言ったら、先日、その子孫の人と対談しましたら頑として否定していました。その方が『京都守護職始末』という本を出しています。これはまさに会津の弁明書です。会津がなぜこういう立場になったのかということと弁明し、克明に薩摩と長州の逆転をうまく突いています。従って、長州・薩摩連合が「発行をやめてくれ」と言っても出版までにはかなりずらしたのです。そのときに、一説では松平家に何か援助金が届いていたという話ですが、なかなかの人だろうと思います。

しかし、このことを書いたのは浩ではなくて健次郎です。健次郎さんは皮肉にも長州藩の割り当てで第1回のアメリカ留学生で行って、帰ってきて、東京大学の総長、京都大学の総長、九州大学の総長、九州工業大学の総長をやり、旧制武蔵高校の校長をやったということですが、彼がほぼ執筆したのだろうということです。どう見ても、戦っている人よりは学者の方が文章がうまいだろうということになっています。

この二つの本は、会津の正真正銘の文献です。中村先生以下、いろいろな先生がおっしゃったのですが、この二つの評価だけはあっているのではないかと考えています。

もう一つの問題は、あと2冊を私はここで解説しているのですが、『会津戊辰戦争』と『会津戊辰戦史』と二つあるのでちょっとややこしいです。『会津戊辰戦争』は平石弁蔵さんという人が書きました。平石弁蔵さんは武士の子どもさんとして、軍人として、最後

に旧制の会津中学の軍事教練の教師だった人です。平石家はこの弁蔵さんからいうと3代目の人が講談社に勤めていまして、歴史についてはそれなりの見識があるのですが、この方から私の方で昭和30年代に白虎隊記念館を創立したときに原稿をお借りしまして、皆さんにお見せしていました。

その原稿には、松平容保は恐れ多くて含まれていません。山本八重子には、あなたはこういうことをやっていましたかと。それから、飯沼貞吉にも、あなたはこういうことをやっていましたかと。そういうように生存していた関係者にあてた手紙に対して、戻ってきた原稿そのままです。ただし、その原稿が、肝心の相手の内容がないのです。従って、相手から「それはそうです」「それはそうではありません」という返事が主に書いてある原稿が白虎隊記念館に飾ってありました。数年前に、平石家で本にでもしたいのでしょう。「戻してくれ」と言われたのでお返しして、今はありません。しかし、私は一応のぞいたつもりです。

飯沼貞吉のその後

そういうことを見て、今、飯沼家のお孫さんが会社を定年になられて、お元気でいろいろ研究している方がいまして、いろいろおっしゃっていますが、そんなこともあって、今の飯沼貞吉さんの士中2番隊絡みで言った証言については果たしてどうなのかという説がたくさん出てきました。一番これを覆しそうなのは、会津の飯盛山からわずか1000mぐらい離れた所が慶山という山です。お城までは大体数キロ離れています。お城に行くまでの1kmか1.5kmの所に慶山という部落があったのです。私が小学校のときでさえ、慶山までの間は田んぼだったのです。

そこから、少し離れた家に飯沼さんが担ぎ込まれてきたと言いはれています。あまり人相のよくなさそうな、お金でも盗みそうな人が来たというのです。推測で言われているのは、刀を、それから、白虎隊員は出陣す

るときみんなお金を母親からもらっていました。これは「うちはいくらももらった」とかいろいろな証言がありました。これは別に士中2番隊だけではなくありません。会津の武士の子どもさんたちはみんなお坊ちゃまですから、みんなお金を持って、いざ危ないときはそれを渡して命は長らえるべきだという意味で母親があげたのだらうと思います。そのお金もあり、刀もありで、飯沼さんは、自刃したが、虫の息でいたところを、担ぎ込まれてきて助かったということです。前から地元では、慶山や、飯盛山の下の部落では、さも定説のごとく飯沼さんは担ぎ込まれていったということが言われています。どうも自己弁護したいこともあったらしいということです。

飯沼さんについては、あまり痛烈なことを言うのは控えたいと思いますが、明治維新以後、政府の高官になったのが、東京大学の山川健次郎さんや飯沼貞吉さんなのです。その他の人がいらっしゃいますが、大体、明治政府の高官になればみんな帰ってきてパレードをやったり大宴会をやったのですが、飯沼さんは一度もそれがありませんでした。国会議員を7期やった八田宗吉という方の息子さんの八田貞義という方が大学教授で役人になったので、私はこの人にくっついて総理官邸に行って人生を間違えることになったということです。そういう八田宗吉さんが、「飯沼さんはかわいそうだ。帰ってきててもあまり人と会えない」というので、東山で芸者をあげて接待したという文書をちゃんと残していました。

ですから、どうも飯沼さんもあまり地元で歓迎されていなかったようです。しかし、戦後、昭和30年ごろ、通信省でみんなでカンパしてお金を集めて、飯沼さんは飯盛山にお墓を造りました。仙台にもお墓があったのですが、会津の飯盛山にお墓を造りたいというので、飯盛山に通信省の人が分骨で造ってあげることになりまして、今、飯盛山のお墓の少し外れた所に飯沼さんの墓地があるという

ことになっています。

従って、私は、それぞれみんな人生の中で、自分の行ったことについては自己弁護というのはいつも付きまとうものだと思っています。そういう意味であると考えて、『真説・会津白虎隊』のときは、父が言い伝えられた説も取り入れながらぐらぐらしたということです。

佐川官兵衛と日向内記

父は、『史実会津白虎隊』のときは、128ページにはっきり、日向内記さんは、佐川官兵衛という人が籠城戦のときのナンバー3で、その佐川官兵衛に方面隊長としてどうも呼び出されたのです。今になってみると、富田先生がどういう表現をされているか分かりませんが、私はこの佐川官兵衛に呼び出されたという説の方に傾いているのですが、次の日の朝、6時ごろに戻ったみたいですが、そのときに3人ぐらいいばらばらになっている少年を連れて当時の鶴ヶ城に戻ったのです。

それで、彼は士中2番隊の隊長でした。士中1番隊はまだ出陣していなかったもので、お城に戻ってきました。従って、士中1番隊と2番隊で、名前がはっきりしないので私は合同白虎隊と付けて、士中1番隊と2番隊と予備隊の人で作った隊がありました。その隊長になるときに、日向隊長について誰かが「疑問がある」と言ったみたいです。それに対して佐川官兵衛は「そんなことはない」。佐川官兵衛は強烈な指導者ですから、会津の田中角栄みたいな人ですから、強引に押し切ってまた隊長になったということです。

佐川官兵衛が、私に言わせると重荷になったのだと思います。終始一貫して喜多方で亡くなるまで、「あれは佐川官兵衛の命令だった」と言えないところが、日向内記さんの武士としての人生観だと思います。これは戦争もそうです。戦争ではありませんが、私は政治の泥沼の中で人生を送ってきましたので、自分の上司のことについては、国がやることについてはなかなか言えるものではありません。

ん。「こんなばかな上司に」と思っても、それは死ぬまで胸に収めていくものだと私も思っていますが、私が総理官邸に務めたときに「これだけはばかばかしいからやめろよ」と言ったのですが、私は一番ペーパーの秘書官だったので意見が通りませんでした。この前、先ほど名前が出た四国に行ったのです。「この橋三つは駄目だ。造ったらとんでもないことになる」といくらでも言ったのですが、池田勇人と三木武夫と大平正芳がそれぞれ選挙区があるから三つないと駄目だというので通った。だから、日本の公共事業の赤字の第1号はあれだと言って、今じゃんじゃんテレビでやっています。そういうことになっています。

何十年後には言えますが、しかし、そのときにはなかなか言えるものではないと思っています。私は、佐川官兵衛が理屈も言わないでかばうというのは、人間の一番上に立った者のずるい点であり、また恩義も感じたのだらうと思っています。

質問の、飯盛山から燃えるのを見たということですが、あれも記念館を父が造ったときに展示しなければならなかったのですが、あまり貴重な資料が当時はありませんでした。そんなことでいろいろ作ったものがありまして、その中で、日向内記先生についても絵など参考にして肖像画を作っていました。しかし、6年ぐらい前ですが、肖像画と絵を間違えた人がいまして、読売新聞に全国版でたたかれました。「白虎隊記念館は肖像画と絵を取り違えたふりをしてやっているのではないか」と言われたのですが、私はそんなつもりはありませんでした。その後、肖像画は撤去しましたので、今はないのはそういうことです。日向先生のだけ撤去したのではないです。肖像画は誤解を生むから写真だけ残っているということです。

（帆荷） ありがとうございます。ポイントのところは最後にまとめていただきました。

続いては、富田国衛さんです。会津郷土史家で、おもはん社という出版社の社長さんでもあります。坂田先生の思いを受け止めてのご著書は福島民報出版文化賞を受賞されています。早速、お願いします。

日向家と内記の像

(富田) 今回のシンポジウムのテーマが、「坂田祐先生と祖父・日向内記の思想と行動」という大きなものですが、日向内記の「思想と行動」をさぐるにはあまりにも資料が少なく非常にむずかしい問題です。しかしこのテーマに沿わなくては話になりませんので、片々たる資料から、ある程度の内記像を浮き彫りにしてみたいと思います。

さきほど矢嶋先生のご紹介にありましたように、日向内記が我が喜多方で亡くなって喜多方に埋葬され、三男の寿松が私の母校の初代校長であったことを知り、その由縁に引かれて日向逃亡説の調査をはじめました。その結果をまとめたのが『会津戊辰戦争一戸ノ口原の戦い―日向内記と白虎隊の真相』という本です。2002年ころから調査をはじめ、2008年に自費出版しましたが、折しも関東学院大学さんでは「坂田祐研究プロジェクト」を2004年に発足されていたことを知り、タイミングの偶然性におどろきを持つと同時に、拙著がその資料としていささかの貢献のできることを喜んでおります。

また、川崎市にお住まいの新井田良子さんも、わたしとほとんど同時に坂田祐先生の調査をはじめておられました。そしてもうひとつつけ加えるならば、これは自費出版したあとに郡山市の古書店で求めて知ったのですが、会津若松市では2001年から旧日向内記邸の発掘調査をはじめ、2002年10月にその報告書が発行されました。報告書のまとめによると、16世紀から17世紀初頭の茶器等の優品が市内の武家屋敷跡と比較すると多かったということです。日向家代々の生活レベルと趣味の良さがうかがわれます。

これら日向内記に関する作業が、なんのつ

ながりもない四者によってほぼ同時期に発生していたことの不思議さを思います。

わたしの本のサブタイトルには「日向内記と白虎隊の真相」とありますが、じつを申しますと、「真相」という言葉を使うのにはためらいがありました。しかし尊敬している地元の歴史学の先生に、それぐらいの自信を持って書かなければだめだといわれ、また作家海音寺潮五郎氏の「歴史は再現することが出来ないのだから、複数の資料を矛盾なく組み立てて出た答えを事実とするしかないのだ」、という言葉がずっと頭にあって、それでおこがましくも「真相」という語を入れました。これまでいわれてきた通説の場面場面で新説を立て、必ず「なぜならば」ということで、複数の直接的資料や傍証としての資料を提示して、矛盾のない説明をしたつもりでおります。

海音寺潮五郎氏の言葉については、中村彰彦さんも近刊書のなかで「ドイツの数学者ヒルベルト以降の公理主義は、ある仮説によってすべての事実を矛盾なく説明できれば、その仮説は定説として認知されるべきだ、と教えている」と同様のことを書いておられ、いま、「公理」という後ろ盾を得て安堵感を持っているところです。

わたしは会津に住みながら会津の歴史には素人で、調査はほとんど手探り状態でした。会津図書館では、日向内記はもう忘れられた人です、と言われ愕然としたこともありました。そんなある日、喜多方市立図書館の薄暗い資料室で何げなく手にしたのが明治16年の役場の綴りでした。僥倖というべきか、めくっているうちに「日向内記」の文字が目にとびこんできました。内記長男真寿見が妻玉を迎えたときの受籍御届で、届け人を日向内記として印判も押してあります。明治のことですから、文面はすべて毛筆で届け人が書いています。まぎれもなく130年前、日向内記が喜多方役場の机に向かい、筆をとり、印判を押したものです。流れるような筆の走り、

かすれ、書いている内記の息づかいさえ感じられるようでした。会津藩上級武士の品性ある見事な筆跡に、深い教養を見、なんとはなしに内記の「無実」を直感させられたものでした。

日向家は会津藩祖保科正之の高遠藩時代から仕えてきた会津の名門のひとつです。累代700石を食み、分流は11家におよび、その宗家第9代の当主が日向内記^{つぎのり}次法です。

代々の当主は少年時代に小姓をつとめるものが多かったようです。内記の長女ミエは、「弟真寿見は城に上って小姓役、戊辰の役、会津戦争の時は小姓頭を務めておりました」と語っています。これを裏付けるように、小姓として「相応なる者」とした学校奉行の吟味推薦書が残っています。これは真寿見本人の人物はもちろん、家格、父親の人品などが吟味の対象となっていたことでしょう。

真寿見は維新後に工部省の電信技士となります。仙台局勤務のとき日清戦争が起り、軍に所属して朝鮮にわたりますが、明治28年3月43歳で現地で病死します。翌年の3月30日、同僚と部下など有志者によって、仙台の青葉神社に「日向君招魂碑」が建てられました。撰文と書を元仙台藩士で学者の大槻修如電が担当しています。大槻は国語辞書「大言海」を著した大槻文彦の兄で、父親は仙台藩の有名な学者でした。題字は農商務大臣榎本武揚が書いています。人が「招魂碑」を建てられるのはよほどのことで、真寿見はたいへんな惜しまれようです。

会津の家老だった西郷頼母^{たのも}が、血統についてつぎのような言葉を残しております。「人の行為は善悪邪正共にその血統を評する物に候えば、努力努力心し給え」と、これは武家が心得の第一とするところで、内記にも当然その自覚と血統のプライドはあったはずで、す。明治15年5月、内記は戦乱で焼失した日向家由緒書を分家の日向新介から借りて書き写しています。由緒を子孫につたえるのは武家として当然のことですが、名門宗家の内

記にはなお血統・家柄を誇りとするもののあらわれでもあったろうと思います。

軍人でもあった内記の孫坂田祐先生は、武士道の精神をもっとも簡潔にあらわしているのは軍人勅諭の「忠節・礼儀・武勇・信義・質素」であるとして書いておられます。坂田先生はやがてこの武士道の精神をもって神に忠誠をつくす考えになったということです。軍人勅諭の五カ条をつづめれば、会津藩主松平容保にみられる「正直・慈悲・決断」ということになります。坂田先生の母ミエは、18歳まで内記とともに松平容保を主君と仰ぎ会津武士道のなかですごしています。坂田先生は父よりも母から多く武士道的教養を与えられたと述べておられます。つまり先生の武士道精神は会津から流れ来ており、そこには祖父内記の存在があるわけです。したがって資料の少ない中、日向内記という人物を評するのに、坂田先生の人格をもってすることもあながち間違いではないだろうと思います。

日向内記の名が出てくる資料で一番古いものは、禁門の変においてです。

元治元年（1864）7月19日、長州藩が御所を襲った際、内記は組頭として唐御門を守衛し防戦します。「一隊の指揮行き届きついに賊徒退散、功作格別に付き」として御褒美銀子25枚を賜っています。武人としての及第点はとっていたことになります。

つぎにその容貌ですが、一般に流布している内記肖像は坂田先生をモデルにしたものとされていますが、しかし両者の像は一致するところがありません。むしろ内記長男真寿見の写真をもとに、「逃亡者」の先入観で描かれた肖像のような印象を持ちます。

日向内記邸の二軒隣に、戊辰当時12歳だった川原勝治という少年がいました。この人が昭和のはじめに、内記の印象を、「三条実美、阪谷芳郎に似てすこぶる艶男なり。従ってその性質も容貌にて判断できよう」と語っています。艶男金と力はなかりけり、というわけです。そこでわたしは三条実美、阪谷芳郎（政

治家・東京市長)の写真をとりよせました。やや晩年のものでしたが、坂田祐先生の晩年の写真に似ている印象を持ちました。そして坂田先生の42歳時の写真を見ると、「すこぶる美男子」だったので、私は隔世遺伝的にさかのぼって内記の肖像をイメージし、内記は孫の坂田先生に似ているのではないかと書きました。

慶応4年3月21日、会津は西南軍の侵攻にそなえて、まず日光警衛のためと称して軍を派遣しますが、ここで内記は砲兵隊の隊長をつとめます。この当時、会津藩はどのような状況にあったかといいますと、仙台藩と米沢藩の使者が会津の嘆願を朝廷に周旋するために訪れ、会津藩に武力行動を慎むように強く求めます。容保はそれを喜び、約束をします。したがって西南軍とは本格的な開戦という状態ではありません。しかし前線の兵士には敵愾心がつよくあり、西南軍に一矢報いようと待ち構えています。

4月7日、内記は部隊を藩境まで引き上げる命令を出します。これは仙米両藩の要求をうけた会津首脳からの指令によったものでしょう。しかし一番、三番分隊は引き上げたものの、二番分隊が命令を聞きません。使者からこのことを聞いた内記は憤り、自ら出向いて二番分隊を引き上げさせました。この「内記は憤り」という当事者の記録に、わたしは内記の生の感情を見、そこに内記の強い意地と責任感を感じ取ります。

その後4月15日、仙米両藩の使者がふたたび会津を訪れ、会津の降伏を求めます。そして会津は21日に家老の梶原平馬が降伏条件の相談に米沢に向かいます。会談中に、日向隊が宇都宮で戦闘中という情報が入ります。梶原は、日向隊はすぐに藩境の五十里村に引き返すように命令を出し、随行していた河原善左衛門を使者にして会津に帰させます。

さきほどの川原勝治(善左衛門子)は、「日向氏は戦闘に臨んで衆を鼓舞して猛烈に敵に

当たるような人ではない、というのが人々の評である」、とも云っていますが、このように、内記が日光方面に出軍していた時期は、会津はなるべく交戦を抑制していました。内記が戦闘をさせていたのは、必ずしも弱腰であったからではありません。

宇都宮で戦闘があったとき、相馬孫市という藩士が戦死します。孫市の遺族が「孫市は大目付日向内記隊に属し云々」と書き残しています。この時分、内記は大目付だったことがわかります。会津藩における大目付は二人制で、職掌は「政庁にあって政治を可否しないが、家老以下理を失ったと認めたときのみ藩主に言上する」とあります。その役目柄もあってか、本格開戦となると内記は若松に戻り、日光口の隊長は勇将山川浩にかわります。そして内記は、藩庁の中樞に身をおきながら主君の護衛隊である士中白虎二番隊の隊長となるわけです。

士中白虎二番隊隊長として

つぎに主君の護衛隊である白虎隊が、なぜ戦場に立つにいたったのかを申し上げます。

慶応4年(1868年)8月21日、薩摩・長州・土佐などの西南軍が二本松から母成峠を進路にとり、猪苗代、若松をめざします。母成峠は会津の藩境で、会津はここをなんとか死守しようとはしますが敗れてしまいます。

翌22日朝、西南軍は猪苗代に向かいます。猪苗代から若松まではわずか5里、20キロメートルです。その間2里半のところに戸ノ口川という猪苗代湖から流れ出る川があり、ここに十六橋という石橋がかかっています。西南連合軍は、22日の夜は猪苗代で宿陣、23日の早朝から若松進撃を予定し、途中の十六橋での会津の反撃は十分想定していました。

一方の会津は、21日の夜おそく母成峠の敗報をうけ、翌22日早朝からこの十六橋の破壊に取り掛かることをきめます。当日朝、石工職人などを大動員して破壊作業をするのですが、はかどりません。そのうち、猪苗代

にとどまらずに抜け駆けしてきた薩摩の一隊がありました。足軽クラスの兵具一番隊です。兵具一番隊は昼ごろに十六橋に到着して、会津と銃撃戦となります。銃器の性能に優る兵具隊は、時間ははっきりしませんが午後2時ごろには十六橋を突破し、戸ノ口原に侵入してしまいます。会津は応援部隊を要請するための使者を若松に走らせます。兵具隊もまた猪苗代に応援要請に走ります。

22日、会津藩主松平喜徳は、士中白虎隊の一番隊、二番隊に護衛されて城下はずれの滝沢本陣に松平容保とともに督戦のために出張していました。そこに、戸ノ口原から使者が飛び込み、援軍の要請を訴えます。容保はすぐにありあわせの人数を派遣しますが、血気に逸る白虎隊の面々も出動を願って止まず、いくら説いても聞き入れません。会津の武士を自覚する15、6歳の少年たちのこのときの気概を思うと少なからぬ感動を覚えます。日向隊長はやむなく直属の部下である二番隊37名をひきいて戸ノ口原に向かいます。このとき、残された一番隊の激昂はなほだしものがあったといわれています。

このようなわけで、日向隊長と士中白虎二番隊は戸ノ口原の戦場に立つことになったのでした。

かれらが戸ノ口原に着いたときはもう夕暮れに近い頃でした。若干の戦闘はありましたが、この夜は明朝の決戦を期して両者ともおむね睨み合ったままです。

翌23日朝、白虎隊はほかの会津軍とともに戸ノ口原で戦います。連発銃を持った2000人ぐらいの薩長勢に対して、会津はおもに旧式の銃や刀槍でしたからたちまち敗れて、皆ばらばらになって山中に逃げ、城をめざします。

白虎隊が22日の夕方に戸ノ口原に着いたときから、翌朝の戦闘そして敗走、その中で日向内記、これらの情状は複雑すぎてここで述べることはできません。ただ、内記が22日の夜に隊を離れて参謀本部に行ったこ

とは事実です。しかし翌朝の決戦をひかえた隊長が参謀本部に向うのは少しもあやしむことではありません。

ともかく23日朝、会津側は敗れて総軍引き上げとなり、籠城戦に入ります。白虎隊の一部は滝沢本陣の殿様の安否が気になって飯盛山をめざしますが、状況に絶望して数名が自刃します。飯沼貞吉は喉を突いたものの通りがかりの者に助けられて蘇生します。こうした特異な体験をした飯沼のはちに取材ぜめにあいます。報道取材者の中に、あることないこと書く人がいるのは今も昔もかわりません。ここに人口に膾炙するわかりやすい「白虎隊物語」が練り上げられていきます。

ここで伊藤綾さんのご質問にお答えします。伊藤さんは、私の本のなかで「中村謙の書いた『白虎隊事蹟』が、日向を卑怯者の隊長とした最初の本である、と紹介しているが、その決定的な理由がわかりにくかった」とのことですので申し上げます。

この23日の戸ノ口原の戦闘場面を描く中村謙の原文を引用した中に、「隊長まず逃る」と書いた箇所があります。そして「白虎隊大いに激して曰く。ああ、かくの如きもの何ぞ指揮の任を仰ぐに足らんや」と続きます。それで日向内記を卑怯者扱いにした最初の本だというのは、その部分を指して言っているわけで、とくに理由を書く必要はなかったのです。「隊長まず逃る」という書き方は、すなわち卑怯者扱いということです。

『白虎隊事蹟』は自刃蘇生者飯沼貞吉の証言によって書いたと著者は言っていますが、一方で飯沼は、前夜「敢死隊に用件がある」といって隊長はついに帰って来なかったと証言し、これが「食糧調達を理由に逃亡した」と変化して今日まで語りつがれて来ました。朝まで帰って来なかった日向隊長が、どうして朝の戦場で戦って「まず逃る」のか、飯沼の談話とされるものはいろいろあるのですが、第三者にゆがめられたりして、このように矛盾するところが少なくないのです。

じつはおととい（3月2日）、このシンボジウムに合わせたようなタイミングで、会津の季刊誌『会津人群像』という雑誌が発売されました。「飯沼家に伝えられた白虎隊の真相」と題する特集が組まれ、飯沼貞雄（もと貞吉）翁の直筆手記などが載っています。

その中に、やや見下げた感じの「白虎隊隊長の末路」という見出しがあります。そこにはこう書いてあります。「後日聞くところに拠れば、隊長日向内記は戸ノ口街道に駐屯せし我が他の軍隊に用事あり、単身之れに赴きたるも、暗夜途を失し遂に翌朝に至り復帰せんとするとき、敵の襲撃に遭い、余儀なく閑道より城中に入り、其の後間もなく城中に於て死したる由、其の死去の原因は、藩中重役の非難を受け、自殺したるものの如し」。食糧調達云々は出てきません。

この手記は明治35年頃に書かれ、平成20年6月に子孫の方が自宅で見つかったということです。これをみれば、さきほどの『白虎隊事蹟』の中の「まず逃る」は、自刃した白虎隊を嘆賞するあまり、作者の筆が先走ったと思わざるを得ません。自殺云々については後でふれます。

籠城戦にはいって二日目、白虎隊は二番隊の生存者と一番隊を合わせて合併白虎隊を編成し、日向内記がこの隊長になります。守備場所は鶴ヶ城の西出丸です。岐阜の郡上藩から会津応援としてやって来た凌霜隊という青年部隊がありました。この凌霜隊も日向隊に属して白虎隊とともに西出丸を守りますが、のちに小山田隊の所属となり北出丸の守備にうつります。小山田隊長は凌霜隊員に評判がわるく、そのうえ日向隊とちがって待遇がわるく難儀します。そこでこれまで通り日向隊に戻してほしいと訴え、ふたたび日向隊となり一同は大喜びします。そういうことを隊員の矢野原与七という人が記録に残しています。白虎隊については、「日向内記隊は白虎隊とて若年血気のもの50人ばかりなり」と、その勇気勃々たるぶりを書いています。そし

て明日は降伏という日、日向隊長から名簿を書いて差し出すように指示されたと書いています。

そこでさきほどの、「隊長は城中に入りまもなく自殺したる由」についてです。矢野原の記録でおわかりのように、内記は籠城から開城まで西出丸の指揮にあたっています。飯沼は喉の傷を喜多方で癒していましたから、籠城戦には参加していません。飯沼手記は、内記については同僚の白虎隊士から話を聞いているようにありますが、内記指揮下で西出丸を守る白虎隊士の中に、内記自殺の話が出るはずはありません。

いずれにせよ、「飯沼談話としてはじまった」日向隊長の逃亡問題は、この「飯沼手記によって否定」されたわけですから、もってこれを最終結論とすべきと思います。

その後の日向内記

落城後、会津は23万石からたった3万石に減封され、南部藩領の一部をさいた荒蕪の地に領地替えとなります。ここを斗南と名づけて斗南藩を立て、会津藩士たちは移動します。移住はしたものの3万石とは名ばかりで、斗南は実質7千石ばかりの不毛の地でした。内記は、旧会津藩士の窮乏生活を助けるために、密命によって地下工作にあたります。この事実があらかになったのは、大湯にお住まいの内記子孫・中村成喜^{しげき}さんが昭和52年に地元秋田で発表したためです。会津には十年後の昭和62年に紹介されていますが、あえて取り上げる人はいませんでした。

中村成喜さんは、内記の長女ミエの曾孫で、ミエは先ほど申しましたように坂田祐先生の母親です。わたしは平成13年に大湯の中村成喜さんをたずね、旅館を経営されておりましたので、ここに一泊してお話をうかがい、また資料を見せていただきました。成喜さんは、小学生のころ、士族出の親戚のおばあさんに「お前さんは日向のじいさんの血を引いていることを忘れてはなりませんぞ」と言い聞かせられ、会津武士の精神で育てられたと申

されておりました。

成喜さんの話でまず驚いたのは、戸ノ口原の戦い以後の内記は、板垣退助に監視されていたために変名していたということ、さらに落城後は函館におもむいて西郷頼母と榎本武揚に会い、会津再興について用談をしているということでした。驚いたというのは、その傍証となりそうなかすかな資料が会津側にあるからです。これは実にかすかなもので今後の調査をまたなければなりません。

ミエの口伝による中村成喜さんの話を続けます。

内記は明治3年9月、若松の御薬園から2歳になったばかりの藩主容大（容保長子）を護衛して斗南五戸に向かいます。その後、会津に引き返し、移住の藩士たちと共に、18才のミエを同行してふたたび五戸に来ます。この時は斗南藩の財政に関する資金の輸送が主目的で、「百姓姿に身を変えた侍たちが、馬の背に積んだ肥え桶に金子を入れ、こやしを積んでいるように見せて、途中の難を逃れる工夫をしたものだ」と、後年ミエが家族に物語っています。

秘密工作にあたって内記は、ミエを脱走ということにして戸籍から抹消、会津の神官平野吉重を中村富造と変名させ、ふたりを夫婦にして大湯に住ませ、ここを秘密救援の拠点にします。二年数ヶ月の後、会津喜多方から米沢藩領を経由して、大湯・大柴峠を越えた今の清水部落に近い山中宿に三戸、五戸方面への連絡路を設定して諸準備をし、再び喜多方にもどり、五十嵐家に奇遇して任務遂行につとめたということです。

中村富造とミエは、大湯で酒造業を始めます。酒造りには米が原料なので広大な田地を買い入れて、一部は酒工場で酒造りに使用し、ほとんどの米は南部藩国道の山中に建てた「山中の宿」に運び、これを旧会津藩士青山与左衛門に管理させ、三戸、五戸方面の移住者へ食糧補給地としての役目をさせていたそうです。五戸には会津藩士矢村精記が藩士

名簿にありその協力者としておりました。

また、内記の指示で大湯地域にある集落に馬数十頭を貸し与え、仔が2才になるとセリに出して仔分けという方法で貸主、借主が売り金を半々に分けたそうです。富造の残した送り状で、中山の宿経由で三戸、五戸方面に米、金子が送り届けられたことがわかります。内記は大湯に移住の富造に命じて食料、金子の調達をさせ、また、喜多方からの情報を入手させて自分は広く行動をしておったとのことでした。

内記は鶴ヶ城落城の時は42才で長女ミエは18才、長男真寿見は2才年下の16歳であった。内記は藩主容保公と同じくらいの年令であったようです。

成喜さんは教員退職後に以上のことがらについて調べはじめましたが、わたしが訪ねたころはやや体調をくずされて、思うようにはかどらなかったようでした。内記の救援活動を会津の歴史に加えるには、ぜひともミエ口伝の裏づけ資料が必要です。

そうしたところに、坂田先生の研究をされていた川崎市の新井田良子さんが取材のために大湯を訪ねます。ここで新井田さんは、坂田先生よりも内記とミエに大きな関心をよせ、口伝の裏づけ調査をはじめます。そして、五戸には米が送られていた事実があったこと、青山与左衛門は実在の人物であること、青山は会津藩士ではなく、じつは南部藩支族南部壱岐の家臣であることを資料によってつきとめます。すると、南部壱岐は南部藩の家老で鹿角郡大湯など12ヶ村を知行地としていることがわかりました。中村酒造店のあった場所は、大湯城へ登るお城坂といわれるそばにあり、大湯城主南部壱岐の了解なしにはここを拠点とすることはできないはずだから、南部壱岐も内記の救援工作の協力者であったといえるだろうと、新井田さんは推測しています。

内記が馬数十頭を貸し与えていたことをいえば、これは南部駒と考えられるので、南部

壱岐の存在によって調達は可能であったことでしょう。酒造りも南部杜氏という言葉があるくらいですから、酒造り職人の手配は容易であったと思われます。つまり酒造業も馬の貸与も産地の利をいかした商売であったから、立ち上げは割合に上手くいったのではと思います。会津から運ばれた金子は、まずこうした準備資金にあてたと思われます。

会津からの金子について新井田さんは、五戸での協力者矢村精記の子孫の方を三戸にたずね、「明治4年に五戸で火災があった際、会津から肥桶に入れて運んだ金が被災民たちの役にたったそうだ」という話を聞き出して、ミエの口伝を裏づけます。また五戸の郷土史家からは、会津の墓地に隠匿しておいた金子が運ばれて来たとの話を聞き、もしやと思い富造の出身地の会津上野尻に足を運ぶと、ここでも馬に積んだ金子がどこかに運ばれていったという話を聞かされます。内記の救援活動の初動をささえた現金は、内記が会津から輸送したものと認めざるを得ません。

斗南藩士たちの惨憺たる生活は数々記録されています。内記の救援活動が彼らの生活にどれほどの潤いをもたらしたかはわかりませんが、優先的には五戸に置かれた藩庁の維持に当てられたのではないかと思います。

斗南藩はのちに青森県に編入されますが、青森県は明治6年末、成果のあがらない開墾の中止と、旧斗南藩士への救助米金打ち切りを決めます。さらに明治8年1月に一時金を支給して、斗南移住後ずっと支給してきた扶持米を完全に打ち切ります。内記の救援活動の必要はいっそう増していきます。しかし旧藩士たちの生活は苦しいままです。かれらは、この困窮生活を脱するために、就産資金貸下げの請願を政府に出します。明治16年3月26日、総額6万9千875円の「旧斗南藩士就産資金貸下げ」がきまります。対象は旧斗南藩士1075戸、7年間据え置き、無利子、10年返済という条件でした。内記らの救援活動はこれを機にして停止したものと考

えられます。なぜなら、内記はこの年の3月6日の日付をもって喜多方の肝煎五十嵐弥六郎の貸家に腰をおちつけているからです。このときの入籍届書が役場の綴りに残っています。これは「内記は喜多方の五十嵐家に寄寓して活動していた」というミエの口伝を裏付けるものであります。

救援活動を終えた後の中村家の生活は赤貧洗うがごときものでした。富造・ミエの長男進は、少年時代の思い出として「数十頭の牛の背に米俵を積んで出ていくのを見ているがその代金が入ってくるころは見ることがない」と、孫成喜さんに語っており、二男の坂田先生も「貧乏のどん底であった」と書いておられます。

この赤貧は何をあらわしているかといえ、救援活動において内記も富造も私腹を肥やさなかったということであり、さらに富造もミエも救援工作のために士族を捨てているので、就産資金貸下げの対象者から除外されていたからでもありました。

内記もまた喜多方で赤貧生活をおくります。喜多方には教鞭をとる三男の寿松がいました。喜多方へ落ち着いて2年半後の明治18年10月31日、おそらく病床にあったがためでしょう、寿松と同族日向栄三郎の長女ミヲとの結婚をいそぎ、そのわずか四日後の11月4日、内記は59年の生涯を終えます。めずらしいことに、真寿見の名で提出された「埋葬許可願い」の綴りが残っています。死亡時刻午前1時、埋葬日時9日午後1時、埋葬場所小田墓場とあります。誕生日よりも最後のこうした数字は人間の実在を強く印象づけます。喜多方に住むものとして、この「埋葬許可願い」の綴りには深い感慨をおぼえます。

日向内記の救援活動は秘密のうちに行われていたので、証拠資料というものが存在しません。したがってこれを証明するには、長女ミエの口伝を傍証、傍証で固めていくしか方法がありません。むずかしい作業ですが、当

時の会津藩の情状と内記の行動をきちんと整理しておく必要は大いにあるのではないかと考えております。

（帆苅） それでは最後となりますが、中村彰彦さんです。作家で、『二つの山河』で1994年に直木賞を受賞しています。その他たくさんの方の会津を舞台にした作品を書かれています。どうぞよろしくお願いします。

（中村）

朱雀隊

私が個人的に会津史を勉強しようと思ったのは、もう25年ぐらい前のことです。佐川官兵衛という会津藩士の生涯を追究したいと思ったのがきっかけでした。この人は白虎ではなく、18歳以上の最も働き盛りの人たちが構成される朱雀隊、その中でも最強といわれた朱雀4番士中隊の隊長で、最初は越後口に出陣します。河井継之助が越後口であそこまで戦えたのは、長岡藩だけの力ではなく、佐川の朱雀隊や、佐幕派最強といわれた桑名兵が協力したためです。のちに、日露戦争でドン・コサックを蹴散らすことになった立見尚文将軍も越後口に集結していました。

どうも会津の幕末史というと、白虎隊の知名度が抜群に高いのですが、最前線で苦労したのは朱雀隊4番士中隊でした。しかも、佐川官兵衛はその後西南戦争で出陣しまして、このときは白虎隊の生き残りも彼に付いていきました。残念ながら阿蘇の中で薩摩軍と遭遇して、そこで佐川官兵衛は戦死しているのです。ですから、こういう流れを見ていると、何か幕末という時代は西南戦争で終わるという感じなのです。その後でやっと明治が始まるということで、明治10年までは幕末と考えていいような気がします。そして、その中にいわゆる賊軍と官軍という二元論があるのですが、それが次第に解消されていくという感じです。

最初、蛤御門の変で、賊になったのは長州軍です。これを撃破して官軍として名を挙げ

たのが薩摩藩および会津藩です。これがいつの間に価値観の変化で、会津藩が賊軍となって薩長側が官軍になります。そして、いつもうまいこと官軍になっていた薩摩藩が今度は西南戦争で賊になります。「朝敵回り持ち」という言い方もあるのです。それだけくくる変わる時代で、それがやっと落ち着いてくるのが西南の役終了後です。ですから、何か明治10年までは幕末という感じがして仕方がないのです。25年前は朱雀隊のことをあまり誰も書いていないので、では書けるのだったら書いてみたいというのが本音でした。そのときは白虎隊の研究は大体終わっているのかなと漠然と思っていたのです。

しかし、その後文春新書の『白虎隊』を書きました。なぜ書いたかという、少し事情が変わってきたのです。酒井峰治という白虎2番士中隊の生き残りの人の記録が突然発見されて、それを早川さんのところで活字化したのです。それで随分飯沼貞吉証言以外の動向が分かってきたということです。率直に言って、それ以前は飯沼貞吉証言でしか2番士中隊のことは分からなかったのですが、必ずしも彼の回想は正しくありません。生き残った人のことをおとしめるようになるのでなかなかそれは言いづらい、特に会津の地元の方は言いづらいと思いますが、かなり都合の悪いことを隠しているようなところを感じます。

極端に言うと、彼は、先ほど触れられたように、強盗に刀を取られ、金銭も取られた可能性がある。それが格好悪いので、士族のおばあさんに助けられたということにしてしまっている可能性がある。本当は別の人に助けられているのに、その人は農民なので、自分の女性に助けられたということにしている可能性がある。唯一の生き残りの証言だから、これに乗って考えていくしかないのですが、100%彼が真実を語ったとは言いにくいものがあるということです。

そこへ酒井峰治という人の回想録があらわ

れて、突然白虎隊に対する新しい手掛かりが出てきたわけです。特にこの富田さんのご本は、日向内記の戦後の役割というところまで踏み込んだ大変画期的なご本だと思って感服しました。

日向内記のイメージ

私が日向内記という人をどういうイメージで考えているかをお話して、それからご質問に答えて終わります。

この人は、文政9年（1826年）生まれです。明治元年には42歳、最も人間として成熟して判断力もつく年代と言っていると思います。そして、番頭七百石です。会津藩は各藩士の石高を低く抑えてあります。千石で一人採用するよりも、三百数十石で優秀な人間を3人採用した方が人材が集まるという発想です。保科正之の時代からそういう優秀な人材を集めるという方法は同じです。佐川官兵衛の場合は三百石、日向内記は七百石です。

ここで私は不思議に思うのです。職務体制は、番頭の上が奉行、若年寄、家老といきまして、若年寄より上が重要書類は花押を書くという資格が出てきます。それを加判といいます。重役ということですが、内記の七百石取り番頭という席次は、いつ奉行、若年寄になっても不思議ではないランクなのです。それが番頭で、ずっと石高の加増もない。七百石のようです。ですから、何のミスがあったということでもないのですが、あまり際立って優秀な人材だったとは言えないと思います。

例えば、佐川官兵衛は三百石で朱雀4番士中隊に行き、隊長として奮戦力闘して、あまりにも優秀なので、途中で会津へ戻されて、若年寄を飛び越えて家老に抜擢されています。山川浩も日光口で敵を見事に食い止めたので、すぐに家老になって、城へ戻って防衛戦の指揮官に任命されました。そういうところから比較しますと、内記はずっと番頭七百石、そして、最初は朱雀2番士中隊の隊長に

なります。この段階では明らかに佐川より格が上で、佐川は4番です。しかし、内記がこのころのように奮戦したかということは、記録的にはまず全く出てきていません。

その後は、山川浩と一緒に日光口を守っていきます。山川浩が見事に敵を食い止めて、あまり日光口の会津軍が強いので、新政府軍側の隊長が会津側の捕虜に尋ねたという記録があるのです。「なぜ、おまえたちは最近急に強いのか」と聞きましたら、「われわれには、旧幕府軍だけでは駄目なので、最近山川大蔵（浩）という人が来て副隊長をしておられる。驚いたか」と捕虜が威張って答えたという話もあるほどです。その山川浩が城へ戻されるわけです。日向内記がその後を受け持って、砲兵隊長になります。しかし、その後あまりにもデータが少なすぎるので、決めつけていいかどうかというためらいがあるのですが、この方は第一線の野戦の司令官として一流の人だったとは思えません。逆に、事務方とか外交的な方面で能力があった人ではないかという気がします。

その一つの証拠としては、先ほどの要約が間違っていたと思いますが、内記がミスをしたというのは日光口にいたときのことです。「慶応4年4月23日、内記はミスを犯した」と私は『白虎隊』に書いています。宇都宮城を一度は奪った大鳥圭介軍が今市まで北上してきたというのに、内記は大鳥軍と合流するのをためらい、領内の五十里村へ兵を返してしまいました。これがみそなのです。大鳥圭介というのは旧幕府の歩兵奉行です。ですから、旧幕府軍が来たらすばっと迎えて、不利な布陣を建て直して共同作戦を立てるのが常識です。それをわざわざ援軍が来ているのに引いてしまうというのはミスです。ですから、第一線の司令官としての器量はさほど見るべきものはなかったと思います。それがすなわち白虎隊という予備の兵力の隊長に任じられた理由でもあると思います。

もともと白虎隊は少年部隊ですから、前線

に出て、朱雀隊のように死屍累々となりながらも戦うことを想定して作られた部隊ではありません。ですから、武器も、ヤーゲル銃という照門も照星もないような、訓練用の銃しか最初は配布されていませんでした。実戦部隊で優秀な能力を発揮できる人物であれば、こういう部隊の隊長には指名されないと思います。ですから、このとき日向内記が白虎隊の隊長になり、朱雀隊の隊長だった佐川官兵衛が大抜擢で家老になった。しかも全軍を仕切るという立場になったというのは、武官としてのセンスの差の現れた人事だという読みが成立すると思います。

三つの敗因

ただし、だからといって、内記が敵前逃亡したというのはちょっと気の毒だと思っています。慶応4年8月22日、急に十六橋を突破した新政府軍のスピードがこれまでの日本の歴史にないような進撃スピードだったので、会津方が慌てるわけです。ですから、急遽殿様の守衛だけしていればよかった白虎隊まで前線に投入せざるを得ませんでした。ですから、当然、出動した部隊に相互の連絡が取れていないのです。佐川官兵衛が全軍の司令官になって強清水まで進出したのも22日です。猪苗代へ敵が侵入してから話なのです。

しかも、兵隊が少ないので、お坊さんや度胸がある町民を全部かき集めて、敢死隊とか急造の部隊を作りました。そして十六橋へ向かわせて、硬い石の橋をつるはしでたたき落として、橋を落とせば守りきれると。ところが、頑丈に造りすぎていたので壊せない。しかも、町人などの募集兵なので、対岸から7連発のスパンサー銃をばんばん撃たれると、それだけで仰天して逃げってしまうのです。それでも破壊工作は失敗します。その中に白虎隊とかいろいろな隊がいても、いわゆる平原大会戦でしたら、1段目、2段目、3段目ときちんと陣を立てて、そして左翼、右翼、中軍と作って連携した動きで勝負を決します

が、それが全くできないような状況なのです。そこに少年たちの部隊が入ったところで、強力な戦力の補充にはなり得ない。

ですから、佐川は一応中軍司令官として強清水まで行っていますが、日が暮れてくるとどこに誰がいるのかも分からないような状況で、前線に行って指揮したという記録さえ見当たりません。しかも、佐川官兵衛もこれは駄目だということで、その日の夜のうちに折り返して鶴ヶ城へ戻っています。その戻る途中で日向内記と合流した話は、私も今初めて聞いて驚きましたが、そのように、佐川官兵衛自体も城に引いているわけですから、その他の隊長が返ってくるのも不思議ではないという気がします。

それと、白虎隊の死んだ少年たちに厳しくなるかもしれませんが、日本の戦の原則というのは、隊長クラスに「おれが帰ってくるまでここにいろ」と言われたら、弾丸や矢がびゅんびゅん飛び交って何人かがばたばた倒れてもじっとそこにいる、折り敷いている、というのが一番怖い部隊なのです。関ヶ原における島津軍や、大坂の陣における後藤又兵衛隊が敵から見てもっとも怖かったのは、一度折り敷くと決して動かなかったからです。そして、旗も槍も全部草原に隠しておとなしくする。それがいざとなったときにはさっと立ち上がって、旗をさっと立てて、槍の鞘を抜いて林立させたりすると、敵はびっくりするのです。雰囲気は飲まれてしまう。そういうふうにして徹底的に折り敷いていなければいけないのに、この少年たちはそのルールを自ら破ってしまいました。これは日向内記の非ではありません。その後、気の毒に自刃をしているので、そういう批判は表だってしづらいのです。私も皆さんの前でこのことをお話しするのは初めてですが、白虎士中2番隊の少年たちは指揮に従うという感覚をどこかで踏み外してしまったということです。

それと、白虎隊の中は意外と何派かに割れていて、統率感がないのではないかという気

がします。一つには、会津藩の教育というのは、人と意見が合わなかったらがんがん議論しろ、争うべきだというのが保科正之の時代からの教えです。新しく出てきた史料でも、「ヤーゲル銃なんか使えるか。こんなもので実戦なんか戦えるか。もっといい銃を配布しろ」といって武器庫の役人とせめぎ合って、その結果、いい馬上銃を持って出撃したということを酒井峰治が書いているのです。この少年たちは、役人たちとがんがんやり合うような気性のグループだったということです。

ですから、帰り際も何人かに割れてばらばらに帰ってくる、小隊長や半隊長が「おれと一緒に来い」と言っても、あまり尊敬していないですからその人と行動を共にしていません。平の隊士が隊長の補佐役の注文に応じていないのです。要するに人間関係があまりうまくいっていませんでした。やはり急造の部隊で4月に編成されて4カ月後にもう出動ですから、上官と隊士の一体感がまだきちんとできていないような気がします。ですから、隊士たちの一部は自分たちのグループの兄貴分の命令で動いてしまったのです。大変酷なようですが、指揮系統をきちんと守らなかったあたりからばらばら感があって、それがこういう結果を招いたのだと思います。

それから、この人たちはどこまでも生きて入城するのだと最初は主張していた少年が、もう駄目だから一緒に死のうではないかといいい出した時点で一気に死に傾斜してゆきます。ところが、酒井峰治少年やほかの入城した人の記録を見ると、みんな途中で「死ぬな。絶対生きろ」と言われて、死に傾きかけた気持ちが生きようという方向にもう1回もどっているのです。そうやって「生きろ」と言われたという人はみんな生きて、お城に帰り、そして降伏の日まで戦っています。そのように、何かのきっかけで死へ死へと針が振れっぱなしになってしまうというのが、鶴ヶ城が燃えていたという認識につながるのだと思います。

ただ、酒井峰治という人の記録を見ると、彼も飯盛山の近くまで帰ってきて鶴ヶ城を見たとは書いてあるけれども、その後、何も書いていないのです。これは城の周辺がまだ炎上していなかったのではないかと思います。ところが、ほかの二十人が飯盛山に帰ってきたのはそれより少し後のことであって、そのときには、飯盛山から見るとこちらに鶴ヶ城があるとなると、私から見るとこちら側が大手門につながる上級武士たちの屋敷です。奥に西出丸があって、その向こうが日新館です。日新館というのは8000坪ぐらいの大きな、大変レベルの高い藩校でしたが、ここを敵に取られると大きな陣地がお城の真横にできてしまうので、西出丸から火矢を放って焦土戦術です。ですから、日新館の8000坪がぼうぼう焼けている。そして、右側につながる大手の武家屋敷では一族自刃して火をかけて死んでいる人たちがたくさんいるのです。ここが燃えています。奥とこちらが燃えていて、あちらも燃えている。そうすると、コの字型の三方が燃えていて、燃えている手前に天守閣が立っている。これが、天守閣も燃えているように見える距離なのです。

酒井峰治が帰ってきたときにはまだ燃えていなかった。ほかの人たちも燃えていないので、まだ城に入れるというので入った人もいた。しかし、飯盛山に登った者たちは、もう城は落ちたと思いこんで全員自刃した。それには身心の萎えという要因もあったでしょう。22日の夜は寝ていない、食べていない、そして雨にずっと打たれていて体が冷え切っている。また洞門をくぐって、雨も降っていますから、全身ぐっしょりです。あの洞窟は猪苗代の水を引いているのですが、猪苗代は雪が深いので、あの水は冷たいのです。私も手を浸したことがあります、これは冷たい水だと思いました。早川さんの亡くなったお父さんに伺ったのは、小さいときに、洞門を抜けてきたところはちょっとえぐれていて、その水へ飛び込むとものすごく体が冷え

る。飯盛山に上がっていくとお墓がたくさんあるので、お墓の石に抱き着くと体が温まる。そうやって遊んだものとおっしゃっていましたが、そういうことなのです。

その後、郡上八幡の郡上藩から凌霜隊という援軍が来ます。今、凌霜隊の記念碑も飯盛山にございますが、この凌霜隊が西出丸に入っています。一緒に籠城戦に参加してくれたというので、今でも会津若松市と郡上八幡市は姉妹都市なのですが、この郡上八幡の凌霜隊を世話したのが入城していた日向内記なのです。佐川官兵衛も帰ってきているのですから、日向内記が帰ってきていても当たり前です。何をおめおめと、という感覚はその時点ではあり得ないと思います。

それと、佐川官兵衛は鬼官兵衛というあだ名があった人で大変強いのですが、日向内記という人はそういう逸話も何もない地味な人です。外交的あるいは事務的なセンスがある人なので、凌霜隊というわざわざよそから来てくれた人たちに対して、大切に扱うべきだと。しかも、大鳥圭介の迎え入れに一度失敗していることもあるので、この凌霜隊にはきちんとした対応を行う。それで、凌霜隊は彼に感謝する記録を残したという順序で考えられるのではないかと思います。しかし、いかんせん記録が少なすぎるので、ちょっとした飛び石と飛び石をつないでいくとそういう読み筋が出来上がるかなという程度の話です。

キリスト教と戊辰戦争

キリスト教と戊辰戦争のかかわりというのを述べたいと思います。会津藩からも、明治になってからクリスチャンになった人が出てまいります。一番有名なのは、山本八重という人です。この人は鳥羽伏見で弟の三郎が戦死していますので、悔しいというので、断髪して、スペンサー銃を持って城へ駆け付けて、籠城戦の最前線で戦った女性です。後に新島襄と結婚して新島八重になります。その人が会津で洗礼を受けた女性の第1号です。会津

藩ではありませんが、変わったところでは坂本竜馬を斬ったと言われる今井信郎は、元京都見廻組の隊士で五稜郭まで戦い抜いた男ですが、この人もクリスチャンになりました。それから、鈴木勘右衛門という全く無名の新撰組の隊士も、明治になってからクリスチャンになっています。友人たちが非常に無残な姿で死を遂げる、それを指をくわえて見ていなければならない口惜しさが、信仰への目覚めにつながるのかなという気がします。

それと、会津についてはいろいろ毀誉褒貶が生まれて、今もその残滓があるということですが、やはり籠城というのは、戦史的にもエポックメイキングなことで、籠城女性の中から日本の近代看護学に目覚める一群の女性が出てきたと感じるのです。山川捨松という人はアメリカのバツサー女子大に留学して優秀な成績を収めた人ですが、彼女はそこでアメリカの看護学を学んでいるのです。この人の兄嫁（山川浩夫人）は鶴ヶ城で爆弾の破片を浴びて死んでいます。それを見ているということです。山本八重も日清・日露の篤志看護婦で出ています。そのように悲惨な光景を見てしまった人が一種ヒューマニティーに目覚めた後半生を送るということも、戦争には付随して起こることだというのが、私の考えです。

質疑応答

（帆布） 何かご質問がありましたら、時間の関係で、お一方だけお受けすることにいたします。では、安田先生どうぞ。

（安田） 経済学部教授で、キリスト教と文化研究所の安田^{やすだ}八十五と申します。今日は坂田^{やそい}祐先生の祖父の白虎隊隊長・日向内記のことをいろいろ勉強させていただいたのですが、私はちょっと違った視点から質問したいと思います。軍事的な問題として見た場合の



戦略・戦術の問題と、社会の問題として見た場合の政治と軍事の関係です。まず、白虎隊の問題ですが、私も日向内記の逃亡説というのは、関東学院に勤める人間として残念だと思っていたのですが、一つはそんなに大きな問題なのかということなのです。

最後に中村さんがクリスチャンと戦争の関係みたいなことをお話しされたのですが、まさにそこから学ぶことは何かというと、戦術の問題ではなくて、もっと戦略の問題であり、会津は基本的に戦略で負けたのではないかな。もっと言えば、軍事は政治の下位に当たるのですから、会津は政治における政策形成に失敗したのではないかな。時代の見る目がなかった。それはなぜかということ、幕末に情報をきちんとキャッチできなかったからだと思います。

そういう意味では、この白虎隊逃亡問題と戦略の問題はどういうふうにつながっているのか。最後に中村さんがコメントしていたので、他の方からもお答えいただければと思います。

(早川) 私は経済学を51歳まで、日本貿易学会の事務局長をやりまして、第一線にいました。帰りまして市長になってから、会津戦争がなぜこうなったかということを考えたときに、一番のキーポイントは、当時の殿様の松平容保が、尾張名古屋藩のたった一つの分家であった岐阜県の海津町というところにある高須藩から、養子で来たおむこさんなのです。高須藩は、本家の尾張名古屋藩に2人藩主がなっています。あと、桑名も弟です、浜田藩も兄弟です。5人出たのです。そういう人が藩主になって、戊辰戦争は、会津の大多数の人は、京都に守護職として受けて行かない方がいいと反対したわけです。これは記録がはっきりしています。しかし、殿様は当時代表権がありますから、彼の決断で乗り込んでいったわけです。

乗り込んでいったら、最初は薩摩藩が会津

藩と組んで蛤御門で戦おうと、これは成功しました。しかし、終わった途端に薩長連合ができたわけです。このときに薩長軍が突き付けた条件というのは、最初、松平容保の首を持ってこいというものでした。松平容保は武士ですから、自分が首を出すのは何でもないと思ったと思うのです。しかし、彼はそういうものかそこで首を出すことに賛成しなかったのです。従って、会津戦争に追い詰められていくわけです。

あと、戦争のことですが、私ははっきりしていると思います。やはり戦力というのはお金です。今になって、薩摩藩が偽札をいっぱい造ったという話が新聞にじゃんじゃん発表されています。そのうち、会津藩は「見てみろ、おまえ。立派に戦ったのだな」と言ったら、会津藩も2割ぐらい偽札を造っていたと日経新聞の裏に大きく詳しくデータを持ってきて発表する人が出ました。実は、私の記念館に偽札を造ったのではないかなという銅板があります。だから、多分偽札を造ったのだと思います。これは随分昔の話ですが、一度大蔵省で調べにきました。「これは間違いなく偽札だ」と言われたので、間違いのないと思います。

そういうことですが、要するに、幕末というのは、偽札でも、天皇の旗でも何でも、大義名分を立てて戦ったのが明治維新、大義名分なき戦いが第二次世界大戦だったと思います。それで、私が会津に帰って一番びっくりしたのは、フランス軍の人たちが会津軍を誘っているのです。それで、フランスでお金を貸すようにと。それを会津は断っているのです。このとき「もし」という言葉があれば、会津藩があのとフランスからお金を借りて泥沼の戦いをやれば、どこかの国のごとくイギリスとフランスに領土が分けられた可能性があったと思います。そういう意味で、会津藩の判断は、最後のところだけはきちんとフランス軍の応援を断って手を挙げたということだと思います。

ただ、何せ石高と当時の経済事業です。最

後になりますが、薩摩藩は沖縄貿易で金もうけしたのです。それから、長州の人は絶対に認めないのですが、韓国貿易でもうけたから、魚でもうかったはずですよ。会津藩だけは、長崎から朝鮮人参と漆器を売っていました。ですから、あまりどうもお金がありませんでした。

戦争は戦略の問題です。私はあまり研究するのは好きではないのです。というのは、どうしてもお金のことになってしまうのですが、実は今、日本の国で開国だと総理が言ったと。明治維新開国、戦後も開国、今度また開国があると。

明治維新の開国は、皆さんの研究のとおりです。なぜ第2次世界大戦をやったかというのは、言論界は徳富蘇峰、軍人は東条英機の2人でやったのだらうということでTBSが作り上げたら、今度はNHKが今ごろその後を追いつけているのですが、最後はあの2人が全部かぶって終わりだと思います。

しかし、今、軍隊に行ってきた人に「あの戦争をどう思うか」と聞いてみたら、要するに、陸大を出た人が第二次世界大戦をやっている。明治から大正までは薩長の人が指導者だったので、負けたら駄目だという実践的な考え方で日清・日露も第一次世界大戦もうまく戦って勝ったけれども、第2次世界大戦は頭でっかちの陸大、海兵の人たちが指導して戦争に突入した。戦後は、陸大、海兵が全部なくなって、官僚、キャリア組が各省を牛耳っている。簡単に言うと、各省のトップである事務次官が官邸に集まって日本の政策とお金と人事を全部決めているわけです。

しかし、そんな中、日本の国家をこれからどう持って行くべきかということについて、私は、選挙制度その他、直さなければならぬことがたくさんあると思います。実は、先ほど出てきた山川健次郎は東京大学の学長として3番目に長く、2回やりました。あとはそれぞれ学部長をやったので、その人の下に4代目の方が木下さんといって、まだ理工系

の教授ですが、その人と一緒に『山川健次郎の目指すべき国家像と未来』という本を、今月の末に出すということです、ご説明して、時間を食ったことだけはお詫びするということです。

パネリストへのコメント

（帆苺） ここで、「キリスト教と日本の精神風土」のグループの代表の富岡幸一郎先生からコメントをお願いします。

（富岡） 私は会津戦争や日向内記については全く知らないのですが、「キリスト教と日本の精神風土」というグループが、私の怠慢でほとんど活動はできなかったのですが、今日は協賛させていただきました。お三方の先生が大変細かくご説明くださって、歴史の面白さというのも味わわせていただきました。

坂田祐先生は『恩寵の生涯』で、祖父である日向内記について、白虎隊を捨てて逃げたと聞いていたたまれない気持ちになったとお書きになっています。私も『恩寵の生涯』を読みました。なぜいたたまれない気持ちになったのかということ聞きながら考えていたのですが、祖父ということ以上に、坂田先生の血の中に会津士魂^{きつしむい}があって、自分は士クリスチャンであるという意識が強くおありになったのだと思います。内村鑑三の影響を受けたということもあります。内村鑑三もご存じのように士で、高崎藩の子弟でした。新渡戸稲造もそうです。佐幕派です。つまり、明治以降に冷や飯を食ったけれども、自分の中には侍の魂がありました。

恐らく坂田先生は、祖父の日向内記の中にある会津の士の思い、武士の魂を引き継ぎ、そういう武士の魂を持っている者が、つまり日本の精神風土に立った者が初めて、耶蘇教といわれていたキリスト教を受容できるのだと。キリスト教の日本の精神風土の受容という中で非常に強い思いを持っておられたのではないかと私は思います。そういう意味で、

いたたまれない気持ちになったという言葉が坂田先生はお書きになっているのではないかと思います。

今日お話を聞いていて、卑怯者ではなかったという説が立証されたということがあるのですが、少なくとも世俗的なストーリーからは自由になれたのではないかと考えています。関東学院はまさにその坂田先生の建学の精神であります。私は、日本の戦後のキリスト教が駄目になった理由は、大東亜戦争に負けて本当のさむらい精神を失ったことにあると思います。そういう意味では、もう一回キリスト教あるいは建学の精神というのをよみがえらせるためには、歴史を学び、今日のような会を通して士^{さむらい}の心を少しでも学ぶことが、実はキリスト教の精神と深くつながっているのではないかと、お三方の先生の大変貴重な話を伺いながら、あらためて、自戒も込めて、文学部の一員として感じました。先生方、ありがとうございました。

本日のまとめ

(矢嶋) まず、中村先生からご教示いただきましたいわゆる七百石問題については、日向内記の思想と行動を知る上でかなりのヒントになりました。その話をする前に、富岡先生の話で言いますと、坂田先生はご承知のように軍人です。日露戦争に「聖書」を持って参戦されています。あのころには心の中に非常につらいものをお持ちになっていたのではないかと。そのご坂田先生は、1918年に兵隊山であったところをテンネー理事長と一緒に視察して、ここに中学関東学院が誕生するわけです。そして1919年に、聖句から「人となれ 奉仕せよ」という言葉を選ばれて、入学生全員に対して訓示されたわけです。

そのときに、坂田先生は内村鑑三先生に相談しているのです。軍人でありながら教育の道を進むということに対して、大きな悩みがあると。それに対して内村先生は「武士の魂

を持ったクリスチャンであれ。武士の魂を持った教育者であれ」と坂田先生を勇気付けたということが『恩寵の生涯』に書かれています。武士道の魂を持ったクリスチャンであれという教育の精神がここに符合するわけですね。

もう一つ、実は中村先生の記事（逃亡説と矢嶋は解釈）を見つけてきたのは、私のところの大学院生の伊藤さんなのですが、私は知りませんでした。私のご案内の中に書きましたが、伊藤さんは「逃亡説ではない。逃亡しているのではない」ということを言っていました。弟子に言われるのは悔しいのですが、そのとおりかもしれません。いずれにせよ、この記事がこのシンポジウムのきっかけとなりました。

同じように、富田さんが伊藤さんに対して、「帰れなかったという説は、決して中村さんご自身が言っているのではない」というご指摘ですが、これはそうでしょうか。引用されている以上、公になれば、やはり自分のお考えということに受け取られます。自分は違う解釈であるということが書いてあれば、それは違うことになるでしょう。しかし、この場合は、やはり引用の文面と同じ意見であるというように受け取られることが普通ではないかと私は思います。

最後に、中村先生の日向へのご説明内容が私の考えていることと極めて一致しているのですが、日向内記隊長は平和論者なのです。私が読ませていただきました限りにおいては、あらゆるところで日向は戦いを避けています。ですから、中村先生が「野戦の司令官とは言えないのではないかと」というのは、そのとおりです。したがって、七百石窓際になったと思います。

これは私の感想になるかもしれませんが、日向内記隊長は非戦論者ですから、少年を山中に置いていったと思います。置き去りにしたと言えは置き去りですが、戦いの中に突入させなかったのです。ところが、彼は先ほど

の経緯の中で城の中に入り、戦って、任を全うしている最中に、意の外に彼らは自害したのです。城が燃えていると勘違いしたことは、これは無理からぬことです。決して言い訳をしないのが会津の武士であるということも伺っていますし、これは生涯他人に話せることではありません。事情はどうであれ、結果的に少年隊士を見殺しにしたことになるからです。それは相当つらかったのではないかと、というような解釈もあるのではないかと思います。中村先生が日向は野戦の司令官には向いていないといわれましたし、私の読むところでは、彼はほとんどの場面で戦いを避けているのです。ですから、私は少年を無駄死にさせたくなかったのではないかという解釈を持っています。

もとよりこのことは、富田氏の言うように「長州藩の分所襲撃に際しての組頭としての行動への褒美金（元治元年7月）」や「会津と西南軍との対峙に際する砲兵隊長としての行動（慶応4年3月）」に見せた強い意地と責任感を日向に認めた上でのことです。

いずれにしても、冒頭に述べましたように、歴史は解釈ですから、むき続けていくと最後はラッキョウの芯がなくなるようなものです。それをキリスト教学の下田哲先生から私たちは教えられました。われわれがどう解釈するのか。帆苅先生も私も卒業生ですが、卒業生としては、日向内記氏の逃亡説に対して坂田祐先生が悔しい思いをしていたのであれば、これに同感の意を示すというのは自然の理なのです。

最後に、建学の精神を私どもは持っていますが、それを誇りとする前提条件として、他大学や他者の生き方を尊重することが必要ではないかと思います。文学部では、「建学の精神を学ぶ」という授業を森島学院長のお世話で3年ほど前からやっていますが、多くの学生はまだ坂田先生の顔もよく分からない、「人になれ、奉仕せよ」という言葉の意味も分からない状態です。しかし、我々は、学生

に粘り強く教えて、30年後、40年後、50年後に、彼らが成長したときにこの建学の精神の意味と、他者を尊重するという意味を理解できるように教育していく必要があるのではないのでしょうか。

シンポジウム開催以降のご報告（矢嶋）

当シンポジウムは、2011年の3月4日、金曜日の午後に行われました。東日本大震災（3.11）は、その1週間あとの金曜日午後のことです。天なる神様が1週間の猶予を我々に与えてくださったとしか思えません。

そのシンポジウムを終えてからちょうど1年余りがたちますので、この間に進展した主なことをご報告させていただきます。本シンポジウムのきっかけは、本誌31ページに西村肇さん（白虎士中1番隊西村四郎ご末裔）もお書きになっている「隊長が死を恐れて卑怯にも行方不明になったと一般に思われているので、私ども近親者は恥ずかしい次第です」という坂田祐先生の無念です。この傍点部分は坂田先生の『恩寵の生涯』から引用されたものですが、このことは二つの意味で重要です。一つには、我々卒業生および在校生・教職員に「校訓」を与えられた坂田先生のご無念を晴らすという主観的な意味においてです。また一つには、白虎隊記念館に掲示されていた（今は諸事情で2年ほど前から外されている）「白虎士中2番隊隊長日向内記の孫の坂田祐は関東学院の創始者」ということについてです。その日向内記が地元でも逃亡説というのでは話になりません。

幸いにして、今回のシンポジウムを通じて「白虎士中2番隊隊長日向内記」の思想と行動が多角的に論じられたと思います。歴史の評価というものは、人物であれ、出来事であれ、そう簡単に片付くものではありません。しかし、これも幸いにして、我々は富田国衛氏の『会津戊辰戦争 戸ノ口原の戦い「日向内記と白虎隊の真相」』（おもはん社、2008年）を与えられました。同書を手にしたとき

の有り難さは表現を尽くし得ませんでした。また幸いにして、当シンポジウムをきっかけに、直木賞ご受賞の中村彰彦先生が「白虎隊百四十年目の真実（日向内記）」（文芸春秋『オール読物』2011年10月号：富田氏との対談がベース）を10頁に亘り執筆され、日向内記に関しての結論部分において「いづれにせよ富田氏の研究が世に出たことによって、日向内記を行方不明者、ないし敵前逃亡した卑劣漢とみなすのはとんでもない誤りであることが明確になった」とお書きくださいました。近く、日向内記「白虎士中 2 番隊隊長」としての思想と行動に曲解（逃亡説）を与える原因となった白石弁蔵『会津戊辰戦争』（1917 年）が再刊の予定と聞きましたが、同書刊行の前提として、上記、中村先生執筆の「白虎隊百四十年目の真実（日向内記）」を巻末に全文収録することとなったとも伺っています。

このような意味において、シンポジウムにおいでくださった富田さん、中村先生には深く感謝する次第です。また、白虎隊記念館の早川館長さんには、白虎士中 2 番隊隊長日向内記の愛孫にあたる関東学院初代学院長坂田祐先生の紹介文と写真、校訓を館内掲示してくださるという有り難いお約束をいただきました。この紹介文については、新たにご子息の坂田創先生にお書き願ひ、この 3 月、写真・校訓とともに会津白虎隊記念館に奉納させていただくことになっています。

（謝辞）

本稿末尾にあたり、シンポジウム開催への特別なるご支援をくださった燦葉会（故長嶋孝彦会長）様・香葉会（山口佳子会長）様には厚く御礼申し上げます。また、足尾調査以来、当シンポジウムに至るまで、格別なるご協力を賜りましたOBの本田梧郎様（燦葉会元栃木県支部長）にも改めて感謝いたします。（矢嶋道文）

悪性腫瘍を抱えながら生きたクライアントへの心理的援助

長谷川 伸 江

Psychological Support for a Patient with Cancer: A Case Study

Nobue Hasegawa

I. 目的

2006年「がん対策基本法」により、がん医療の整備や質の向上が求められ、つづく2008年「がん診療連携拠点病院の果たすべき要件」において、“緩和ケアチームに協力する薬剤師および医療心理に携わるものをそれぞれ1人以上配置することが望ましい”と明記されたことにより、近年がん医療に関わる臨床心理士が増加している。

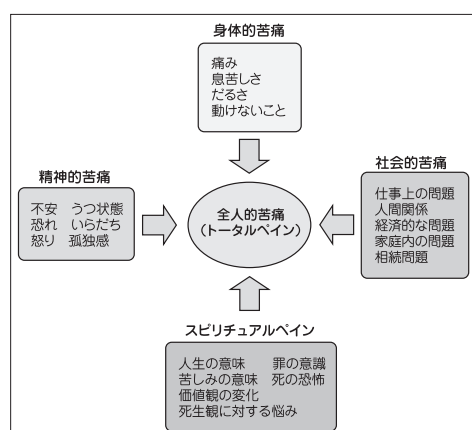


図1 トータルペイン 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センターより引用

人は死に向かって、これまで獲得してきたものを次々と失っていく。がんの進行に伴う

身体的苦痛に加え、今まで普通に出来ていたことが出来なくなっていく経過は、大変な苦痛や無力感を伴うと想定される。それゆえ、がん患者の苦痛を捉えるモデル(図1)では、身体的苦痛のみならず、心理社会的、スピリチュアルな次元まで含めた様々な苦痛(トータルペイン)を緩和することが提唱されている。がん医療は、心理的ケアが重視される領域なのである。兒玉(2006)は、“がんでもはやこれ以上延命を可能にする治療法がなくなった時、(中略)多くの人は絶望の淵に追いやられるかもしれない。しかし、むしろそこで臨床心理学が本来研究と支援の対象とする心の問題が浮き彫りとなるのである”と述べている。限られた生に向き合うとき、それぞれの事例やそこでの語りはその人の人生を反映した個別なものとなり、そこでは個を尊重して対応する臨床心理学の基本姿勢が必要とされる。

個別性や全人性を重視する動きは、医療領域においても耳目を集めており、従来の客観的・医学的診断に偏ったエビデンスベースド研究にとどまらず、病にかかった人の個別的な語りを尊重するナラティブ研究に関心が寄せられている(Kleinman1988/1996, 岸本ほか2006)。ナラティブ研究では、患者自身の語りに注目し、本人にとっての病の意味や個別性、医療者と患者の関係性を考え、病をそ

の人の人生の「物語」として捉えようとする。かたや、臨床心理学においては、従来より個別の事例研究が行われ、クライアントがどのような物語を生きようとしているのか、その物語を理解することが重視されてきた(河合, 2001)。病気や疾患を中心に扱われることが多い医療の中で、病を含んだその人のありよう全体に目を向け、その物語を聞く役目を取ることは、医療現場で働く臨床心理士の大きな役割であろう。ことさら、人の生死に関わる末期医療においては、“その人自身の物語を傾聴していく態度”、“物語に沿った援助”(三木ほか, 2006)が重要だと言われている。しかしまた、クライアントとの関係性が重視されるからこそ、クライアントの死が面接の終結となる終末期医療においては、臨床心理士側にモーニングワークが必要になることがある。

そこで本研究においては、末期悪性腫瘍を患ったAさんの事例を通じて、悪性腫瘍という病を抱えながら残された時間をどのように生きるのかというAさんの語りを報告し、クライアントの語りの意味とそれを受けるセラピストの役割、また、さまざまな死に立ち会うセラピスト側のモーニングワークの必要性について検討したい。

II. 事例の概要

〔クライアント〕 50代男性 Aさん

〔病名〕 右胸膜中皮腫

〔面接までの経過〕 X年10月左尿管結石でB病院（250床程の地域の救急病院）に入院。排石があり退院となった後、レントゲンから胸水が発見される。細胞診と生検で悪性腫瘍であることが判明し、外科主治医より「悪性、余命半年、1年生存率20%、がんセンターでの手術の推奨」などの話がある。Aさんから治療について相談された病棟看護師長よりカウンセリングを勧められ、筆者（以下Th）にカウンセリング依頼があった。

〔家族状況〕 X年1月心筋梗塞で妻に先立たれる。長男、長女は独立しており、一人暮らし。近隣地域に長姉が住む。

III. 面接経過

全113回、3年半の面接過程。面接構造は、週1回1時間。Clの言葉は「」, Thは<>にて記す。

第1期（#1～9）X年11月～X+1年1月 病に至る物語（入院から外来へ）

Thは入院中のAさんをベッドサイドに迎えにいき、病棟内の相談室に移動して面接を行う（#1）。「今年1月に妻が突然に心筋梗塞で亡くなった。腹痛で救急受診した病院では検査なく帰され、翌朝激しい痛みで別の病院を受診、その日の午後亡くなった。自分はその後胃潰瘍と十二指腸潰瘍で吐血。絶望していたとき『伴侶の死』という特集を見つけ何度も何度も読み返した。今度は自分に石ができて入院したのがきっかけでがんが見つかった。私は30代でも石ができたのを機に仕事を変え生き方が変わった。今回も石に救われた。妻のことがなかったらがんにならなかったかもしれない」とAさんは涙ながらに語る。「こんな風に話が聞いてもらえて嬉しい」と今までためていた言葉が怒涛のようにあふれ出す。Thが<この病気を通じてこれまでを振り返る作業をお手伝いしていきたい>と言うと、Aさんは握手を求める。ThはAさんが体験した波乱万丈な1年に圧倒される感覚と、Aさんが自分で決定し病に向き合っているという強さを感じた。「戦争で父を亡くし、学校から帰ると内職の手伝いをした。働きながら夜間高校に通った」（#2）と生い立ちを語り、自分の描いた絵や写真（#3,5）、家族の写真集（#6）、家系図（#7）を次々と持参する。一方腫瘍については、入院中に一度化学療法を試みるが発熱などの副作用を体験し「自分には無理」と中断する。退院後（#4）がんセンターを受診し「実験

段階にかけることはできない。自然のままにやっていく」と積極的治療をしない決意を固めていく。年明け（#8）には「妻の死から始まり自分の病へといたる一年」を振り返り、「初夢：乗り物に乗って旅をしている。どこへ行くのか行き先の分らない旅」を報告する。「お酒ばかり飲んでよく殴られた」という叔父のこと、家事と学校をこなす必死の生活について語り、「自分で決められることとそうでないことがある。生まれついた家、自分のせいでも親のせいでもない。でも諦めていない、がんと共に生きていきたい」と語る。

一方で「どこも悪く見えないが十字架を背負っているようなもの。暗くなって落ち込んでもいいんですね。カウンセリングを生きがいにしていくことになるかも」（#3）「妻が生きていればどんなことをしても必死に生きようとするかもしれない。二人三脚、これからというときに亡くなってしまった。片足とび、これじゃあ遠くまでいけません」（#4）「入院して面会謝絶になったら先生ともお話できませんよね」（#5）と語る。Th が「くベッドサイドまで伺えますよ」と応えると、「安心しました。先生には最期までお付き合いしていただきたい、私のことを覚えておいてもらいたい」と言う。Th は、病気のことを最小限の親族（姉、子供）以外には語らず、自分一人で闘病しようとするAさんの頑強さと、人に出せないが故の心細さを感じ、闘病の不安を語れる場にしていきたいと感じた。

第2期（#10～29）X年+1年1月～X年+1年6月 湯治場との出会い

「露天風呂に行ってきた。自然の一部になっている露天風呂が好き。からっぽの状態で、自分も自然の一部、がんを忘れて本当に楽しかった」と語り、焦るように次々と旅行の予定を入れていく（#10）。若い頃好きだったというスケッチを再開し、以後旅行の度に鉛筆でのスケッチ（風景画）をするようになる。

外科部長医師から「今の状態では一番よい

選択肢」とコメントを貰い「自分で納得して決めた」と自分の選択を確認するように話す（#13）。その頃、「旅で知り合った人からC温泉（がんに効果があるという酸の湯、岩盤浴）の話聞いた。皆命がけで来て、肌が焼け爛れるぐらい湯治をしている。それでも治るんだったら！信じていれば救われるかもしれない」と期待をもつ（#14）が、CT検査でがんが大きくなっていたことを機に身体的な自覚症状（胸痛）が増して涙する。家事を手伝うため部活もしないで過ごした貧しい中学時代を思い起こし「一生懸命やっていれば苦にならない。周囲と比較してはいけな。どうして自分だけ、と思っははいけな。そうしてきたから今の自分がある」と懸命に語る（#19）。仕事の夢「終わったはずのプロジェクとなのに相手先からやったことのない仕事を続々と与えられる」を報告する（#20）。「妻の亡くなる半年前から毎日二人で散歩していた」ことを回想し短歌を作成、「妻のことで苦しむことは減った」と語る。「妻の好きだった溪谷に姉や娘と出かけた」旅行を境に、描かれる絵がモノトーン（鉛筆）からカラー（色鉛筆）へと変化する（#28）。一方、「息子も嫁もよくやっているが孫のことが心配」（#22）「自分の死より残された子ども達はどう感じるかのほうが気がかり」（#23）と、家族への心配を繰り返す。

「C温泉は絶対効果があると信じている」（#24）「何年かかってもがんを治していきたい」（#29）と強い希望を語るが、「家の生活は寂しい。育てていた竹も枯れてしまった。」「心の中には先の見えない寂しさ。湯治場では男女混合の仕切りのない部屋を選んだ。いろんな人と触れ合え話ができる。そういう中にいたら勇氣も貰えるかと思っ」と涙を流した。

第3期（#30～87）X+1年6月～X+3年7月「闘治」の時期

初めてC温泉の見学へ行き、「今までのど

んな旅行とも違った。私も本当にがんを治せるかもしれないと思うようになった。旅行後から熟睡」（#30）「自分で納得して人生を生きる、結果的に私もそういう生き方を選んでいる。がんになって私は変わった。自分で目標を希望を見つけてきた。今回の湯治は『闘治』、闘ってくる」（#31）と強い意気込みで語る。（これ以降、第3期は数週間ごとに湯治場と自宅を行き来する生活となる）

1回目C温泉後、「本当によかった！」とそこでの多くの人との出会いを語り、特に、Dちゃん（40代女性）の人柄に感銘をうける（#32）。しかし毎日長時間湯治をしたにも関わらず、「がんの大きさ変わりなし。落ち込んで心にぽっかり穴が開いたような寂しさ」「湯治は賑やか自分の生活は一人静か」と涙する。「すごく疲れている」（#36）と落胆し、「中学のときオレンジの人魂を見た。自分は科学を超えたものがあると思っている。C温泉にもそういうものがあるんじゃないか。奇跡。奇跡の起こる人もいれば起こらない人もいる。自分を励ましているけれどそれだけじゃ駄目なんです」（#37）と懸命に自分を奮い立たせる。しかし、がんが一気に増悪した結果に涙する（#39）。自覚症状も増え、「頑張っても駄目なのか…痛みが出てどこにもいけなくなったら生きている意味はない。」「湯治では人との関わりがある、カウンセリングのある日はまだいい。家では一人きり。向こうに行ってしまったほうが楽。」と強気と弱気が交互にくる中で、必死に自分を持ち直そうとしていた。

4回目C温泉後、「湯治は半分寝込んでいたのがんが小さくなった！妻が亡くなって以来初めて、心の底から嬉しい」と報告する。「仕事の夢：特殊な仕事を引き受けて納期に追われている」を報告し「当時は仕事だけ、がんにならなかつたら湯治やカウンセリングなどとは無縁のまま。今の方が心も体も健全」と前向きに語る。しかしこの頃、Thの勤務していたB病院の心療内科が閉鎖され、

B病院での面接が続けられなくなる。Thの勤務する近隣クリニックへ転院する必要に迫られるが「今まで先生が私に合わせてくれた、だから今度は合わせます。いいことっていうのは長く続かない、そういうものだとかかって生きてるから大丈夫です」と語気強く語る。

5回目のC温泉後、CT上で腫瘍の変化が見られず（#52,53）「痛みを我慢して源泉（酸の湯）に入っていた。体中発疹で岩盤に行ったら驚かれた。なのに検診変化なし。頑張っていたのに！あんなに痛いのを我慢したのに！あの痛み、がんの末期を先取りして苦しんでいるような、それでもがんを減らすためと思って頑張った。人からすごいねって言われるくらい頑張ってきた。でも足りないのか？」と怒りを表現する。＜場所の移動もがんも。頑張ってもうまくいかない、しんどい＞努力でどうにもならない現実を前に、AさんもThも無力感を感じる。その後、カウンセリングの場がクリニックに移動する。「今はがんが治るという確信はもう持てない」（#54）「母のことが気がかり。次姉にはまだ病気の話をしていない」（#58）と距離のある姉弟間のことを語る。[症状は進行し、右胸のしこり、喘息様症状が出る]¹

8回目C温泉後、CTで今まで以上に腫瘍が大きくなり、「一人でいたら気が減入ってしまっていた。神様は意地悪だったり優しくかったり両方だ。がんになってDちゃんや先生に会うべくしてあったのか…」（#66）と涙する。新しい携帯電話を持参し「写真をとらせて欲しい」（#67）とThの写真を撮る。「C温泉に行ってからおしゃべりになった」「湯治も大事だけど楽しく過ごす方が大事」と、自分を律する湯治中心の過ごし方から人間関係中心の過ごし方に変えていき、湯治以外でも、湯治仲間と旅行に行ったりプライベートな付き合いが増える。痛みや痰、咳など気管支の症状が強くなるが、「湯治に行くと調子悪くなるということはわかっているが、行かないというのは生きるのを諦めたと

いうこと」(#71)「みんなと旅行して、その後湯治へ行く。これがみんなで行く最初で最後かもしれない。体調を考えたら旅行も湯治も行かない。でも自分はそれがないと…待っていてくれる人がいるから。そういう生き方なんです。握手しましょう、これで最期になるかも」(#75)と涙ながらに Th と握手をする。

帰京後「腫瘍はさらに増大し、右肺は胸水で圧迫され、気管支は1/3の大きさ」「湯治で進行がんが治った人はいない。自分は酸の湯を最も頑張っている、それでもこんな感じなわけです。がんが治るなんてことはない。進行を遅くするだけ」(#76)と言いきる。「自分を追い込んでいるから動ける、緩んだらもう張り直せない」と語る。そのような A さんに Th は胸が痛みく本当によくやっておられる。生きるということを考えさせられる>と言葉をかけると、A さんは泣く。痛みが酷くようやく痛み止め(ロキソニン)を飲み始める。

13回目 C 温泉中 A さんから「C 温泉で呼吸困難。緊急で帰京した」と電話が入る。[顔、右胸から全身の浮腫、腫瘍が右肺に収まらず左にはみ出し心臓、大静脈、気管を圧迫。B 病院へ緊急入院] Th が A さん入院中の B 病院に伺い面接をする。「帰るのが一日遅れていたら危なかった」(#82)。退院後は、酸素ボンベをつけて生活することになる。「来週から湯治だが、もう無理はしない。長姉から次姉に自分の病気の話をしてもらった。そろそろ田舎にも言わないといけない」(#83)。

14回目 C 温泉後、「娘が来て湯治場を案内した。D ちゃんとは二人で外出し、普段聞けない彼女の本音を聞いた。いろんな話をして今までの総括という感じだった」(#84)と納得したように語る。[CT では、一昨年の12月に減って以来、腫瘍が初めて小さくなる。肺に空洞(中心性壊死)が生じる]「体の不思議。自然治癒力を感じる」(#86)と A さん。(精神科医師は、このような形で腫

瘍が縮小することに驚き、「がんがこの人の時間を待っていてくれるのではないか」とコメントする)

第4期(#88～113) X+3年7月～X+4年4月 終息の時期

腫瘍の増悪による体調の悪化に伴い、ついに湯治にはいけなくなる。周期的にやってくる嘔吐、浮腫や痛みに耐えながらも、「食事・買い物・洗濯自分で。人に自分の弱いところ、嫌なところを見せたくない」(#88)と語る一方、身体の変化や病状を Th に克明に告げる。

離れて暮らす寝たきりだった母親の体調に変化が起きる。(Tel)「いよいよ親戚に病気のことを伝えた。皆泣いていた。寝たきりの母が食べなくなった。母の意識ではわからないはずだが、私のことを感じて拒否したのかもしれない。母のことが現実になってきた、それがないと次に自分の安らかな死を迎えられない」(#90)「先週母が亡くなった。次姉から、病気を伏せていたこと、母に会いに来て短時間で帰ったことで文句を言われた。こちらとしては気を使っただけのこと。次姉の夫、賭け事で昔から金遣いが荒い。母を引き取ったのは毎月お金が出るから。『もう二度と会うことはない』と面と向かって言われた。姉弟でこんなにもめることがあるなんて…(涙)」(#94)「母の納骨があった。次姉夫婦もいたが目を合わせない状態。姉弟だけだと駄目と思いおばさんにも入ってもらって話し合いをした。この前は高飛車に見下していたのに『ごめんなさい、私が賭け事に使いました』とひたすら謝り通し。でもこれで終わりにするしかない」(#99)と語る。

その後、病になる前の自分を振り返ることが多くなる。「昔のアルバムを見ている。昔こんなことがあったんだな、元気なときがあったんだと自分を見つめなおすようで不思議。今は病気になった後の人生が全て」(#93)、昔の恋愛を振り返り「人生って不思

議、どこで何を選ぶかで全然違ったものになっていく。湯治に行く前の人生には思い出すことはなかったように思っていたが、自分にも色々あったんだと思い出した」(#96)「がんになる前のことは別のことのようだったが、昔のことが入ってくる余裕ができたのか、昔に戻った感じ」(#100)「同じがんを患う友達と話した。がんは生き方を選んでいける、治療も自分で選んでいくから勉強しなくちゃいけないが、それが自分のためになっていく、がんになってよかった、と。私もあのまま働いて定年で趣味もない人生より、いろんな人に知り合えて今ある人生を送っているほうがいいんだ、それでいいんだと思えた。昔は痛い思いして酸の湯に入ることが生きている証拠と思っていたが、酸素がきてから変わった。今は今でいい。誰も踏んでいない落ち葉の公園でベンチに座るのがささやかな楽しみ」と静かに語り、病になってからの自分とそれ以前の自分を繋いでいく作業をしているように思われた。

カウンセリングも3年を迎え、「3年前、この病気になって再出発するとき最初に先生がいてくれた。こんなに長くなるとは思わなかったでしょう？3周年記念に」(#101)とケーキを持参し3年を振り返る＜3年間沢山のことを教えて頂いている＞Thは、3年という時間の重みと確実な症状の進行を感じ、別れが近づいていることを恐れる気持ちと、もう十分に頑張ったという葛藤的な思いを抱く。

「右肺は腫瘍で潰され心臓が押され気管支が曲がっているが、致命的なところを避けている」来院するが、苦しさのあまりしばし休憩し痛みをこらえる。「ここに來られるだけまだいい。このぐらい今の自分には普通」(#104)と語る。痛みで、立ち上がれず電話でカウンセリングすることが増える。「あまりにつらいので、友人に手紙を書いた。起き上がれるのは一日2時間程しかない。病が大変な友人の姿は明日の私の姿。ここまで生き

られると思わなかった。神の力、もしかしたら妻の力なのか」(#105)。(Tel)「吸い込まれるように寝ている。自分は末期なのか、富士山の何合目にいるのか？調子悪いのが当たり前、でも明日は少しはよくなるんだ、そう思ってやっている。一人で生活していてなぜこんなに冷静になれるのかと考えた。中学時代母は仕事でおらず、夕飯を作って待っていた。お弁当もなく、一人だけ菓子パンを買って食べていた。一人でポツンといってもこれが現実だ、という気持ち。それが今の原点。妻がいたら楽だし、大勢でいたら楽しいけれどそれは仕方のないこと。病気も同じ」(#107)

年が明け、浮腫による体重増加がみられて体調が悪化する。「妻の命日にお墓参りにいけなかった」(#108)「買い物3日に1回、1時間かけて自分でやっている。娘が買出しにきてくれるといったが、迷惑かけたくないといったら、どうしてそんなに強いのか？といわれた。生きていることは痛くても我慢して生活することだ、と言ったらびっくりしていた。じっと収まるのを待つ、明日になったらもう少しよくなる、我慢すればまたよくなる。このぐらいは当たり前でこれからもっときつくなる」。次第に浮腫がひどく目が開かない状態になり、夜中も頻繁に目が覚めるようになる。(Tel)「『中皮腫アスベスト患者と家族の会』ⁱⁱに連絡。あなたの話が他の人の励みになる、といわれた」(#111)「アスベストの会から電話があり皆3年半という年月に驚いている。他の事例を聞いて、自然に一番いい道、一番楽な道を選んだんだと実感。自分で買い物行っている。まだ自分でやりたい。」(#112)「テレビで『がん患者学』の著者が、転移が見つかりCTの結果を見たくないといっていた。それを見て自分は一体何なのだろうと思った。自分はCTの結果が生きるすべ、がんをずっと追いかけてきている。妻が亡くなったときに悲しみ辛く思う経験はし尽くしてしまったのか。絶対に死なないと思っていた妻が亡くなった、だから自分ががんになる

ことだってありうると思った。嘆いたり泣いたり、そういうほうに使うエネルギーを全て、どうやって生きていくか、何をしていくかという方に向けてきた。それはこれから同じ、でも何が自分をそうさせるのか？人は皆いつか死ぬ。自分もそうだし妻もそうだった。辛いときがあっても、乗り越えるために毎日がある。娘に手伝ってもらっても病気がなくなるわけじゃない、だから自分でやっていくんです。また来ます」(#113)

来院予定日の前日 B 病院に入院。その夜永眠された。

X + 4 年 5 月、Th は A さん宅を訪問し、A さんの娘と姉に話を伺う。リビングには大きな黒板があり、次回のカウンセリング予定と、そのときに乗る電車の時刻が大きく記されていた。2 人からは次のような言葉をかけられた。「最後まで救急車を呼ぶのに抵抗したが、リハーサル、練習なんだからという言葉で納得して入院。最期まで本人らしかった。カウンセリングに通うことが支えになっていた。ありがとうございました。」

IV. 考察

1. 面接の経過

第 1 期 (病に至る物語)：面接の初回、A さんは今年突然妻が心筋梗塞で亡くなったこと、石ができて入院したのをきっかけに腫瘍が発見されたことを涙ながらに語られる。妻の死に続く自らの病という変換期にあった A さんは、語る場所を求めているようであった。配偶者を失うことは人生で経験するライフイベントのうち最もストレスの多いイベントであるといわれおり (Holmes, 1967), 悲嘆による衝撃が強い。特に男性の場合それまで仕事のみに生きることが多く、妻を失うと人との情緒的な関係を取り戻せない人が多く、より孤独を感じやすいと指摘されている (河合, 1990)。妻の死と向き合いながら、一人で慣れない家事をこなし、忙しい仕事に明け暮れ

る生活は、A さんを追い詰めていた。そんな矢先に発見された悪性腫瘍であった。30 代で発見された石も人生を変える転機となったが、今回も石をきっかけに腫瘍が発見され、病によって生き方が大きく変わる転機となったことが語られた。家族写真や家系図を持参され、ご自身の生い立ちや妻との結婚生活を振り返ることは、突然の妻の死へのモーニングワークになっていた。一方、「最期までおつきあいいただきたい」と語るなど、闘病の伴走者としての Th との関係が作られた時期でもあった。

第 2 期 (湯治場との出会い)：スケッチをしながら自然の中にある露天風呂巡りをしていく中で、C 温泉というがんの人にとっての聖地のような場所を知り、そこでの湯治を新たな目標にしていく。「信じていれば救われるかもしれない」と希望を持ち、描かれる絵もモノトーンからカラーへと変化していった。1 期に語られた「妻を亡くし、自らががんになった」という物語が、C 温泉との出会いによって、がんを抱えながらどのように生きるのかという、今後の方向を決めていく契機となった時期であった。C 温泉は、1 期の夢「先行きの見えない旅」の行き先となり、A さんが積極的に生きるための布石となった。

第 3 期 (「闘治」の時期)：医学的には積極的治療をしないことを選択した A さんであったが、C 温泉で多くの仲間と寝食を共にすることは、闘病生活を送る A さんの心元なさを支える大きな役割を果たした。同じ病をわずらう仲間との関係は、先行きの見えない闘病を支える自助グループのような働きをしていたと思われる。がんの当事者同士で話合うことは、「気持ちの整理」「孤独の軽減」「情報交換」「自立の促進」(伊藤, 2008) の効果があるというが、妻を失った A さんの場合、仲間の存在によって、他人との情緒的で親密な関係を繋ぎなおすことが可能となった。特に D ちゃんは最期まで A さんを支える重要

な存在となった。3期の始めでは、「終わったはずの仕事に追われている」（#20）「特殊な仕事を引き受けて納期に追われている」（#40）という夢が報告された。Aさんにとって、がんの闘病は命がけの「大仕事」であり、「納期に追われている」という表現には、「残された時間が限られている」という焦りが表現されたのだと思われる。しかし、このような夢は、湯治に通うことがAさんの生活スタイルとして定着し、仲間関係が出来上がったところから報告されなくなった。「必要とされることで自分は生かされている」「待っていてくれる人がいるから。そういう生き方なんです」という語りからも、妻を失ったAさんが仲間が必要とされることが持つ意味は大きかったと思われる。

一方、「闘ってきます」と湯治場の誰よりも真剣に湯治（岩盤浴と酸の湯）を行い、体中に痛々しいほどの皮疹を作りながらも、湯治の後には必ずCTを比較し、腫瘍の進行に一喜一憂するAさんは、必死に自分なりのやり方を模索し、死の恐怖や無力感と戦っているように思われた。しかし途中、病院からクリニックへとカウンセリングの場所を移動しなければならず、このような構造の変更は、AさんにもThにも「良い状態は長くは続かない」「思うようにはならない」という無力感を引き起こした。それは両者に、どれだけ必死に頑張ってもがんは止められない、努力ではどうにもならないことがある、という事実と向き合わせることになった。

第4期（終息の時期）：腫瘍の増悪による体調の悪化に伴い、ついに湯治にはいけなくなる。離れて暮らす寝たきりだった母親を見送り、行き違いのあった次姉とのトラブルに終止符を打ち、やり残した仕事を終える。がんや痛みを排除せずに生きるAさんの姿勢は、家族関係や友人関係でのうまくいかない様々な人間関係を抱えつつ生きることとパレレルであった。面接当初から家族への心配を口にしていたAさんであったが、「それ（母

のこと）がなければ次に自分の安らかな死を迎えられない」と語っているように、母の死は自らの死を受け入れる前段階となり、病を含めたこれまでの人生を振り返る作業が加速されていった。次第に病になる前の自分や周りとの関係を振り返り、病になってからの自分とそれまでの自分を繋いでいく作業をしているように思われた。妻の死に続き、母の死を受け入れることは、自らも死に向かう存在であるというAさんの思いを高めたのかもしれない。

激しい痛みや浮腫、呼吸困難に耐えながらも、「頼らず一人でやっていきたい」という強い意志で生活する中、「今は今でいい」「一人でいてもこれが現実」という静かで確固たる思いに到達する。医療、介護などだけでなく、肉親である娘にも頼らず自分で生活されていくさま、息も絶え絶えになりながらも外来カウンセリングに通院していただける気迫にThは圧倒された。Aさんにとって病や痛みを抱えて生きることが、思うままに行かない自分の人生そのものを抱え、それでも自分で歩まれることであつたのだと思われる。カウンセリングは電話で行うことが増えるが、最後まで外来に通院される。「（本格的入院前の）リハーサルのつもりで」入院し、そのまま永眠された。

2. 痛みに耐えることの意味～依存しない生き方～

がんは進行性の病であり、末期に向かうにつれ、身体的な痛みもまた増悪していく。通常緩和ケアにおいては、身体的痛み、心理社会的痛み、スピリチュアルな痛みなど、様々な痛みを緩和させていき、患者のQOLの改善に努める。国際疼痛学会では、痛みは“不快な感覚性、情動性の体験”であると定義されており、感じている本人にしかわからない主観的な感覚である。だからこそ周囲に伝わりにくく、本人は孤立感を感じることもあり、痛みをどう扱うかは緩和ケアでは重要なボイ

ントとなる。痛みはないほうがよい、というのが一般的な感覚であろうし、精神的にも身体的にも痛みを取り除くことのメリットは大きい。

しかし一方で、痛みを取り去ることによって、更なる別の症状が生み出され、症状が転化していくことがあるという。岸本（2004）はがんの見立てを考える中で、“症状というのは、確かに、辛く、苦しく、取り除きたいものだが、果たしてそれだけだろうか。もし症状にいろいろな意味があるとするならば、症状を緩和し除去しようとする姿勢だけでは不十分になる”と見解を示している。

本事例においては、痛みは、それを取り払うのではなく、その痛みと共にあることが心理的に重要な意味を持っていたと思われる。Aさんは積極的な治療を希望せず、「自然のままに」やっていくことを選択したが、それは終末期になっても変わりなく、酸素マスクと最小限の痛み止めや内服薬のみで過ごされた。家族や親族など周囲に依存せず、薬剤などにもできるだけ頼らない生き方をAさんは求めていた。安易な痛みの除去は、Aさんの生きる意味を奪うことになりかねなかった。

「闘治」の渦中でAさんは「あんなに痛いのを我慢したのにそれでも足りないのか」「湯治に行かないのは生きるのを諦めたということ」と語っている。敢えて痛みの強い酸の湯に入り「がんの痛みを先取りしたような」痛みを耐えることは、Aさんにがんと闘っている実感、今この瞬間を生きているという実感をもたらし、生きる目標をもたらしたのだと推察される。痛みを耐えて闘う姿勢は、4期になって湯治に行けなくなった後にも続いている。「妻がいたら楽だし、大勢でいたら楽しいけれど仕方のないこと。病気も同じ」「生きていることは痛くても我慢して生活すること」「辛いときがあっても、乗り越えるために毎日がある。娘に手伝ってもらっても病気がなくなるわけじゃない、だから自分でやっていくんです」と語るAさんは、最期

まで痛みに向き合い続けた。

痛みは主観的な体験であるからこそ、それを体験する側は痛みの意味付けが変わることで、生の意味も変貌するという（丹木、2007）。痛みが延々と続き、受動的に被る圧倒的な力であるとき、痛みは個人を無力化する。しかし、Aさんにとって痛みは、自らがコントロールし主体的に生き抜くべきものであった。痛みはがんとの闘病の証であり、乗り越えるべき壁であり目標になっていたと推察される。面接の最終回「人はみんないつか死ぬ。自分もそうだし妻もそうだった」というAさんの語りは、様々な痛みを乗り越えた先でAさんが自らの死をも受け入れた姿を表していたのではないかと思われた。

3. 生きたことの「証人」としてのセラピスト役割

Aさんは面接の初期で、「最後までお付き合いいただきたい」「覚えておいてほしい」と確認し、語りを受ける確かな器をThに求め、最期まで外来カウンセリングに通った。Thが、一時的な関わりではなく、終末の時まで関わられるという意思を伝えたことが語りの受け皿を作っていくきっかけとなり、その前提の上に、Aさんは病を抱えつつ必死に生きたことの証を筆者に伝え続けたのだと思われる。クライアントの闘病の過程を見守り、看取っていく役割を果たすこと、Thは、クライアントが生きたことの「証人」として、Aさんの人生の物語を聞き遂げる役目を取っていた。中原（2000）は、ソンドースの not doing ,but being を引用し、”Thができる援助は、（中略）そこに「ある」CIを大切にし、Th自身も「共にある」ことを自覚し、その個人にとって意味ある援助方策を腐心・模索することに尽きる”と明言している。痛みと闘いながら必死に生きるAさんの姿を見つめ、Aさんの語りに耳を傾け続けること、そしてTh自身も闘いの痛みを感じながら最期まで共にあり続けることがこの事例で果た

したThの役割であったと考える。

一方、心理面接においては、時間・場所・料金などの「構造」を守ることが、治療の大前提とされている。それは、日常とは切り離された安全な場を提供することで、クライアントの自由な語りを守ろうとするために先達を作り出してきた心理学的な工夫である。セラピストはクライアントとの人間関係を面接室の中での限定的な関係におくことで、クライアントを日常性から解き放ち、より自由な語りを保障するのである。しかし、事例の中でThは通常の面接原則を破る行動をいくつかとっている。Aさんが最期までの付き合いを望み、病院からクリニックへと移動してまで命がけで来談し続けたのに応じ、Thも面接だけではなく電話対応、入院先の病院への訪問、さらにクライアントが亡くなった後は自宅訪問を行った。また、握手や写真撮影、プレゼント（ケーキ）に応じている。安易に原則を破っては、関係自体が壊れてしまうことにもなりかねない。しかし、病状の急変や、入院や在宅などの現実的判断を迫られる終末期においては、原則だけにとらわれない柔軟な対応を求められることが少なくない。必要なものは、クライアントとの関係性の中でセラピストが主体的に判断していかざるを得ない。上記の行動は、極力他人に頼らず、命がけで3年半を歩み続けたAさんとそれに付き添おうとする筆者の相互作用の結果であった。「証人」として命の営みを聞き続けることは、単なる受身の傍観者ではいられない。個人が生きようとする命の在りように応じ、関係性を軸としつつ、セラピスト自身が枠となって主体的に存在し続けることが必要であろう。

4. セラピスト側のモーニングワーク

このように、クライアントの語りを受ける側のセラピストは、共に死という終わりを見つめるからこそ生のあり方がはっきりと顕在し、クライアントと同様に、自分がどのよう

に生きるのか（死ぬのか）ということ意識するようになる。永友（2002）は、緩和ケアにおいて時に臨床心理士が“自分の死生観を語ることも必要になる”という。本事例では、筆者が直接死生観を語ることはなかったが、Aさんの生き方から筆者の側が生きては（死ぬとは）どういうことかを学んだ。面接の終結が本人の臨終で終わることの多い終末期の心理面接において、セラピスト側が命の先輩、先に死を迎える先輩としてクライアントを尊重する気持ちを持つことは、無力さを感じることの多いクライアントを背後から支え、死を受け止める支えになるのではないだろうか。そして、そのようなセラピストの態度は、自分もまた同じように死に行く人間であるという共感に支えられて、クライアントを失う喪失感から自分自身を守る役目も果たすのだと思う。

しかしそれでも、人の生死を前にした場では、セラピスト―クライアントという枠組みを超えて、臨床心理士もまた限りある一人の人間としてクライアントと出会っていくために、臨床心理士側にもバーンアウトやモーニングワークなど、自己管理の問題が生じることがあるだろう。

緩和ケアに携わる多くの病院では、チーム医療の一環として、デスカンファレンス（医療の評価、振り返り）を行う中で、スタッフ側のモーニングワークを行う場合がある。また、緩和医療で働く臨床心理士同士のネットワーク作りの必要性が唱えられ（兒玉ほか、2006）、学会活動に留まらず自発的な研修会を積み重ねる努力が発展しつつある。事例研究における同職の仲間からのコメントは、事例理解を深めるだけでなく、セラピスト本人の振り返り作業やモーニングワークを兼ねる場合もある。筆者の場合は、院内カンファレンスの場でAさんの生き様を共有してもらい、当時行っていた院内の箱庭制作グループでAさんを失った悲しみを表現することができた。このような場合は、筆者自身の気持ち

を整理し、面接全体を振り返る貴重な機会となった。成田（2003）は、治療者のメンタルヘルスとして、“書くこと”の効果を論じているが、今回このように文章としてまとめることも、自らのモーニングワークになっていると感じる。また「自分の体験を役に立ててほしい」と語っていたAさんへの弔いになるのではないかと感じている。クライアントから語られた語りはセラピストの中に伝わり、セラピストもまた語ることで、クライアントのことを胸に収めていく（長谷川ほか、2002）。緩和医療でのセラピスト自身の悲嘆の作業については、今後ますます研究が望まれる。

V. 終わりに

がんにかかった本人だけでなく残された遺族へのケアが重視されている中、本事例においては家族とは少ないながらも電話や訪問でAさんの闘病についての思いを確認する機会を得た。しかし、その後のフォローアップはなされていない。家族の死という現実、その後も様々な形で影響を与えていくものであり、本人が亡くなったところで援助が終わってしまうわけではない。終末期医療は、そこに立ち会う人々が共に死という重いテーマと向き合うことになるが、同時に人生の意味や病の意味について考える機会を与えられる場であり、そこに立ち会う臨床心理士にとっても援助の基本に立ち返る機会を与えてくれる領域だと思われる。

<付記>

本事例は日本心理臨床学会第26回大会での発表をまとめたものである。多くを学ばせてくださったAさんに心から感謝いたします。

文献

- Holmes TH & Rahe RH (1967) : The Social Readjustment Rating Scale. Journal of Psychosomatic Research, 11, : p.213-218
- Kleinman, Arthur (1988) : The Illness Narratives : Suffering, Healing and the Human Condition. Basic Books. 江口重幸（訳）（1996）病の語り 慢性の病をめぐる臨床人類学 誠信書房
- 河合千恵子（1990）：配偶者を喪うとき 廣済堂出版 p.262
- 河合隼雄（2001）：総論 物語ることの意義 河合隼雄（総編集） 講座心理臨床法第2巻 心理療法と物語 岩波書店
- 長谷川伸江・待鳥浩司（2002）：ある末期患者との面接：スーパービジョン体験を交えて 三木浩司（監） 死をみるころ 生を聴くころ I 木星舎 p.84-117
- 兒玉憲一・栗田智未・品川由佳・中岡千幸（2008）：わが国のがん医療現場の心理士による研究の展望 広島大学大学院心理臨床研究センター紀要 7, p.47-60
- 兒玉憲一・内野悌司・磯部典子（2006）：先端医療が生み出す心の問題に関する研究の展望 平成15、16-17年度文部科学省科学研究補助金基盤研究（C）研究成果報告書
- 岸本寛史（2002）：緩和のころ 誠信書房 p.119
- 岸本寛史・斎藤清二（2006）：新しい人間科学的研究法としての事例研究、メタティブ・ベイスト・メディスンの視点から 心身医学 46（9） p.789-797
- 伊藤朋子（2008）：現場で臨床心理士に求められていること 広島大学大学院心理臨床研究センター紀要 7, p.16-20
- 三木浩司 監修（2006）：死をみるころ 生を聴くころ II 木星舎
- 永友隆一郎（2002）：末期患者への心理的援助の可能性 三木浩司（監） 死をみるころ 生を聴くころ I 木星舎 p.59-83
- 中原睦美（2000）：外科領域での末期がん患者への心理療法的接近の試み 心理臨床学研究 vol.18, No.5 p.433-444
- 成田善弘（2003）：治療者のメンタル・ヘルス 精神療法家の仕事 金剛出版 pp.183-197
- 丹木博一（2007）：痛みの意味について 聖母大学紀要 vol.4, p.43-51

i [] 内身体症状の記載は、本人の報告と精神科医

の診療記録からの抜粋。

- ii Aさんの胸膜中皮腫とアスベストとの関係は不明。

太平洋戦争下におけるアメリカ・バプテストの宣教政策に関する一考察

原 真 由 美

One Consideration about the Mission Policy of the American Baptist
Under the Pacific War

Mayumi Hara

要 旨

1939 年（昭和 14 年）に宗教法人法が公布され翌年に施行された。日本バプテスト派の東部組合と西部組合は、1940 年（昭和 15 年）に合同して日本バプテスト基督教団を設立したにもかかわらず、国家の政策により他のプロテスタント諸派とともに日本基督教団へ統合させられた。これは、アメリカ・バプテストミッション（外国）の援助資金と影響力を切り離そうとした政策であった。この結果、太平洋戦争開戦前の 1941 年（昭和 16 年）4 月に、アメリカ・バプテストの組織的な日本への宣教は終了した。しかし、戦時下にあってもアメリカ・バプテストは、日本の戦況を注視し、敗戦を想定しつつ戦争終了後の日本への宣教再開を模索し、動き出していた。

キーワード

- ①アメリカ・バプテスト ②宗教団体法
③日本バプテスト基督教団 ④日本基督教団
⑤日本委員会 ⑥6 人委員会

目 次

- I はじめに
II 日本基督教団への統合
1 日本バプテスト東部組合と西部組合の合同

- 2 日本基督教団への統合
3 日本基督教団の設立理由
(1) 日本バプテスト基督教団の設立について
(2) 宗教団体法・治安維持法と日本基督教団への合同
III 戦時下のアメリカ・バプテストの宣教政策
1 日本宣教の終了
2 日本宣教終了に対する日本側の反応
3 日本敗戦への予測
(1) 日本の東亜伝道に対する警戒
(2) 日本バプテスト基督教団の東亜伝道
(3) 宣教師団の対応と強制帰国
IV 1945 年（昭和 20 年）の敗戦
1 日本宣教再開を探って
2 日本委員会と 6 人委員会
3 日本側からの訴え
V まとめ
注と引用文献

I. はじめに

1939 年（昭和 14 年）4 月に宗教団体法が公布され 1940 年（昭和 15 年）4 月に施行された。これに促される形で日本のプロテスタントの各派は、小教派を含めて統合し、日本

基督教団が結成された。もちろん、統合に向けての政治的・強制的な圧力は大きく、異議を唱えることは難しい状況にあり、この統合に対抗する事が出来ず、教派の存続を図るために体制に追従した。従って、日本のプロテスタントの各派は、基督教の持っている機能・主張を十分に発揮することが出来なかったといえる。むしろ、プロテスタントの教会側には、国家に公認される、保護を受けると言う思惑があり、他の宗教団体との格差を図った節があった。

統合に向けての動きには、プロテスタント教会として、一番早く対応したのがバプテスト派である。まず、日本バプテスト東部組合と西部組合が合同し、日本バプテスト基督教団が成立する。その後、1年も経たない間に、日本基督教団の結成に参加した。バプテスト派の中では、日本バプテスト基督教団として単一教団になってまもなく、一年で日本基督教団に統合されるのは如何なものかとの疑義や反対もあったが大きな問題にもならず日本基督教団へ統合した。なお、日本基督教団への統合に反対したプロテスタントの派もあり、耶蘇基督之新約教会、セブンスデー・アドベンチスト、プリマス・プレズレン等の派は、日本基督教団には加わっていない。

日本基督教団は、当初11の部制を採用し各教派の伝統を認めた。日本バプテスト基督教団は、第4部であったが、1年後に部制は廃止になった。これを政治的な流れとして見れば日本が太平洋戦争に突入するのを見越した統一された組織の完成ということになる。この後、日本基督教団は一括した統制時代（統率者：富田満統理）に入り、政府の戦争遂行政策の方針に従っていった。

この合同に至るころの日本国内のバプテスト派の動向については、先に拙論¹⁾で述べているが、本論では、そこで論じなかった日本の国内事情及びその動向と外国、特にアメリカにおける状況について言及している。

アメリカ・バプテスト派の日本への宣教政

策は、日本基督教団の設立を境に終了した。日本政府による外国基金と外国からの影響力の切り離しにより、アメリカ・バプテストの組織的な日本への宣教は終了したが、太平洋戦争下にあっても、日本への宣教再開への動きがあった。それがどのように図られていたのかを、アメリカ・バプテストの年次報告書 *Along Kingdom Highways* を中心に日本の国内情勢と比較しながら検討し考察する。

II. 日本基督教団への統合

1. 日本バプテスト東部組合と西部組合の合同

日本のバプテスト派で起こった最初の課題は、東部組合と西部組合の合同問題である。太平洋戦争開始前の経緯をまとめと次のようである。東部組合では、1935年（昭和10年）5月に開催された第19回日本バプテスト東部組合年会²⁾で、西部組合では、1935年（昭和10年）に開催された第32回西部組合年会³⁾で東西両組合合同促進のための日本バプテスト東西両組合合同問題研究委員を選出し、公式に東西両組合の合同問題の研究が進められることになった。

この東西合同に対する積極的な動きは、1938年（昭和13年）ごろから本格的になっている。その理由は、国内の政治情勢が後押しし、統制強化という要因が強くなったことである。この合同問題は、当初から西部組合側よりも東部組合側の方が積極的であったと言われている。東部組合側は、東西一緒にやっという意識があったように見られるが、西部側は、東部側の西部側に対する配慮のない行いに反発して、独自に活動しようとした経緯がある。また、米国の南・北バプテストのミッションの影響が、日本側のそれぞれの組合から抜けずに強く残っていたという事情があった。

1939年（昭和14年）にこの問題は急速に進展した。同年9月12日から14日に第1回

東西組合合同委員会が、続いて同年 11 月 28 日から 30 日に第 2 回東西組合合同委員会が開かれた。

東西合同は、1940 年（昭和 15 年）の年明けに起こった。1 月 3 日から 5 日にかけて日ノ本女学校・姫路教会で「第 24 回日本バプテスト東部組合年会」が、同じく「第 38 回日本バプテスト西部組合年会」が同時期に開催され、初日の 3 日に両組合は同年 3 月 31 日に解散することが決議された。引き続いて、翌 4 日には、第 26 回「日本バプテスト教会組合総会」が開催され東西組合の報告を承認後に総会名称を「日本バプテスト基督教団総会」とし同 4 日から 5 日までの会期の組織総会とした。ここに「日本バプテスト基督教団」が成立して、東西両組合の合同が成立した⁴⁾。

2. 日本基督教団への統合

東西組合の合同後 1 年経たないうちに、日本基督教団への統合の動きが急速に表面化した。1940 年（昭和 15 年）10 月 15 日から 16 日にかけて東京の三崎会館において第 2 回日本バプテスト基督教団総会が開催された。同じ年の秋に 2 回目の総会が開かれたのは、プロテスタント諸派の基督教団統合について、早急に対処しなければならないという国内の政治的事情が背景にあったからである。

この総会における主事報告⁵⁾の中に同年 2 月 14 日（於基督教聯盟）、同 19 日（於 Y・M・C・A）に宗教団体法懇談会が開催され、出席した記事がある。また、同 28 日に宗教団体法に関し基督教各派代表者と共に文部省を訪問したこと、3 月 7 日に宗教団体法に関する各派代員委員会を基督教聯盟において開催したことの記載もある。この宗教団体法が日本基督教団への統合の要因であった。

また、日本バプテスト基督教団における 5 月 16 日の報告欄には、日本基督教団への加盟の同意書を求めた結果、教会、伝道所の全てから回答があったこと、不明の学校、社会事業団体が西南学院、捜真女学校、東京保

姆傳習所、東京三崎会館、久慈幼稚園であったことが記載されている。他は、財産の教団に対する無償譲渡に関する等の事務手続きを残すだけの状況になっており、既定の事実であった。しかし、このことについて、日本バプテスト基督教団の中からは、すでに表だった異議を唱えることはなく、逆に、この状況を利用して自派に有利に展開しようとする思惑さえ見られた。

1941 年（昭和 16 年）11 月 12 日から 14 日にかけて京都教会・奉公館において第 3 回日本バプテスト基督教団総会が開催された。議題は、教会規則の修正（日本基督教団第四部教会規則制定）に関してであった。つまり、各個教会規則の原案が示され、各個別教会がこれに沿って規則改正することが要求された。この規則改正により、国に公認され、保護を受ける見返りに、国からの統制を受けるという代償を払うこと、国から与えられた裁量の範囲内でしか宣教活動ができないことになったのである。

このことは、公認され、保護を受けることが、国（権力）の統制を受けることになることを見抜けなくて、現実的な妥協と追従に走ったためであったと言える。

なお、東西組合の機関誌の合同問題は、合同委員会の動きよりも早く、合同を見越して 1939 年（昭和 14 年）5 月 22 日に委員会が開催され、同年 8 月 1 日には、東部組合の「基督教報」と西部組合の「バプテスト」の両機関誌が『日本バプテスト教報』と改称し、第 1144 号 6) として合同発刊している。さらに、1941 年（昭和 16 年）12 月 5 日『日本バプテスト教報』は、第 1176 号で終刊し、この後、バプテスト派の機関誌は、「基督教報」と改称され発行された。

3. 日本基督教団の設立理由

(1) 日本バプテスト基督教団の設立について
まず、日本におけるバプテスト派の統合についての理由である。日本における伝道をさ

らに強く推し進めたい日本バプテスト東部組合は、組織強化を図っていくが、反面、次第に中央集権的な組織となり、バプテストの個別教会主義を脅かす危険性が出てきた。このことに対して反対の声もあったが、さらに中央集権的な「日本バプテスト基督教団」が設立された。

この日本バプテスト基督教団の設立に至った経緯には、日本のバプテスト派に対する国内外の社会情勢に対する対応策という意味が認められる。ここに至った要因として次に挙げる4つが考えられる。

一つ目は、アメリカからの援助金の問題が挙げられる。これは、アメリカ・ミッションが、その援助金をより必要とする他の宣教地支援のために、限られた資金を効率的に、有効に活用しようとした方針があったためであったのだが、日本では米国からの援助金の減少となって現れた。

二つ目は、日本側の要因である。これには、次のことが挙げられる。

- 1) 急速に近代化した日本の国力増進と経済的発展が教会の自立を可能とした。
- 2) 日本の旧来からの大家族主義に根ざす封建思想・社会構造・制度による依存的、隷属的体質から自覚的、主体的な思考への変化が生まれた。
- 3) 日本人の自負心に基づく教会の発展があった。

これらのことが、結果的に外国ミッションとの関係に対する圧力となった。

三つ目は、宗教団体法による国内の統制があった。

四つ目は、日本の中国進出に伴いアメリカとの関係が悪化したことである。

この社会情勢から生まれた要因がもたらしたものは大きく、東部組合と一線を劃していた西部組合も参加せざるをえない状況となってしまう。日本国内で不利益を被り、不都合な状況に陥ることもあると思われるので、同じバプテストが一致協力して日本教化に尽

くそうという標語が掲げられたことが理解できる。特に三つ目の宗教団体法への対処方法は大きな問題となった。

この時代の統制強化の例⁷⁾を見ると、1937年（昭和12年）12月24日付の文部次官依命通牒がある。日本バプテスト教会常置委員長宛てに出されたもので、標題は「國民精神総動員第2回強調週間に関する件」となっている。これによれば、外国ミッションとの関係に対する圧力や、国内の統制の強化を図る風潮が如実に見て取れる。

(2) 宗教団体法・治安維持法⁸⁾と日本基督教団への合同

基督教各派にとって宗教団体法と治安維持法は、日本のバプテスト派に影響を与えた。宗教団体法は、1939年（昭和14年）3月に成立し、4月に公布され、1940年（昭和15年）4月に施行された。当初は、宗教団体法の認可基準は示されていなかったが、1940年（昭和15年）6月に文部省は一つの教団の認可基準として教会数50以上、信徒数5000人以上という宗教団体の基準を示した。さらに、文部省は、その方針としてプロテスタントは、教会として歴史、教養、政治形態、教職制等が異なっても本質的に異なっている訳ではないので全教派教会が合同で教団を設立した方が良いと指示してきた。

日本の基督教関係団体では、この問題についてはバプテスト派が一番早く対応した。当初、バプテスト派は、弱小教派が存続するために東・西両組合合同によって外部圧力である宗教団体法に備えようとした。1940年（昭和15年）の東・西バプテスト教会合同直後の日本バプテスト基督教団は、示された認可基準を超えていたからである。

しかし、当初はある程度の大きさの教派単位で認可されるはずだったのが、文部省の方針・指示には、当てはまらないことが判った。基督教会は、カトリック、プロテスタント、正教会の三つの基督教団体しか認められず、

それに入らない教会は、宗教結社の扱いとなることから、プロテスタントの各教派は、ついに「日本基督教団」に統合され、さらにこの統合された団体は、動員という戦時体制に組み込まれた。これが敗戦まで暫く続いた。

この教団への統合に対して正面からの反対がなかったのは、当初、宗教団体法に対して日本のバプテスト派には全面的な反対がなかったからである。他の仏教とか神道という宗教団体との格差解消をねらっていた節が見られた。しかし、このことの経緯は、今後の課題とする。

また、基督教各派にとっては、国からの制約を徹底する面での治安維持法の存在も見逃せない。1925年（大正14年）に公布され、1928年（昭和3年）には普通選挙法の公布に対処して、1941年（昭和16年）には15年戦争に対処して強硬な取り締まりが行われた。国民の思想・信仰・言論・集会・結社の自由を制限するもので、特高警察が担当する場合もあり、より強制力を持たせた。

どちらにしても、日本基督教団への合同は避けることの出来ないものであった。1941年（昭和16年）6月24日から25日にかけて東京・富士見町教会で『日本基督教団創立総会』が開催され、日本のプロテスタント各派は、合同して『日本基督教団』を成立させた。11部、18教区、教師2,800人、信徒246,200人による発足であった。統理に富田満、バプテスト関係では常議員に千葉勇五郎、教団参与・総会書記に友井楨が選ばれている。

また、それぞれの教派の記録・広報となる機関誌について見れば、バプテスト派にあっては、1942年（昭和17年）日本基督教団他部の機関誌と統合した『基督教世界』が発刊されることとなり、同年中に『基督教世界』は、『福音新報』及び『るうてら』と統合し日本基督教団機関誌の『日本基督教新報』と改題して発行されることとなり、教派としての主張の場は無くなっていった。

Ⅲ. 戦時下のアメリカ・バプテストの宣教政策

1. 日本宣教の終了

アメリカ・バプテストの日本に対する宣教は、アメリカ・バプテスト外国伝道協会（American Baptist Foreign Mission Society：以下「ABFMS」と言う。）と婦人アメリカ・バプテスト外国伝道協会（Women American Baptist Foreign Mission Society：以下「WABFMS」と言う。）が担っていた。1942年（昭和17年）のABFMSの報告書⁹⁾によると、アメリカからの経済的援助は、1941年（昭和16年）4月30日に終了した。太平洋戦争後の落ち着きを取り戻した時代の1955年（昭和30年）まとめられたABFMSとWABFMSの合同報告書¹⁰⁾では1941年（昭和16年）4月20日に日本とアメリカの相互の同意により終了したと記載されており、アメリカの対日宣教政策が垣間見られる。

1942年（昭和17年）のABFMSの報告書では、日本政府のプロテスタント各派に対する日本基督教団への統合政策が、外国からの経済的援助（基金）と影響力行使から切り離すためのものであり、日本政府の影響力を随時行使出来る目的を持ったものであるということを確認していたことが記載されている。

日本基督教団統合（加盟）については、ABFMSにとって重要な課題で有り、メソジスト派の宣教師であるDr.チャールズ W.アイグルハート（Dr. Charles W. Iglehart）の1941年（昭和16年）10月の宣教の国際雑誌 *International Review of Mission* への報告を同報告書へ転載して教団組織構成の説明を補完している。そこには、設立された日本基督教団は、1つの名前、1つの信条を持ち、一人の運営統理者の元に単一の事務局と1つの協議会及び1つの全体大会で構成される。教会の宣教活動は、11の部制となっておりそれぞれに議長と役員がいる。各部は、比較的大きな教派とその構成団体に類似した団体で

構成されている。これらの部は、宣教関連の活動については自治権を保持していたと述べている。なお、バプテストはその内の1つの部となっていると報告されている。この時はまだ、日本の情報が的確に掴まれていたことが判る。

しかし、その後のABFMSの報告書は、日本とアメリカの意思疎通が次第に不明瞭になってきたことを示しており、戦争が勃発することに疑いをもたなくなってきた。

ABFMSは、日本の教会の歴史は、アメリカと英国の宣教師達の尽力と信徒達との密接な繋がりによるところがあったことから、日本の教会にとっては、大災難を迎えたと悔やみもしているが、日本基督教団の合同のための運動は、当初、日本の基督教信徒の将来をよりよくすると言う標語が掲げられており、最近の社会的な基督教迫害と思われる悲観的出来事を見れば、日本の教会を外国の組織(外国当局)からの影響力行使と財政援助から切り離すことは当然となるだろう。今後の日本の宣教は、新しい教団と言う土台の上で行われることになるであろうと言う報告をしていた。

日本のプロテスタント各派が基督教団へ統合されることは、アメリカ・バプテストミッションとして避けがたいところか、日本の多くの基督教徒が、日本の将来のためと言うことで支持している現実を見ると、アメリカ・バプテストからの財政援助及びその宣教への影響力行使が基督教団への統合により教団へ移ってしまうことは必須で、日本とアメリカ・バプテストミッションとの関係を解除することが両国にとって良い結果となるとし、それを認めざるを得なかった。

1955年（昭和30年）まとめられたABFMSとWABFMSの合同報告書¹¹⁾では、1940年（昭和15年）の宗教団体法は、2つのバプテストの団体を日本バプテスト基督教団と言う1つの組織にするのを急がせ、そして、1941年（昭和16年）には、日本政府に

より日本の教会は、日本基督教団へ強制的に加盟することを急がされたと報告しており、最初の状況判断の対応に疑義を出すことはなかった。

2. 日本宣教終了に対する日本側の反応

このような状況について日本側は、どのような対応をしたのだろうか。日本の基督教宣教活動は戦争のためにこれまでと急速に変わっていった。しかし、日本側においてもアメリカの日本への宣教が閉ざされようとするのを傍観していただけではなく宣教が継続されることを願っていた。

1941年（昭和16年）3月27日に日本のプロテスタント組織である日本基督教聯盟は、アメリカに基督教の親善使節を派遣して戦争が起こる前の最後の連絡会を持った。参加者は、日本人側がYMCAの斉藤惣一、組合教会派牧師の小崎道雄、元同志社大学学長の湯浅吉郎、恵泉女学校校長の河井道、賀川豊彦博士等7人とアメリカ・バプテストの宣教師ウイリアム・アキシリング博士（Dr. W. Axling）1人の計8人であった。彼らはアメリカの基督者の代表者達と理解と絆を強めるための素直な情報と意見の交換を行っている¹²⁾。この同じ内容の記録は、チャールズ・W・アイグルハートの記録¹³⁾にも記載されており、アメリカで学んだ経験のある、アメリカでよく知られ愛されていた人達が渡米し、行く先々で聴衆を魅了したと記載されている。

アメリカ・バプテストにおいても、日本宣教の終了に気落ちしている訳ではなかった。1942年（昭和17年）のABFMS報告書の最後に、日本の基督教教師からの励ましの便りを載せて冷静に判断し、受け止めようとしたことがうかがわれる。「あなた方は、外国伝道を行ったことを決して後悔してはいないだろう。そして私達は、イエスの教えを伝えられた事を決して悔いていない。安心してくれ。困難が起こっても、私は日本宣教を続けていく。共に協力し神の国を拓けるために働きま

しよう。」と載せていたが、これらのことによって状況が好転するわけではなく、それ以上のものではなかった。

3. 日本敗戦への予測

(1) 日本の東亜伝道に対する警戒

アメリカは、日本政府が日本基督教団を宗教法人として認可したのは、基督教が国際的な繋がりを持ち、宣教地の基督教関係者と交流し、宣撫工作に従事させられるのではないかと言う側面を見ていた。日本基督教団の国外活動は主に中国大陆であり、特に華北・華中における中国基督教が外国ミッションとの関係を絶ち、日本と提携するように促す働きかけを行っている経緯を見ていた。

チャールズ・W・アイグルハートはその著書¹⁴⁾で、大東亜局の下で教団は組織的な視察活動を行い、アジアへの影響力を拡大していった。その任務は、日本人の居住者への単なる伝道だけではなく、アジアの人々との調和と講和を図る仕事であった。それは、日本軍の権限の下に各占領地の基督教徒との接触を通じて任務が行われるという特務であった。この任務には、教団から指導者が参加していたが、次第に重要な任務として必要とされ、アジアの広範囲な地域への拡大策を支援する熱心な人々を伴って行われていた。華北では、日本軍の権威によって教団の代わりに教会連合を設立している。華中では元教職者が中国の教会と日本軍当局（官憲）の間で現地に居住して連絡係をしており、彼は戦争終了まで上海に住んだようだと言っている。

アメリカ・バプテストに届く日本についての情報が不十分な中で、1943年（昭和18年）の年次報告¹⁵⁾に日本の東亜伝道に関しての報告が若干記載されている。占領下の中国に派遣された日本の宣教師である某氏の中国での視察報告に注目し、これは、日本基督教団の明白な働きかけであるとして強い関心を示している。彼の中国への旅が、明らかに日本が占領した地域の中国人基督教徒を日本の

基督教団に組み入れるための働きであったとみており、日本とその占領下全地域の基督教徒との関係が、既に極東の教会の将来構想に向けた広範な動きとなっていると警戒していた。

アメリカ・バプテストは、日本での宣教活動が、戦時下の状況の中で縮小される一方、日本の中国への宣教拡大に対し、危機感を覚え、日本との繋がりが断ち切られる事態に自信を失いかけていた時もあった。しかし、一方では、このような状態の中でも、年次報告中のS. S. Gripsholm（交換船名）レポートでは、1942年（昭和17年）6月に日本を去るまで教会と学校は、戦時下の調整に合わせることを余儀なくされながらも、宣教師達は、自分たちのプログラムを継続したと言う記述がある。

(2) 日本バプテスト基督教団の東亜伝道

東西バプテスト合同の際、西部バプテストが行っていた満州への東亜伝道が、日本バプテスト基督教団へ、引き続いて1941年（昭和16年）に統合した日本基督教団の日本東亜伝道会に引き渡された¹⁶⁾。その後の東亜伝道については、教団が国家の統制と動員のための民間にあって国策に協力する補完的な存在となったように思われる。

日本のバプテスト派について詳細にみると、1938年（昭和13年）、第25回日本バプテスト教会組合総会が広島教会で開催された。この時予測された東西バプテストの合同を見越したかたちで第2号議案に東亜伝道に関する件が掲げられた。西部組合伝道部から日本バプテスト教会組合総会に出されたもので、この総会の名に於いて東亜伝道に協力することを満場一致で承認した¹⁷⁾。

また、丁度1939年（昭和14年）1月に日本バプテスト東部組合事務所菅谷主事あてにバプテスト関係者からの手紙が2通¹⁸⁾届いていた。内容は、中国の南京で国際難民救済委員会を組織したが、自分の後任を探してお

り日本軍の特務部で手続きをしたいからバプテストから1名派遣できないかというものであった。南京の良民収容所を本拠として、基督者として中国人の間に食い込んでいく任務、外国宣教師達と衝突しないで勧める任務等の工作の仕事であり、俸給についても細かく記載しており、他の教派からも入って来ているとも書かれていた。

さらに1940年（昭和15年）1月3日の姫路バプテスト教会で開催された第24回日本バプテスト東部組合年回（総会）報告によれば、東亜伝道に関する件は、東西両組合年會に於いて挙げられた委員によって行われることになり、緊急動議で、今後、東亜伝道を東亜局の東亜伝道會に引き渡すことに関し、教団の理事会に善処してもらう旨を決議し、中国の大連バプテスト教会を東亜伝道會に委譲することを承認している。このことから、東亜伝道が国策に沿った、しかも、軍を後ろ盾にしたものであったことをうかがわせた内容であった。

このような中国での動きも、アメリカの見解の確かさが当を得たものであることを裏付けており、その後のアメリカで展開された敗戦後の日本への宣教政策の基となったと思われる。

（3）宣教師団の対応と強制帰国

宣教師達は、1940年（昭和15年）に起きた日本基督教団の統合の過程について、当初、日本政府が宗教団体法により、キリスト教を三つの宗教の一つとして公に承認するもので、政府当局の保護下に入るのだから、外国の教派から援助される基督教は、宗教活動のための資金を外国から受けるのを中止し、また、教会内の重要な地位は日本人が占めるという政府の指示には従うこととした。そして、宣教師達は、1941年（昭和16年）6月のプロテスタント教会の合同による日本基督教団の創立についても、「宣教師達は、天井敷で喜ばしい観客として席を占められる。」

と、キリスト教が日本の国民生活の中で存続し、成長したこととして語っている。

戦時体制が進む状況になっていく中で、1940年の『日本バプテスト教報』は「宣教師団の申し合わせ」というものを載せている。その記載内容は次のようなものだった。

「われわれは、ミッションとして日本バプテスト基督教會が新年度より自給独立するに至るまで進展せし事を心から祝する。われわれは過去に於ける教団の進歩に対して神に感謝すると共に、日本の兄弟らが時局に対して有せらるる先見と勇氣とを見て誇とする者であって、バプテスト教団とそれに関する諸団体との発展に深い関心を抱き、熱棒を怠らない者である。右決議す。」としている。

当時の教会が国策に沿って外国からの援助を受けられなくなり、自給独立の道を選ばねばならなくなった。このことについてミッションは、それが残念なことで、断腸の思いをした事だろう。しかし、宣教師達は、これも良いこととして積極的に考え、受け止めようとした。日本人自体の宣教活動として評価し、精神的な激励を与える姿勢を見せた。そしてこの後、宣教師・婦人宣教師達は、戦時体制の下で、いつか日本に戻ることを期しつつ順次帰国していった。

Ⅳ. 1945年（昭和20年）の敗戦

1. 日本宣教への再開を探って

アメリカ・バプテストの現宣教師であるロバータ・L. スティブンス（Roberta Lynn Stephens）によれば¹⁹⁾、1943年（昭和18年）頃からアメリカ各派の外国伝道協會は、戦後の日本がどうなるかと言うことを予測し始めたとした。スティブンスの示す資料²⁰⁾を再調査してみると、「アメリカは戦争に勝つだろう。」と言う確信に満ちており、さらに敗戦後の日本国民の感情を予測する論議さえ次のようになされていた。

「日本の基督教徒は、真っ先に友情を持つ

て手を握るであろう。だが、我々は戦勝国の代表として、もしくは戦争が破壊したものの再建を提供する恩恵者として彼らに近づくわけにはいかない。我々はまず和解の任務の先頭に立たなければならない。(中略)。徹底的な日本の敗北によって、教会の指導者達は、極度に敏感に成り引込み思案になっているだろう。このことはアメリカの教会との関係を再構築するのに、非常な困惑を引き起こす。しかし、別の可能性も考えられる。昨日までの敵国の基督教徒からさえも助けてもらおうとする傾向が生まれるかもしれない。]

この検討内容からは、既に戦後の日本への宣教再開に伴う状況について議論が及んでいたことが読み取れる。これらの議論は、それほど的外れなものではなく、元在日宣教師が占領軍のスタッフとなり、日本の基督教徒との接触が素早く始まっていったことに繋がる。

2. 日本委員会と6人委員会

1945年(昭和20年)8月15日、日本の敗戦により太平洋戦争が終結した。先に記載したように、アメリカ・バプテストのみならず1943年(昭和18年)頃からすでに北アメリカの各派外国伝道協会は、戦後の日本がどうなるかを予測し始めていた。

戦勝国連合軍のスタッフとなった元在日宣教師達は、この準備があったことから日本の基督教徒との接触を敗戦後直ぐに始められた。これは、北アメリカの各派伝道本部が、日本の教会とのつながりを再構築するために手を結び、日本に関する全活動を取り仕切る日本委員会(Japan Committee)を伝道本部の中に組織したからである。その活動は、戦争中に帰国した宣教師を送り返すこと、そして牧師と教会を援助する資金を募金することであった。日本が太平洋戦争に敗戦した後、さらにこの日本委員会から6人の委員が在日連合軍最高司令部(SCAP)に対する公的交

渉連絡機関「通称6人委員会」として任命された²¹⁾。この「6人委員会」の最初の2人は、1946年(昭和21年)4月15日に日本に着いた。2人の氏名と役割は次のようであった。G.アーネスト・ボット(G. Ernest Butt)(カナダ連合教会)は、海外基督教徒の緊急事態対応の働きを担当した。ポール S. メイヤー(Paul S. Mayer)(福音主義派)は、SCAPとの連絡係で、帰国した宣教師と日本の教会との連絡窓口を担っていた。

他の4人のメンバーは、6月に到着している。その氏名と役割は次のとおりである。アリス・ケリー(Alice Cary)(組合派)は、日本の婦人、教会とその働きの再構築を担った。ヘンリー G. ボレンカーク(Henry G. Borenkerk)(長老派)日本の教会と伝道の関係の責任を担当した。カール D. クリーテエ(Karl D. Kriete)(改革派)基督教主義学校との連絡の任務を担当した。ジョン B. カップ(John B. Cobb)(メソジスト)大阪と日本中心部の任務を担当した。彼等は、日本の教会や教会の婦人達、キリスト教の学校と北アメリカ各派教会との橋渡しの仕事を行った。この6人の委員の中には、アメリカ・バプテスト外国伝道協会(ABFMS)の関係者は入っていないことから、福音派のポール S. メイヤーに自分達の思いを委託していた²²⁾。

6人委員会は、これら仕事をしばらくの間続けるが、その間、各派では独自の調査も行っていた。アメリカ・バプテスト外国伝道協会では、日本の破壊状況について独自の調査を行い、太平洋戦争が終わって1年半後に日本バプテスト伝道主事(Japan Baptist Mission Secretary)のエルマー・フリーデル博士(Dr. Elmer Fridell)が2回来日し、アメリカ・バプテスト外国伝道協会(ABFMS)が戦前に宣教していた全ての地域を訪ねて必要なものを調べている²³⁾。

太平洋戦争が終わった時点では、他のプロテスタント教派をはじめ、アメリカ・バプテストも宣教にこれほどの好機に恵まれるとは

思っていなかったため、それに対応する本格的な計画は、1950年（昭和25年）の後半に打ち出された日本への伝道強化計画の基金構想以降であった。バプテストの宣教師であるB. L. ヒンチマン（B. L. Hinchman）は、この特別基金により日本のバプテストへの援助が可能となり、効果的な働きのための扉が大きく開かれ、この伝道計画がなければ関東学院が存続し得ず、同盟唯一のバプテストの大学は失われたかもしれない²⁴⁾と述べている。なお、太平洋戦争後のアメリカ・バプテストの日本に対する働きかけが再開された状況についての詳細は、今後の課題としたい。

2. 日本側からの訴え

最後に日本側キリスト教指導者からのアメリカ各派への働きかけについて若干述べておきたい。働きかけは、落ち着きの戻った1945年（昭和20年）11月頃から始まった。1946年（昭和21年）のABFMSの年次報告²⁵⁾に日本バプテスト派の指導者である千葉勇五郎から1946年（昭和21年）4月に日本の窮状を訴えた手紙をアメリカ・ミッション・ボードが受けたことが記載されている。千葉勇は、父である千葉勇五郎略伝のなかでこのことを次のように書いていた。「日本のバプテストで最初のアメリカ留学生で、日本バプテスト神学校の創立委員の一人となり同神学校校長となり、テンネー（Charles Buckley Tenny）博士の後、関東学院長を歴任（筆者注：1932年（昭和7年）から1937年（昭和12年）。1937年（昭和12年）以降名誉院長に就任。）した千葉勇五郎は、1945年（昭和20年）に御殿場で敗戦を迎えていた。彼は食糧事情の悪化から栄養失調に陥っていた。1946年（昭和21年）2月、東京市中野区野方町の自宅に衰えた体にむち打ちながら戻った師は、同年4月20日夜、病床にあってアメリカ・ミッション・ボード宛ての信書を英語で口述した。そこには、日本のバプテストの教会、学校、団体の多くが戦災を被り、

牧師、信徒、教師、生徒達の多くが家を失い、困窮して援助を求めている。国破れ、希望を失っている国民を真に救うものは、キリストの福音においては無いと信じる。どうかこの訴えに応じられたい。この信書を日本バプテスト新生社団主事の菅谷仁に渡し、G.H.Q.（占領軍）を經由してアメリカ・ミッション・ボードに送った。」とある。他の教派でも同様な働きが在った。なお、千葉勇五郎は、「6人委員会」の最初の2人が到着した直ぐ後である1946年（昭和21年）4月21日イースターの早朝に召天したとABFMSの年次報告にある。

敗戦後、日本に置かれた在日連合軍最高司令部は、日本の民主化を占領政策の重要な課題として、全面的に基督教会に好意を示す。これを背景にしてアメリカの大小各派教会の中には宣教師を派遣しようとするものが少なくなかった²⁶⁾。

V. まとめ

日本において1939年（昭和14年）に宗教団体法が公布されてから、東部バプテスト組合と西部バプテスト組合は、1940年（昭和15年）に合同し日本バプテスト基督教団を設立した。アメリカ・バプテストミッションからの援助金が減少した事と、日本の近代化による国力・経済力の発展が、教会の自給教会へ自立の道を促したからである。しかし、国の政策により日本基督教団に統合させられたことから、国の政策遂行の一翼も担わされることとなった。ここでアメリカ・バプテストの日本宣教は、終了を余儀なくされた。

しかし、太平洋戦争の開戦に伴い在日宣教師達が順次アメリカへ強制帰国（送還）させられた中であっても、アメリカ・バプテストは、日本基督教団が日本の政策の一端として組織的に大東亜圏で活動していることなど、日本の状況を観察していた。この結果からアメリカは、1943年（昭和18年）頃には、日

本の敗戦を予測し、戦後の宣教再開に向けて元在日宣教師達を含め、戦争終了後直ぐに動きが取れるよう周到に検討していた。

アメリカ・バプテストは、太平洋戦争以前から関係のあった日本のバプテストの指導者である千葉勇五郎の手紙を受け、日本への宣教の足がかりとして日本の宣教の再構築を進める。

日本のバプテスト派は、日本政府の政策により基督教団へと統合され、太平洋戦争遂行に組み込まれ、教派としての独自性と特色を失いかけた。しかし、敗戦を迎え再びアメリカ・バプテストとの相互の協力により更なる宣教活動を果たしていくことになった。

註と引用文献：

- 1) 拙論『日本バプテスト派の婦人達の宣教活動に関する歴史的研究』学位論文 2005 年 7 月
- 2) 『第 19 回日本バプテスト東部組合年會記録』昭和 10 年 5 月 22 日 p.9-10 p.14-15
- 3) 枝光泉『宣教の先駆者たち－日本バプテスト西部組合の歴史－』2001 年 10 月 10 日 ヨルダン社 p.94～95
- 4) 『日本バプテスト基督教団組織總會記録』昭和 15 年 1 月 p.1-3
- 5) 『日本バプテスト基督教団第 2 回總會記録』昭和 15 年 10 月 p.48-49
- 6) 『日本バプテスト教報』第 1144 号 昭和 14 年 8 月 1 日 p.5-8
- 7) 『國民精神總動員第 2 回強調週間に關する件』文部次官からの依命通牒 昭和 12 年 12 月 24 日
「趣旨：興隆日本の建設は、肇國精神の顕現に在り、仍て事變下の紀元節を機とし國民精神總動員強調週間を設定シ國民精神總動員の中核たる國體觀念の明徴、日本精神の昂揚を強調し、之を社会萬般の上に具現せしめんとす。
「実施方法：（一）我が尊嚴なる國體、宏遠なる肇國の理想、日本文化の精粹を國民に徹底せしめ以て日本精神を昂揚せしめること
（二）我國現下社会各般に見らるる弊害が外國思想及外國文化を無批判的に採り入れたる ことに因るもの多きに顧み、日本精神の根本義に立脚して此の際國民をして深く之を反省せしめ社会生活に於ける各般の弊の匡正に努めしむること
特に誤まれる個人主義、自由主義、功利主義、

唯物主義の打破に努めしむること」

- 8) 大島良雄『プロテスタント諸教会を戦争協力に導いた諸要因』関東学院 大学文学部 人文科学研究部報第 8 号 昭和 60 年 3 月 30 日 p.47

治安維持法：1925（大正 14）年に公布、1928（昭和 3）年には普通選挙法に対処して、1941（昭和 16）年に 15 年戦争に対処して過酷になった。広く国民の思想・信仰・言論・集会・結社の自由を制限し、かつその実施方法は、特高警察によった。

宗教団体法は、挙国一致が提唱され、その時流に日本中が流される時、宗教団体法によるキリスト教諸派の合同に、直接・間接的に強制力を与えた法律である。その抜粋は 次のとおりである。

第 16 条 宗教団体又ハ教師ノ行フ宗教ノ教義ノ宣布若ハ儀式ノ執行又ハ 宗教上ノ行事ガ安寧秩序ヲ妨ゲ又ハ臣民タルノ義務ニ背クトキハ主務大臣 ハ之ヲ制限 シ若ハ禁止シ、教師ノ業務ヲ停止シ又ハ宗教団体ノ設立ノ認 可ヲ取消スコトヲ得

第 17 条 宗教団体又ハ其ノ機関ノ職ニ或ル者法令又ハ教規、宗制、教団規則、寺院規則若ハ教会規則ニ違反シ其ノ他公益ヲ害スベキ行為ヲ為シタルトキハ主務大臣ハ之ヲ取 消シ、停止シ若ハ禁止シ機関ノ職ニ在ル者ノ 解任ヲ命スルコトヲ得 教師法令ニ違反 シ其ノ他公益ヲ害スベキ行為ヲ 為シタルトキハ主務大臣ハ其ノ業務ヲ停止スルコトヲ 得

第 18 条 主務大臣ハ宗教団体ニ対シ監督上必要アル場合ニ於テハ報告ヲ徴シ又ハ実況ヲ調査スルコトヲ得

- 9) *Annual Report Along Kingdom Highways, AEHS* 1942 p.13-14
- 10) Robert G. Torbet *Venture of Faith* Judson Press 1955 p.548
- 11) 同上書
- 12) *Annual Report Along Kingdom Highways, AEHS* 1942 p.13-14
- 13) Charles W. Iglehart *A Century of Protestant Christianity in Japan* Charles E. Tuttle Company 1960 p.237
- 14) 同上書 p.246
- 15) *Annual Report Along Kingdom Highways, AEHS* 1943 p.44-46
- 16) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社 1987 年 7 月 10 日 p.357 p.360
- 17) 『第 25 回日本バプテスト教会組合總會記録』昭和 15 年 10 月 p.48-49
- 18) 日本バプテスト東部組合事務所菅谷主事宛て手紙

- 19) ロバータ・L・スティブンス『根づいた花』キリスト新聞社出版事業部 2003年3月31日 p.185-187
- 20) *Preliminary Considerations for Post War Study on Japan* 20 March 1945, n.p., War Years Collection, Japan, BIM, Archival Collections, American Baptist Historical Society, Valley Forge, PA.
- 21) Charles W. Iglehart *A Century of Protestant Christianity in Japan* Charles E. Tuttle Company 1960 p.282-283
- 22) *Annual Report Along Kingdom Highways* 1946 p.36-37
- 23) Elmer Fridell and C. H. Sears eds. *Japan Statement* 14 November 1947
War Years Collection, Japan, BIM American Baptist Historical Society, Valley Forge, PA.
- 24) *Out of the Ashes- Post War Japan-* Japan Missionary Fellowship of the ABFMS and WABFMS. P.59-60
- 25) *Annual Report Along Kingdom Highways* 1946 p.36
- 26) 海老沢有道, 大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局 p.560

AA の 12 ステップのプログラムの普遍的特質について II

—ユング心理学における内向・外向のパーソナリティ理論からの構造分析—

三 井 純 人

Universal Aspects of the AA 12 Step Program (Part II) : From the
Structural Viewpoints of Introversion and Extroversion

Sumito Mii

要 旨

昨年 2010 年度の本所報掲載の研究ノートにおいては、AA の 12 ステップのプログラム内容には新約聖書の「ローマの信徒への手紙」後半部のパウロの神学的思想が含まれていることについて論じた。さらに、今回は視点を変えて AA の成立に影響を与えた精神科医カール・グスタフ・ユングのパーソナリティ理論に基づいた内向・外向の概念から 12 ステップのプログラム構造について考察する。各ステップのプログラム内容を吟味すると、自己内省的、内向的なステップと絶対者への信頼、他者への告白という外向的なステップが規則的に配置されて進行するプログラムであることが分かる。AA における依存症回復の源泉は「自分を越えた大きな力」にあるとされるが、臨床心理の観点からその回復のプロセスについて考えると、12 ステップのリズミカルなプログラム構造に添って AA のミーティングを重ねていくにつれて、心理的さらには生理的なバランスが整い、依存症の回復につながっていくものと推察される。そして、12 ステップのプログラムが成立してまもなく、AA はラインホルド・ニーバーによる「平安の祈り」を採用する。12 ステップのプログラムの内向・外向の構造は、ニー

バーのキリスト教的現実主義、弁証法的神学にも即したものであり、キリスト教的な意味においても普遍性をもつものといえる。

キーワード

- ① AA (アルコールリクス・アノニマス)
- ② カール・グスタフ・ユング
- ③ 12 ステップのプログラム
- ④ 内向的エネルギー
- ⑤ 外向的エネルギー
- ⑥ ラインホルド・ニーバー

目 次

- I 序論
- II 12 ステップのプログラムとユングの
パーソナリティ理論
- III 12 ステップのプログラム構造
- IV 結論
- 注釈と参考文献
- 付録：AA の 12 ステップのプログラム全文

I 序論

アルコール依存症からの回復のためのセルフヘルプグループである AA (アルコールリクス・アノニマス、匿名のアルコール依存症

者たち）は、プロテスタント教会の霊性刷新運動であるオックスフォード・グループ運動の直接的な影響を受けて1935年にアメリカで成立したものである。そして、AAの創始者の一人であるビル⁽¹⁾が創作した12ステップのプログラムは新約聖書の「ローマの信徒への手紙」に見られるパウロの神学的思想を反映したものであることは、2010年度の本所報掲載の研究ノート（三井, 2011:p.103-116）において論じた。しかし、AAはやがてオックスフォード・グループ運動と袂を分かち、20世紀後半においては宗教組織ではなく依存症からの回復という目的に特化した、専門家の直接指導には依らない一種の心理療法として世界中に広まることになった。AAに始まる12ステップのセルフヘルプグループは、魂の救いというキリスト教会の本質的な目的から離れて現代社会における病理に対しての臨床的方法論として普及することになったわけである。

したがって、12ステップのプログラム内容が、新約聖書、特に「ローマの信徒への手紙」に見られるパウロの神学的立場を含んでいるというだけではその本質のすべてを明らかにしたことにはならないであろう。そのプログラムに基づいたセルフヘルプグループが、キリスト教徒であるかないかに関わらず現代人全般の依存症に対してなぜ有効に働くのかという点を臨床心理的な立場からも解き明かさなければならない。

AAの発足当初の背景を考えると、オックスフォード・グループ運動とともに見逃すことができないのは、精神科医カール・グスタフ・ユングの存在である。本稿ではユングのパーソナリティ理論を手がかりにして、依存症回復のための装置としての12ステップのプログラムの構造的特徴を明らかにする。

そしてさらに、その構造的特徴がキリスト教的な意味においても普遍的な特質といえるものであることを説明する。

Ⅱ 12ステップのプログラムとユングのパーソナリティ理論

1. AAとユング

AAの創始者の一人であるビルは、晩年AAの発展に寄与した人物としてまずユングを挙げていた。

ビルは友人のエビーからキリスト教会の霊性刷新運動であるオックスフォード・グループ運動に参加したことによってアルコール中毒⁽²⁾を克服した話を聞いたことがきっかけとなり、自らもアルコール中毒から解放されたのである。AAとユングとの関わりを明らかにするためには、その話をさらに遡り、エビーの回復に影響を与えたローランド・Hという人物について触れる必要がある。彼はアメリカのロードアイランド州の名門の出身であったが、その飲酒癖は絶望的なものであり、当時すでに名声を博していたスイスのユングのもとで一年間の治療を受けることで一時的に回復したものの、アメリカに帰国するとまたその悪癖が戻ってしまった。ローランドは再度ユングの治療を受けようとしたが、ユングは彼の申し出を断り、あなたの問題の解決の道は「霊的な覚醒」にしかないと告げ、なんらかの宗教的、霊的な体験をもつことで時には回復もありえることをローランドに伝えたのである（Alcoholics Anonymous, 1984 : p.381-383）。

当時、アルコール依存症は医学的に全く手の施しようのないものであった。分析心理学と呼ばれる新たな臨床心理の分野を開拓しつつあったユングにしても、彼の治療対象は主に精神分裂病（現在の統合失調症）、あるいは神経症であり、依存症に対しては根治に至るような治療を施すことはできなかった。アルコール依存症からの回復の可能性があるとするれば、それは人知を超えた「霊的な覚醒」によるものだとしてユングはローランドに言うしかなかったのである。

そして、ローランドはアメリカに帰国後

オックスフォード・グループ運動の中でアルコール依存症から根本的に解放され、エビールのペンキ塗りの仕事を手伝いつつ彼にその体験を伝えたわけである。

ビルは晩年、チューリッヒのユングに対して謝礼と賞賛の手紙を書く。AAはユングの診察室から始まったとビルは考えていたのである。その手紙に対するユングの返信は、神の力がローランドを回復させたという内容で、「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ、私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」という詩篇の42篇1節の言葉で締めくくられていた。ビルはその返信に大変喜び、ユングに対して再度手紙を書くが、それに対するユングからの返信はなく、二ヶ月後にユングの死が報じられることになる(Alcoholics Anonymous, 1984 : p.381-383)。

詩編を引用したユングの返信内容からは彼のキリスト教的な思想背景が分かるが、ユングの興味はキリスト教の枠内だけに留まるものではなかった。ユングは世界中のさまざまな神話・伝説の内容の共通性から、フロイトの提唱した個人的無意識の領域だけではなく、人の心のさらなる根底には個人のみならず古今東西の宗教や文化の枠をも超えた集合的無意識という広大な心的フィールドが潜在していると仮定した。そして、釈迦や老子などの東洋思想、さらに晩年は人格の個性化のプロセスを暗示したものとして錬金術の研究に没頭することになる(ユング, 1973 : p.3-33)。

ユングは1875年スイスのツルガウ州ケスヴィルで改革派教会の牧師の子として生まれた。父親のみならず、父方の伯父2人が牧師、そして、母方にも6人もの牧師がいた。聖職者の家系に育ったことは、キリスト教との結びつきを決定的なものにした反面、学生期に入ってから、生きた神体験ではなく神学を拠り所とした父親の信仰観と当時のプロテスタント教会のあり方に深い懐疑を抱くことにもつながっていく(ヤッフエ, 1974 : p.130-168)。

また、母方の遺伝的な素因が関与していた

と考えられるが、ユングは幼少期から自己の内面に分裂を感じ、「第二の人格」というものを意識し、幻視をしばしば経験することになる。現実と空想の狭間の中で彼の自己統合の闘いは晩年まで続くことになり、そのような心理的背景も彼が伝統的なキリスト教会の枠内での信仰をもつことを困難にさせていたようである(ヤッフエ, 1973 : p.17-129)。

ユングがローランドに言った「霊的な覚醒」とは、伝統的なキリスト教会の教えの範囲には収まらない概念であり、12ステップのプログラムの中の「自分を越えた大きな力(ハイヤーパワー)」或いは「自分が理解した神」というものに関わるものと考えられる。

もっとも、12ステップのプログラムは、ビルがインスピレーションを受けて短時間のうちに一気に書き上げたものであり(AA日本出版局, 2005 : p.246)、その中にユング思想の直接的な影響をはっきりと見出すことはできない。また、AAとユングとの現実的な関わりは、大よそのところ先に述べたとおりで、ユングがローランドの治療に携わったことと、晩年のユングとビルのわずかな期間の文通だけであり、両者の思想的つながりをAAの文献に基づいてそれ以上に詳細に説明することはできないのである。しかし一方、ユング関連の文献からは、直接AAについての言及は見い出せないものの、依存症について独自の考察をなした箇所があり、それはユングの思想の大きな特徴の一つである「内向型」・「外向型」によるパーソナリティ理論に基づくものである。そして、そのパーソナリティ理論を手がかりにして12ステップのプログラムを吟味すると、そのユニークな構造の本質が見えてくる。そのことを以下に順次説明していく。

2. ユングの心理学的類型論における外向型と内向型

人間の性格や体質を複数のタイプに分類した類型(タイプ)論は、古今東西いろいろな

ものがあるが、ユングがまず心理的根本態度の方向性に基づいて提唱した「外向型」と「内向型」という分類（懸田，1974：p.79-84）は一般によく知られているものである。対人関係において「外向型」の人は、相手の言動に興味を示し、あけっぴろげで人づきあいがよいタイプである。一方、「内向型」は、自分の殻に閉じこもってなかなか本心を見せない人のことである。もっとも、人間のパーソナリティはそれほど簡単に判別できるものではない。表面的には外向的に見える人であっても、個人的に深く付き合っていると以外にも内向的な部分が見えてきたり、逆に、普段は内向的でおとなしい人が、ある状況の中で驚くほどの行動力を示したりするといったことは現実的に経験することである。

ユングは、そのようなパーソナリティの複雑さを、無意識というものを想定し、意識と無意識は補完的、補償的にはたらくものであり、意識レベルでの分類は必ずしもそのまま無意識レベルに当てはまず、むしろ、両者は逆行的な傾向があるものととらえるのである。そして、過度に外向的な人間は、かえって主体的意識が薄れ、相手と同化してしまうことになり、主体の本来の欲求は無意識下に抑圧され内向し、原始的、小児的、利己的な性格を帯びる傾向があるとユングは分析する。本来社交的な「外向型」の人が思わず対人関係で失礼な態度や言葉をとってしまうというのは、無意識的に過度に抑圧された欲求が意識活動に反動的に入り込んだ結果であるとユングは考えるのである（懸田，1974：p.118-124）。意識レベルで外向的に心的エネルギーがはたらく人の場合、その傾向性があまりに極端なものになるとその分無意識レベルでは内向性も強まるというわけであり、その結果生じるのが、抑圧という内向的な心理メカニズムなのである。社会的、文化的見地からすれば個人的な願望を抑圧することはときには必要ではあるだろうが、これが過度になると「神経症や、アルコール、モルヒネ、

コカインなど、麻酔剤濫用の原因になりやすい」（懸田，1974：p.121）とユングは指摘する。

アルコールや薬物といった現在も依存症問題の中心となっている依存対象に関わるユングの分析は、「外向型」の方にこそむしろ依存症の病理が起きやすいことを示したものであり、複雑な人間関係を伴う現代の物質文明の歪みと依存症の関係を端的に説明したものとして現在でも評価できるものである。

また、ユングは当時貶められる傾向にあった「内向型」の性格については擁護的であるものの、やはり内向的思考が度を越すと外的な現実との分裂が生じ、「内的消耗ないしは頭脳の疲労の増大、つまり精神衰弱症の性格を備えた神経症」（懸田，1974：p.121）に至ると考えている。ユングは「内向型」と依存症の関係については特に明記していないが、近年、依存症の概念は、かなり幅広いものになりつつあり（三井・安田，2009：p.23）、その中で例えば「引きこもり」の病理は元々対人関係が不得意な人に起きやすいものであり、「内向型」の依存症の一形態という見方ができるだろう。「外向型」にしても「内向型」にしても、その傾向性が極端なものになると、依存症につながるものと考えることができるわけである。

もっとも、ユングの「外向型」「内向型」といった心的傾向による分類は、先に述べたとおりそれほど確定的なものではない。表層の意識だけではなく認識不可能の領域である無意識レベルのことまで考えると、健康な一個人の心の中では、外向的エネルギーと内向的エネルギーが複雑に絡み合い、その時その時の外的状況の影響を受けながらも、ある一定の範囲内で均衡を保ちつつ流動していると考えられる。

ところが、そのいずれかのエネルギーが極端に強まり、もう一方のエネルギーを圧迫してしまうと精神的な流動のバランスが崩れ、対人関係に不協和音をきたし、アルコールなどの特定の依存対象物への固着を引き起こす

ことになると考えられる。

そして、12 ステップのプログラムは人間の心の中の外向的エネルギーと内向的エネルギーの崩れたバランスを再び回復させる作用をもつものとしてとらえることができるのである。以下に外向的エネルギーと内向的エネルギーという心的方向性の視点から 12 ステップのプログラムのステップ 1 から 12 までの各内容を読み解いていきたい。

Ⅲ 12 ステップのプログラム構造

1. プログラムの導入部としてのステップ 1, 2 —外向的方向性を含んだ内向的傾向—

ステップ 1 私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。

ステップ 2 自分を越えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。

自らのアルコール依存症の回復のために AA のミーティングに参加することになった人は、まず 12 ステップの導入部であるステップ 1、そして次にはステップ 2 に取り組むことになる。過度の外向的エネルギーが要求される資本主義社会の中で疲弊した心を内省しつつ、同じ依存問題をもった人々とともに「自分を越えた大きな力」という対象を意識して、回復の作業を始めることになるのである。

ステップ 1 のフレーズは、自分の意思では飲酒欲求をセルフコントロールすることができず、どうすることもできなくなった現実を認めるところから回復の第一歩が始まることを教えている。自らの内面を見つめ、自分がアルコール依存症であることを率直に認めることがまず必要なのである。アルコール依存の病理とそれに伴って生じてしまった自他への言動の過ちを内省しつつ自らの社会生活の限界を認めるわけだから、基本的には内向的

なエネルギーが働くステップであることは間違いない。

しかしながら、AA が発足した 20 世紀初頭のアメリカにおいて、人前でアルコール依存症であることをあばかれることは、社会的な自殺を意味することであった（斎藤、1998：p.46）。資本主義社会のパワーゲームの中での人間関係においては自らの弱点を他人に握られるようなことはあってはならなかったのである。AA のミーティングでは、匿名性、守秘義務を原則としつつも、本来ならば隠しておきたい自らの弱さを認め、それを他のメンバーに告白するのである。そこには、このミーティングの中で本来の自己を取り戻そうという決心に基づいた外向的なエネルギーも少なからずはたらくわけである。

そして、続くステップ 2 では、まず「自分を越えた大きな力」という言葉がでてくる。その概念の中には、キリスト教の神ということだけには限定されないその人にとっての信仰の対象、或いは科学的思考の枠ではとらえきれない自然界の不思議な力というようなものも含まれる。それがどのようなものであれ自分の外側に何らかの超越的な存在のはたらきを意識し、それが「私たちを健康な心に戻してくれる」と期待することは、外向的なエネルギーのはたらきであると考えることができる。

しかし、それに続く「と信じるようになった。」という語尾のフレーズは、ステップ 2 がステップ 1 の内省をさらに深める作業であることを示している。自らの無力さを自覚し、アルコール依存からの回復のためには今まで信じることはできなかった「自分を越えた大きな力」を信じ、それに頼ることがどうしても必要であることを認める気持ちになったというわけである。やはりステップ 1 と同様に文章全体としては自らの内側を見つめる内向的なエネルギーの方が強くはたらくステップであると考えられる。

ステップ 1, 2 では、まず「外向型」主導

の物質文明社会から離れて、利害の絡んだ対人関係や金銭などの物質的なものに向いていた外向的なエネルギーを、自らの内面に振り向け、その弱さと病理を認める作業を始めるのである。但し、それは単なる個人的な内省ではなく、ミーティングにおける他のメンバーに対する告白と「自分を越えた大きな力」への信仰という外向的な方向性も含んだものである。

2. ステップ3から10 ―交互に繰り返される外向と内向のステップ―

ステップ3 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。

ステップ4 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行ない、それを表に作った。

ステップ5 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。

ステップ6 こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。

ステップ7 私たちの短所を取り除いて下さいと、謙虚に神に求めた。

ステップ8 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。

ステップ9 その人たちやほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。

ステップ10 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。

ステップ3から10までは、自らの心の整理（棚卸し）を行い、アルコール依存に起因する間違った生活習慣や対人関係を修正していくプロセスである。それらは、ステップ1, 2が導入部であり序論であるならば、いわば12ステップの本論に当たる部分であり、以

下に見るとおり、外向のステップと内向のステップが交互に連なって進行していく仕組みを持つものである。

まずステップ3には「自分なりに理解した神」というフレーズが出てくる。ステップ2では「自分を越えた大きな力」という曖昧で漠然とした表現であったが、その力の出所の本体をより明確に対象化したものが「自分なりに理解した神」ということになるだろう。その神が自分を良き方向へと導き、配慮してくれると信じ、その神に自らの「意志と生き方」を委ねる決心をするわけである。神という存在に向き合い、その神に自らの人生を明け渡す決心を示すということで外向的なエネルギーが強く要求されることになる。

そして、ステップ4では、自分自身の棚卸しをすることになる。棚卸しというのは、商業用語であり、営業を休んで在庫の種類、数量、品質を査定することであるが、このステップは心の棚卸し作業ということで、自らの心の倉庫に貯まっている幼少期からのさまざまな体験を想起し言語化し、さらにそこから導き出される自らの長所や短所も書き出してリストにする作業なのである。自らの内側に見たくない心の傷（トラウマ）や性格上の問題があっても、「恐れず、徹底して」棚卸しをし、自らの成育歴、人生の歩みを客観的に評価するわけであり、ひたすら内向的な方向にエネルギーを集中させるステップである。

ステップ5は、ステップ4の棚卸し作業の結果明白になった過ちの本質を認め、「神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、」告白することになる。対象化した自分自身を含めて、外部に存在する三者に対して自らの過ちの本質について認めるという外向的な作業である。日々の心の葛藤を一時的にせよ解消してくれるアルコールという薬物が一つの偶像になり、飲酒願望に自らの人生が支配されてしまっているということはアルコール依存症者に共通する過ちの本質であるといつてよい。一人ひとりがその本質を認め、

ミーティングの中で自らの言葉でそれを「ありのままに」表現し、自己開示をするわけであり、外向的なエネルギーが要求されるステップなのである。

ステップ6では、ステップ5で語られた「自分の過ちの本質」から派生する「性格上の欠点の全部」を神に取り除いてもらう準備をすることになる。アルコールが神に代わって偶像になってしまったという「自分の過ちの本質」に気が付いたとしても多くのアルコール依存症の場合、その偶像の支配力は心の深いところまで染み込んでしまっており、簡単に抜き取ることはできない。アルコールを手放したいという気持ちとともに手放したくないという葛藤が心の深層にあるものである。そして、その葛藤からさまざまな性格上の欠点が顕在化してしまうわけである。ステップ6での「神に取り除いてもらう準備」とは、神の力を求める前に、まず自らの内側の葛藤、呪縛に気がつき、その呪縛によって作られた性格上の欠点を自分の力では克服できないことをはっきり自覚し認める内向的作業なのである。

ステップ7はステップ6の内省に基づいて明らかにされた自らの欠点・短所を取り除いてもらえるように神に求めることになる。ビルが作った原案では、「ひざまずいて」という言葉が挿入されていた（AA日本出版局、2005：p.254）ことから分かるように自らの上位にある神という存在をはっきりと認めて、自らの欠点を取り除いてくれるように神に対して「謙虚に」求める外向のプロセスである。

そして、ステップ8、9は、他人に対する謝罪のステップである。まず、ステップ8では、自らの人生を振り返り、過去において傷つけてしまった人々のリストを作る自己内省の作業を行うことになる。依存症者は幼少期に養育者からの承認の欲求が満たされなかったために、人格に歪みが生じ、大人になってからも対人関係がうまくいかず、結果として

依存行為に走るものと考えられている（三井・安田、2009：p.22）。つまり、依存症は根本的には人間関係の病気ということができる。したがって、依存症者は身近な家族・親族との間でさらには友人・知人との関係でもさまざまなトラブルを引き起こすものである。ステップ8において過去の人間関係での過ちを思い起こし、相手への謝罪の気持ちを意識することは、ステップ6での「性格上の欠点」をさらに内省し具体的に自覚することである。

そして、ステップ9ではそのリストに基づき、一人ひとりの相手に対して現実的な謝罪の行動を起こすステップであり、強い外向のエネルギーが要求される。精神科医の斎藤学は、12ステップを基にして日本人のための10ステップのプログラムを作成しているが、その中では先に述べたステップ7の自己変革のための神への懇願及びステップ8、9に当たる対人関係での実践行為が削られてしまっている（斎藤、1998：p.278-279）。欧米人に比べて内向的傾向が強いと考えられる日本人のメンタリティに配慮したプログラムであると考えられるが、元来のAAの12ステップにおけるステップ9の謝罪の実践のためには、対人関係におけるキリスト教的倫理観に基づいた外向的エネルギーの後押しが必要なのである。

以上のとおり、ステップ4の棚卸し作業から始まる自己変革の作業は、ステップ9まででひとまず区切りがつくわけであるが、さらにステップ10では棚卸し作業を繰り返す必要があることを教えている。12ステップのミーティングに参加し、自らの内なる思いを表現し整理し、また他者の告白を傾聴する中で、自分の今まで気が付かなかった長所や短所を見つけたり、長い間忘れていた人物についての記憶が悔恨の念とともによみがえってきたりするものである。さまざまな人々で新たな自己認識に関わる気づきが生まれるわけである。そして、その気づきの結果、

一度なした棚卸しの内容に修正すべきもの、付加すべきものがあることが分かったら「直ちにそれを認め」、より正しいセルフイメージの構築のために自己内省の作業をさらに深めていくのである。

3. 新たな使命に目覚めるステップ11,12 —内向的な方向性を含んだ外向的傾向—

ステップ11 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。

ステップ12 これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコールに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

ステップ1, 2は外向的な方向性を含んだ内向的傾向という趣旨であったが、ステップ3から10を経て行き着くステップ11, 12はその逆で内向的な方向性を含みつつも全体としては外向的傾向をもつものである。

ステップ11には、「祈り」と「黙想」という言葉が出てくる。「黙想」はプロテスタント教会では馴染みが薄いものの、カトリック教会では盛んに行われているものである。「黙想」は広い意味においては「祈り」の中に含まれるという見方もでき、両者は明確に分けることのできないものと考えられるが、便宜上区別するとすれば、「祈り」とは、神に対する語りかけという外向的な方向性をもつ心的行為であるのに対して、「黙想」は「祈り」による神への語りかけの後の「神の言葉を聴く沈黙の行為」（加藤、2007：p.69）という内向的な心のあり方なのである。

或いはまた「黙想」の中に自然や宇宙との一体感、主体と客体との融合を目指す東洋的な瞑想をも含めてとらえることも可能ではある。しかしながら、ステップ11の「黙想」

という言葉に続く「自分なりに理解した神との意識的な触れ合い」といった表現は、主体としての自分自身の立場から客体として対象となる神と間には一定の距離感を保った意識的な関わりが必要であることを教えている。そして、その後に続く「神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。」という表現にも外向的で主体性の強い西洋人の感覚が反映しているように感じられる。

先に述べたとおりユングは東洋思想に強く興味を示していたが、西洋人が内向的傾向をもつ東洋思想をそのまま受け入れることには否定的であった。東洋の瞑想によって達成される「サマーディ（三昧）の完成、恍惚の状態、或いは宇宙の意識」は、無意識が意識を飲み込んだ状態であると考え、外向的で自我の強い西洋人はむしろ無意識と積極的に対決することをユングは主張する（林、1991：p.66,67）。内向的要素を含みつつやはり外向的エネルギーを重視するステップ11の表現内容は、そのようなユングの思想に即したものと考えられる。

昨年度の研究ノートでは、最終のステップ12を「ローマの信徒への手紙」15章23, 24節に記載されたローマさらにはイスパニア伝道へのパウロの切望に対応する箇所として説明した（三井、2011：p.113,114）。最終章であるステップ12は、これまでのステップによって「霊的に目覚め」、他のアルコールにも彼らにとっての「福音」、即ち、アルコール依存症からの回復をもたらしてくれる12ステップのプログラムを同様な問題を抱えている他者に伝えていこうという外向的な趣旨が大きなポイントなのである。

同時にステップ12は、人のことばかりではなく自分自身についての点検が常に必要であることを教えている。依存症は一生続く病とされている。治ったかに見えていてもちょっとしたきっかけで悪習慣がよみがえることがある。自らの内省を続けつつ「自分を超えた大きな力」「自分なりに理解した神」

からの助けに基づく 12 ステップの原理原則によって日々のさまざまな生活上の問題を積極的に解決していこうということなのである。

4. 12 ステップのプログラムの内向・外向の構造

これまで見てきたステップ 1 から 12 までのプログラム構造をまとめると以下のようになる。

- | | | |
|---------|--------------------------|--------------|
| ステップ 1 | 自分の無力さの自覚と告白 | |
| | | 内向・外向 |
| ステップ 2 | 自分を越えた大きな力による癒しへの信頼 | |
| | | 内向・外向 |
| ステップ 3 | 人生を自分なりに理解した神に委ねる決心 | |
| | | 外向 |
| ステップ 4 | 内的な棚卸作業 | |
| | | 内向 |
| ステップ 5 | 神、自分、人に対する自分の誤ちの本質の認識と告白 | |
| | | 外向 |
| ステップ 6 | 性格上の欠点の除去を神に委ねる準備 | |
| | | 内向 |
| ステップ 7 | 短所の除去についての神への懇願 | |
| | | 外向 |
| ステップ 8 | 他者への謝罪の準備 | |
| | | 内向 |
| ステップ 9 | 他者への謝罪の実行 | |
| | | 外向 |
| ステップ 10 | さらなる棚卸し作業 | |
| | | 内向 |
| ステップ 11 | 祈りと黙想による神の力の希求 | |
| | | 内向・外向 |
| ステップ 12 | 福音伝道と生活改善の努力 | |
| | | 内向・外向 |

ステップ 1, 2 は外向を含みつつも内向重視である。過度に外側の物質世界の価値観に染まり、心理的な過呼吸状態になってしまった自己を休息させ、回復のためには神の助けが必要であることに気がつくところから 12

ステップのミーティングが始まるのである。

ステップ 3 から 10 までは、外向的な内容と内向的な内容が交互に連なって進行していくジグザグの構造になっている。奇数番のステップは、神に対する祈り、人への告白、謝罪といった自分以外の他者への働きかけが中心になっており、偶数番のステップは、内省、棚卸しといった自らの心を見つめる内的作業に重きが置かれている。吐く息と吸う息という規則な連続運動の中で私たちの肉体の機能が保たれるように、このプロセスはアルコール依存の病理によってバランスを崩してしまった精神活動の本来のリズムを回復させ、安定させるはたらきをしているものと考えられる。

そして、終盤のステップ 11, 12 は内向を含みつつも全体としては自らの内的な体験を日々の生活の中で応用し、他の人にも分かち合っていこうという外向的な内容で終わる。

しかしながら、12 ステップのミーティングはここで終わるわけではない。ステップ 12 まで終了すると再びステップ 1 に戻り、ミーティングを何度も繰り返すことにより霊的な意味での呼吸をさらに深めていくのである。12 ステップのプログラムは、ユングのいう「霊的な覚醒」を呼び起こす装置としての構造をもつと考えられるわけである。

現代において心の問題は、先に述べたような幼少期からの生育環境といった発達心理学的な立場とともに脳内の生理学的な立場からも研究（三井・安田，2009：p.66,67）がなされており、ドーパミンやアドレナリンといった脳内物質の過剰分泌が依存症に関係することが明らかになりつつある。人間の心と体は密接な関わりがあるものである。リズムカルに規則的な配置がなされた 12 ステップのプログラムによるミーティングに連続的に参加することで心の整理がついてくると、人間が生命体として本来的にもっているホメオスタシス（恒常性の維持機能）が賦活し、脳の過剰興奮が沈静化して依存症の回復につながるも

のと推測される。もっとも、脳の研究は始まったばかりであり、「霊的な覚醒」という宗教的な概念と現象としての脳内の生理的な変化の関係についてはさらなる科学的な解明が待たれるところである。

IV 結論

12ステップのプログラムはビルによって1938年の暮れに作成されたものであるが、その数年後にビルはニューヨークの新聞の切り抜きから以下のような祈りの言葉を知ることになる。

「神様、私たちにお与え下さい。

自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを、

変えられるものは変えていく勇気を、
そして二つのものを見分ける賢さを」

ビルはこの「平安（セレニティ）の祈り」の短いフレーズにAAの精神が詰め込まれていることに驚く。そして、この祈りは、カードにされて発送する郵便物すべてに同封されることによって驚くべき速さでAA全体に広まることになるのである（AA日本出版局、2005：p.296,297）。

「平安の祈り」は、ラインホルド・ニーバーが1943年にマサチューセッツ州ヒースの会衆派教会で捧げたものであり（ブラウン、2002：p.501）、12ステップのプログラム内容に深くかかわるものなのである。

「神様、私たちにお与え下さい」という言葉の後には「自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを」という表現が続く。それは、自らの限界を知り、無理に頑張ろうとはせずに変えられないこと、できないことはそのまま平静な気持ちで受け入れられるようにという祈りである。それは、人間の限界と罪深さを認識する12ステップのプログラムの内向にかかわるステップ内容に通じる謙虚な

姿勢である。

しかしながら、その後には逆に「変えられるものは変えていく勇気を」という力強い言葉が続く。ニーバーはキリスト教現実主義の立場から社会変革を唱えた学者であり、「変えられるものは変えていく勇気を」というのは、個人的な変革に留まらず、世の中全体を改革していこうという意味合いにも解釈できるものである。つまり、その言葉は、神の無限の力が自らを変革してくれることを信じ、人間関係の修復を積極的になし、さらには同じ問題を抱えた人々にも回復のメッセージを伝えていこうとする12ステップのプログラムの外向にかかわるステップの趣旨に通じるものなのである。

ニーバーの神学は、弁証法的神学とも呼ばれ、有限と無限の総合としての人間存在を前提とする。「ニーバーの人間論の特徴は、この一見矛盾する二つの要素（有限と無限、罪と義）が、人間においては相互に貢献し合い緊張関係に置かれているとするところにある。」（鈴木、1982：p.43）とされる。そのようなニーバー思想の特徴を考えると、末尾の「二つのものを見分ける賢さを」というのは、人間の中の限界と可能性という相反する二つの要素を見分け認識することで、その二つが止揚されてさらに人間は成長できることを示唆している箇所であるといえる。

12ステップのプログラムは、自らの限界を認める内向的方向性と、無限の神の力にかかわる外向的方向性との連鎖の中で本来の人間性を回復させていくプロセスワークである。ユングの臨床心理の影響を見出すことのできるその構造は、「平安の祈り」の中に表現されたニーバーの現実主義的、弁証法的神学にも即したものと見える⁽³⁾。

【注釈と参考文献】

- (1) AA の創始者はウィリアム・ウィルソンとロバート・スミスであるが、匿名性を重視する AA のテキストではそれぞれをビルとボブというようにファーストネームの略称で表記している。
- (2) AA の創設当時は社会的烙印の言葉として「アルコール中毒」という言葉が用いられたが、現在、アルコール中毒はアルコールの過剰摂取による不快な身体反応を指し、反復する飲酒行為を指すアルコール依存症とは区別される。
- (3) ニーバー神学の全体像及び「平安の祈り」のより詳細な関係については参考文献（田代、2008）を参照されたい。

- ・三井純人（2011）『AA の 12 ステップのプログラムの普遍的特質について—「ローマの信徒への手紙」後半部のパウロの言葉との比較研究—』関東学院大学キリスト教と文化研究所『キリスト教と文化』第 9 号 p.103-116
- ・Alcoholics Anonymous（1984）『‘PASS IT ON’ The story of Bill Wilson and the A.A.message』Alcoholics Anonymous World Service
- ・MEMORIES, DREAMS, REFLECTION by C.G.Yung（1963）ヤッフエ編河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳（1972）『ユング自伝Ⅰ—思い出・夢・思想—』みすず書房
- ・MEMORIES, DREAMS, REFLECTION by C.G.Yung（1963）ヤッフエ編河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳（1973）『ユング自伝Ⅱ—思い出・夢・思想—』みすず書房
- ・Alcoholic Anonymous Comes Age（1990）AA 日本出版局訳編（2005）『アルコールリクス青年に達する—AA 小史—』AAゼネラルサービス・オフィス
- ・Psychologische Typen（1921）C.G.ユング 懸田克躬訳（1974）『世界の名著続 14 ユング フロム』中央公論社
- ・斎藤学（1998）『魂の家族を求めて』小学館文庫
- ・三井純人・安田八十五（2011）『日本における依存症問題の出発と到達点—斎藤学「精神科医から見た依存症の本質と対策」講演記録の概要—』関東学院大学キリスト教と文化研究所『キリスト教と文化』第 7 号 p.21-27
- ・加藤常昭（2007）『黙想と祈りの手引き』キリスト新聞社
- ・Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete X I – 5（1939）C.G.ユング 林道義訳（1991）『個性化とマンダラ』みすず書房
- ・Niebuhr and His Age : Reinhold Niebuhr's Prophetic Role and Legacy（2002）チャールズ・ブラウン 高橋義文訳（2004）『ニーバーとその時

代—ラインホルド・ニーバーの預言者的役割とその遺産—』聖学院大学出版会

- ・鈴木有郷（1982）『ラインホルド・ニーバーの人間観』教文館
- ・田代泰成（2008）『ラインホルト・ニーバーの信仰と「成長の 12 ステップ・プログラム」』関東学院大学キリスト教と文化研究所『キリスト教と文化』第 6 号 p.25-48

【付録】AA の 12 ステップのプログラム全文

- ステップ 1 私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。
- ステップ 2 自分を越えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。
- ステップ 3 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。
- ステップ 4 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行い、それを表に作った。
- ステップ 5 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
- ステップ 6 こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。
- ステップ 7 私たちの短所を取り除いて下さいと、謙虚に神に求めた。
- ステップ 8 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たちが全員に進んで埋め合せをしようとする気持ちになった。
- ステップ 9 その人たちがやほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合せをした。
- ステップ 10 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。
- ステップ 11 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実行する力だけを求めた。
- ステップ 12 これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコールに伝え、そして私たちすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

「坂田祐日記」解説（1934年1月～1935年12月）

坂 田 創

The Diary of Dr. Tasuku Sakata (1934 - 1935)

Hajime Sakata

1934年（昭和9年）

【解説】

1. 内外の情勢

満州国は皇帝溥儀の即位により帝政が実施された（3/1）。治安維持法改正案が国会で可決され（3/16）取り締まりが一段と進む，文部省に思想局も設置された（6/1）。斎藤実内閣は帝人疑獄事件により総辞職し（7/3），岡田啓介内閣が発足した。

住友をはじめ大財閥の満州国進出が開始された。国内では東北の冷害，西日本の旱魃，関西の風水害のため大凶作が起こり飢饉，自殺，身売り等の社会問題が起こった。一方軍需工場は拡張されて行った。ドイツではヒトラーが総統になりファシズムが台頭した。

2. 関東学院

学院の SCM 運動は1932年末に終息したが，社会事業部は，学生募集を行わず廃部の方向に進み（1935年廃部），神学部は青山学院に於いて合併授業を行っていた。（1937年青山学院と合併廃部）。中学部と高等商業部は順調に運営されていた。

3. 捜真女学校

坂田祐は1932年12月に校長に就任して2年目を迎えた。学校の運営は軌道に乗り順調に進んでいた。創立50周年（1937年）までに経済的に独立する目標に向かって基本金を作るために努力していた。後援会「真窓会」が発足した（1/20）。

坂田祐日記（1934年1月～12月）

主要事項1934年（昭和9年）＊解説文あり

月	日	曜日	主要事項
1	1	月	新年奉賀式（中学部，捜真）
	8	月	始業式（中学部，捜真），中学部教員会議，捜真同窓会委員会
	9	火	中学部教員会議（図書館の件）一定例以下略
	10	水	中学部同窓会橄欖会役員会（購買部の件）
	12	金	高等部教授会一定例以下略

	15	月	剣道寒稽古視察，中学部教職員祈祷会一定例以下略，英語科教員会議
	18	木	捜真歯科検診視察，捜真祈祷会・教員会議一定例以下略
	19	金	関東学院経理（経営）委員会，青年訓練所講義一定例以下略
	20	土	中学部第一次入学査定会議
	22	月	京浜教役者会（日本精神と教会），捜真理事会（基本金の件）
	23	火	県教育会常務理事会
	25	木	中学部教練査閲
	26	金	市内中等学校長会（本牧中），工業懇話会（講演：人と文学）
	* 27	土	関東学院創立記念式，捜真第一次入学考査，橄欖会臨時総会（購買部設置の件），高等部音楽会（中学部，捜真参加）
	28	日	市会議員選挙投票，県下中等学校武道大会視察（鎌倉師範）
	29	月	捜真第一次入学査定会議
	30	火	高等部授業最終回（国民道徳），捜真入学査定結果通知
	31	水	高等部宗教委員会
2	2	金	澤野良一を英語学校副校長に決定
	3	土	私立中等学校聯合会委員会（如水会館）購買部実行委員会
	* 4	日	私立中等学校聯合会総会，内村鑑三全集編集者感謝会
	* 9	金	学校教練研究会（湘南中）
	10	土	橄欖会購買部設置，西村茂を橄欖会主事に任命
	11	日	紀元節奉賀式（関東，捜真）
	* 12	月	坂田誕生日祝い（捜真）
	16	金	関東学院幹部会（青山学院の申出で検討）
	17	土	家事科指導研究会（県立高女）捜真第2次入学考査，中学部卒業査定
	19	月	捜真基本金募集趣意書を作成，捜真入学査定20名許可
	20	火	市内中等学校長会（女子師範）
	* 24	土	尚綱女学校危機に瀕すの報，関東学院常務理事会，教授会（神学生卒業の件）
	25	日	中学部卒業礼拝，聖書科教員会議
	26	月	中学部学友会送別会
	27	火	Converse 名誉校長訪問諸報告
	28	水	関東学院経理委員会
3	* 3	土	中学部卒業式，橄欖会新入会員歓迎会，卒業晩餐会
	4	日	県立一中卒業式，宮田生セツルメント奉仕を報告
	5	月	捜真専門科家政科生徒募集広告作成，八木一男氏来訪和解
	6	火	捜真地久節奉賀式，文芸会
	10	土	英語学校教員会議
	13	火	建武中興600年記念講座（捜真），建武中興600年記念祭（横浜公園）
	14	水	関東学院経理委員会
	15	木	横浜高等工業学校卒業式，荒木大將歓迎晩餐会
	16	金	捜真理事会，青年訓練所終了式挨拶

	17	土	関東学院理事会，英語学校卒業式
	18	日	捜真卒業礼拝（澤野良一教授説教）
	*19	月	捜真卒業式
	20	火	捜真謝恩会，英語学校丘友会晩餐会，総会
	21	水	中学部廊下屋根破損（大暴風雨のため）
	26	月	中学部終業式
	27	火	中学部第 2 次入学考查，同査定会議
	28	水	県教育会理事会，内村先生 4 周年記念日先生を追憶
	29	木	中学部教職員交誼会旅行（伊香保）
	31	土	捜真第 3 次入学考查査定会議
4	1	日	教会礼拝にて信仰告白（6 名）
	5	木	中学部始業式
	6	金	中学部理科教室改装発注，生徒保護会常務理事会（県庁）
	9	月	捜真始業式，教育会常務理事会（県庁），中学部教員会議
	11	水	高等部入学試験，英語学校始業式
	12	木	高等部入学査定会，中学部 YMCA 歓迎会・映画会
	14	土	県体育聯盟常務理事会
	15	日	捜真女学校同窓会東京支部（白木屋）
	17	火	高等部学生会館開館式，高等部講義開始（国民道徳）
	18	水	生徒保護会理事会（県庁）
	19	木	捜真専門科授業開始（聖書）
	21	土	体育聯盟理事会（県庁）
	22	日	教友浅見審三宅訪問（鶴沼）
	23	月	横浜復興記念日につき休校
	24	火	教育会常務理事会（県庁）
	25	水	市内中等学校長会で小田原高女視察，箱根行楽
	27	金	靖国神社臨時大祭につき休校，対県立工業学校野球試合
	28	土	門衛住宅完成
	29	日	天長節奉賀式
	*30	月	ミッションスクール校長教頭会（英和女学校）八木一男氏来訪 和解
5	2	水	関東学院経理委員会
	4	金	高等部教授会一定例以下略，教授歓送迎会
	5	土	中学部交誼会歓迎会，岡崎順牧師帰米送別晩餐会
	9	水	関東学院経理委員会
	*11	金	宮城前天皇御親閲生徒 150 名参列，80 校参加
	16	水	中学部 5 年，4 年修学旅行出発，5 年関西旅行に同行
	*17	木	橄欖会関西支部発会式
	18	金	全国中学校長協会総会（府立一中）～21 日，中学校長懇親会
	*19	土	同上新宿御苑，上野美術館見学
	20	日	同上中学部校舎土台建設視察
	21	月	同上日露戦争 30 年記念展見学
	22	火	捜真工事完成状況視察

	23	水	東部バプテスト総会年会（四谷教会）～25日
	24	木	同上社会事業の夕べ（三崎会館）
	25	金	同上学校部研究委員会
	27	日	三崎寄宿舍（生徒受け入れ準備）
	30	水	捜真CST集会
6	2	土	理科指導会（一中），開港記念祝賀会（記念会館），捜真理事会
	5	火	東郷元帥国葬儀
	6	水	関東学院経理委員会
	10	日	全国高等女学校協会総会（府立第一高女）700名～14日
	11	月	同上（東京帝大），南原繁訪問
	13	水	同上東大校内散策
	14	木	同上横須賀海軍見学
	17	日	四谷バプテスト教会第43回創立記念礼拝で説教
	21	木	捜真教室で生徒と懇談，教育会常務理事会，生徒保護会常務理事会
	22	金	三崎寄宿舍受入れ準備，市内中等学校長会（二中）
	23	土	捜真家政科生徒三崎寄宿舍用布団製作慰労会
	24	日	三崎寄宿舍
	25	月	中学部4年生82名三崎寄宿舍到着（野外教練実施）
	29	金	三崎野外教練終了，生徒帰校
7	* 2	月	三崎野外教練（中学部4年）～6日
	3	火	斉藤内閣総辞職
	8	土	県下中等教員学会（厚木）
	9	月	三崎野外教練（中学部5年）～13日
	* 15	日	三崎に於いてバプテスマ式実施の件，憲兵隊に関する件
	* 16	月	三崎野外教練（中学部5年）～20日，憲兵隊と談合
	* 19	木	横須賀要塞司令部訪問，横浜憲兵隊訪問
	20	金	英語学校終業式
	21	土	中学部終業式，捜真女学校終業式
	23	月	三崎普通週間（第1週）～30日生徒50名
	25	水	県下中等学校水泳競技大会（元町プール）
	* 26	木	基督教教育同盟会第7回夏期学校（御殿場東山荘）～30日
	30	月	三崎普通週間（第2週）～6日生徒45名
	31	火	学院常任理事会（寄付行為改正理事数変更）
8	4	土	三崎寄宿舍下水工事開始
	6	月	三崎普通週間（第3週）～13日，ドイツ総統ヒトラーの演説を聴く（ラジオ放送）
	7	火	遠藤書記を文部省に遣わす（寄付行為改正）
	* 13	月	三崎捜真週間（第1週）～20日生徒38名
	* 19	日	三崎諸磯海岸にてバプテスマ式（捜真生徒6名）
	20	月	三崎捜真週間（第2週）～27日生徒約40名
	25	土	橄欖会総会（約150名）
	29	水	教役者会（三崎寄宿舍）～30日

	30	木	閉舎準備開始
9	1	土	三崎寄宿舎閉鎖，夜間防空演習
	6	木	中学部始業式，中学部新校舎献堂式
	7	金	学院経理委員会，中学部教員会議，青年訓練所講義
	10	月	捜真教員会議
	11	火	捜真始業式，高等部教授会，英語学校始業式
	15	土	日本美術院展を観る（上野）
	*19	水	中等学校連合野外訓練（富士裾野，滝ヶ原廠舎）147 名参加
	21	金	暴風雨，中学部校舎一部被害
	22	土	第 34 回東部バプテスト組合関東大会（関東学院）～ 24 日
	25	火	捜真特別伝道集会（ミス・ガレスピー），学院常務理事会
	26	水	学院経理委員会
	27	木	市内中等学校長会（川崎中）
	28	金	捜真教員会議
10	1	月	捜真第 47 回創立記念式
	3	水	学院経理委員会
	6	土	学院理事会
	10	水	捜真 5 年級の英語会
	*11	木	捜真同窓会関西支部より眞窓会（後援会）へ基金の寄付
	*12	金	学院寄付行為改正認可
	13	土	学院常任理事会
	*16	火	高等部第 2 学期始業式，憲兵隊訪問
	18	木	思想問題研究会（県庁）
	20	土	逗子開成中学校落成式，中村岳稜，山田孝三郎訪問 工業懇話会（銀行集会所）
	21	日	横浜高等商業学校開校 10 周年記念式，捜真 5 年関西修学旅行
	23	火	中学部校内運動大会
	24	水	日本精神講演会（大倉山）～ 27 日
	30	火	教育勅語奉読式（中学部，捜真）
11	2	金	中学部音楽と映画の夕べ
	3	土	明治節奉賀式（中学部，捜真），捜真運動会，中学部英語大会
	5	月	神学部講演会（青山学院比屋根教授）
	7	水	市内中等学校校長会（三中）
	10	土	国民精神作興に関する詔書奉読式（中学部，捜真），県下中等学校体操会（一中），高商部主催珠算競技大会，橄欖会主催映画・音楽会
	12	月	県教育会常務理事会（県庁），県下教役者会
	14	水	基督教教育同盟会第 23 回総会（東洋英和女学校）～ 16 日
	17	土	捜真同窓会例会
	19	月	県下女子中等学校体操部会（横浜公園）捜真全校参加
	*25	日	南原繁の論文を読む，馬術競技大会を見学（戸塚競馬場）
	*26	月	Henry Topping 宅訪問
	*30	金	市内ミッションスクール教員懇談会（関東学院）

12	1	月	中学部第一志望入学志願者受付開始 32 名，高商部主催市内タイプライティング競技大会
	5	水	経理委員会，市内中等学校長会（一中）
	7	金	高等部教授親交会（高等部学生会館）
	8	土	秋田県人会（磯子園）約 80 名
	10	月	県教育会常務理事会
	11	火	市内教育懇話会（神奈川高女），一本配属将校転任発表
	12	水	中学部教員査閲成績良好，一本教官送別晚餐会
	13	木	一本少佐全校送別会，県保護会常務理事会（県庁）
	14	金	青年訓練所教科書編集会議（女子専修学校）
	15	土	工業懇話会（銀行集会所）特命全権公使笠間氏講演
	16	日	南原繁，高谷道男と会談（自宅）
	17	月	高等商業部中等教員資格試験（文部省より来校）
	20	木	英語学校終業式
	22	土	捜真終業式クリスマス祝会（保護者約 200 名）
	24	月	中学部終業式，新任配属将校平戸大尉紹介，院長招待クリスマス・ディナー，県教育会常任理事会，中学部 YMCA クリスマス集会
	28	金	山枅儀一，高谷道男と会談（山枅宅）
	*31	月	大晦日の一日

解 読 文

1月27日（土） 晴

創立記念式 本日から藤大吉氏寄贈の国旗を掲揚せり 午前8時頃学院に至る 8時30分より全校合併記念式，第一屋内体操場，余司会中居君聖書祈祷院長式辞，余少しく所感を述べる，式辞前に高等部グリークラブ合唱 式辞後校歌カレッジソング，港の西合唱，高等部先に散会，中学部を残して一場の訓示を与えたる後散会せり（略）それより高等部講堂の音楽会に出席，高等部グリークラブ主催 捜真グリークラブ及び中学部も出演 笠原寿々代さんも独唱8時40分頃終わる

2月4日（日） 晴

5時頃東京駅前日本工業クラブに開かれたる内村全集編集者感謝会に出席 来会者約60名，主賓塚本，畔上，三谷，鈴木（俊郎），斎藤，岩波の諸君 発起者名古屋君，藤本武平二君，藤本重太郎君等，町田大一君，渡辺貞三郎老，八木君，山枅君も来会，大賀君に会う 開会前三浦*堂の教育講演をきく，宝生流の元祖

の修業時代の話し興味なりき，食事塚本君，畔上，大島先生の前に岩波君と僕と座せり，斎藤君の長演説の後5分演説せり 畔上君の閉会の祈祷5時半頃閉会，本夜の会費は2.50 藤本武平二君の依頼に特に2円を寄付せり

2月9日（金） 晴天

湘南中学に至り学校教員研究会出席，県主催各中学校長 配属将校 教員教師 49 聯隊長小宮山氏 高商配属田中中佐も出席，9:35～5:00まで 午前湘南中見学午後協議，昼食は県の馳走 協議会に余も一場の話をなせり，教員の主要目的は服従の精神を養成するにあり 北海中学校長の話を付加せり

2月12日（月） 快晴

市電にて捜真に至る 余の誕生日の祝いなりカーネーション，フリーズヤの美しい花一瓶を机の上に置きあり 多分家政科生ならん（略）昼食余の誕生を祝して特別の馳走あり 放課後会議室に於いて交際会より誕生祝いとして茶菓の馳走ありたり

2 月 24 日 (土) 晴天

Board より Miss Acock に来たりたる手紙を見る 尚綱危機に瀕せり、同情に堪えず、捜真大いに奮闘を要す (略) 余はタクシーにて学院に帰り高等部会議室に於いて常務理事会に出席、神学生の卒業に関する懇談、5 時頃閉会、引き続き教授会 昨夜保留の神学生の卒業を決定せり 本日米国本部より返電 3 萬円の Budget と他に 5000 円の為に努力するとあり、安心せり

3 月 3 日 (土) 雪、曇

8 時半頃学院に至る 本日は卒業式、昨夜雪降り一面の銀世界なり 9 時半の挙式なるに県官の来臨 10 分ばかり遅れたり 市から水島教育課長、県より越野社会課長、田尻高商校長、小崎浅野校長も見えたり 11 時半頃閉式終わって茶菓、父兄来賓約 100 名 (略) 1 時より高等部講堂に於いて橄欖会例会新会員歓迎会、4 時少し前閉会、落語ありたり (略) 記念会館に至り卒業晚餐会 5 時半開演 多田君 Talk master 10 時 10 分前閉会、理事は橋本、湯川、安藤、藤中、特に八木元教員出席

3 月 19 日 (月) 晴

学院に至り一寸事務を見てタクシーにて 10 時半少し過ぎ捜真に至る 午後 1 時卒業式、県より萩田紀子視学 市より鈴木視学代理にて来校 Converse 名誉校長、Mrs. Axling, Madame Fisher, Mr. Fisher, Dr. Chiba, 井上梶之助氏、橋本牧師、菅谷牧師、川又牧師、多田理事、父兄、同窓会幹部、卒業生等多数来校 3 時少し前終了、それより茶菓、両視学を案内して家事、理科、作法教室等を巡視写真を生徒と共に数葉とる 余一人のものをも撮れり

4 月 30 日 (月) 雨

3 時山下教頭同伴バス及び市電にて英和女子校に来たり ミッションスクール女学校長及び教頭会に出席、フェリスを除く他全部出席

種々懇談せり、ミス・ハダス、大竹、ミス・ルーミス、宮崎君、山下及び余他英和の西洋人教員 2 名 5 時頃散会 帰宅入浴夕食 7 時頃八木君来訪 過去一カ年の友情の疎かりしを清算して釈明せり 妻も同席、熱烈なる祈祷を共にして愉快に分かれたり

5 月 11 日 (金) 晴

宮城前御親閲 午前 4 時起床 5 時朝食、5 時半頃学院に至り、桜井教員の来着を待ちタクシーにて校旗携帯生徒土居及び吉見を同乗せしめ横浜駅に至る 6 時整列、6 時 25 分発車、生徒 150 余 職員一本教官、桜井、内海、及び余、7 時半までに宮城前到着、東京府、山梨、神奈川、千葉、埼玉、県下の中学校約 80 校の上級生参列 8 時 30 分二重橋前を正面にして各学校総員隊の整列を終わる 9 時秩父宮殿下御来臨 閱兵分列を御親閲遊ばさる、10 時 50 分頃式終わり学校長は自動車にて靖国神社に送られ個人参拝、内部の休憩室にて休憩それより偕行社に於いて午餐会、香坂知事、森少将以下配属将校を招待 (中学校長協会主催) 2 時頃閉会、余は向山堂に立ちより一寸本を見 (高山君不在) 神保町よりバスにて東京駅に来る

5 月 17 日 (木)

5 時頃起床、天気晴朗奈良の朝景色爽快なり、6 時朝食直ちに生徒一同と出発奈良駅に至り 6:44 発にて宇治へ向かう、宇治に下車平等院見学 高僧の説明懇切明瞭大いに得るところありたり 廃仏毀釈の影響にてこの国宝の建築物を痛めたる事少なからず、わが国にもこの立派なものありしを見て欣快に堪えず、電車にて黄檗に到り黄檗宗の万福寺をみその規模の広大なるに驚く、それより再び電車にて桃山御陵参拝、乃木神社休憩所にて休憩、乃木神社参拝 愛馬寿号 (向かって左) ステッセルの贈りたるものなるべし余が預かり乗りたる名馬、(略) それより電車にて七条に到り余は一同と別れ京都駅にて今晚の切符及び

寝台を求む（略）生徒教職員と会い夕食を共にして内海君その他と共に都ホテルに着、橄欖会関西支部の発会式に列席、午後七時半開会 来会者安村三郎君、椎谷健君、保科一雄君等横浜よりは内海、田中、安藤、花光、西村、坂田六名計20名 真に嬉しき会合にして余は大いに感激したり 心尽くしの贈り物を受け一同記念の写真を撮り余は明日の中学校校長会あるを以って先に退席 田中山本両君に駅まで送られ9時45分の急行にて帰る

5月19日（土）晴

東横線にて渋谷駅下車ハチ公の碑（銅像）を見、市電にて新宿御苑に至る 午前8時より中学校長約300名と共に御苑拝観約1時間にて終わる 新緑鬱蒼、さるすべり、つつじ、紅白紫、初夏の百花、青々とした芝生、すべて名状すべからざる景色なり 全く心頭を洗い得たるが如く感じたり 拝観後直ちに市電及びバスにて上野美術館に至り報知新聞主催の国宝展覧会を見る 午前10時少し前より視12時に館内にて昼食をなし午後3時まで漸く見終わったり、門外に出て公園のベンチに腰をかけ約40分休憩せり 千年以前にも既に世界に誇る立派なものあるを知り驚けり特に仏画多し殆ど国宝なり 本日の部会には出席することを得ず 午後4時半少し過ぎ学士会館に至り 東大クラブ主催の中学校長会晩餐会に出席、出席者約百名

7月2日（月）晴

杉田駅に下車第4学年の2組及び4組の集合を視7時40分一同と共に乗車、金沢八景にて乗りかえ逗子葉山にて下車、三崎タクシー2台に荷物と生徒6名と余と大曾根君と乗車、他の生徒は一本教官櫻井教員に引率せられ行軍、余は9時着舎、昼食は舎に於いて、行軍の生徒は3時半頃着舎、銃器の手入等を終て余及び教官の注意を終り4時半頃入舎、校医の診断を受けたる者数名、5時より約30分

有志約20名水泳せしめたり、6時夕食6時50分旗下し夕拝、余司会奨励を与えたり終て9時半頃まで自由時間になせり

7月15日（日）曇 小雨

10時教会、中居牧師司会、鈴木登郷君説教終て三崎に於て志願者にBaptismを施すこと、それには立会の学院教員が信仰告白をきき適当なるものに中居牧師授けること、一同異議なく賛成せり、終て多田君より昨日大曾根君が憲兵隊を訪問したる様子をきき学院三崎寄宿舎に軍部が疑の眼を向け居ることをきき驚けり、白山君も居り其話をきかしめたり12時帰宅、（略）午後大曾根君来り憲兵隊訪問の様子を詳細に報告せり

7月16日（月）降雨

第5年の残り半分野外教練三崎に向う杉田駅発、余は用事あり同行をのばせり、憲兵隊に電話をかけ瀬戸伍長に面会を求めたるに先方より態々来訪せられ部長室に於て懇談せり、一昨日大曾根君に対し話したる事は稍言い過たる点あるを謝し、余よりも種々話し三崎寄宿舎土地の件に関し軍部の誤解なきよう努むる話せり、約1時間半話しかへれり9時半頃高等部に至り澤野君及び千葉院長にあひ憲兵来訪の旨を告げたり

7月19日（木）快晴

5時半一同起床、6時旗上げ朝礼、余司会奨励を与へたり、朝食後横須賀要塞司令部に立より帰浜の予定にて出発、9時頃同司令部着、11時頃迄かかる、属官中尉及関野（？）参謀にあひ三崎寄宿舎土地の法規にふれ居るにつき合法的にする為に指示を仰いでかへり（それは理事は外国人半数は不可なる故その数を減ずること也）12時帰宅昼食、電話にて横浜憲兵隊隊長の都合をきき午後1時半頃同隊本部に菊池隊長を訪問指示を仰ぎてかへる、直ちに千葉院長にあひ米人理事数を早速減少する手続をなすことに付き相談せり、遠

藤書記を呼び寄付行為を持参せしむ約 1 時間
話して帰宅 3 時頃

7 月 27 日 (金) 雨

天気よからず雨降る朝礼中居牧師司会講堂に於て、朝食 8 時 20 分頃より、宮崎小八郎氏司会にて市村典一議長の講演「日本基督教教育の根本義」終て 9 時半よりそれを主題として各部に分れて討議せり余は花光君と中学部会に出席、大いに意見を述べたり 12 時頃閉会昼食、本日午後はピクニックのプログラムなるも天候不良の為明日午後のプログラムとかへて研究発表、大竹清君、末光信三君の発表あり 終て台南より来会の牧師の台湾教育に関する講演と同地の長老教会に属する中学の現状を述べ大いに援助を乞はれたり、散会後に入浴、夕食後も午前に引きつづき主題につき討議 10 時少し前散会 10 時過就寝

7 月 28 日 (土) 快晴

久しぶりに快晴となる、朝礼、朝食、終てプログラムの通り日本基督教教育原理の解説田川氏、終て各グループに分かれ、主題につき討議、余は花光君と共に中学部会に出席、大に意見を開陳せり、12 時少し前閉会、12 時昼食、午後はピクニック、3 コースに分かれ箱根方面に至る、余は島村教員と共にアメリカ村を訪問、クラブに至りポールデン氏夫妻其向いの家にミス・カンパルス、山田女史、フィッシャ母堂にあひ茶の馳走になりそれより山田女史の案内にてエーカック女史の別荘に至り両姉妹及びシナよりの Miss Hill にあひ茶の馳走になり、4 時頃エーカック両女史 Hill 女史と共に東山荘にかへる、富士岡荘より YWCA の女学生約 150 名ピクニックに来荘しあり捜真の生徒 5 名余を見て飛んで来て喜ぶ、夕食後 top にて夕陽会、(ピクニック未だかへらざるあり) 先生方と女学生と共に礼拝、余司会を命ぜられ、一場の奨励を与ふ(服従すること)、天晴れ富士山の雄姿が夕暮れにだんだん消えゆくを見荘嚴の感に打たれ

下山するを忘る、日全く暮れ女生徒ら携帯の提灯をとばしてかへる、晩は各学科にて研究会、余は島村教員と聖書科に出席、10 時頃閉会入浴就寝

8 月 13 日 (月) 快晴

7 時 30 分黄金町に至り捜真の三崎ゆき生徒を見送る 8 時 26 分発大野、最上教員生徒 22 名母上 1 名、山下教頭浦賀迄見送りかへり午後に再び赴く、(略) 11 時少し過ぎ帰宅し昼食の上黄金町に来り三崎ゆき捜真生徒 15 名、職員山下、軽部、千葉よし子及余 1 時 26 分浦賀発自動車 4 台に分乗生徒飯島生加はり合計 20 名 3 時少し過ぎ着、必要なる注意の後入舎 4 時より水泳、(略) 6 時夕食 6 時半旗下し夕拝トップに於て余司会せり基督教の根本はイエスキリストなることを説明せり

8 月 19 日 (日) 晴天

5 時半旗上 向側の浅瀬に於てバプテスマ式受洗者は boat にて中居牧師と共に至り他全部港を通りて至り、式前に松林令息によりて記念撮影、終りて式、阿部、福田、井上、森、田辺、富樫の 6 名順次に受洗せり 午前 6 時頃太陽東天に輝く真にうるはしき式なりき一同深き印象を受く、(略) 7 時朝食 8 時より tent に於いて日曜礼拝式中居牧師司会説教せられたり

9 月 19 日 (水) 雨

7 時 40 分頃横浜駅に至り富士裾野の中等学校聯合野外教練に向ふ、駅前にて生徒隊の敬礼を受け 8 時 28 分発の臨時列車にて他校と共に発車 10 時半頃御殿場着、余は中居、内海両教員とタクシーにて滝ヶ原廠舎に至る、本日学院よりの出場者職員は余、一本教官、中居、桜井、内海 3 教員計 5 名生徒 147 名合計 152 名也 一同 12 時少し前着、廠舎にて昼食、細雨降る、為に午後は演習出来ざりき、(略) 7 時点呼 8 時消灯す、12 時前に生徒騒ぎ桜井、内海両教員叱り訓諭せり一本教官も

後に出て訓諭せり、余は一本教官と一室に眠るベッド1個備付けありたるを使用す、毛布は例の通り毛なく板の如く南京虫は居らざるも安眠し得ざりき

10月11日（木）曇

同窓会関西支部よりの代表葉山、本田、沖口3夫人に面会し、同本部より真窓会に基金としての500円を受領し、教員会後カンパルス先生宅に至り各役員列席の上、同代表3人の前に於いて右500円の見録を余より真窓会長高山夫人に伝達せり6時夕食の馳走を一同と共に受け食事後余は代表者に一場の挨拶を述べ独立計画の実行に関する説明をなし将来を依頼して辞去

10月12日（金）雨

寄付行為改正認可指令到着、遠藤君区裁判所に至り、有高君より手続きしてかへり適当な方法を取れり、新任理事は、千葉、坂田、内田の3名也

10月16日（火）曇

今朝10時頃憲兵隊に瀬戸伍長を訪ひ財団理事の数15名に増加し日本人9名になりたることを報告し過日の懸案解決取計いを依頼して帰る

11月25日（日）曇

夜半2時～4時迄南原君のヒフィテの研究の論文を読む完了、大に啓発せられ今更ながら君の明晰なる頭脳と堅固なる信仰には敬服せざるを得ず、(略)朝食、タクシーにて戸塚競馬場に行き、軍馬改造会馬術競技大会に出席、会長横山知事よりの案内状ありたり、本日は日曜日なるも、騎兵として馬の愛着から久しぶりに馬の展覧会と競技会を視る、竹田宮殿下と北白川宮殿下の台臨ありたり、馬匹の著しく改良せられたることと馬術の進歩せるに驚きたり、9時に始まり3時半頃閉会せり、終て展覧の馬を一覧せり、オリンピック

に出場せる騎兵学校の馬を見る、西大尉の障害飛越をも見る、戸塚駅より省線にてかへる

11月26日（月）雨

東横及び省線にて東京ゆき3時少し前新大久保付近のMr. Topping宅に着、新築の家屋の開始式昨日行はれたに付き御祝い、Mrs.及び小川牧師にもあう、懇談、小川牧師より賀川豊彦氏の活動振りをきいて大いに敬服せり、Lutheran Churchの宣教師スタイキールド師は、此宅の主人公なり家族を米国に帰し単独生活、ここにMr.,Mrs. Topping 寄寓す。小川牧師去り御兩人及びスタイキールド師と共に夕食を共にす、夕師の家屋建築費のことを承はりMr.のLife Insuranceをやめて其金にて支払ふとのこと、余は来年3月迄に家具費の一部として¥100寄付することを申し出たり、種々御話して祈祷を共にささげて8時過辞去

11月30日（金）晴天

Chapel 約220音楽礼拝金君独唱 第1時間修身授業昼食は会議室に於て金君と共に弁當を食せり、午後高等商業部国民道徳授業せり、教室に落書き(硝子戸に)あるを以て叱責訓諭せり、学友会誌にのせる原稿を書けり午後4時より市内M.S.教員懇談会高等部合併教室、ピンボンの試合、6時少し前夕食、食堂において牛鍋、会食者107名、6時40分頃より会場に至りDevotional(第1部)それより余興(第2部)9時半頃閉会、余は一場の所感を話せり、第1部に於て明日中学部にて行ふ映画試写を見る

12月31日（月）終日雨

昼食後書齋にて遺言書の整理夕方完了、西岡皚君上京来訪、伊沢君も来訪兩人とみそかそばを我等と共にせり、食前に集りをなせり、さんび歌、聖書朗読(黙示録7:13～)簡単に天国の説明をして祈祷し食事に移る、(略)西岡君8時頃伊沢君そのあとにかへる、余は

書斎にて明日の式辞の準備をなせり、レビ記を読み了はる ヨベルの年の記事規定は興多し、山柝兄夫妻の努力により八木兄夫妻と余の平和回復し心極まりなく平和なり、友と和を得ずして真の平和は我らの心に來らざる也、今日は大晦日なる故靜かにこの1年を回顧し懺悔と感謝をすべきである。晩ラジオ大衆演芸を除夜の鐘の鳴るまで聞く、近所の寺の鐘とラジオにて芝増上寺京都妙心寺の国宝の鐘をきき、12時10分就寝、2時頃地震あり、平和の夢を破らる

1935年（昭和10年）

〔解説〕

1. 内外の情勢

貴族院で美濃部達吉の「天皇機関説」が攻撃された（2/18）国体に背く学説として非難され天皇の主権が主張された。これは政党、軍部、ファシズムによって政治的問題になり政府は「国体明徴」の声明を二度発して（8/3,10/15）天皇機関説を排除した。美濃部は貴族院議員を辞任した（9/18）。ドイツは

再軍備を宣言した（3/16）。

2. 関東学院

社会事業部はSCM運動の影響、経済的問題等により廃止になり（3/31）、セツルメントも閉鎖された。神学部は青山学院に予科学生を委託して授業を続けていたが、ミッションの意向、経済的問題等により青山学院神学部に合併し廃止することになった（12/24）千葉院長は予ねて辞意を表明していたが認められ坂田副院長が後任に決定した。（12/7）ミッションの補助額は年々減額されていて財政的独立が急務である。

3. 捜真女学校

カンバルス名誉院長が78歳で永眠し学校葬が行われた。

ポーレー（Pawley）宣教師が就任した。かつて1925年カンバルス校長の後任として校長になり1929年辞任したがこの度再来日した（8/29）。坂田の関東学院長就任に備えて主事職を設け中西敬二郎が任命された（12/20）。

坂田祐日記（1935年1月～12月）

主要事項 1935年（昭和10年）＊解説文あり

月	日	曜日	主要事項
1	1	火	中学部、捜真新年奉賀式横浜市賀詞交換会（開港記念会館）
	5	土	基督教教育同盟会委員会（YMCA）
	8	火	中学部始業式中学部、捜真教員会議捜真職員を晚餐に招待（末広軒）
	9	水	学院経理委員会
	10	木	橄欖会購買部役員会、中学部入学志願者受け付け終了（368名）
	11	金	県教育会常務理事会、英語学校始業式
	14	月	中学部剣道寒稽古視察（75名）中学部教員早朝祈祷会（定例）MissConverse訪問
	15	火	中学部教員会議一定例以下略
	18	金	中学部第一次入学考査、新旧知事歓送迎会
	19	土	中学部平野教官（配属将校）遠藤、大曾根職員歓迎会
	21	月	中学部3年野外訓練、Miss Converse 重態

	23	水	中学部1年野外訓練，今井館（大久保）建物処分に付き協議
	*24	木	捜真女学校名誉校長 Converse 永眠（午前7：40）捜真祈禱会，教員会議（定例）
	*25	金	Converse 先生葬儀に関すること，市内中等学校校長会（浅野中）
	*26	土	Converse 先生告別式，火葬
	27	日	学院第17回創立記念式，中学部創立記念音楽会，旧約聖書研究会講演会（産婆会館）
	*28	月	Converse 先生叙勲申請手続き
2	2	土	中学部第二次入学考査（172名）中学部学芸部大賀一郎氏講演会
	5	火	県教育会常任理事会
	*6	水	Converse 名誉校長校葬
	*7	木	Converse 先生埋骨式校葬の後処理
	*8	金	外務省文部省に謝礼訪問，学院経理委員会，中学部多田教頭辞任
	9	土	高商部記念講演会（記念会館）内海教員教頭就任受諾
	11	月	紀元節奉賀式（中学部，捜真）
	12	火	坂田第58回誕生日
	13	水	学院経理委員会
	15	金	高商部教授会議（定例）宗教委員会議工業懇話会（総合医学の講演）
	16	土	神奈川郵便局（横浜駅前）落成祝賀会中学部卒業査定会議
	17	日	卒業生送別愛餐会（教会）
	18	月	三崎寄宿舎視察
	19	火	神学部講演会（升崎外彦氏）県教育会常務理事会
	20	水	市内中等学校校長会
	21	木	捜真5年，専門科講演会（高島富子氏），詩編講義（産婆会館）
	22	金	Dr. Holtom にものを聴く会（学院教職員）
	23	土	Dr. Holtom 神学部長就任式学院理事会
	24	日	中学部卒業礼拝式（小平国雄牧師説教）
	*25	月	中学部学友会送別会，社団より財団に学院校地移譲登記
	*27	水	中学部八木一男を招聘契約，中学部高等学校受験対策座談会
	28	木	鈴木半次郎昨日永眠の報あり
3	1	金	高等部学友会送別会一高会（八百政）中学部栗原隆黄金町駅で事故大腿部切断
	*2	土	中学部卒業式，橄欖会新会員歓迎会，卒業記念晚餐会（開港記念会館）
	6	水	捜真地久節奉賀式中止（皇族薨去のため）学芸会学院経理委員会
	8	金	県教育会代議員会，中学部斉藤久吉牧師礼拝感話（聖和学園のため献金184円）
	9	土	英語学校卒業査定会議，Mrs.Band 書簡（学院独立の基本計画の要あり）
	10	日	浅野中学校卒業式
	11	月	市立高等商業学校卒業式，中学部日露戦争奉天占領30年記念講演

	*12	火	青年訓練所終了式
	*13	水	高等工業学校鈴木達治校長引退感謝会（ホテルニューグランド）
	15	金	高等工業学校卒業式（新任校長富山保就任）
	16	土	英語学校卒業式
	17	日	捜真卒業礼拝式（植村環氏説教）英語学校卒業晩餐会，丘友会総会
	18	月	捜真共練会送別会工業懇話会（ドイツ近情講演）
	20	水	捜真卒業式，謝恩会学院経理委員会（Dr. Decker と会談，経営上の根本問題につき）
	23	土	中学部進級査定会議，捜真理事会，中学部交誼会（安楽園）
	24	日	カンバルス先生追悼会（神奈川バプテスト教会，県下バプテスト教会連合主催）
	25	月	中学部終業式，県教育会常務理事会
	27	水	横浜博覧会開会式，中学部第二次入学考査及び査定会議
	28	木	学院臨時経理委員会（ミッションボード要求の計画検討）捜真第二次入学考査及び査定会議
	29	金	捜真教職員旅行（熱海）
	*30	土	H. Topping 先生訪問，内村先生第 5 周年記念会（柏木聖書講堂）
4	* 3	水	日露戦役 30 周年記念会（県，市，甲府連隊区主催，横浜公園） 中学部 5 年生出場
	* 4	木	中学部教員会議，横浜博覧会見学
	5	金	中学部始業式，入学式町田四郎結婚式司式（学士会館）
	6	土	満州国皇帝奉迎（埠頭）中学部，捜真生徒参加
	7	日	中学部生鈴木幸雄列車事故で死亡，火葬場に会葬
	8	月	捜真始業式，入学式（普通科 104，家政科 7）
	9	火	高商部入学査定会議，中学部新任教員歓迎晩餐会
	10	水	学院経理委員会
	12	金	高等部入学式
	13	土	捜真共練会新入生歓迎会
	15	月	工業懇話会（楠公及び正統論講演）
	16	火	県生徒保護会常務理事会
	17	水	カンバルス先生葬儀始末会議
	18	木	学院経理委員会（高商部独立計画協議）
	19	金	高商部講演（近江ミッション吉田悦義氏）カンバルス先生の遺言状（同窓会宛）
	20	土	県教育会常務理事会，横浜博覧会見学，中学部学友会総会
	*21	日	教会バプテスマ式（中学部生徒 2 名受浸）教会青年会で奨励
	*22	月	カンバルス先生の遺品，学院臨時理事会（高等部独立問題，坂田副院長辞職願）
	24	水	市内中等学校校長会（小田原中）箱根観光
	*25	木	学院経理委員会・理事会 Dr. Decker と協議
	26	金	捜真職員慰労会

	*27	土	馬術大会（横浜公園）見学，バプテスト東部組合財団法人設立委員会（学院）
	29	月	中学部，捜真天長節奉賀式
5	* 3	金	教育懇談会（市立高女）カンパルス先生の寄付金
	4	土	捜真同窓会・真窓会役員会
	7	火	県教育会主事会議
	8	水	中学部4年修学旅行（北陸方面）見送り，川崎乗馬倶楽部で乗馬
	9	木	中学部3年修学旅行（日光方面），2年（静岡方面見送り）神学部講演会（栗原陽太郎氏）
	10	金	学院経理委員会
	*11	土	学院常務理事会，捜真校舎土台の腐食
	12	日	県下中等学校学士会
	*13	月	中学部伝道集会（木村清松牧師講演）
	15	水	市内中等学校校長会（捜真）工業懇話会（シナ問題講演）
	17	金	全国中等学校長協会総会（山王下）～20日熊野清樹氏訪問
	21	火	国民精神文化研究所（目黒）見学
	24	金	横浜博覧会閉会式
	25	土	中学部大楠公講演会，市内M.S.教員親睦会（共立）
	26	日	貿易新報社三宅社長葬儀
	27	月	中学部大楠公六百年記念と海軍記念日の講話
	30	木	青年訓練所講義，藤本伝吉氏重態
	31	金	中等学校体育連盟常務理事会
6	1	土	中学部1，2学年野外訓練見送り
	2	日	開港記念日祝賀会（開港記念会館）
	3	月	教育時報編集会議（県庁）県体育連盟理事会
	* 5	水	藤本伝吉氏葬儀
	12	水	学院経理委員会
	14	金	英語校内研究会，県教育会理事会
	16	日	県下中等学校球技大会
	18	火	中学部Covell宣教師送別会（21日出帆）
	21	金	三崎寄宿舍（生徒受け入れ準備）
	24	月	中学部三崎野外教練開始74名参加～28日
7	1	月	中学部4年三崎寄宿舍野外教練（89名）に同行～5日
	6	土	中学部に猩紅熱発生，教室消毒実施，三崎寄宿舍も実施 市内ミッションスクール校長教頭会議（フェリス）
	10	水	学院経理委員会
	12	金	中学部3年三崎寄宿舍野外教練（93名）に同行～15日
	17	水	中学部3年三崎寄宿舍野外教練に同行～20日
	20	土	捜真1学期終業式，英語学校終業式
	21	日	捜真西洋館改修に着手，甲神静野球大会予選（公園野球場）三崎教練慰労会
	22	月	中学部1学期終業式，三崎寄宿舍中学部週間開始（75名，教員11名）
	*26	金	三崎寄宿舍に要塞司令官来訪

	28	日	三崎諸磯海岸にてバプテスマ式（1 名）
	29	月	中学部週間第 1 週終了，第 2 週開始（一部残留，35 名新来）
	* 30	火	神学生鈴木庸一南紀にて水難事故死の報を受ける
8	1	木	汎太平洋新教育会議（帝大）～7 日鈴木庸一の遺骨を迎える
	6	火	興野農民講堂館見学
	7	水	汎太平洋新教育会議閉会
	12	月	三崎中学部週間終了捜真週間開始（52 名，教員 12 名）
	14	水	捜真工事視察
	15	木	新市長青木周三氏歓迎会（記念会館）
	19	月	捜真週間第 1 週終了，第 2 週開始（28 名退舎 12 名新来）
	21	水	三崎小学校にて講演
	24	土	橄欖会総会（約 200 名）
	25	日	三崎諸磯海岸にてバプテスマ式（教員 1 名生徒 5 名）
	26	月	捜真週間終了
	28	水	三崎寄宿舍閉鎖
	29	木	捜真宣教師 Miss Pawley 来日
9	3	火	『武相教育』編集会（県庁）捜真 Miss Nicholson 仙台転勤出発
	6	金	中学部 2 学期始業式教員会議，英語学校始業式，青年訓練所講義
	* 9	月	捜真教員会議（Miss Pawley 紹介）捜真同窓会役員会
	10	火	県教育会幹事会中学部教員会議（定例）
	11	水	捜真 2 学期始業式
	* 15	日	鈴木庸一の告別式に弔辞
	16	月	工業懇話会（満州国に関する講演）
	* 17	火	修身科教員会議
	19	木	捜真教員会議（定例）Miss Pawley 歓迎茶話会
	* 21	土	ミッシンの質問書に対する回答協議
	23	月	貿易新報社新社長就任式，バプテスト関東部会（早稲田奉仕園）
	25	水	県文化聯盟座談会（県庁）ミッション質問書に就き Miss Pawley と懇談
	26	木	横須賀重砲隊見学（生徒 145）に同行，市内中学校長会議（総持寺）
	* 27	金	ミッションに回答書郵送，捜真理事会
	* 30	月	木村清松師特別集会（中学部及び捜真上級生）
10	1	火	捜真第 68 回創立記念式木村清松師特別集会（中学部及び捜真下級生）
	* 2	水	木村清松師特別集会（中学部，高等部，捜真教職員）
	* 4	金	中学部卒業教員に訴える
	* 7	月	捜真 YWCA 活動援助発表
	8	火	中学部教員に宗教活動アピール
	11	金	中学部裁判所見学に同行
	* 12	土	学院理事会（院長辞任問題）
	15	火	高商部富士裾野野外教練見送り
	17	木	鎌倉師範学校創立 60 年記念式

	18	金	捜真3年以下修学旅行実施（富士五湖，奥多摩，大磯）
	19	土	捜真同窓会映画と舞踊の会（開港記念会館）
	20	日	二宮尊徳遺物展（小田原）捜真5年関西旅行より帰る
	22	火	県生徒保護会常務理事会
	*23	水	学院経理委員会（ミッションに送る回答書，高商部5年計画） 市内中等学校長会（工業学校）
	26	土	山枿家葬儀列席，中学部2回生同期会
	27	日	石川在脩教員夫人告別式に弔辞
	28	月	県下連合野外演習視察（戸塚）
	29	火	同上（湘南中）
	30	水	中学部全校野外教練（鎌倉方面）捜真教育勅語奉読式
	31	木	高等部教授会議
11	1	金	中学部，捜真熱田神宮本殿遷座祭遙拝式
	2	土	捜真運動会中学部4・5年父兄会
	3	日	中学部，捜真明治節奉賀式
	4	月	県下中等学校長会（県立高女）晚餐会（県知事招待）中学部1 年父兄会
	*5	火	ミッション使節と懇談，中学部2年父兄会
	6	水	中学部3年父兄会鈴木庸一追悼文集「人ばしら」出版
	11	月	教役者会（学院）捜真教会設立提案
	13	水	学院経理委員会（神学部，高商部の将来につき）工業懇話会（西 田天香につき）
	15	金	県下市立中等学校校長懇親会
	16	土	県下中等学校体育聯盟女子部体操部会（公園球場）捜真生全員 参加
	23	土	捜真教員一同と歌舞伎座観賞
	24	日	南部バプテスト教会（東京小石川）にて説教
	25	月	市内中等学校長会（商工実習）青年訓練所講義
	26	火	教育会『武相教育』編集委員会（女師）
	*27	水	中学部教練査閲高商部査閲要請実施
	28	木	教育会福水事業委員会，第二皇子殿下誕生
	29	金	市内中等学校・小学校懇談会（浅野中）
12	1	日	中学部生徒募集開始
	4	水	第二皇子殿下御命名奉祝式
	*7	土	学院臨時理事会（千葉院長辞任，後任坂田祐，神学部問題）中 学部8回生同期会
	*9	月	捜真教員に通達
	*10	火	中学部教員に通達，県教育会委員会
	15	日	教会にてバプテスマ式（中学部生13名，捜真生3名）
	17	火	基督教教育同盟会理事会（教文館）
	*19	木	ホルトム，フィッシャー，澤野と会談
	20	金	捜真理事会（中西敬二郎を主事に任命）

	*21	土	神学部問題につき懇談
	23	月	捜真 2 学期終業式クリスマス祝会
	*24	火	中学部クリスマス礼拝終業式，臨時經理委員会（神学部青山学院と合併）
	27	金	県教育会幹事会
	30	月	青山学院阿部院長を訪問会談
	*31	火	千葉院長，フィッシャーと会談 一年回顧

解 読 文

1 月 24 日（木）晴

Miss Converse 今朝 7：40 永眠の報電話にて来る，Chapel 後タクシーにて訪問約 30 分話して捜真に至り Chapel 司会し生徒に Converse 校長永眠の報をなしそれより再び Miss C 宅に来たり 12 時少し前まで居りそれよりタクシーにて学院に帰り（略）余は 2 時少し前中座しタクシーにて捜真に至り職員会議を司会，4 時前散会

1 月 25 日（金）晴天

第 1 時限修身，終りて県庁に至り捜真設立者変更につき望月属官と打ち合わせ，（略）官房主事西岡氏に会いカンバルス校長叙勲方尽力を依頼して学院に帰る，（略）高等部に至り千葉院長にカンバルス校長校葬の説教を依頼せり，タクシーにてカンバルス先生宅に立ちより鈴木書記に設立者変更書類を渡して清書をなして書留にて県庁に出すよう命じ（Miss Converse の代りに Miss Yamada に sign を乞い）それより浅中に至り市内中等学校校長会に出席，（略）Miss C 宅に立ちより市電にて帰る

1 月 26 日（土）晴，曇

Miss C 宅に至り告別式に参列，寝室に居り時間まで待ち 1 時より式始まる，余は捜真女学校を代表して弔辞を述べ 来会者は同窓生に限りたるも無慮数百名，生徒は 5 年生のみにせり，3 時 40 分頃式終わり告別を終りて自動車に乗りたるは 3 時 20 分なりき，霊柩車の外 23 台，余は第 1 号に山田女史，高山

夫人，川又，橋本両牧師と同乗先導者なり，久保山火葬場に至る特等に納棺川又牧師聖書橋本牧師祈祷，終りて捜真出身者の茶屋に休憩，全部で百数十名，5 時少し前窯を開いて骨拾い，壺に納めて（略）山田女史骨を捧持して帰宅，自動車より下車して余はお骨を捧持して寝室に安置せり

1 月 28 日（月）快晴

叙勲手続きに必要な Converse 先生の履歴及び功績調書を作成複写にして外務省に運動開始軽部，島村両教員に渡し余は昼食後県庁に至る，莊田視学に 2 部渡し西岡官房主事に 2 部渡して依頼せり（注：29 日の記事に叙勲は難しき様子が記されている）

2 月 6 日（水）快晴

Miss Converse 校葬

礼装（シルクハット，フロックコート）にてタクシーにて 8 時 40 分頃捜真着，諸般の指揮をなせり 10：30 軽部教員と共に迎える自動車にて遺骨を迎えに至る 直ちに遺骨を捧持して山田女史，青木同窓会長，高山夫人植山牧師等と自動車にて 12 時学校着，生徒一同の迎えを受け西洋館に入る，斎藤視学官，村山市助役，鈴木市視学次いで文部省より桜井督学官来着，1 時余は遺骨を捧持して講堂に入る時山田女史に渡し一同起立の中に定められたる場所に安置，藍綬褒章も前に安置したり，式に先立ち文部大臣から贈られたる感謝状（表彰状）を督学官によりて読まれ余拝受して然る後開式を宣し葬儀，約 1 時間 15 分かかり終りて告別，大体終わりとるは 3

時40分頃（略）それより写真を撮る4時20分頃自動車にて遺骨を捧持帰る、職員生徒（5年生、専科）の見送りを受け帰宅遺骨を安置せり

2月7日（木） 晴天

Miss Converse 埋骨に参列すべく8:30先生宅に着 最後の集会は植山牧師により保たれつつあり出席、終りて自動車5台に分乗して三ツ沢墓地に至る余は遺骨を捧持してゆけり
かねて用意せる墓地に埋骨、植山牧師司式讃美歌聖書朗読祈祷、終りて花をたむけてかへる来会者20数名 余は反町にてわかれバスにて桜木町に立ちより靴をみがき市電にて県庁に至り官房にて望月氏に知事弔辞に対するお礼の言上を依頼して学務課に立ちより視学官にお礼の伝言を望月君に依頼して市役所に至り中村君に市長及び村上助役に伝言を依頼して教育課に行き課長に会いお礼を言い帰る、途中庁内にて村山助役に会い直接お礼を述べて帰る

2月8日（金） 晴天

午前10時新橋駅に着、待ち合わせいたる青木捜真同窓会長と同伴タクシーにて外務省文部省を訪問それぞれ御礼を述べ東京府に横山知事を訪問面会できず御礼を依頼してそれよりタクシーにて押上の小椋氏を訪問夫人に会い礼を述べ（略）青木夫人を残してタクシーにて送られ東京駅に下車（略）学院に帰着
2時より経理委員会、多田君教頭を辞することにせり 終りて澤野君多田君と3人にて協議して7時帰宅せり

2月25日（月） 晴

学校校地を社団より財団に本日移譲登記を完了、遠藤書記財団理事として余を代理し社団理事としてフィッシャー氏出頭せり

2月27日（水） 雨

9時50分頃八木君訪問懇談、来る4月より

学院に招聘国語、聖書の授業専任但し無報酬、教会の悪口、無教会を振り廻さぬことにして従来の午後の集会は継続して差し支えなきを約せり 昼食の馳走をなして帰る、夫人も同席せり

3月2日（土） 快晴

8時頃学院に至り卒業式の準備を視る、定刻までに県より社会課長知事代理、市より教育課長市長代理にて到着、三中黒土校長、山崎校長も出席せられたり、渡辺房吉医学博士も出席9時半に挙式、1.2年は中学部講堂、11時少し過ぎ閉式終りて第二屋内体操場にて茶菓、生徒の父兄多数に挨拶、（略）午後1時半頃橄欖会例会中学部講堂田中君司会祈祷の後歓迎、入会の辞ありたり 余挨拶して余興に入る前に金君の独唱数番あり大いに感興を与えたり 生徒の余興数番の後落語家馬之助の落語2席、その前に洋服屋の渡辺晃次君の手風琴ありたり、3時半過ぎ散会、校歌港の西合唱（略）4時半までに記念会館に至り晩餐会、5時半開会、岡本君トーストマスター、八木君、佐々木俊子さんも特に招待せり、大ホールに入り切れず別室まではみ出せり、例の通り食事の後生徒教員交々指名に従い感話、余興等あり余の挨拶にて八木君話し最後に余は約20分話して栗沢君祈祷校歌、終りて橋本理事の発声にて学院万歳を三唱して散会、（略）本日の卒業式は真に恵まれた好天気 式、集会好都合に運ばれ蓋し従来のものに比してベストなりしならん 午後1時鈴木半次郎翁の葬儀三崎会館にありたるも欠席、澤野君に名刺を依頼せり

3月12日（火） 晴

6時15分頃日枝訓練所、付近青年団長数名、三木県議その他指導員等にて十数名本年度の謝意を表する為の晩餐の馳走になり8時少し前青訓終了式 余も一言祝辞を述べ 終りて暫く教員室にて日露戦の懷旧談をなし乞われて生徒の親睦会に出席して従軍録の一節を読

み聞かせて実検談をなして帰る

3 月 13 日 (水) 快晴

Hotel New Grand に 5 時半着、鈴木達治氏感謝会に出席、来会者約 250 デザートコースに至り井坂孝氏発起人を代表して挨拶し大西市長の指示にて乾杯をなし鈴木氏の答辞、興味津々として温情溢るものありたり、同時に退職したる教授の為、又五千の門下生の為に二度のつとめに就かず晴耕雨読の余生を送るべしと 8 時頃宴を終わる一龍斎貞丈の講談あり

3 月 30 日 (土) 曇

午後 4 時頃出発東京にゆく、第一に淀橋区百人町 303 タッピング老師夫妻を訪ね新築祝いとして¥100.00 を贈呈して 2, 30 分話し茶菓の馳走になり辞去、柏木聖書講堂に至り内村先生第五周年記念会に出席、6:30 より余司会し開会別紙プログラムの通り、9:30 閉会、来会者約 180 (うち女 5,60 人) 山根君夫妻と同乗帰宅、

4 月 3 日 (水) 晴

本日は日露戦役第 30 周年記念会、県知事、市長、海軍鎮守府、甲府聯隊区連合の主催なり、学院よりは第 5 学年 3 小隊編成武装にて出場午前 9 時出発公園に至る 平野教官桜井教官内海教頭中居教員同道出場余はタクシーにて音楽堂に至る 9 時半少し前、式は 10 時 5 分神式にて行われ最初に戦死者慰霊祭、祝典、分列式、来賓従軍者にて音楽堂満員、壇上には陸軍従軍者を代表して長沼中将閣下見えらる余の連隊長なりき、ご老体益々元気に見受けたり、混雑のため挨拶をなすことを得ざりき、分列は県庁前日本大通り、12 時頃終了、それより商業専修学校にて宴会、簡単な弁当 (握り飯 3 個) 酒一合びん 1, 数十分にて散会、余は徒歩伊勢崎町を通り市電にて帰り学院に立よる

4 月 4 日 (木) 曇

9 時より中学部新学年教員会、千葉院長に来室を乞い (部長室) 新任の八木、松村、野田、小林信次 4 教員を紹介せり、9 時 10 分余司会し聖書朗読信仰上の奨励をなし学院教員としての重大なる責任は生徒に信仰上の導きを与えるにあることを力説し千葉院長に祈祷を乞い終りて協議会 11 時半頃閉会

4 月 21 日 (日) 晴、風強し

イースター Sunday、9 時頃学院に至るバプテスマの準備、会堂の両側の小室の整頓をなせり昨日改修完了、10 時 15 分礼拝中居牧師司会説教、終りてバプテスマ式中学部の 5 年小長井、4 年臼井の 2 生受浸 神戸の友井春吉氏出席 終りて教会青年会、食堂にて昼食終りて 0 時半頃合併教室に於いて茶会、第一部に於いて余一場の奨励をなせり余の信仰生活と復活と題して、故郷を出でたる少年時代のこと聖書と英語辞典を交換したることなり 2 時頃帰る

4 月 22 日 (月) 晴天

カンバルス先生より先生常用のアーム椅子校長用として送り来る、第 5 年修身授業昼食

うどん 2, 1 時半バス及び市電にて学院に来たり準備の午後院長室にて開かれたる臨時理事会に出席、余は一昨日千葉院長を経て副院長辞職願を出し協議せられたるも向こう 1 年は其の俤に置くようになり却下せられたり 高等部独立問題協議せられたり 5 時頃閉会夕食を共にして散会

4 月 25 日 (木) 晴大いに暖し 75° 位

Chapel 満員田中君司会 Dr. Decker 出席一場の奨励をなせり渡部一高教員通訳せり、渡部元牧師も出席、礼拝後 Covell 教員と余と Dr.Decker に校内を案内して見せたり、10 時まで渡部牧師と話せり 10 時より院長室に於いて経理委員会と財団常務理事会と合同 Dr.Decker を中心に会議を開けり、主とし

て高等商業部を廃すべからざる理由を述べ、Dr.Holtom 議長なり、12時半閉会せり前記諸員の外渡部理事と内田理事出席せり食堂に於いて昼食を共にして分かる

4月27日（土） 快晴

午後2時より中学部部長室に於いて東部組合財団法人設立に関する委員会時田主事、委員有馬君、小林喜一君、フィッシャー氏及び余（グレースット氏欠席）余議長となり会議4時半頃終了、時田君波止場にDr.Deckerの出發を見送るタクシーにて送らむ

5月3日（金） 快晴、曇

市立高等女学校に至り教育懇談会に出席、余はM.S.（注：ミッションスクール）は神社参拝を拒否するにはあらざることを力説し誤解なきようにせり（結城女学校校長の話により）午後3時半閉会（略）Miss Converse 遺産中より捜真女学校と同窓会に金¥1000.00の寄付金ありたり Mr.Gressittの手を通して多田君に依頼して来たるを（余不在のため）余は多田君より受領し捜真の斉藤君に渡せり

5月11日（土）

バスにて捜真に至り山下君及び斉藤君と建物特に土台が痛み居らざるやを点検せり（略）宮田君来たり建物を検査し土台の腐れ居るもの多し、（略）学院に帰り2時よりの理事会に出席（常務理事会也）ホルトム、アキスリング、グレースット、コヴェル、千葉、白山、時田（傍聴）、橋本、藤井、多田、フィッシャー及び余 4時半頃閉会終りてアキスリング理事長と過日副院長辞表のことに付き懇談せり5時半頃タクシーにて捜真に至り土台の検査の報告及び実地を宮田君と共に視る早速修理工事にかかるよう命じバス及び市電にて帰る

5月13日（月） 曇

Prayer meeting, Chapel 約420、午前9時木村清松師来着中学部特別伝道集会の為也、

千葉院長も来室懇談10時より全校を第二屋内体操場に集め栗沢宗教主任司会八木君聖書祈祷余紹介の辞を述べて金氏の独唱 次いで木村氏の大雄弁 満場感激12時少し過ぎ終わる 決心カードを募る六百数十名決心せり院長室に於いて5名木村先生と会食せり

6月5日（水） 晴

朝鈴木庸一生寄宿舎を代表して余の提案を拒絶せるを以って更に第2案夏休みまで現状継続して夏休み後T夫人を止めしめることを述べて午後2時までに回答を求めたり、（略）高等部事務室に於いてK書記自分の机の下に痰を吐いて足でこすりたるを見て激しく叱りたり、（略）3時より藤本氏の葬儀神奈川バプテスト教会に於いて行われたり、余は出席の心組みして礼服を着けて登校したるも先年同君を捜真より辞職せしめたる関係上余が捜真を代表して弔辞を述ぶることを遠慮し山下君を代わらしめ出席せざりき

7月26日（金） 晴

本日おやつ中2時40分頃要塞新司令官少将真野参謀及び副官を伴い自動車にて来観、余出でて挨拶をなせり、地利修養に適することを賞せり、西洋人来るかと問いたる故余り来たらず来たらぬようにせりと答う 写真を撮らぬよう注意を受けたり、大いに好意を示して帰る 尚平野大尉が来たりしやと問いたり約1ヶ月居り先週帰りたる旨答えたり 午後5時15分夕食、6時旗下し、直ちにカンラン山にて夕拝松村教員話せり、臼井生司会 午後7時半矢島教員の星の話

7月30日（火）

鈴木庸一生紀州南部にて水難、溺死 三崎タクシー横浜よりの電話を自転車にて取次ぎくられたり、鈴木庸一君南部（紀州）にて水泳中遭難の通知なり大いに驚けり、直ちに支度を整え（略）バス及び湘南電にて浦賀を経て帰る 中学部に立ち寄り直ちに帰宅（7時半頃）

中居牧師来訪し居たり 直ちに同道千葉院長を訪問澤野君も来合わせ澤野君と共に中居君の南部行きを送る

9 月 9 日 (月) 快晴

午後 2 時より職員会議 4 時頃閉会, Miss Pawley を紹介せり 同窓会役員会あり校長室に於いて, 余出席して在校生の同窓会費積立金に関し意見を述べ, 今月より卒業まで同窓会に渡さず学校会計に於いて積立保管することにせり

9 月 15 日 (日) 午前雨午後晴る

午後 2 時より鈴木庸一君の告別式に参列(略) 告別式に余学院を代表して弔辞を述べ, 4 時 5 分過ぎ閉会, 来会者三百名位, 自動車 7 台をつらねて三ツ沢墓地に至り埋葬 東京から熊野君, 中島牧師等会葬

9 月 17 日 (火) 雨

余の室で修身科, 内海, 栗沢, 八木, 山北君及び余重大なる協議 聖霊の導き豊かに, 木村清松師の大伝道を機としてその求道者の指導を YMCA の働きとし各組主任は各組ごとに之を指導すること, 信者にあらざる組主任も必ず出席すること組主任と監督部と宗教部と連絡を取りこれが強化に努め止むを得ざる場合に教員会議に提出して協議することにせり 八木君また謙虚なる感想を述べハンプル懺悔の祈祷を捧げて大いに感激せしめられたり, 5 時散会

9 月 21 日 (土) 雨

午前 9 時院長室に至り Mission の Questionnaire に対する回答相談, Dr. Chiba, Dr. Holtom, Mr. Fisher 集まる, 約 1 時間にて解散

9 月 27 日 (金) 快晴

今朝澤野良一君を余の室に呼び余の念願即ち近く学院を辞し捜真に尽力しその独立を完

うせんと, 余等夫妻は極めて単純な生活月 50 円位にて生活せんと 澤野君より其精神は賛成なるも学院を如何せんと, (略) 捜真に至る, Miss Pawley Mission に提供する Questionnaire の回答を示せりよく出来たり その発送を命ぜり 午後 4 時理事会, グレセット, 澤野, 山田, Pawley, 千葉出席, 森田理事欠席 6 時 10 分頃閉会

9 月 30 日 (月) 快晴

木村清松先生特別集会

6 時半少し前学院に至り木村先生大集会の会場祈祷会等の準備 7 時少し過ぎタクシーにてなると屋旅館に至り先生にお目にかかり先ず第一に祈る, 先生祈りて余祈る平賀牧師来会, 同乗学院に来たり 7 時 45 分より職員祈祷会に木村先生の奨励を頂き千葉院長平賀牧師も出席, 終りて 8 時 10 分から第一屋内体操場にて全校集会, 栗沢君司会余簡単に挨拶して木村先生の大説教 9 時半まで, 終りて暫時部長室に休憩の上タクシーにて宿に送らしむ(略) 12 時少し前 なると屋旅館にタクシーを送り木村先生同伴捜真に至り校長室に於いて昼食(うな井) 午後 1 時 10 分より貴志教員司会余紹介木村先生のお話し, 正味一時間半(平賀牧師も来会)(決心者 307 名 終りて各組毎に決心記名せしめたる結果) 終りて校長室にて茶話会(略) 先生を送り出して校内関係者だけにて今後の活動方法に付き懇談

10 月 2 日 (水) 雨

(木村清松先生) 1 時 10 分捜真 3 年以上のものにお話し 3 時少し前余最後に話をなせり校長室にてお茶 教員は 3 台の自動車にて関東に至りしも余は少し遅れて木村先生, Pawley, 中居牧師と 4 人にて同乗学院に来たる 3 時 30 分より学院中学部, 高等部, 捜真の教員職員 80 名中学部講堂に於いて奨励せらる約 1 時間, 余は先生を部長室に送り先生と別れの挨拶握手をなし直ちに講堂に引き返して大演説を約 30 分, 全職員に決心を

促せり、5時散会

10月4日（金）晴

3時30分余の室に於いて卒業生教員（中学部）全部を集め内海教員列席、余が祈祷を捧げたる後一人一人今回の木村先生宗教講演及び余の奨励に対しいかなる覚悟をなしたるかを述べしめたる後 余創立の精神を説き起こし信仰生活の実行、生徒を信仰的に指導すること自ら教会に出席して範を垂れること他日学院の院長となり部長となり教頭となり・・・大責任を負うに堪える準備をなすべきことを力説し内海君の祈祷を以って閉会す、終りて困った時は余の許に來たれ 米櫃に米二升あれば一升を分かたんと・・・泣くものありたり大いに緊張裡に散会せり

10月7日（月）晴夕方小雨

昼食後生徒一同を講堂に集め過日教員會議に於いて決定したるYWCAの働きを各組毎にして学校はこれを援助すること各組主任先生は責任を持つことを宣言せり、明日より実施のこと火曜日放課後正味30分、その時間帯はSports等を禁ず、学校内に残りおる者は出席すること然らざるものは帰宅すること（略）バス及び市電にて帰院 放課後修身科教員會議部長室に於いて、（略）明日の教員會議に提出するYMCAの集会のこと各組主任はその組の宗教教育に責任を負うこと…5時頃まで懇談して解散

10月12日（土）晴

千葉院長より電話あり院長室に至りて院長より本日の理事会は院長辞職することにしたるを以って過日經理委員會に於いて発表したる副院長及び英語学校長辞任のことは本日の理事會に提出せざる様にと申されたるを以って承諾せり Dr.Holtom 來会、神学部を青山に合同することを本日提案する旨話せり 12時半組主任會議臨時試験終了後各組毎に組主任教員がその組の宗教教育をすることを話せ

り（略）院長室の理事會に出席せり一般報告の後院長辞任の問題につき協議せり、本日は理事長一任次に予算一括承認したり、夕食を共にして再開8時半頃解散

10月23日（水）晴天

院長室に於いて經理委員會、米国よりの回答の手紙に対する返事のこと、高等部5年計画を遂行する返事に決す（略）澤野君と神学部 of 将来に関し話せり

11月5日（火）曇

第1時間目第5年修身授業終りて直ちにタクシーにて捜真行き米国婦人 Mission President Miss Smith 及びその秘書 Miss Maine 他一名の3人をChapelに伴い余司會して一場の奨励をなしたる後Miss Smithを紹介して一場の挨拶をなさしむ島村通訳せり、Chapel後Miss Pawleyと余と山下君と3人の客を案内したり校舎を隈なく巡視終りて余の室に於いてMiss Pawleyと余と共にMiss SmithとMiss Maineとに捜真の独立計画等に付き話をなせり、400人にて独立できれば校長のSalary3000円を米国より送付するよう努力する旨話ありたり、余は経済的に独立しても宣教師教員少なくとも2名は必ず送られたしと述べたり即ちMiss PawleyとMiss Acockそれにでき得ればMiss Nicholsonを捜真に専任を希望せり、（略）昼食後Miss Smithなどに過日運動会に行いたるプロネードを觀覽に供し大いに喝采を博したり2時半頃余はバス及び市電にて学院に來たり3時少し前Miss Pawley, Miss Maineを同伴參觀したるを以って半分余自ら案内し他の全部を渡部一高君をして案内せしめたり

11月27日（水）晴天

7時半学院に至る本日は教練査閲千葉院長、白山部長來室8時少しすぎ平野少佐査閲官三原鼎中佐殿を案内して來室、一同挨拶、8時25分第1屋内体操場に於いて一般礼拝栗沢

教員司会終りて余査閲官を紹介、終りて書類査閲それより閱兵等予定の通り滞りなく進捗し 11 時 30 分昼食、0 時半第 5 年…プログラムの通り実施、終りて高等商業部の教練を願により特に閲せらる、4 時少し過ぎ(茶話会の後)退席、タクシーにて平野教官横浜駅まで見送る、本日の査閲の結果極めて優秀なりとの講評を受く(列中に話声の無かりしこと全員動かざることは余は大いに感歎せりこれ嘗て見ざる好成绩なり)

12 月 7 日 (土) 晴

2 時 30 分学院臨時理事会、主として院長問題及び神学校問題につき協議、夕食後再開 7 時半頃閉会、千葉院長来年 3 月限り辞任その後任として千葉院長余を推薦せられ満場一致可決、中学部問題は学校当局に研究を委任せられたり

12 月 9 日 (月) 曇

昼食後職員全部を集め来る 4 月より学院長に任命せらるることを話し 従来よりも捜真のために尽くす余裕なきに至るべきに付き各位の奮励を一層望みたり 中西君来室(略)余が学院長就任に伴う捜真の任務上同君を主事に任命する内意を伝え考慮を促してかへせり

12 月 10 日 (火) 晴

県庁に至り教育会委員会に出席、昼食を共にして午後の会には失敬して帰校、午後千葉院長と懇談せり それより Dr. Holtom と院長室に於いて余と二人きりにて神学部の将来について懇談せり、とにかく 3 月末まで現状維持たることをすすめたり、(略)それより中学部教員会、千葉院長 3 月限り辞任し余を後任に推薦し理事会は満場一致可決したる旨報告 余これに应えて挨拶をなせり、6 時頃散会

12 月 19 日 (木) 晴天

Dr. Holtom と Mr. Fisher を余の室に呼び神

学部問題につき懇談、大体青山と合同することに余の腹を決めたり、Dr. Holtom と友井教授を送ること、他の職員は整理すること、但し澤野教員は高等学部の教頭に任ずることに決心せり、(略)昼食後澤野教授を呼び神学部合併のこと高等部教頭たるべきことに付き懇談諒解を求めたり

12 月 21 日 (土) 晴天

11 時半より 1 時過ぎまで院長室に於いて神学部問題につき懇談、千葉院長、澤野、友井、中居牧師及び余、結局青山に合同する余の決心の確たることを示して余は捜真にゆくために退席せり、昼食の後タクシーにて捜真に至る 2 時頃、山下君 3 月限り教頭辞職の旨を述べたるを慰留せり、それより会議室に於いて教員会議(略)中西教員主事任命を教員会議に発表せり

12 月 24 日 (火) 晴天

2 時学院高等部に至り臨時経理委員会白山君を除く外全員出席、神学部問題に関し協議青山に合併することにせり、4 時少し前閉会澤野君と暫く話して帰宅

12 月 31 日 (火) 曇

千葉院長より電話あり 9:30 頃訪問 Dr. Holtom よりの話につき数十分話しそれより中学部及び高等部にちょっと立ち寄り Mr. Fisher を訪ね Mission Board よりの手紙につき懇談その手紙を借りて帰宅、(略)食後余は Mission の手紙を読み明日の支度をなせり

一年回顧：今年は実に感謝に溢れたる年なりき、

○学院は八木君を再び得たるは千軍の援兵を得たるに等し 宗教活動は為に著しく活況を呈せり

○35 年前に始めてキリスト教の説教を聞かしたる木村清松師を聘して学院と捜真とに 3 日間の直接活動を願い両校に大いなる

霊道を与えられたるは真に感謝に堪えず

○鈴木庸一君を南紀に失いたるは大いなる
ショックなりき

○千葉院長の後任となるよう理事会の決定あり、任甚だ重きを感じず、只管に天よりの力の加わらんことを

○今31日にFisherより借用し閲読したるMissionよりの手紙は経済上の大打撃の通報、大いに考えさせられたり これを見たる余は万難を排して中学部を現状に至らしめたる事は誠に感謝に堪えず 何時までも米国の兄弟方のお世話になることはできない 併し米国Missionの悲況を知り勇気大いに加わる 我らは独立に向ひて勇躍せざるを得ず 神学校の問題、高等部の問題は何れも重大なり よく祈りよく考えて善処せざるべからず

○余は明年59歳還暦も近づけり 幸い健康なり 最後まで信仰の良き戦いを戦い通して天に還らんことを祈る

以上を記し感謝の祈祷をささげて就寝 時に午後11時也

ロバート・コールズに見られるボランティア活動と人間形成

所 澤 保 孝
高 野 進

Robert Coles' Methodology of Examining Volunteering and the
Formation of Individuals

Yasutaka Tokorozawa
Susumu Takano

はじめに

本研究ノートは、奉仕・ボランティア教育の課題の研究および建学の精神の研究の基本図書、ロバート・コールズ著『奉仕の呼び声』（原題）を取り上げた。これは参考文献の中で特に重要なものとして注目してきた。そこからボランティア精神の原点と研究手法を学び、これからの奉仕・ボランティア教育に適用することを目指している。

ロバート・コールズの略歴

1929年にボストンに生まれた。父親のフィリップは英国出身、技術者だった。母親のサンドラはアイオワ州出身であった。ボストン・ラテン・スクール（中等学校）卒業後、ハーバード・カレッジでは英語を専攻した。その後、医学進学準備課程は母校ハーバードで修了し、次にコロンビア大学医学部に進んで、そこを卒業した。

1958年に徴兵され、ミシシッピ州にある空軍キースラー病院の神経・精神科部長として勤務した。1965年にハーバードに戻り、エリック・H・エリクソン担当の講座「人間の一生サイクル」ティーチング・フェローに就任、1966年にはハーバード・カレッジの

一般教育担当講師となった。

1973年には『危機に瀕した子供たち』でピューリッツアー賞を授与された。

1977年にはハーバード大学医学部精神科と医学人文学教授となった。ハーバード・カレッジでも、「社会的な考察の文学」を担当した。

1989年にはダートマス大学精神科客員教授、デューク大学ドキュメンタリー・センター設立にかかわった。

コールズは児童精神医学分野の開拓者であり、開業はしないが精神科医師、医学部教授、文芸評論、詩作、伝記作家、その他いろいろな肩書きがつけられている。中でも、コールズは若い時期からボランティア・社会奉仕に強い関心を持っており、自らそれを実践してきた。ピューリッツアー賞を受賞している『危機に瀕した子供たち』では、移民家族や黒人家庭の子供たちなど、社会の底辺で虐げられている人々の心理を記述し、分析している。

この研究ノートは、『奉仕の呼び声』（邦訳では『ボランティアという生き方』訳者は池田比佐子、1996年。引用は原書及び邦訳ページを記載した）を手がかりとした。コールズのボランティアのあり方と人間形成について深く分析した知見に注目し、学ぶ価値があるからである。コールズ自身も長い間にわ

たって意識的にボランティア活動に従事してきた。それに彼は現場の多くのボランティア従事者から聞き取ったものから、彼自身が蓄積したボランティア活動と人間形成をめぐる洞察は、日本におけるボランティア教育者にとって多くのものを学ぶことができる。またコールズ自身が生涯かけて追求してきたボランティア活動の思想的、道徳的、心理的な原動力についての知見にも注目したい。今回は特にコールズ自身が深く影響を受けた人物との対話から彼が学び取ったものに注目してみた。

ロバート・コールズのボランティア・奉仕についての研究法

コールズは『奉仕の呼び声』を著作した目的についてこう述べている。重要な視点が扱われているので、長い文であるが、ここに引用したい。

「私は、他者のために、ひいては自分自身のためになされる『奉仕』について探求することを目的として、本書を書いている。私は奉仕の主観性や現象学を書き留めたい。つまりそのような行為が行われる際の多様な方法、特定の努力が遂行されるとき、多様な理論的根拠、衝動、価値観、達成と、つまりきや、失敗。個人的な好機と危機、そして結果、こうした活動がどんな風に人生の中に組み込まれるかを書き留めたい。さらに、社会奉仕と知的な内省の関係についても論じ、何らかの奉仕において、自らを他者のために役立てた人々にとって、物語や詩が思考の整理に大きく役立っているということを明らかにしたい。とりわけ、人間の行動を理解しようとする私の研究上の苦闘や、エリック・H・エリクソンやアンナ・フロイトとの数々の有益な議論に言及しながら、私たち人間の『良い』面を見つめ、倫理的な生活の源やその揺れ動き、勝利と敗北といった複雑さを解明するた

めに、精神分析のレンズを通して、理想主義や利他主義を眺め直したいと思う。」（原著 xxiv / 邦訳 19。訳文は邦訳に準じたが、一部独自に訳し直した。）

ここに引用した方法によって研究成果を報告するためには、社会科学の定量的な方法によるのではなく、コールズは物語・叙述的な手法をとることがもっともふさわしいと見るにいたっている。

コールズは、奉仕・ボランティアの有意義性をドロシー・デイから学んでいる。1955年2月に開かれたカトリック・ワーカーの集会でドロシー・デイが語った言葉にヒントを受けて本書の題名としたようだ。

「私たちに呼びかける声が聞こえてる。奉仕の呼び声——他の人々と力をあわせて、より良い世界をつくるようにとの。」(xxiii/19)

コールズは結論の記述の中でも、ドロシー・デイの上記の言葉の延長線で、奉仕という、小さなあかりをまとめていくことにより、世界をつくりかえるという理想主義を示している。これは彼自身が研究と実践において肝に銘じたことであった。

「彼女にとって奉仕の呼び声は、他者に向かう呼びかけである。つまり他者の心、精神、魂への呼びかけである。それは同時に自己の内なるものへの呼びかけである。自分自身への呼びかけである。それは忘れていたことを想起させる呼びかけでもある。『見張りの者よ、今は夜の何どきか』（イザヤ 21:11）。暗闇があるから、私たちの内に灯がともる瞬間が際立つ。この暗闇に対抗して、私たちは互いにそのあかりを照らしあい、やがて大きなあかりにまとめあげるのである。」

ロバート・コールズが思想形成のために対話した人たち

ドロシー・デイ

彼は「序論」の中で、彼の育った環境を語りながら、両親のこと、とくに社会改運動家

ドロシー・デイのカトリック・ワーカー運動に母親が関心を持っていたことを述べている。まだ6, 7歳の子供だったコールズは、すでにこの運動の精神がボランティア活動と密接に結びついていることを知っていた。後にコールズはドロシー・デイと交流を持っている。こうしてこの運動家から大きな影響を受けた。

ドロシー・デイは1897年11月8日にブルックリン・ハイツで生まれた。イリノイ大学を中退して、社会主義系の新聞『コール』で働いた。若いときには波乱万丈な生活を送った。続いて若くして平和運動に身を投じた。過激な編集者・作家としても知られた。1927年に、30歳で彼女はカトリック信者になった。「生涯を通じて、私の中に神が去来した」と彼女は語った。これはドストエフスキーの『悪霊』のなかのキリーロフの語った言葉から引用したものである。

その後、カトリックのメディアのために執筆もしている。1932年に、フランス農民のピーター・モーリンと一緒に働くことになった。この神父は貧しい人々とともに暮らし、彼らのために生きてきた人である。

ドロシーたちは1933年に『カトリック・ワーカー』第1号を発刊した。この月刊誌は、大恐慌のもとで苦しむ人たちの心の琴線に深く触れるものがあったようである。同労者のモーリンの立場は「ラディカルな政治思想というよりも、忘れられたキリスト者たちに糧を与えることのほうに、関心があった。政治的秩序に対しては、反対よりもむしろ無視の態度で臨み、強者に顧みられない者たちの間に、共同体の絆をしっかりとつくりあげようとしていた。』（『エスケイア アメリカの歴史を変えた50人』上 邦訳224ページ）ドロシー・デイはこれにとても共鳴したのである。彼女はニューヨークに慈善施設を設け、そこを拠点として、祈りと神学的討論と、飢えて食べ物を探している人々への具体的行動

を結びつける企てを実践した。

第二次大戦中も、ドロシーは平和主義の立場を守り続けた。彼女はいかなる形でも人を殺すことに反対した。そのために、戦争色に染まった当時の社会的な潮流の中で、彼女の運動に対して支持者数が激減してしまった。カトリックの良心的な兵役拒否者たちは、自分たちが属していた教会からも無視され、関わり合いを拒まれたこともあった。しかしドロシーはこの人たちの味方となって親身に世話をした。

また彼女はアメリカ政府による日系アメリカ人に対する冷たい処遇をめぐって厳しく政府を批判した数少ない有識者の一人であった。トルーマン大統領が原子爆弾投下の成功を喜んだという報道を知って、彼女は新聞にこう書いた。

「トルーマン氏は大喜びだった。トルーマン（真の男）。なんと奇妙な名前ではないか、さあ考えてみよう。」（同上 225ページ）

ジャーナリストのギャリー・ウィリスはドロシー・デイについて次のように評価する。

「ドロシーの言葉や彼女が示した手本によって、人生が変わったという人を、私は数十人知っている。その数十人は数百人、その数百人がさらに数千人、同じような知己を持っているだろう。『ザ・カトリック・ワーカー』も信愛の家も健在である。」（同上 225ページ）

彼女は心臓発作を起こして、数日後の1980年11月29日、ニューヨークで死去した。83歳であった。彼女は急進的なジャーナリストであったが後に生涯をかけてニューヨークの貧しい人々のため奉仕したのである。

すでに指摘したように、コールズはドロシー・デイとカトリック・ワーカーの活動を子供時代から知っていた。「当時、6, 7歳の子供だった私も、カトリック・ワーカーの精神が会員のボランティア活動と密接に結びつ

いていることを知っていた。」（原書x, /邦訳3）

カトリック・ワーカーの月刊新聞を購読しており、郵便配達人から毎月同紙を受け取って、笑顔でお礼の言葉を言う母親の様子を彼は忘れていない。それゆえ、彼は後にドロシー・デイの活動とその思想にさらに注目することになったわけである。

母親はその新聞の論説や、特集記事、それにドロシー・デイが自らの思想を述べたコラム欄などを父親に読んで聞かせていた。父親はカトリックの伝統や活動に関心がなかった。しかし父親はエンジニアの仕事を退いてから、生活困難者のために全身全霊をかたむけるようになった。父親にその使命をどうみていたのか、コールズは聞いてみたいと考えたが、父親からは十分な答えは得られなかった。しかしこう言ったことはあるという。

「母さんは私がやっていることに、どうしても理由を探したがるのだよ。だからこう答えたのだ。ほっといてくれ！ただ人と会って話したいことだけなのだから。」（xii / 6）

「何かをするのに、理由なんて必要ない。大事なものは、自分がしようとしていることが正しくてよい行いかどうかだよ。」（同上）

コールズはこう述懐している。両親は、それぞれのやり方で、奉仕という行為が持つ意味を真剣に考えるようにと教えてくれた。母親の場合は、奉仕は宗教的義務であり、彼女が信奉するカトリックの伝統の不可欠な要素であった。そのためボランティアとして貧しい人たちの面倒を見る診療所や、給食施設で働き、またガンを患っている子供たちの世話をした。父親の場合は、奉仕は何よりも行動であり、困窮している人たちと感傷をさしはまさない明快な交友関係を持つことであった。

コールズはこのような家庭の伝統の中で育ったのである。後にニューヨーク市内のコロンビア大学医学部に入ったので、ドロシー・デイの活動場所に近いところで学んでいた。

医学部の最初の2年間は暗記中心ばかりで、勉強に興味をもてなくなって、彼は脱落寸前になっていた。

そのとき、彼はマンハッタンのロウアー・イーストサイドで活動していたドロシー・デイを訪ねた。そこで彼もボランティア活動をしなから、自分は彼女が働く活動の場に相应しくないのではないかという自責の念に駆られたこともあった。

ある日、彼はドロシー・デイに自分は偽善者だと告白した。すると彼女はこう答えた。

「もし偽善者にここで働くことを禁じたら、働いてくれる人は一人もいなくなるでしょう。……私たちは毎日自分にできる精一杯のことをするように努力しているのです。——たとえ間違ったところや、至らないことがたくさんあっても。」（xxv / 21）

彼女はさらにこう加えた。

「プライドを持つがゆえに、自分がとても悪い人間に思えることがあります。本当はただひたすら一日一日を生き、時々つまづいているだけなのに。」（同上）

この言葉を聴いて、まだ若かったコールズは、彼女を誤解して、しばらくそこを離れていた。

しかし数年がたってから、彼はドロシー・デイに再会した。彼は奉仕という概念の複雑さがわかり始めたという。彼はこう記す。

「奉仕は私たちが行う行為だけではなく、私たちが何者であるかということ（言うまでもなく、これは私たちの行為に形を与える）の機能をもつ」（xxvi / 22）

コールズはその後ドロシー・デイと交流を持ち続けて、多くのことを学び取っている。

ドロシー・デイは長い間、理想主義に関心を持ってきて、よきわざを行うという義務を果たしてきた。しかしコールズに言わせれば、彼女は理想主義の定義や説明をすることは避けてきたという。彼が、なぜ今のような生活を送るようになったのか、その理由を彼女に問うと、彼女は神様の御心にしたがうよ

うに努力しているからだとか、そのような生活を送るようにイエスが皆に望んでおられるからだ、と答えるだけだった。やがてコールズは、彼女が理想主義という言葉を使わないで、もっと正確な表現を用いて言おうとしたことに気がついた。コールズはドロシー・デイが話してくれた、次のような回顧を引用する。

「私どもが若かった頃、ロウアー・イーストサイドに住んで、飲んだくれや、浮浪者、ホームレスと呼ばれる人たちのために、毎日、食べ物をかき集めるようになるなんて、夢にも思わなかった頃、——私は多分自分のことを『理想主義者』だと考えていたし、他人にもそう呼ばれたいと思っていた。・・・

当時の私として理想主義者になるということは、何らかの政治的立場をとり、ある社会的姿勢を貫き、そうした信念のために、喜んでわが身を捧げることを意味しました。・・・あの当時、考えたり、話したりしたことを振り返ってみると、気恥ずかしい思いがしますけど。」(184 / 272)

コールズは自分たちの理想主義が唯我独尊に墮してはならないとする。ドロシー・デイが若いときに過激な活動家であったことも含めて、彼はここでコメントしている。

「若いジャーナリストであったドロシー・デイは、思春期の終わりから、正しいと信じるもののために、厳しい現実社会と闘い、常に自分が信奉する主義主張のために記事を書いた。しかし・・・大事なものであっても、まさにその理想主義に対しても、無知であってはならぬということを自ら戒め、私にも警告してくれた。」(185 / 274)

1977年12月初旬に、コールズはハーバード大学の学生9人を連れて、ドロシー・デイと面会した。場所はマンハッタン東一番街の「聖ヨセフの家」にあるカトリック・ワーカーのいわゆる「スープキッチン」(無料給食施設)だった。ここは貧困者のためにスープやパンなどを提供する活動の場所である。彼女は厨

房に立ち、セロリを刻んでいた。それが済むと、次にニンジンにとりかかった。スタッフの一人は彼女についてこう述べた。

(彼女は)「働けるときは働きたいのです。とりわけここへ食事をしに来るゲストたちと雑談するのが好きなのよ。」(209 / 306)

ドロシー・デイは学生たちにこう語った。

「スープを作ってゲストに出すことで、行かないを通してお祈りしているという実感が得られます。言葉でお祈りするだけは、時々不満がたまります。言葉の後や前に、ちゃんと行動が伴っていないかしら、と考えてしまうのです。私はもう歳で、残された時間は少ないけれど、頭の中では、神様の前で、神様の御心に沿って精一杯働いているところを示そうとしている、昔ながらのドロシーなのです。」(209 f. / 308)

そして彼女はこうも付け加えた。

「お医者様から2、3日は寝ていなさいと、きつく言われると、これでは自分や、他の人のために祈り、まともな食事を求めてやってくる貧しい人たちのために、[活動を通して]お祈りすることができなくなるな、と感じるのです。」(210 / 308)

これに対して学生はこう言った。「あなたはすでに、この人たちのためにたくさんのことをしてこられたではありませんか。」

それに対して、彼女はこんな答え方をした。

「すべて神様がなさったことです。私たちは神さまの必要を満たす道具になろうとしているだけです。」(同上)

学生はそれに満足せず、こう反論した。

「でもそれを成し遂げたのは、あなた方ですよ。」(同上)

ドロシーは一瞬沈黙して後に、こう答えた。

「そう誰かの命令を受けてね。」

彼女は神の名を出さずに、「より大きな意志に应えて」とも言い換えている。

学生がこれにも納得していないところを見て、ドロシーはこう答えた。

「お祈りすれば、教えてもらえます。問い

かけには答えが返ってくるのです。それが返ってくると、あの方の思い、考えが伝わってきます。」(210 / 309)

彼女の深い信仰の力を解することのできない学生は、執拗に質問を投げかけた。これ対して彼女はこう答えた。

「私たちが、ここにいる人たちは、・・・自分たちのしていることを犠牲だとは考えてないのです。・・・よいことをしたいから—こういう仕事をしているのではありません。・・・ここで働いていると、心の底から幸せを感じることがたびたびあります。それはキリストの精神が仕事の中に生かされていると思うからです。・・・しかしもちろん人間ですから、偽善者や、詐欺師になることもあるのです。」(211 / 310)

他の時に、コールズはドロシーに長時間インタビューした後、多大な協力をいただいたことに厚くお礼の言葉を述べ、そこで別れようとしたところ、彼女はこうも述べたことがある。

「ゲストもカトリック・ワーカーの一員なのです。あの人たちがいなければ、私たちがこのところにいる意味はないでしょう。ランチを出し続けているうちに、あの人たちの存在がどれほど大切か、どんなに多くのものを与えてくれるかということに気づきました。」(234 / 339)

ここで「ゲスト」というのは食事の提供を受けに来る人たちのことである。彼女は彼らをキリストが招く来賓として受けいれて、大切な存在として扱う。

彼女はコールズに彼らに会って直接に声を聞きなさいとも助言する。そのインタビュー内容も多く示唆に富むが、それは別の機会に分析することにしたい。

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ

コールズはウィリアムズからもボランティ

ア理解について思想的感化を受けた。ウィリアム・カーロス・ウィリアムズはペンシルバニア大学で医学の教育を受けた。ニューヨーク市でインターンを経験した後、ドイツに渡り、ライプツイヒで小児科学を研修して帰国した。彼は富裕な人たちの住む地域で開業することもできたが、敢えて故郷に帰り、近くのパターソン市で貧困家庭の人たちを対象に医療活動をした。詩人、作家でもあった。1963年に彼は死後であったが、彼の最後の作品に対してピューリッツァー賞を授与された。コールズは同じ医師として共感するところがあったのでもあろう何度も、ウィリアムズの医療の現場を訪ねた。コールズは本書の巻末注記のおいてこう記している。

「これまで手がけた研究は、ウィリアムズ先生に出会わなければ、何ひとつ完成できなかったであろう。たった一人の人間が研究生生活全体を形作るほどの影響力をもつことになった。」(289 / 421)

ウィリアムズは彼にとって研究指針となっただけでなく、一生涯奉仕の精神を実践する生き方も学ぶことになった。ハーバード大学学部在学中にペリー・ミラー教授の指導を受けたときに、ウィリアムズの詩が課題図書の中に入っていた。それが最初に関心を持つきっかけであった。彼は学生時代にウィリアムズの詩やその他の著作を読んだ。ウィリアムズは彼の作品の中で、満足のいく生活や、社会的な評価を得るために、社会の中で奮闘している普通の人々の生活を描写していた。こうしてコールズはウィリアムズの記事や思想に引かれて、この人にぜひ会いたいと願っていた。

コールズがウィリアムズを訪ねたとき、診療に追われて、ゆっくり話し合う時間がなかった。しかしウィリアムズはこれから往診に行くので、もしよければ一緒に行かないか、と言ってくれた。こうして二人は患者の家を回った。その時、ウィリアムズはこう述べたという。

「教師というものは、学生が理解している事柄を評価するだけでなく、自分が押し付けている知識に対して、学生が従順な態度を取るつもりがあるかどうか、評価するのだ！」(181 / 268)

これは教える者と教えられる者、医師と患者、ボランティア活動においては、与える者と受ける者の関係について、きわめて厳しい洞察の言葉でもあった。

ウィリアムズはコールズの面前で患者の欠点を非難することもあった。しかし彼はすべての患者に対して公平な態度をとろうというも努めていた。これはコールズが観察して、学び取ったことであった。治療費を払えない人にも、あるいは一部しか払えない人にも彼は等しく治療を施した。しかも治療費の請求額は極めて小額であった。借金を帳消しにしたこともあった。

コールズによれば、ウィリアムズは無私無欲の心で人々を助けながら、その接し方がそこ住む人たち同士のようにぶっきらぼうで、さげすんだような言葉を発することがあった。

しばらくして後に再び、コールズがウィリアムズに会ったとき、彼はこう言ったという。

「この前、ここへ来たとき、医者になるならいい仕事をしたと言ったね。だとしたら貧しい人に対して感傷的にならないほうがいいよ。彼らの面倒を見ている自分自身に対してもね。」(181 f / 269)

ウィリアムズの説明によれば、他人にかけた恩義を思って、自分で感傷にふけるのは、理想化の一形態であり、他人に不当な重荷を負わせることになるという。しかし治療に当たっては、いつもベストを尽そうとしてきたとも彼は言ったという。(182 / 270)

患者に面と向かうときには、「なんとしてもこの人たちを助けたいし、精一杯の診療をしたい、と切に願ってきた」とも言う。(同上)

コールズはウィリアムズと会話しながら、自分のあり方として学んだことをさらにこう

記述している。

患者に対する姿勢としては、ウィリアムズは「人の身になって考えるようにつとめている」(24 / 57) という。しかし彼はそのことの難しさも吐露していた。

「私たちは、自分の世界に没頭して、エゴイストになる傾向がある。自分の殻に閉じこもってしまい、外へ出たいと思っても、なかなかできない。だから殻を破って、入り込んで、私たちを連れ出してくれる人の助けを必要としている。」(24 / 58)

「何事も学べる場所で学べ」(18 / 50) とウィリアムズは現場主義を伝授している。学んだことを現場で実践し、しかも実践の現場から学ぶことを助言する。

コールズがウィリアムズとともにパターンソンの貧困家庭を訪問したときのことである。ウィリアムズは生き生きとしており、愛嬌たっぷりであった。しかもたくみに振舞っていた。彼はポケットからハーシーのキシチョコを取り出して、床に置き、子供たちがそれを手に取るのを待ってから、ほくも食べていいか、と聞いた。それからいろいろ教えてやったのだから、ほくにも助言をしてくれないか、と頼んでいる。そして耳に手を当てて相手の言葉に傾聴しながら、横目ではアパートの様子や、人々が身に着けているものを細かく観察していた。こうして彼らをよりよく理解しようとした。

ウィリアムズはこうも言ったことがあるという。

「ちょっと手を浸すのではなくて、体ごと飛び込もうとしているのだ。しかもあまり波を立てずにね。」(26 / 60) ボランティアの心構えがここにある、とコールズは学び取った。

ペリー・ミラー

ペリー・ミラーはシカゴ生まれの、アメリカ文学者、評論家、ハーバード大学教授である。コールズは学部学生時代に教授の下で毎

週一冊課題図書を読んで、報告した。コールズはペリー教授との面談の中で自分がやっているボランティア活動の中で体験したことを語り、教授から助言を受けた。コールズがボランティアでスラム街の子供たちに国語と算数の面倒を見ていたが、あるとき、ペリーという少年が「なぜ先生はここに来るの?」と質問してきた。彼は答えに窮してしまった。このことをペリー教授に話したところ、今度、ペリーに聞かれたら、どう答えるつもりか、と教授に逆に問われた。彼は「わかりません」と答えた。このとき、ミラー教授はコールズの返事を非難せずに、「そうだね。わかるよ。」と言ってくれた。それから、教師が生徒からいろいろ学ぶことができることを覚えておくべきだ、と助言してくれた。

教授はさらにこんな風に考えてごらんと言った。

コールズはその助言をこのように要約している。これはボランティア研究にとって示唆に富むので注目したい。

他人のために何かをすれば、庇護者ぶった振る舞いのせいで、相手に大きな戸惑いを感じさせる恐れがある。「ノブレス・オブリージュ」を実践しているのだ、という高慢な意識を露わにすることになるからだという。

「とてもしばしば、私たち教師を捉える道徳的不均衡がある。それは他人に奉仕をして、最善のものを与えている、と私たちは考えてしまうことである。そして私たちは、自分たちも教え子から奉仕を受けていることを忘れて。」（177 / 263）

このあと、コールズはボランティア先でペリーに会ったときに、ペリー教授の示唆を自分なりに言い換え、こう答えた。

「この学校に来るのが好きだし、自分の住んでいる場所から出られるのが嬉しい。それに何ととっても、もとの世界に戻る途中で、近くの店に立ち寄り、濃いコーヒーとイタリヤ風パイを食べることができるのが嬉しい。」（同上）

教える者が教えられる者と同じレベルに立って、自分も同じ人間なのだと告白することによって、両者が気兼ねのない時間を共有できるということを、学生だったコールズは学び取った。

ミラー教授は、まず自分が楽しまなければ、他人のために献身することができない、とも助言してくれたという。またもっと肩の力を抜いて、現実的で、即物的な考え方をしたらどうかとも、コールズに忠告している。（188 / 267）

ボランティア活動に当たって、客観的に自分を見るために、このような「メンタリング」（mentoring）の時間が必要なのである。

アンナ・フロイト

アンナ・フロイト（1895 - 1982）は有名なジグムント・フロイトの末娘で、英国の精神分析学者である。コールズは彼女を「私の師」と言う。彼女がイェール大学に客員教授として来ているときに、彼はしばしばニューヘイブンにいるフロイトを訪ねており、さらにイギリスにまで行って交流をもった。

コールズはボランティアをめぐる議論したクラスの模様をフロイトに見てもらっている。彼女は微笑みながら、こう言ったという。

「この話し合いには、あなた方全員が加わっているのね。つまりあなたは『子供の道徳観の発達』という名目の研究を行いながら、そういう子供たちの助けを借りて、あなた自身の道徳的問題について考えているのではないかしら。それからボランティアの若い先生だけれど、彼は人生をどう生きるべきか、決めている。ということは、彼もまた何かを学ぼうとしているのよ!」（xxii / 17）

フロイトの説明によれば、そのボランティア教師を見てわかるように、観察者はほかの人間を観察しながら、自分自身のジレンマと闘っているのだという。コールズがそのことについてさらに説明を求めると、フロイトはこう答えた。

「あなた方は皆、そのクラスに全身全霊を傾けていたのでしょう。あなたは観察者でありながら、自分が観察しているものの一部であるの。青年教師は勉強を教えているけれども、授業中の教室は、彼にとっては実験室であり、彼はそこで何かを学んでいるのよ。」(同上)

コールズはアンナ・フロイトとの議論において「メンタリング」のことを取り上げた。ボランティアとして子供や青少年と交流を持つとする者は「メンター」になって「メンタリング」を行おうとしている。近頃は、「メンタリングを受けている者」は「メンティー」(mentee)と言われる。そういう新語までできている。

アンナ・フロイトのコメントは次のようなものであった。

「そんな言葉を若いボランティアが意識し始めたら、どういうことになるかしら。メンターとはもともと尊敬すべき人物、人から信頼される賢い助言者、相談役、教師であり、指導と鼓舞を与える源になる人のことよ。若い人にそこまで望むのは、酷じゃないかしら。若い人でなくても、誰だってそんなに多くのことを要求されてはね。」(96 / 156)

フロイトは「メンター」と呼ばれる存在については、心理学的意味まで考えるのが当然だと言う。このことについて、コールズはフロイトに会った後に、帰路の車の中で思い巡らしたことがあるという。子供たちや、大学生、医学生と過ごしてきて、今日のメンタリングは、友情、教育、指導、鼓舞が混ざり合っているのではないかとコールズは気がついた。

数ヵ月後、彼は再びフロイトに会い、ボランティア活動で出会っている子供たちのことを説明し、彼らとの対話を録音したテープを聴いてもらった。このとき、フロイトはギリシア古典の知識を背景にしてこう語った。

「メンートルとテレマコスとオデッセイウ

スの話は、あなたの知り合いの子供や、彼らのメンターたちと関係ないんじゃないかと思っているよね。・・・ギリシア神話のメンートルは神のような存在で、父親の信頼を受けて、息子を託される。そしてその子を激励して、成長を助け、父親と同じように、善良で慎み深く、勇敢な人間に育て上げるの。」(111 / 174)

「ところであなたの知り合いのメンターは、どんな人なの？・・・子供たちと人種が違う場合も多いようだし、社会階級はたいいてい違うみたいね。・・・大事なのは、年上の者が導こうとしている子供の姿勢よ。問題は子供のほうについていく気があるかどうかね。」(同上)

ここで重要なことは、子供のほうが回りの世界から受ける社会的・人種的な圧力にどんなに脅かされても、メンターと気持ちを通わせて、メンターの理想や価値観を吸収して、すでに子供が持っている自分の理想や価値観に結びつけることでしようとフロイトは言う。軽々にメンタリングという言葉を使えないことについて、コールズは教訓を得たことになる。しかもフロイトは、ボランティア活動を受ける子供たちに対する使命の重要性を汲み取ろうとしている。

コールズは、フロイトに法科大学院に学ぶカールトンについて話したことがある。カールトンは大学2年生のときに、彼の兄を交通事故で失った。その後、理想主義者の兄を思い、兄の願いを実現するために弁護士になった。フロイトはこの青年についてこうコメントしたという。

「その青年弁護士は、お兄さんとの結びつきを捨てなかったのね。・・・理想主義的な法律の仕事を立派に実践している。しかも楽しんでるよね。・・・かつてお兄さんが彼のためにしてくれたように、他人を救い、他人のために闘うとき、象徴的な意味で古い傷が癒されることによって、理想主義が維持

されているのです。」(202 f / 296 f)

フロイトにとっては、理想主義や博愛主義は、人の身になって考え、相手のもろさや、苦しみを理解した上で、行動を起こすことであった。コールズはそうのように理解した。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア

キングはバプテスト派牧師、公民権運動指導者であった(1929 - 68)。実はコールズと同じ年に生まれた。それゆえコールズはキングの活動を見てきて、深い共感を持ってきた。アトランタにまで行って、しばらく滞在しており、公民権運動指導者たちと知り合い、親しい交流を持った。本書には、キングとの対話は報告されていないが、運動家たちにキングが直接語るところに居合わせている。

キングは、1964年のある時、公民権運動の同志たちに向かって、自分たちと闘争の相手との関係について「お互いのことを、どんな風に考えたらよいか」と問いかけた。

「私たちにとっての大きな危険は、敵対する人たちからの誘惑に乘せられてしまいそうになることです。……人種差別主義者と呼ばれる人々の多くは、普段の生活では、違った振る舞いをしていることです。……隣人や家族に優しく、仕事では人に役立つ快活な人間かもしれません。悪意でなく、徳をもち、敵意と偏見ではなく、寛大さを備え、無知ではなく、教養のある人間なのです。もうお分かりでしょうが、どんどん突き進めば危険にぶつかります。……私は近頃、それが心配でならないのです。」(32, 33 / 69, 70)

コールズはキングが相手を同じ人間として認め合うことの大切さを運動家たちに訴えていたことに注目する。

同じ年、キングが暗殺される4年前であった。キングは若いリーダーたちに燃え尽き症候群の心配を語ったことがある。

「私たちが持っている力は限られています。それを使っていけば、もっている力がだんだん減って——しばらくすると、ある時点で

すっかり弱りきってしまいます。…自己れんぴや、悪意、自己への陰鬱な執着に屈服してしまうのです。そして、それを抑鬱、バーンアウトと読んで結構です。自己の内部から善良さが叩き出された後に、罪が勝利をおさめたと解釈することもできます。……理想主義にしたがって生き抜くことには、危険が伴います。」(同上)

理想を実現しようと熱心なあまり、焦燥に駆られて、過激に走ったり、燃え尽き症候群や、抑鬱に陥る危険をコールズは精神科医として見てきており、ボランティア活動の担い手の仲間に助言している。

まとめ

コールズの著作『奉仕の呼び声』(The Call of Service)から、コールズ自身が高校生時代からその後に精神科医師になっても、ボランティアを続けて、そこから学び取ったことをめぐって、自分の人生の先輩たちと対話しながら、ボランティアのあり方と自分自身の人間としての成長を考えている。彼は精神科医師また教師として、他者を理解し、他者をよき市民として育てるために貢献することになった。原書のタイトルは意味深い。ここで使われている「of」は所有・所属を表す「の」ではなく、起源・原因・理由を表す「から」「のため」を意味する。つまり現場からの「呼び声」「叫び」なのである。またそれは目的関係を表す「を」でもあって、奉仕を訴えているとも理解することができる。

コールズが対話した、あるいは学び取った著名な人々のうち、本研究ノートでは5人について注目したが、日本の奉仕・ボランティア教育と活動のために役立つ示唆を最後にまとめておきたい。

ドロシー・デイからは、毎日自分にできることを精一杯やること、食事を求めてやってくる人々に、偽善ではない、敬意をもって接すること。彼女は那些人たちを「ゲスト」と

呼ぶ。その人たちからたくさん学ぶことがあるという。その人たちに食事を作って提供すること自体が、祈りの行為だともいう。

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズからは、貧しい人々の中に入り、その人たちを愛して、できる限りの医療活動をしてゆく。自分が学んだものを社会のために役立たせることを教えてくれた。

ペリー・ミラーからは、他の人々のために奉仕する時には、決して上位に立っているという意識を持つてはならないこと、むしろ相手から学ぶことがあり、奉仕を受けていることを忘れてはならないという示唆を受ける。

アンナ・フロイトからは、古代ギリシャの「メンター」という言葉の含蓄から、安易な使い方に注意しなければならないことを教えられる。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアからは、理想主義の追求にあたり、焦燥に陥ったり、燃え尽き症候群にかかる危機があることに気づかされる。

ある女性牧師が東日本大震災に遭遇して、九死に一生の中で、一命を取り留めた。絶望と喪失感の中で生き抜き、その後このように述懐している。

「写真を撮っている人たちが嫌でした。信仰的に何かを語ろうとする人さえ、立派に書き上げた牧師の説教でさえ、いやでした。……黙っていてくれ、と言いたい気分でした。……水やパンをもってきて静かにそばにいてほしかったのです。笑顔で手を握ってくればよかったのです。あるいは、ともに祈りをしてくだされば、十分だったのです、と叫びたい気持ちは今も変わりはありません。」

すべてを失って、津波のあとに立って、茫然自失の中、この方はそばにいてくれる人が欲しかったという。

「しばらくして落ち着き始めたころ、心配してくださった方々に私は言いました。『生きるに疲れました』。私は安息を求めました。

主イエスの胸に抱かれて思い切り泣きたい、深い眠りに入りたい、心の底から死を望む自分がいました。一方深い虚無感に襲われた気がします。すべてが嫌になりました。」

疲れ果てて、深い眠りにつきたいとの願いは、死を望むほどであったという。

しかし、次にこの女性は苦しむ人たちのために何かをしなければと考えた。

「私たちは牧師として何か善いことをしなければならぬという義務感に襲われる、それは、あって当然のことと思いますが、深い人間理解が伴わないところで、かえって人の気持ちを傷つけてしまうのではないのでしょうか。」

(鈴木ペーソンヒ「震災の体験を通して」『共助』第7号、2011年11月発行)

良心的な人であれば、何か善いことをしなければならぬ、という義務感や、負い目を感じるのは自然の感情であろう。しかしここで指摘されている次の言葉に重みがある。

「深い人間理解が伴わないところで、かえって人の気持ちを傷つけてしまうのではないのでしょうか。」

ロバート・コールズが関心を持って研究して来たことは、ボランティアとの関連で、この「深い人間理解」に迫ろうとしていることである。

「与える者と受ける者」「教える者と教えられる者」「尽くす者と尽くされる者」「導く者と導かれる者」の関係について、コールズは、ドロシー・デイ、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、ペリー・ミラー、アンナ・フロイトから学び取り、つぎに続く世代にその知見を伝えようとしている。また自分たちもそれ追求して欲しいと願って研究方法を提示してくれている。

[参考資料]

Robert Coles: The Call of Service – A Witness to Idealism, 1993

[邦訳]

ロバート・コールズ著、池田比佐子訳『ボランティアという生き方』1996

[書評]

Scott London: 'The Call of Service' by Robert Coles
- A Book Review

<http://www.scottlondon.com/reviews/coles2.html>

Frederic & Mary Ann Brussat: Book Review: The
Call of Service

<http://www.spiritualityandpractice.co/books.php?id=065>

[関連著作]

Scott London: A Way of Seeing: the Work of Robert
Coles—A Bibliographic Essay

<http://www.scottlondon.com/articles/coles.html>

Beth Gazley & Monica Dignam: The Decision to
Volunteer. 2008

[その他]

雑誌『共助』第7号 2011

『エスクァイア アメリカの歴史を変えた50人』

上 1988



（共同研究者——所澤保孝，リサ・ボンド，渡辺光一，細谷早里，高野 進。本研究ノートの執筆責任者は所澤保孝，高野進）

2011 年 「坂田祐」 研究プロジェクト活動報告

帆 莉 猛

Report of Dr. Tasuku Sakata Study Project, 2011

Takeshi Hogari

1, 2011 年度研究会報告

(2011 年 1 月～12 月)

・2010 年度第 5 回研究会

2011 年 1 月 29 日 (土) 10 時半～12 時半
8 名参加

講 師 坂田創氏

テーマ 『坂田日記』(1934 年 1～6 月)

研究

関東学院の SCM 運動は 1932 年に終息するが、その影響もあり、社会事業部は学生数が減少し、明治学院と合併授業を行う。捜真女学校は、後援会「真窓会」が発足する。

講 師 三浦啓治氏

テーマ SCM 運動

SCM の流れ、および、関東学院の SCM の経過、学生の逮捕について、作成した年表やその他さまざまな資料を通して紹介された。

・2011 年度第 1 回研究会

2011 年 6 月 4 日 (土) 10 時半～12 時半
10 名参加

講 師 坂田創氏

テーマ 『坂田日記』(1934 年 7～12 月)

研究

7 月に入ると、中学部の野外教練が三崎宿舎で行われる。その間、15 日には志願者へのバプテスマ式が行われる。さらに、7 月 21 日に終業式を迎えると、3 週間にわたって三

崎宿舎の夏季合宿が開かれる。さらに引き続いて、8 月 13 日から 27 日までの 2 週間は捜真週間として捜真の生徒、計 78 名が参加する。その間、19 日には諸磯海岸で捜真の生徒 6 名のバプテスマ式が举行される。

・2011 年度第 2 回研究会

2011 年 7 月 9 日 (土) 10 時半～12 時半
9 名参加

講 師 坂田創氏

テーマ 『坂田日記』(1935 年 1～6 月)

研究

関東学院社会事業部が 3 月 31 日付で廃止され、関東学院セツルメントも閉鎖される。Dr.ホルトムが神学部長に就任する。

捜真では、名誉校長、ミス・カンパルスが 1 月 24 日永眠し、2 月 6 日に学校葬が行われる。

・2011 年度第 3 回研究会

2011 年 10 月 1 日 (土) 10 時半～12 時半
7 名参加

講 師 坂田創氏

テーマ 『坂田日記』(1935 年 7 月～12 月)

研究

関東学院では、9 月 30 日から 10 月 2 日まで、坂田の入信のきっかけを与えた木村清松氏を迎えて特別集会を開催する。12 月 7 日の理事会で、千葉勇五郎院長が退任し、その後任として坂田が院長になることが決定される。また、神学部は青山学院と合併すること

が経理委員会で決定される。

捜真では、8月29日に宣教師、ミス・ポーレーが来日する。

講師 三浦啓治氏

テーマ 『坂田祐と日本バプテスト青年同盟』

三浦氏より「日本バプテスト青年同盟」について紹介していただいた。坂田は設立当初から「日本バプテスト青年同盟」の指導的な立場で活動していた。この青年同盟が理事会に提出した「東京学院を横浜に移転・拡張を要望した建議書」が関東学院として実現したのだ、という。

・2011年度第4回研究会

2011年11月5日（土）10時半～12時半
8名参加

講師 坂田創氏

テーマ 『坂田日記』（1936年1～6月）
研究

テンネー名誉院長が1月11日米国で永眠する。1月27日の創立記念日にテンネー名誉院長の追悼式が挙行される。前年12月に理事会で決定したように、千葉勇五郎院長が3月で退任し、4月1日より坂田が新院長に就任する。また、神学部は青山学院と合併する。

・2011年度第5回研究会

2011年12月10日（土）10時半～12時半
9名参加

講師 坂田創氏

テーマ 『坂田日記』（1936年7～12月）

この時期は、まず関東学院に関することとしてはミッション本部より、おそらく経済的な問題と思われるが、高商部を廃止するか、独立するかの決断を迫られる。坂田は苦慮した末、廃止せずに独立する道を選ぶ。またテンネー記念講堂の建設のための募金を開始する。

また、捜真関係では新校舎を建築し、さらに、カンバルス記念講堂建設のための募金を開始する。

このほか、矢嶋先生と帆莉が11月26日（土）「白虎隊記念館」に出かけて、早川館長父子と学院関係の資料の展示の件で協議してきたことを報告した。

2. シンポジウム「坂田祐とご祖父・白虎隊隊長日向内記の思想と行動」

（「キリスト教と日本の精神風土」と合同）

2011年3月4日（金）午後3時～5時45分

白虎隊記念館館長・早川廣中氏、会津郷土誌出版『おもはん社』社長・富田国衛氏、作家・中村彰彦氏を迎えて、「日向内記が若い白虎隊隊士を戦場に残したまま逃亡した」という従来しばしば取り上げられていた見解について、近年の研究を踏まえて検討を加えた。

詳細は、本号の『シンポジウム報告』をご覧いただきたいが、富田氏の詳細な研究の成果によるところが大きいと思われるが、「日向内記が隊士を残したまま逃亡した」という見解は訂正を余儀なくされた。（中村彰彦氏は「白虎隊 140年目の真実」（『オール読物』10月号）で、従来の説が修正されたことについて紹介して下さっている。）

3. 会津「白虎隊記念館」訪問、および、パネル展示の件

11月初めに矢嶋先生が白虎隊記念館館長、早川氏と交渉する中で、早川氏は関東学院の展示スペースを拡大して下さるとの意向を示して下さった。そこで、学院および大学の了承を得て、11月25日（金）、26日（土）、矢嶋先生と帆莉と燦葉会の本田梧郎氏で会津の白虎隊記念館を訪問し、展示スペースを確認してきた。今年度中に、パネルが展示される予定である。

2011 年「国際理解とボランティア」研究プロジェクト活動報告

リサ・G・ボンド
勘 田 義 治

Report of the International Understanding Volunteer Study Project, 2011

Lisa Gayle Bond
Yoshiharu Kanda

中国南西部に位置する雲南省は中国と東南アジアとの通商における接点、文化を中心とする交流史の豊かな蓄積が古くから存在する地域として夙に有名である。また多種多様な少数民族が生活する新奇かつ美しい山々は観光資源としても注目され、多くの観光客が国内外からこの地を訪れる。ラオス、ミャンマーと国境を接す同省シーサンパンナタイ族自治州には茶、バナナ、ゴムの広大なプランテーションが広がり、大型トラックやタンクローリーが絶え間なく国境ゲートを通過し、まさに「ヒト・モノ・カネ」が動いている様相を呈す。

19 世紀初頭、欧米諸国プロテスタント宣教会の中国伝道が開始され、その後アヘン戦争に敗北した清朝政府は開港場での伝道を認め、欧米の世界伝道の潮流を背景として宣教団による内地伝道が始まった。教団は宣教事業とともに教育や出版印刷、医薬治療に進出し、その後、中国の共産化によって「三自愛国運動」とも密接に関わって伝道活動を展開した。当時の諸教派宣教師間においては、東アジア（中国、朝鮮半島、日本）を一つの伝道圏として捉えられ、この地域の宣教は歴史的に見て、決して別々に展開されてきたわけではなく、むしろ相互関連の内にあったといえる。

さて上述の中国におけるキリスト教伝道史に関する文献は主に漢人への伝道を主要な対

象とし、雲南省における少数民族民族に対してなされた布教の経緯について記されたものは多くはない。漢民族という強大な民族の中にあって、民族としての主権国家を持つことのなかった少数民族に対しての民俗学、文化人類学的な研究は多くの研究者によってなされているが、タイ北部山岳地帯少数民族にはビルマで、あるいは中国・雲南省でキリスト者となった者が多いという現状を踏まえ、東アジアのキリスト教を一つの研究対象とする意味とその根拠について明らかにした研究は少ない。

そこで本プロジェクトでは「雲南省における少数民族の生活変化とアイデンティティに見るキリスト教の変遷」と題した調査活動により、雲南省少数民族におけるキリスト教の受容の経緯を明らかにし、中国伝道の開始とその意味を検討しながら、布教、改宗が彼らにどのような影響をもたらしたのか、を解明する調査活動を行った。調査においては「辺境」「少数民族」という中央からの位置づけとは異なる彼ら自身の世界観、神観に視点を置き、両者がどのように変化しているのかを生活実態とアイデンティティの両面から明らかにすることとした。

調査活動は関東学院大学と昆明理工大学との共同研究とし、両大学から派遣された研究員による調査団を構成した。本学からは調査員として森島牧人研究員、勘田義治客員研究

員、吉川成美客員研究員、昆明理工大学からは調査員・コーディネーターとして洪涛客員研究員が参加し、タイ国立タマサート大学東アジア研究所より客員教授栗野淳一氏がアドバイザーとして、タイ国内アカ族プロテスタント派教団アカ・チャチーズ・イン・タイランド財務理事ヨハン・チェルマー氏、事務長アドゥ・マヤー氏が現地アカ族集落での聞き取り調査通訳として参加した。尚、調査結果は2011年度本プロジェクト研究会にて取りまとめ、2012年度第2次調査活動の基礎資料とし、2012年度所報にて発表される。

1. 研究会

計7回（2011年1月～12月）

2. 研究調査活動

タイ北部山岳少数民族アカ族

第5回2011年3月9日～22日（2010年度）

第1回2011年6月1日～7日

第2回2011年12月24日～

2012年1月1日

2011年度所属研究スタッフ

・研究員 森島牧人（文学部）

・所 員 リサ・G・ボンド（工学部）

・客員研究員

勘田義治（文学部非常勤）

吉川成美（早稲田大学環境塾）

洪 涛（昆明理工大学外国語言文化学院
専任講師）

大西純（弘前大学国際交流センター教授）

森島豊（長崎平和教会牧師）

佐々木和之

（ルワンダ・リーチNGO現地職員）

島田正敏（関東学院六浦小校長）

山本直美（専修大学非常勤講師）

加藤壽宏（中央学院大学非常勤講師）

2011 年「いのちを考える」研究グループ活動報告

松 田 和 憲

Study Group on “Consideration of Life (INOCHI)”, 2011

Kazunori Matsuda

いのちを考える研究グループにおいては、「いのち」という多様な意味と価値を内包するテーマについて、さまざまな観点から検討を進めている。2010 年度は、大学生のいのちの捉え方についてインタビュー調査を通して検討を行った。つづく 2011 年度は、このような特定のテーマを設定し 1 年間継続的・集中的に検討を行うというスタイルはとらなかった。代わりに、いのちについて改めて幅広い観点から検討することをグループの活動目標とした。メンバーのさまざまな専門的を活かし、各々の観点から「いのち」というテーマについてアプローチし、いのちの研究を進めていく上での課題を共有することができるよう運営した。

また、2011 年 4 月からは、研究グループの新しいメンバーとして、関東学院大学カウンセリングセンター カウンセラーの長谷川伸江氏が加わることとなった。長谷川氏は、臨床心理士・カウンセラーという専門的立場から、いのちに関する新しい観点をグループに提供してくれることとなった。

2011 年の活動は次の通りである。

2010 年度第 5 回研究会

「インタビューに関する暫定的報告」

報告者：鈴木公基所員

(2 月 22 日 (火) 開催)

大学生のいのちに対する認識に関するにイ

ンタビュー調査を行った分析結果について暫定的な報告がなされた。いのちの認識については個人差が大きいということ、特に、個々人のいのちの認識とその説明、すなわち、例えば、いのちを大切に思うその理由について個人差が大きいということが報告された。

2011 年度第 1 回研究会

「今年度の研究予定について」

(4 月 19 日 (火) 開催)

7 名のメンバーが集まり、今年度のグループの活動の方向性についての話し合いが行われた。話し合いの結果、本年度は、ひとつのテーマに絞らず、幅広い観点からいのちについて検討を行っていくことをグループの活動目標とした。また、3 月 11 日に発生した東日本大震災とその後の人間やいのちのあり方、考え方についても検討する機会も設けることが確認された。

2011 年度第 2 回研究会

「西表島での現地調査・老人へのヘルパーの諸問題」

報告者：加賀谷真梨客員研究員

(5 月 24 日 (火) 開催)

加賀谷氏の西表島での現地インタビュー調査の結果について報告がされた。加賀谷氏がフィールドとしている西表島での老人の生活とそこに関わるヘルパーとの関係について、

主に老人の語りから分析が行われた。西表島の文化に老人ヘルパーという現代的な役割が関わることの意味と課題について検討された。

2011年度第3回研究会

「緩和医療における心理的ケア」

報告者：長谷川伸江客員研究員

（6月21日（火）開催）

終末期における緩和ケアの意味について、事例分析を通して検討した結果が報告された。死を目前にした患者にとって僅かな時間をどのように過ごすことが大切なのか、また、そのような患者に関わるカウンセラーの役割とその意味について検討された。また、緩和ケアそのものの課題について、活発な議論が展開された。

2011年度第4回研究会

「いのちの大切さと重みに関する大学生3名に対するインタビュー調査の結果」

報告者：鈴木公基所員

（11月29日（火）開催）

大学生のいのちの認識について、特に「いのちの重み」に関する認識について、インタビュー調査を通じた分析結果が報告された。いのちの重みについては、対象としたすべての大学生は、いのちの重みは人にとって同じである、という認識をしていたが、その根拠とする考え方には大きな個人差が見られ、その意味・要因と今後の課題について議論が展開された。

2011年の活動は、以上で終了となった。

なお、東日本大震災を踏まえた、研究グループの取り組みとして、2012年1月14日（土）にシンポジウムを開催予定であることを付記する（場所：関東学院大学関内メディアセンター）。

2011 年「奉仕ボランティア教育」研究グループ活動報告

細 谷 早 里

Study Group on the Problem of Service Education and Its Practice, 2011

Sari Hosoya

2011 年 1 月, 2 月の研究会は 2011 年度から開始する関東学院大学の戦略的プロジェクト研究の助成を受けるべく, おもに研究内容の決定と, 申請書作成のために時間を使った。幸い助成を受けることができたため, 4 月からの活動は助成されたプロジェクト研究「関東学院大学の建学の精神, 教育観, およびその実践の社会的需要に関する研究」を中心に調査研究を行ってきた。また, 東日本大震災後, 震災被災地における本学学生のボランティア経験の調査も行った。プロジェクト研究は現在も進行中である。

2010 年度

- 1 月 26 日 (水) 2010 年度第 5 回研究会
12:00 ~ 15:00 参加者 4 名
- ・ 関東学院における教育観・奉仕観の研究 J・F・グレースットについて (影山先生報告)
 - ・ 2011 年度 関東学院大学 戦略的プロジェクト研究 申請書の作成
 - ・ 今後の計画について
- 2 月 10 日 (木) 2010 年度第 6 回研究会
11:00 ~ 15:00 参加者 5 名
- ・ 戦略的プロジェクト研究申請のための話し合い
- 2 月 28 日 (月) 2010 年度第 7 回研究会
13:00 ~ 17:00 参加者 2 名
- ・ 戦略的プロジェクト研究申請書完成のた

めの会合

2011 年度

- 5 月 19 日 (木) 第 1 回研究会
16:30 ~ 18:00 参加者 5 名
- ・ 今年度の計画の進め方について
- 6 月 9 日 (木) 第 2 回研究会
16:30 ~ 18:00 参加者 5 名
- ・ 東日本大震災ボランティアについての調査を行う
 - ・ 調査に向けての質問作製開始
震災被災地ボランティア活動の経験についてのアンケート
(動機, 満足度, 参加希望について)
- 6 月 23 日 (木) 第 3 回研究会
16:30 ~ 18:00 参加者 5 名
- ・ 調査質問項目の決定
 - ・ アンケート調査の技術的方法について
- 7 月 7 日 (木) 第 4 回研究会
16:30 ~ 18:00 参加者 5 名
- ・ 7/6 のボランティアオリエンテーション報告 (所澤先生, ボンド先生)
 - ・ 本学学生ボランティアの調査準備
 - ・ 国立情報学研究所 NIA で奉仕ボランティアの情報報告 (渡辺先生)
 - ・ 『関東学院 125 年史』『関東学院の源流を探索』のデータベース化の報告 (所澤先生)
- 7 月 21 日 (木) 第 5 回研究会
16:30 ~ 18:00 参加者 5 名

- ・ 奉仕ボランティアに関する構造項目の準備

9月22日（木）第6回研究会

16:30～18:00 参加者5名

- ・ ボランティア活動体験について（リサ・ボンド先生報告）
- ・ アンケート調査結果の分析についての話し合い

10月27日（木）第7回研究会

18:00～19:30 工学本館 4F

教養科目教室 参加者5名

- ・ ボランティアに関するアンケート調査について

構造方程式モデルから、奉仕体験の言説・事例の自由回答アンケートに変更する（統計言語分析）

建学の精神、理念と現実を結ぶボランティア教育という考え方

リンフィールドとの比較調査も視野に入れる

その他米国のキリスト教大学、宗教のない大学との比較

- ・ 所報への投稿

震災ボランティア中間報告（ボンド先生）

コールズのボランティアと人間形成（高野先生）

11月17日（木）第8回研究会

18:00～19:30 工学本館 4F

教養科目教室 参加者5名

これまでの振り返り及び今後の研究・作業の確認

12月8日（木）第9回研究会 18時より

参加者4名 工学部教養科目教室

アンケート調査の質問項目完成

2011 年「依存症とキリスト教」研究グループ活動報告

安田 八十五

Report of the Study Group on the Dependency and Christianity , 2011

Dr. Yasoi Yasuda, Marco

1. 研究の概要：

本研究グループの主たる目的は、「依存症」(Dependency)及び「依存症社会」(Dependent Society)の構造と特質をキリスト教の視点から分析し、解決のための方法と手段を探り、さらに実践することにある。ことに、依存症からの回復のために安田・三井・田代等が実践しているキリスト教に基づく12ステップ方式による自助グループの活動(Christian Living Group (CLG)キリスト教12ステップグループ)を外展展開し、その有効性を検証し、普及をめざすとともにその学問的裏付けを強化する。本研究プロジェクトは、2007年(平成19年)度から設置され、2010年度で研究プロジェクトは一旦終了し、2011年度からは共同研究グループとして再出発した。2011年度は、通算第5年度目であり、着実に研究を進めることが出来、下記に示すような大きな研究成果を得た。

2. 研究計画と研究課題：

本研究プロジェクトは、当初、2007年度－2009年度の3カ年計画で一旦終了する予定であったが、研究所からの要請により1年間延長し、2011年度からは共同研究グループとして再出発した。主な研究課題としては、引き続き下記のテーマを計画し、研究を進め

た。

- ①依存症に関する総合的調査研究－人文社会科学研究及びキリスト教との関係の調査研究
- ②依存症社会に関する総合的調査研究－人文社会科学研究・社会システム論的アプローチ及びキリスト教との関係の調査研究
- ③依存症と依存症社会に関するキリスト教との関係の基礎的調査研究
- ④依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの実践と実践的研究
- ⑤大麻・不登校・引きこもり等の最近の大学生等に起こっている学生依存症問題に関する研究

2011年度(平成23年度)の研究計画と研究日程は、下記のように実践した。

定例研究会の開催・合宿リトリートセミナーの開催・12ステップ方式自助グループ(CLGと協同)の実践と発展・公開シンポジウムの開催・出版計画の準備

3. 2011 年度(平成 23 年度)の研究会活動の実績

第1回研究会(通算 第20回研究会)

日時：2011年7月30日(土)

午前10:30－12:30

会場：関東学院大学 KGU 関内メディアセンター K803 会議室

内容と講師：安田八十五（関東学院大学経済学部教授・キリスト教と文化研究所研究員）
「神は存在するか？－神の存在証明への科学的アプローチの意義と課題－」

第2回研究会（通算 第21回研究会）

日時：2011年9月2日（金）17:30－

9月3日（土）16:30（1泊2日）

会場：関東学院大学葉山セミナーハウス

内容と講師：「依存症とキリスト教」研究会
2011年度合宿セミナー研究会

- ①田代泰成「精神的落ち込みの解釈学的分析」,
 - ②安田八十五「神の存在に関する科学的方法と課題」,
 - ③黙想会Ⅰ『最新のキリスト教的心理療法FAP』（三井純人）,
 - ③黙想会Ⅱ（神谷・金井等が担当）,
 - ④神谷『LD（レクツィオ・ディヴィナ 聖書で祈る）』,
 - ⑤金井「スピリチュアリズムの紹介」,
- その他。

第3回研究会（通算第22回研究会）

（マクロエンジニアリング学会循環型社会研究会と共催）

日時：2011年11月12日（土）

10:30－12:30

会場：関東学院大学関内メディアセンター
801（横浜メディア・ビジネスセンター8階）

内容と講師：公開シンポジウム

テーマ＝「PPP（公民連携）と持続可能な発展」

講演1：藤木 秀明（東洋大学 PPP 研究センター リサーチパートナー）：

「PPP の概念整理と新しい公共」

講演2：二宮 浩輔（山梨県立大学国際政策学部 准教授・博士（経済学））：

「ODA における PPP と環境社会配慮」

司会：安田 八十五

（関東学院大学経済学部教授・工学博士）

4. 研究論文の公表（予定）：

『キリスト教と文化』, 第10号, 関東学院大学キリスト教と文化研究所・2011年度所報, 平成24年3月発行（予定）：

- ①安田八十五（2012）, 「神の存在と役割に関する科学的分析－神の存在に関する数学的証明の言葉による説明－」
- ②三井純人（2012）, 「AA の12ステップのプログラムの普遍的特質についてⅡ－ユング心理学における内向・外向のパーソナリティ理論からの構造分析－」

2011 年「バプテスト」共同研究グループ活動報告

村 椿 真 理

Report of the Baptist Study , 2011

Makoto Muratsubaki

1, はじめに

本研究グループは2010年度より取り組まれた、かつての「バプテスト派の歴史的貢献」研究プロジェクトの流れを汲むものであった。このグループは、2006年度、「研究所・叢書」第1号として関東学院大学出版会から『バプテスト派の歴史的貢献』を刊行し、2009年10月には「研究所・叢書」第2号として『バプテストの宣教と社会貢献』を刊行し、単行本の出版という業績を残した。その後、プロジェクトの主なる活動は、「教科書、バプテスト史」の刊行に移ったため、従来の研究チームは2011年度からの研究本格始動を探り、再出発したものである。統一的研究テーマを一応「バプテストと教育」として始め、参加研究者の専門範囲からこのテーマに合わせられるよう検討することとした。

なお、前年度までのプロジェクトの成果、教科書の刊行もこの場にて簡単に報告することとする。

2, 活動報告

1) 構成員

先ず、共同研究の構成メンバーは以下の7名であった。過去に所属した幾人かのメンバーは今回参加していない。

代表：所員、村椿真理、所員：影山礼子

客員研究員：金丸英子、斎藤剛毅、
内藤幹子、原真由美、
古谷圭一、

2) 今年度、定例会報告

第1回定例会 6月2日(木)

午後17時半～18時半、出席4名。

於、キリスト教と文化研究所

報告と新年度の主題協議。

新メンバー紹介 今後の予定

第2回定例会(研究発表は流会)

7月14日(木) 午後18時より定例会、
出席5名。

報告と研究発表

村椿真理氏「レスターシャーに於ける
ジェネラル・バプテスト、ニューコ
ネクションの起源」 Barton in Beans
におけるバプテストの誕生と分蜂

第3回定例会

10月27日(木) 17時半より、19時まで、
出席4名。

キリスト教と文化研究所にて

報告と研究発表

古谷圭一氏「四谷教会の昭和初期 渡部
元と江谷林蔵」パワーポイントによる
詳しい発表が行われた。

3, 2012 年度の活動予定

2012 年度は、研究者それぞれの研究テーマを掘り下げながら、共通テーマをめぐる研究発表を中心とした研究会を計画したい。また、様々な理由で今年度未発表の研究員にも、発表に加わって貰えるようにしたい。

4, バプテスト研究プロジェクトの教科書刊行

2011 年 5 月 30 日, 「見えてくるー バプテストの歴史」関東学院出版会から出版された。

4 年をかけたプロジェクトであったが、出村 彰先生を監修者に招き、学外の研究者と共に執筆、編集したものとして、学術的バプテスト通史としてよい評価も既に各方面から頂いている。感謝して改めてここにご報告するものである。これは本学のキリスト教学の講義の教科書とされている他、西南学院大学神学部でも、また日本バプテスト神学校でも教科書として用いられている。

出版感謝会

出版感謝会は監修者が東北で被災されたこともあり、時期をずらして 2011 年 11 月 2 日（水）午後 1 より、福岡、西南学院キャンパスにある「西南クロスプラザ」ゲストルームにて、枝光泉氏を除く、監修者、執筆者全員が集い恵の内に行われた。

2011 年度「資料委員会」活動報告

矢 嶋 道 文

Report of the Resource and Reference Committee, 2011

Michifumi Yajima

1. 委員会報告

(1) 第1回「資料委員会」

6月22日 午後6時

(キリスト教と文化研究所)

報告事項

1. 2011 年度所員会議報告（委員確認）
2. その他

審議事項

1. 安井聖先生の委員就任について
2. 資料委員会「活動方針・計画」について
3. その他
(資料)
 - ① 2006 年度「資料委員会」活動報告書
 - ② 2010 年度「資料委員会」活動報告書

(2) 第2回「資料委員会」

12月1日（木）17時から18時

報告事項

1. 貴重書保護カバーの購入について
昨年に引き続いての継続事業であることから、貴重書保護カバーを購入したことが報告された。
2. 日向内記に関するシンポジウムテープ起こし経費の負担について
本年度は、坂田研究会の予算捻出が難しいことから（出版事業を予定）、初代学院長に関係するシンポジウムの資料保存と

しての観点から、資料委員会の予算にて捻出したことが報告された。

3. その他

勉強会として、杉並教会の松岡先生を講師として呼び出すことを確認した。
(その後、松岡先生はご多用のため、川島第二郎にお伺いすることになった。)

審議事項

1. 旧プロテスタント史研究所所蔵図書の整理について
1月26日(木)16時より図書館本館にて、各委員が整理・分担にあたることを打ち合わせた。
2. 貴重図書の購入について
村椿先生に昨年度購入貴重図書の継続候補をあげて頂くことにした。
3. その他
資料委員会終了後の運営委員会にて、坂田日記のデータベースについて、公開の範囲を制限する方策が協議され、資料委員会と広報委員会で協力し、案を作成することになった。

2. 旧プロテスタント史研究所所蔵図書の継続調査について

1月26日(木)16時より図書館にて、矢嶋、中村、安井各委員が継続調査にあった。2年

間のブランクがあり、この間に資料全体が移動しており、本館地下に移されていた。確認の結果、残されているのは約50冊程度であり、3月に整理し、4月以降に登録を完了する。

**（3）東京外語大学講師加藤 栄一先生からの
資料調査の依頼と勉強会の開催**

加藤先生からの訓点新約聖書などに関する調査の依頼があり、資料委員会では、2月21日（火曜）ご専門家の川島第二郎先生と加藤先生をお招きし、勉強会を行うことになった。

2011 年「広報委員会」活動報告

中 村 友 紀
簀 弘 幸

Report of the P.R. Committee, 2011

Yuki Nakamura
Hiroyuki Mino

広報委員会は、関心を寄せてくださる全ての方々に向けて、研究所の活動を知っていただくべく、様々なメディアを通して広報活動を行っています。

本年度も引き続き、(1) ニュースレター等刊行物の編集・出版、(2) ホームページの運営管理、コンテンツ充実、(3) 坂田日記プロジェクトのウェブへのアップロード作業、等の業務を行いました。

[ニュースレター]

本年度は以下の3号を発行した。

- ・ニュースレター第28号(8頁, 2011年8月発行)
- 1) 巻頭言: 2011年度の研究活動(帆刈猛 所長)
- 2) 2011年度各プロジェクト・グループ活動計画
- 3) 2010年度公開シンポジウム報告
「国境を越えて行きかう人・金・物」
- 4) 所員・研究員紹介(平坂文男 所員, 栄本和子 研究員)
- ・ニュースレター第29号(4頁, 2011年12月発行)
- 1) 巻頭言: 奉仕に生きる(森島牧人 学院長)
- 2) 救援ボランティアに続くこれからの関わり(松田和憲 所員)
- 3) 寄稿: 取り結べる〈絆〉/取り結べない〈絆〉
(加賀谷真梨 客員研究員)

・ニュースレター第30号(8頁, 2012年3月発行予定)

開所10周年記念号: 10年間の歩み

なお、バック・ナンバーは、ホームページに掲載している。

[ホームページ]

2011年度の各グループ・プロジェクトページの年次更新およびニュースの更新を行なった。

[坂田日記プロジェクト]

坂田祐研究プロジェクトグループにより解読された坂田日記の一部(1923年9月～25年, 1928年～29年, 1944年～46年)は, xoops を使って研究所ホームページにアップロード完了。

委員会報告

2011年「所報編集委員会」活動報告

鈴木 公基

Report of the Bulletin Editorial Committee, 2011

Kouki Suzuki

所報編集委員会は、本誌「キリスト教と文化」第10号編集のための委員会である。2011年度の所報編集常任委員として、安田八十五研究員（経済学部特約教授）、リサ・ゲイル・ボンド所員（工学部教授）に加わっていただき編集作業を進めた。

2011年9月27日開催の所報編集委員会、ならびに9月28日開催のキリスト教と文化研究所運営委員会にて、所報の編集方針および編集スケジュールが決定された。具体的には、キリスト教と文化第10号においても9号までと同様に投稿論文に対する査読を行うこと、投稿論文の申し込み締切を2010年11月1日とすること、論文原稿提出の締切を2010年11月22日とすること等が確認された。

今回も多くの論文および研究ノートの投稿をいただいた。これらは、厳正な査読と審査を経て最終的な採択・掲載が決定される。

2011年の所報編集委員会としての活動は以下の通りである。

2010年度 第2回所報編集委員会

（2011年1月20日（木）18時～20時）

所報キリスト教と文化第9号の第2回編集委員会に先立ち、各論文の査読結果を1月第2週に各執筆者に送付し、修正作業を依頼した。修正原稿の返送は1月19日（水）に締め切られた。第2回の編集委員会においては、

査読結果と修正稿を検討し受理および受理形式についての審議を行った。その結果、2編を特別報告、4編を研究論文、4編を研究ノートとして受理することを決定した。各論文は入稿し、微修正に関しては校正原稿完成後各執筆者に依頼することとした。

2011年度 第1回所報編集委員会

（2011年9月28日（水）18時～19時）

今年度の所報の編集方針および編集スケジュールが検討・決定された。また、所報第10号における課題について確認し、変更点が決定された。

2011年度 第2回所報編集委員会

（2011年11月24日（木）18時30分～

19時30分）

論文投稿が11月22日に締め切られたのを受け、投稿された論文、研究ノートについて査読者の決定が行われた。8編の論文と研究ノートが投稿された。また、キリスト教と文化第10号の編集方針および今後の編集スケジュールについて確認が行われた。

この後、査読結果の決定、論文修正作業、修正結果の確認、入稿、および校正を経て、2012年3月にキリスト教と文化第10号が発刊される予定となっている。

関東学院大学キリスト教と文化研究所

『所報』（『キリスト教と文化』）に関する内規 （趣旨）

第1条 この内規は、関東学院大学キリスト教と文化研究所『所報』（以下『所報』という。）の執筆および発行に関し、必要な事項を定める。『所報』の表題は、『キリスト教と文化』とする。

（発行）

第2条 『所報』の発行は、年1回を原則とする。

（編集）

第3条 『所報』の編集は、所員等から選ばれた編集委員会が行う。

（執筆）

第4条 執筆者は原則として本研究所の研究員、研究員および客員研究員とする。

（原稿）

第5条 原稿は、未発表のものに限り、内容は、論文、研究ノート、翻訳、資料（史）料および書評とする。

この他に、研究所主催の講演会、シンポジウムまたは研究会などの原稿も掲載することができる。

2. 本誌はレフェリー制を採用する。

（原稿）

第6条 原稿は研究所が別途定める編集委員会規定にもとづいて作成する。

（配布・保管）

第7条 『所報』は、研究所員、専任教員、学生ならびに本学と研究誌を交換する大学（特例）および学術機関に配布し、図書館と研究所に累加保管する。

第8条 第10号（2012年3月発行）以降に本誌に掲載された原稿は、すべて関東学院図書館のウェブサイトに掲載される。

第9条 この内規によらない事由が生じたときは、所員会議の議を経て、所長が決定する。

（内規の改廃）

第10条 この内規の改廃は、所員会議の議を

経て行う。

附則1 この内規は、2002年11月14日から施行する。

附則2 この内規は、2005年9月29日から改正施行する。

（キリスト教と文化研究所所員会議02年11月14日承認）

（キリスト教と文化研究所運営委員会05年9月29日承認）

（キリスト教と文化研究所運営委員会11年10月20日承認）

関東学院大学キリスト教と文化研究所

『所報』（『キリスト教と文化』）編集についての 申し合わせ

1. 原稿の執筆を希望する場合は、所定の期日（原稿締め切り日の約1ヶ月前）までに、原稿のタイトルと種類、予定枚数を所定の用紙に記入して、編集委員会に申し込む。
2. 原稿の字数は、原則として横書き16,000字（400字原稿用紙換算で40枚）を基準とし、20,000字（400字原稿用紙50枚）以内とする。ただし、書評については、4,000字（400字原稿用紙10枚）を基準とする。いずれの原稿も、図表、注なども換算して字数に含める。

原稿は、完全原稿で提出するものとする。

原稿は、原則としてフロッピーディスクなどの電子媒体およびプリントアウトしたものを提出する。

3. 本誌は、レフェリー制を採用する。論文と研究ノートについては、編集委員会が審査を行ったうえで、「掲載」「書き直し」あるいは「返却」を決定する。
4. 執筆者には、抜刷50部を無料で贈呈する。
追加分については、50部単位として執筆者の実費負担とする。
5. 本誌は、毎年3月に発行する。
原稿の締め切りは12月末とする。
6. 執筆者には、原則として初校と再校を見ていただく。校正段階での大幅な変更や書き加えはお断りする。

（キリスト教と文化研究所所員会議02年11月14日承認）

2011年度キリスト教と文化研究所 主な活動経過（2011/1/1～12/31）

日付	時間	開催内容	備考
1/13（木）	19：00～20：30	2010年度第6回運営委員会	キリスト教と文化研究所会議室
1/19（土）	10：30～12：30	2010年度第5回坂田研究会	キリスト教と文化研究所会議室 出席者8名
2/10（木）	15：00～16：30	2010年度バプテスト共同研究会	キリスト教と文化研究所会議室
2/14（月）～ 2/15（火）	1泊2日	2010年度依存症とキリスト教 研究グループ研修会	葉山セミナーハウス
2/22（火）	16：15～17：50	2010年度いのちを考える研究グループ 第5回研究会	キリスト教と文化研究所会議室
3/4（金）	10：30～12：00	2010年度第2回所員会議	
3/4（金）	15：00～17：30	特別合同シンポジウム 「坂田祐先生とご祖父・白虎隊隊長日向内 記の思想と行動」	フォーサイト10階中会議室 参加者：55名
4/19（火）	17：00～19：00	「いのちを考える」研究グループ 第1回研究会 （今年度の研究予定について）	キリスト教と文化研究所会議室 出席者7名
4/21（木）	19：30～21：00	第1回所員会議	キリスト教と文化研究所会議室 出席者7名（所員）・3名（事務方）
5/19（木）	16：30～18：00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第1回研究会 （今年度の研究予定について）	経済学館315 細谷早里研究室
5/19（木）	18：00～20：00	第1回運営委員会	キリスト教と文化研究所会議室 出席者9名（運営委員） 3名（事務方）
5/24（火）	17：05～18：40	「いのちを考える」研究グループ 第2回研究会 発題者：加賀谷真梨 客員研究員 “西表島での現地調査・老人へのヘルパー の諸問題”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者7名
6/2（木）	17：30～18：00	バプテスト共同研究グループ 第1回研究会 （今年度の研究予定について）	キリスト教と文化研究所会議室 出席者5名
6/4（土）	10：30～12：30	坂田祐研究プロジェクト第1回研究会 発題者：坂田創 客員研究員 “坂田日記研究（1934年7～12月）”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者9名
6/9（木）	16：30～18：00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第2回研究会 （アンケート調査項目の作成・研究発表に ついて）	経済学館315 細谷早里研究室
6/21（火）	17：05～18：45	「いのちを考える」研究グループ 第3回研究会 発題者：長谷川伸江 客員研究員 “緩和医療における心理的ケア”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者5名
6/22（水）	18：00～19：00	資料委員会第1回定例会 （今年度の研究予定について）	キリスト教と文化研究所会議室 出席者2名
6/23（木）	16：30～18：00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第3回研究会 （質問項目の決定・アンケート調査の技術 的方法）	経済学館315 細谷早里研究室

2011 年度キリスト教と文化研究所 主な活動経過 (2011/1/1 ～ 12/31)

7/7 (木)	16:30～18:00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第4回研究会 (ボランティアオリエンテーション報告)	経済学館 315 細谷早里研究室
7/7 (木)	18:00～20:00	第2回運営委員会	キリスト教と文化研究所会議室 出席者9名(運営委員) 2名(事務方)
7/9 (土)	10:30～12:30	坂田祐研究プロジェクト第2回研究会 発題者:坂田創 客員研究員, 三浦啓治 客員研究員* “坂田日記研究(1935年1～6月)” *“関東学院社会事業部・ 神学部の廃止とSCM”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者9名
7/14 (木)	17:50～19:15	バプテスト共同研究グループ 第2回研究会 発題者:村椿真理 所員 “レスターシャーにおけるバプテストの発展”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者5名
7/21 (木)	16:30～18:00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第5回研究会 (奉仕・ボランティア教育観とその実践に についての調査)	チャブレン室
7/30 (土)	10:30～12:30	「依存症とキリスト教」研究グループ 第1回研究会 発題者:安田八十五 研究員 “神は存在するか?—神の存在証明への 科学的アプローチの意義と課題—”	関内メディアセンター K803 会議室
9/20 (火)	17:00～17:30	「いのちを考える」研究グループ 第4回研究会	キリスト教と文化研究所会議室
9/22 (木)	16:30～18:00	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第6回研究会	チャブレン室
9/28 (水)	18:00～19:00	所報編集委員会第1回定例会 (所報の運営方針の決定, 募集の確認)	キリスト教と文化研究所会議室 出席者3名
9/29 (木)	18:00～19:30	第3回運営委員会	キリスト教と文化研究所会議室 出席者8名(運営委員) 2名(事務方)
10/1 (土)	10:30～12:30	坂田祐研究プロジェクト第2回研究会 発題者:坂田創 客員研究員, 三浦啓治 客員研究員* “坂田日記研究(1935年7～12月)” *“坂田祐と日本バプテスト青年同盟 —中学関東学院の成立—”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者7名
10/20 (木)	18:00～19:30	(臨時)所員会議・第4回運営委員会	キリスト教と文化研究所会議室 出席者6名(所員) 2名(事務方)
10/27 (木)	17:00～18:30	バプテスト共同研究グループ 第3回研究会 発題者:古谷圭一 客員研究員 “四谷教会の昭和初期:渡部元と江谷林蔵”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者4名
10/27 (木)	18:00～19:30	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第7回研究会 (アンケート・セミナーについての検討)	チャブレン室
11/5 (土)	10:30～12:30	坂田祐研究プロジェクト第4回研究会 発題者:坂田創 客員研究員 “坂田日記研究(1936年1～6月)”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者8名

11/17（木）	18：00～19：30	奉仕・ボランティア教育研究グループ 第8回研究会 （国際調査についての検討）	チャプレン室
11/29（火）	18：15～19：30	「いのちを考える」研究グループ 第5回研究会 発題者：鈴木公基 所員 “「いのちの大切さと重み」に関する大学 生3名に対するインタビュー調査の結果”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者4名
12/1（木）	17：00～18：00	資料委員会第2回定例会 （貴重古書について、その他）	キリスト教と文化研究所会議室 出席者4名
12/1（木）	18：00～19：30	第5回運営委員会	キリスト教と文化研究所会議室 出席者5名（運営委員） 2名（事務方）
12/10（土）	10：30～12：30	坂田祐研究プロジェクト第5回研究会 発題者：坂田創 客員研究員 “坂田日記研究（1936年7～12月）”	キリスト教と文化研究所会議室 出席者9名

※本号から当該年1月～12月の活動について報告している。

2011 年度キリスト教と文化研究所構成員

所 長	帆 莉 猛	(人間環境学部教授)
	松 田 和 憲	(工学部教授)
所 員	簗 弘 幸	(工学部教授)
	リサ G ボンド	(工学部教授)
	富 岡 幸一郎	(文学部教授)
	矢 嶋 道 文	(文学部教授)
	平 坂 文 男	(文学部教授)
	渡 邊 光 一	(経済学部教授)
	細 谷 早 里	(経済学部教授)
	中 村 友 紀	(経済学部准教授)
	村 椿 真 理	(法学部教授)
	影 山 礼 子	(法学部教授)
	牧 野 ひろ子	(人間環境学部准教授)
	鈴 木 公 基	(人間環境学部准教授)
研 究 員	森 島 牧 人	(文学部教授)
	所 澤 保 孝	(人間環境学部特約教授)
	武 田 俊 哉	(工学部准教授)
	安 田 八十五	(経済学部特約教授)
	安 井 聖	(文学部特約講師)
	榮 本 和 子	(人間環境学部准教授)
客員研究員	中 島 昭 子	(捜真学院教諭)
	花 島 光 男	(元関東学院中・高等学校教諭)
	石 谷 美智子	(元本学経済学部非常勤講師)
	佐々木 敏 郎	(元関東学院大学法学部教授)
	長 井 英 子	(本学経済学部・人間環境学部非常勤講師)
	坂 田 創	(元関東学院中・高等学校教諭)
	安 達 昇	(早稲田大学教師教育研究所招聘研究員)
	藤 原 久仁子	(大阪大学大学院人間科学研究科グローバルCOE特任研究員)
	三 浦 一 郎	(本学工学部・経済学部非常勤講師)
	田 中 喜 芳	(ニューポート国際大学大学院客員研究員教授)
	勘 田 義 治	(文学部非常勤講師)
	山 本 直 美	(同志社大学非常勤講師・大阪医専非常勤講師)
	三 井 純 人	(カウンセラー)
	田 代 泰 成	(横浜女学院中学高等学校聖書科教諭)
	加 藤 壽 宏	(中央学院大学商学部非常勤講師)
	森 島 豊	(長崎平和記念教会牧師)
	原 真由美	(本学文学部非常勤講師・バプテスト同盟全国女性会副委員長)
	吉 川 成 美	(早稲田大学アジア太平洋研究センター早稲田環境塾 特別研究員)
	古 谷 圭 一	(恵泉女学院大学名誉教授)

金丸英子	（西南女学院大学 学術研究所気付）
小高千恵	（関東学院野庭幼稚園教諭）
伊藤哲	（本学経済学部、文学部非常勤講師）
高野進	（本学経済学部名誉教授）
神谷光信	（神奈川県立横浜旭陵高等学校教諭）
齋藤剛毅	（福岡女学院大学名誉教授）
岡西愛濃	（鶴沼高等学校非常勤講師）
小玉敏子	（捜真学院前理事長）
加賀谷真梨	（日本学術振興会特別研究員 放送大学非常勤講師）
加納政弘	（関東学院教会名誉牧師）
綿貫春利	（本学小田原キャンパスカウンセラー）
兼子盾夫	（横浜女子短大講師）
スムットニー祐美	（本学文学部研究科博士後期課程）
権田益美	（本学大学院文学研究科博士後期課程）
三浦啓治	（本学職員）
長谷川伸江	（本学室の木キャンパスカウンセラー）
内藤幹子	（日本バプテスト連盟 西川口キリスト教会副牧師）
森克子	（日本バプテスト同盟 霞ヶ丘教会伝道師）
洪涛	（中国昆明理工大学専任日本語講師）

2011 年度キリスト教と文化研究所 研究プロジェクト等のメンバーリスト（＊代表者）

グ ル ー プ	所 員	研究員	客員研究員
坂田祐研究プロジェクト	＊帆 莉 猛	安田八十五 矢嶋 道文	坂田 創 佐々木 晃 花島 光男 小玉 敏子 加納 政弘
国際理解とボランティア研究プロジェクト	＊リサGボンド	森島 牧人	勘田 義治 山本 直美 加藤 壽宏 森島 豊 吉川 成美 洪 涛
依存症とキリスト教研究グループ	＊安田八十五 帆 莉 猛		三井 純人 田代 泰成 山本 直美 藤原久仁子 兼子 盾夫 綿貫 春利
バプテスト研究グループ	＊村椿 真理 影山 礼子		古谷 圭一 原 真由美 金丸 英子 内藤 幹子 森 克子
キリスト教と日本の精神風土研究グループ	＊富岡幸一郎 帆 莉 猛	武田 俊哉 安田八十五 矢嶋 道文	花島 光男 神谷 光信 岡西 愛濃 中島 昭子 藤原久仁子 田中 芳樹 山本 直美 スムットニー祐美
いのちを考える研究グループ	＊松田 和憲 鈴木 公基		長谷川伸江 安達 昇 三浦 一郎 石谷美智子 長井 英子 小高 千恵 加賀谷真梨

奉仕・ボランティア教育研究グループ	*細谷 早里 渡邊 光一	所澤 保孝	高野 進
資料委員会	*矢嶋 道文 牧野ひろ子 中村 友紀	安田八十五	
広報委員会	*中村 友紀 箕 弘幸	武田 俊哉	勘田 義治
所報編集委員会	*鈴木 公基 リサGボンド	安田八十五	

編集後記

キリスト教と文化第 10 号編集委員長 鈴木 公 基

2011 年は忘れられない年となった。

3 月 11 日に発生した東日本大震災は、自然の脅威、原子力をはじめとする文明のあり方、そして被災地復興の困難さといった、さまざまな問題を私たちに提起した。しかし 1 年が経とうとしている今、震災の記憶はすでに風化しはじめているように感じる。

いわゆる非被災地ではこの風化が激しい。そこでの関心の多くは放射能から自分たちの生活をどのように守っていくのか、ということや、夏冬の電力確保の問題であったりする。さらに最近では、テレビでは震災をテーマにしたドラマが度々放映されるようになっている。非被災地では、震災そのものはすでに「過去の出来事」となっているように感じられることが少なくない。

一方、被災地ではいまだに仮設住宅で暮らす人々、仕事を得られない人が多く存在するばかりか、行方不明者の搜索が今なお継続されているという現実がある。被災地の人々にとっては、震災は過去のものにしたいともできない、まさに今現在進行しつつある苦悩なのである。

震災が私たちに問うたものは、まさに生身の存在としての人間の生き方であり、血の通った社会のあり方であったのではないだろうか。そのような意味では、希有な経験について、迷い苦しみながらも考え続けることそれ自体が、大震災の時代に生きた私たちに与えられた使命なのではないかと思っている。

今回掲載された論文は、震災によって投げかけられた課題に対して、ひとつひとつが実直に向き合おうとしたものである。これらの論文が 2011 年度のキリスト教と文化研究所所報に掲載された意味は大きい。2011 年だからこそ、特別に込められた思いがそれぞれの論文にみることができるだろう。今回所収された論文を通して多くの人々が、人と社会とのあり方を考え、そして考え続けようとするきっかけをつかんでいただければと思う。

最後に、今回の所報の編集にあたっては多くの人のご協力をいただいた。所報編集員として携わってくださった安田八十五先生、リサ・G・ボンド先生、その他の方々、貴重な助言を与えてくださった横浜プリントの福谷氏には記して感謝申し上げます。また、関東学院大学キリスト教と文化研究所事務局の牛坊氏、川口氏(当時)、飯島氏にも改めて感謝申し上げます。多くの温かい人々と、よい関わりの中でこのキリスト教と文化第 10 号が刊行されたことを報告させていただき編集後記としたい。

執筆者紹介

帆苅 猛
安田八十五
高野 進
リサ・G・ボンド
渡邊 光一
細谷 早里
所澤 保孝
矢嶋 道文
長谷川伸江
原 真由美
三井 純人
坂田 祐
坂田 創
勘田 義治
松田 和憲
村椿 真理
中村 友紀
簗 弘幸
鈴木 公基

＊執筆順

所長：人間環境学部教授
研究員：経済学部特約教授
客員研究員：本学経済学部名誉教授
所員：工学部教授
所員：経済学部教授
所員：経済学部教授
研究員：人間環境学部特約教授
所員：経済学部教授
客員研究員：本学室の木キャンパスカウンセラー
客員研究員：本学文学部非常勤講師・バプテスト同盟全国女性会副委員長
客員研究員：カウンセラー
故人：元関東学院大学長・元関東学院長
客員研究員：元関東学院中・高等学校教諭
客員研究員：本学文学部非常勤講師
所員：工学部教授
所員：法学部教授
所員：経済学部准教授
所員：工学部教授
所員：人間環境学部准教授

Christianity and Culture
No. 10
Bulletin of the Institute for the Study of Christianity and Culture 2011
Kanto Gakuin University
Contents

FOREWORD	Takeshi Hogari	iii
Special Reports		
A Scientific Analysis of the Existence and Role of God	Yaiso Yasuda	1
Volunteers for the Great East Japan Earthquake: An Interim Report of the Questionnaire Administered to Kanto Gakuin Volunteers	Susumu Takano, Lisa Gayle Bond, Koichi Watanabe, Sari Hosoya, Yasutaka Tokorozawa	21
Tasuku Sakata and His Grandfather, Naiki Hinata: The Thought and Actions of the Byako Troops and Their Leader, Naiki Hinata (Recording taken of the Special Symposium)	Michifumi Yajima	27
ACADEMIC PAPERS		
Psychological Support for a Patient with Cancer: A Case Study ...	Nobue Hasegawa	57
An Examination of the American Baptist Mission Policy During the Pacific War	Mayumi Hara	69
Universal Aspects of the AA 12 Step Program (Part II): From the Structural Viewpoints of Introversion and Extroversion	Sumito Mii	81
RESEARCH NOTES		
The Diary of Dr. Tasuku Sakata (1934 - 1935)	Hajime Sakata	93
Robert Coles' Methodology of Examining Volunteering and the Formation of Individuals	Susumu Takano, Yasutaka Tokorozawa	117
REPORTS OF RESEARCH PROJECTS		
Report of Dr. Tasuku Sakata Study Project, 2011	Takeshi Hogari	129
Report of the International Understanding Volunteer Study Project, 2011 ...	Makito Morishima	131
REPORTS OF STUDY GROUPS		
Study Group on "Consideration of Life (INOCHI)", 2011	Kazunori Matusda	133
Study Group on the Problem of Service Education and Its Practice, 2011 ...	Sari Hosoya	135
Report of the Research Project on the Dependency and Christianity Study, 2011 ...	Yasoi Yasuda	137
Report of the Baptist Study, 2011	Lisa Gayle Bond, Yoshiharu Kanda	139

REPORTS OF COMMITTEES

Report of the Resource and Reference Committee, 2011	Michifumi Yajima	141
Report of the Public Relations Committee, 2011	Yuki Nakamura	143
	Hiroyuki Mino	
Report of the Bulletin Editorial Committee, 2011	Kouki Suzuki	144

REPORTS OF RESEARCH SECTIONS

Report on Research Activities for the 2011 Academic Year	145
Constitution of the Institute of Christianity and Culture	148
Member List of Research Projects and Committees	150

Editor's Note	Kouki Suzuki	153
Introduction of Authors		154

Institute for the Study of Christianity and Culture, Kanto Gakuin University

1-50-1, Mutsuura-Higashi, Kanazawa-ku, Yokohama-shi, Kanagawa, Japan 236-8501

TEL.045-786-7873, FAX.045-786-7806

E-mail kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp

URL <http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp>

関東学院大学キリスト教と文化研究所 2011 年度所報

キリスト教と文化

第 10 号 (通号 10 号)

2012 年 (平成 24 年) 3 月発行

発行人 帆 苅 猛

編集人 鈴木 公 基

発行所 関東学院大学キリスト教と文化研究所
〒 236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1
TEL. 045(786)7873 FAX. 045(786)7806
(URL) <http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp>
(E-Mail) kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp

版下製作 株式会社 横浜プリント
印刷製本 〒 232-0016 横浜市南区宮元町 1-23
TEL.045(712)2211 FAX.045(713)3130